
バカとテストと召喚獣 ～伝説と呼ばれたバカ～

アルたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 ～伝説と呼ばれたバカ～

【Nコード】

N0891X

【作者名】

アルたん

【あらすじ】

世界を震撼させた『第一次学生戦争』から2年の月日が流れた。《松下 啓吾》は戦時中、ありとあらゆる『近接武器』を人々に提供した事から、『近接武器職人』と呼ばれ恐れられた。そして、『文月学園』に入学してから2回目の春、新たな動乱の時代が幕を開ける！

(現在、清涼祭編)

登場人物紹介1

まつした
松下 啓吾

身長 170cm前後

外見 クールなナイスガイ

性格 冷静沈着故にやや覚めているが温厚

趣味 近接用武器造り

特技 ペーパークラフト

好き 素直で寛大な精神を持つ者

嫌い 偏見者、勸善懲悪主義者

概要

明久の幼馴染で家は近く、度々出入りしており、明久からは「けいちちゃん」と呼ばれている。

両親は2人とも外国企業勤めなので仕送りを貰いながら一人で暮らしている。

中学の頃に近接武器にのめり込み、現在も武器の開発をしており、

特に木刀に関してはプロに匹敵する程の腕前。

交友関係は…今までの顧客とは面識はあり、坂本や土屋とは仲がよい。

只今身近な道具で家庭用品や改造文房具を研究中。

成績

近接武器を作る為には英語、数学、古典、歴史、保健体育の知識が必要なのでそれらに関しては300点前後。

反面それ以外は50点を切っているので総合科目は2150点程。

召喚獣

武器 ナタナイフ

20本所有。

服装 忍者

ナイフは背負ってあるリュックに内包

吉井 明久(変更点のみ)

・ 中学時代は常人離れの身体能力を持ち、150cm超の啓吾作木刀《竜光》で多くの戦士を地に沈めた経歴を持つ。当時は荒んだ振る舞いばかりで一部から《金色の疾風》と称された。

・ 吉井 玲 帰還以前から同居人がいる

第1話 プロローグへ原作第1巻編開始〈前書き〉

バカテスト 化学

第1問

調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例をひとつ挙げなさい。

松下啓吾の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点

合金の例……ジエラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、松下君は引っかかりませんでしたね

坂本雄二の答え

『問題点……ガスを止められていたから。』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

、

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金）　すごく強くて、未来金属Aと
マグネシウムを合成する。』

教師のコメント

すごく強いと言われても。ゲームのやりすぎです。

第1話 プロローグ〈原作第1巻編開始〉

視点：啓吾

文月学園に入学して二度目の春が訪れた。

只今学園までの通学路を1人で爆走中。

今日に限っていつもよりかなり遅い時間まで眠ってしまったのだ。

当然朝食など食べていない。

今日はクラス発表だというのに、疲労だけが溜まり、ドキドキ感など遅刻するか否やで薄れきっていた。

「けいちゃああんまってよおおお！」

ふと呼びかけられたが、立ち止まれば遅刻確実なので振り返らずに、
「相変わらずだな。どうせゲームを夜明けまでしたんだろ？」

独特のおバカ臭を撒き散らす吉井明久は私の昔からのパートナーだ。

「急ごう。鉄人に目をつけられる。」

「うん。」

学園に向かう。

「そういえば、今日はクラス発表だけどドキドキするね！」

「明久がFクラス以外なら日本滅亡だな。」

「舐めないでよ啓ちゃん。10問に1問は解けたんだ、絶対にFクラスなんて有り得ないさ。啓ちゃんだって試験中ずっと寝ていたじゃないか。」

「あの日は熱があって問題に集中出来なかったんだ。それよりも登校時間まで3分ですがどう間に合います？」

「全力疾走なんてどうかな！」

「走れ走れ！」

「心臓破りの坂を超えれば校門が見えてくる！」

「間に合えー！ー！」

「ズサアアアアアー！ーッ！」

「明久が校門へスライディングした。」

「目の前に佇むのは西村宗一先生。」

「吉井に松下。初日から遅刻4秒前の登校とは良い度胸だな。」

「遅れさえしなければどうということはないですよ鉄人！」

「あれだけ全速力で走ったのに明久は息切れ一つしないだこっちこっち」

はもうバテバテだ。

「に、西村先生、おはようございます…。」

俺は汗だくになりながらも挨拶した。

西村先生には生徒の間で《鉄人》と言う渾名で呼ばれている。

趣味はトライアスロン、真冬でも半袖、極めつけは2m超の鋼の肉体だ。

「おはよう…次からはもっと早く来い。」

鉄人は溜め息をつくと足元に置いてあった箱から封筒を取り出し、俺と明久に渡してきた。

頭を下げながら受け取った封筒には宛名の欄にそれぞれ『松下啓吾』『吉井明久』と書かれている。

「啓ちゃんを吃驚させてやる。」

「しかし変わった方式ですね。」

鉄人はすぐに理由を説明してくれた。

「ウチは世界的にも注目されている《試験召喚システム》を導入した試験校だからな。これもその一環というワケだ。それと早く封を切って中を確認したらどうだ？」中の確認を促す西村教諭。それに返答しながら封を切って紙を取り出す。

「クラスなんて分かってるんですけどね、特に吉井に関しては。」

「そりゃそうだろう。」

「当たり前ですよ。だってあのテストは吉井にとって難しいものだったのです。」

「ああ。しかし松下、お前は無理をしていたのだな…。」

「体調管理もテストの内ですから。」

「そうか。…吉井、何度見返しても現実が変わらんぞ。」

「まだだ！まだワンチャンあります。」

明久はFと書かれた紙を様々な視点から確認をしていた。

明久が鉄人に嘆願する。

「最下位クラスなんて最悪だ！再試験を求めます！」

俺は明久の肩を叩いて諭した。

「100回受けても結果は同じだ。」

「ならば一文字加えてEにしよう！」

「既にFクラスの一員として登録されている。」

「信じられない、この僕がFクラスだなんて…。」

そのフラグは去年から立っていたぞ。

鉄人は呆れた様子で、

「クラス発表は貴様らが最後だ。早く指定の教室に向かわんか！」

「はい。明久、行くぞ。」

「…はい。」

「すぐ慣れるさ。嫌なら《試召戦争》で上位クラスの設備を奪えばいいんだし…というかちゃんと勉強していれば上にも行けただろうに。」

そう、奪えばいいのだ。

Fクラスの設備は学年で最低らしい。

しかし《試召戦争》で勝利すれば上位クラスの設備と交換出来る。

鉄人は笑みを溢しながら、

「なら勝つために精一杯勉強させてやろう。《試召戦争》をやりた
いなら尚更努力が必要となる。俺もとことん貴様らを補習漬けにし
てやるから頑張れよ。」

「明久。向かうとするか。少し遅れたヒーロー気取りで。」

「うん。啓ちゃんが同じクラスで良かったよ！」

…単純だなあ。

「では鉄人。俺たちはこれで。」

「てつじ…時間がない。とっとと行ってこい！」

そう鉄人に挨拶をして俺達は靴を履き替えて2年生の教室がある3階に向かった。

「明久。頭の良い奴はAクラスで悪い奴はFクラスだぞ。」

「やだなあ啓ちゃん。僕がそんな事間違えると思ってるの?」

「普通の人は間違えないだろうな。」

明久はまだブツブツ言っている。

「試験の手ごたえはあったしCかDあたりの計算だったんだ。」

足し算からやり直せ。

「明久…10年間付き合ってきたんだが、『もしかするとコイツはバカなんじゃないか』と疑いを抱いていた。」

「それは間違いさ。」

と明久は微笑んだ。

「お前を疑うなんて俺こそ謝らなければならない。」

「そうだね。」

「だが疑いはなくなった…明久が疑いの余地のない真正銘のバカだということかな！」

『吉井明久

Fクラス

全てを賭して物凄く頑張りましょう』

「その一切れの紙が証明だ。」

「…もう現実から逃げなくてもいいんだね。この振り分け試験、敗けたのは僕はだったんだね。」

沈む明久を先導して3階に辿り着いた。

酷い茶番劇だ。

そこで待ち受けていたのはホテルを思わせる程の豪華な教室だった。

「…すごいね啓ちゃん。」

「Aクラスは流石に広いな。」

これには唾然とならざるを得ない。

通常の6倍の広さを持つ教室だと？

『私はこの2年A組の担任、高橋洋子です。よろしくお願いします。』

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきつちり着こなした知的女性の代表のような教師が…高橋先生とはAクラスらしい。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示される。

贅沢すぎる、他の教室の設備が悲しいことになってるんじゃないのか？

「あの先生綺麗だなあ。」

「ああ、美人さんだ。」

俺は若々しく美しいのには弱い。

『まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備のある人はいますか？』

教室は五十人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があつて、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた

様々な食料があつてエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっている。さらに天井は総ガラス製でありながらスイッチひとつで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれていた。

『参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給いたします…他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなく、何でも申し出てください…。では、始めにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前にきてください。』

『…はい。』

クラスの生徒たちが注目した。

『…霧島翔子です。よろしくお願いします。』

物静かな雰囲気で穢れを近づけない神々しさを放つ。

それに黒髪を肩まで伸ばしているので、まるで日本人形のようなようだ。

視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げていく。

『……………』

聞き損ねた。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように。』

こうしてはられない。

私達もクラスへと向かきましょう。

「そろそろ行こう。」

「あ、うん。そだね。…カロリーが一杯だ。」

こいつには何が見えているんだ…。

.....

二年F組と書かれたプレートのある教室についた俺達は緊張していた。

「一緒に行こう。」

「うん。」

深呼吸して一緒に

ガラッ

と開けて初撃を撃ち込む！

「「「すいません、ちょっと遅れちゃいました」「」

「早く座れ、この蛆虫野郎共。」

なるほど、見事なカウンターパンチだ。

「来るのが遅いぞ明久。今か今かと待ってたんだ。」

「相変わらず血の気の多くて仕方がないヤツだな。」

教壇に立っている男を見た。

背は高く、だいたい180cm強くらいで、見掛けはボクサーのよ
うな機能美を備えた細さを感じさせる。

視線を上げると意志の強そうな野性味たっぷりの顔をした猛獣が構
えているようだ。

短い髪がつつんと立っていてまるでたてがみのようにさえ見
える。

「…雄二、何やってんの？」

彼は明久、そして私の悪友の坂本雄二だ。

「先生が遅れてるらしいから代わりに教壇に上がってみた。松下、
話は聞いたぞ。」

「ええ、どうやら女性がいるそうですねよ」

『『『『『なにー！？女性だとおおおー！？』』』』』

耳をつんざくような男、こんなむさくるしい耳をつんざくような男、こんなむさくるしい男ばっかのクラスに居なければならぬ女性が可哀想だ。

「で、何で雄二が先生の代わりを？」

明久が疑問符を浮かべた。

「一応このクラスの最高成績者だからな」

「え？それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ。」

「世も末ですね。」

「何を言おうがこのクラスの全員が俺の奴隷って事だからよろしくな。」

ふむ、あの《悪鬼羅刹》が代表とは、これは楽しくなりそうだ。

Fクラスの面々はみんな床に座っている。

畳に卓袱台とは中々凝っているではないか…廃墟なら完璧なのが悔やまれる。

「それにしてもさすがはFクラス。ある意味珍しい設備だね。」

明久と私はとりあえずあいている席でも探そうとおもった時、不意

に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

そこには寝癖のついた髪によれよれのシャツを貧相に着た、いかにもさえない風体のオジサンが居た。

どう見ても10代ではない。このクラスの担任だ。

「それと席についてもらえますか？HRホームルームを始めますので」

明久と雄二がそれぞれ返事をして席に着く。

先生は明久たちを待つてから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎ふくはらしんです。よろしくお願いします。」

福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。

チヨークすら無いんかい！

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

クラスメイト達が続々と不満を漏らす。

「せんせー、座布団に綿が入ってないです」

「我慢してください」

「せんせー、卓袱台の足が折れました」

「ボンドで直してください」

「せんせー、窓が割れてて隙間風が寒いです」

「ビニール袋とセロハンをあげますから直してください」

…これは酷い、けれども自力で問題を解決するのってやり甲斐があったりする。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね、松下君、君からやってもらいましょう。」

ざわ…ざわ…。

いきなり自分をアピールするチャンスが到来！

やってやるっじゃないか！

俺は深呼吸して静かに口を開いた。

第1話 プロローグへ原作第1巻編開始 (後書き)

作者です。書くの初めてなので起承転結すらままならないですが、未永くよろしくお願いします。

第2話 バカと美女と自己紹介（前書き）

前回、誤字脱字が多く読みづらかった事、申し訳ありませんでした！

今回はバカテストはありません。

I・K様、感想有難うございました。

より精進して参ります。

これからは前書きにバカテスト、後書きに近況報告を綴ります。

第2話 バカと美女と自己紹介

視点：啓吾

自己紹介において、第一印象が全てを決める尺度となる。

短所を極力露出せず、かつ長所を強調し、端的に述べてみせろ！

「松下啓吾だ。一年間よろしくな。」

簡単に名前だけ告げて席につく。

…こんのバカ野郎！

名前だけ言っちゃった上にそのまま座るとか、何という失態だ…！

ま、まあ自己紹介が全てといつ訳では無いし、まだ慌てるような時間じゃない。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

この独特の言葉遣いといえば木下秀吉。

男装女子とは分かっていらっしやる。

去年演劇部の小道具の助っ人として行った時に出会った美女…Fクラスとは意外だ。

「というわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい。」

自己紹介が終わってしまった…後でお茶でも飲み誘うかな。

「……………土屋康太。」

俺の顧客にして親友のムツツリーニか…この間も煙球や警棒を作るのを手伝ったし、話しやすい。

「…です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です。」

この声はまさか…。

「趣味は吉井明久を殴る事です。」

明久が青ざめるのを見た俺は慰めに行く。

「彼女さんも同じクラスで良かったじゃない。」

「え！？島田さんも一緒！？また毎日ボコボコにされる日々が始まるんだ…。」

殴られる程度でも、女子と交流出来ると思えば痛みなんてありません…ドMホイホイ。

「ハロハロー」

島田がこちらにきずき、笑顔で手を振ってきた。

「……………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

島田の自己紹介がおわり、その後は名前を告げる作業が進む。

「僕の番だ。」

明久が立ち上り、一呼吸置いて喋る。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽にダーリンって呼んで下さいね」

『『『『『ダアアーリーーン！！』『』『』『』』』』』

野太い声の大合唱…気持ち悪さとノリの良さの合わせ技！

「…忘れてください。」

明久は肩身が狭くなったのか席を座った…ドンマイ。

その後はまた名前を告げるだけの作業続いていたが、不意に教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

「あの、遅れてすみま、せん・・・」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声が上がった。

騒がしくなるクラスの中で担任の福原先生がその姿を見て話しかけ

た。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さん
もお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」

「はいっ！質問です！」

既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでここにいますか？」

聞きようによつては不愉快な質問だ。

しかし、姫路瑞希の成績は俺よりずっと高いし、Aクラス最有力候補と言われた程…本来ここには居ない筈だが。

「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……。」

なるほど、試験中に倒れた女子生徒…つまり明久が介抱したのは姫路だったのか。

振り分け試験の途中退席は0点扱いになるから、結果としてFクラスになってしまった訳だ。

彼女の言い分を納得したのか、クラスの中でもちらほらと言いつの
声上がる。

「そう言えば俺も熱の問題が出たせいでFクラスに。」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

…バカばかりだ。

「で、ではっ一年間よろしくお願いしますっ！」

姫路は逃げるように明久と雄二の隣かつ私の真後ろの卓袱台に着く。

「き、緊張しました」

「あのさ、姫ー」姫「姫路。」

明久の声が私に、さらに雄二に遮られる。

「は、はいつ。なんですか？えーっ」と…」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「俺は松下啓吾。何とでも。」

「あ、姫路です。よろしくお願いします」

「姫路さん…体調はどう？」

明久が姫路さんの体調の話を持ち掛けた。

俺も同じ事を聞こうとしていたのでここは引く。

「よ、吉井君!？」

明久の顔を見て驚く姫路。

明久が余りに不細工だからショック状態に陥ったのか、これは謝らなければ。

「「姫路。明久がブサイクですまん!」」

雄二とは気が合うようだ。

「そ、そんな!目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ!その、むしろ…」

雄二は首をかしげながら、

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺にの知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし。」

「明久に興味持ってるなんて、余程物好きなんだな。」

「え？それは誰…」

「そ、それって誰ですか!？」

明久よりも姫路のほうが食いつきがいい…。

「確か、久保ー利光だったかな？」

久保利光…男の子。

明久が窓から飛び降りるのを阻止!

新学期初日から散々な扱い…これから一年間、明久の精神が持つのだろうか？

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

担任が教卓を軽く叩いて警告を発すると、

バキィツ バラバラバラ……

教卓はゴミ屑と化した。

「えー…替えを用意してきます。少し待っていてください。」

福原先生はそう告げると、教室から出て行った。

近くでは姫路が苦笑いをしていた。

これがFクラスの洗礼というのか。

先生が出るなり明久が雄二に用があると行って教室から出て行った。折角なので俺も外へ息を吸いに行くか。

…教室内では残りの生徒達による自己紹介が行われていた。

何人が有名人がいるらしく、幾度と教室がざわめく。

聞いたところでは須川と横溝は《リア充撲滅委員会》を設立したらしく、異性行為を行った男子を亡き者にし続けているそうで、問題ばかり起こしているらしいとのことだ。

…ちゃんとやっつけていけるのだろうか。

暫くすると先生が戻ってきたので明久と雄二と一緒に教室に入った。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

へい。」

先生に呼ばれて雄二が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄る姿はふざけた雰囲気醸しながらも眼力には熱が籠っていた…。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

雄二は頷く…クラス代表といっても最低クラスの成績者の中であ

たま一番に過ぎず、俺や姫路に比べればその成績は遙かに劣る。

「俺はFクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は代表でも坂本でも、好きなように呼べ。」

坂本は、ゆつくりと、全員の目を見るように告げた。

こんな馬鹿だらけのクラスが試召戦争をやったところで、勝てる可能性は低いし、これから先、成績が上がるとは限らない。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが…不満はないか？」

「……大ありじゃあつ!!」「……」

一瞬にしてFクラスが炎に包まれた。

彼らの不満はもつともだ。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そつだそつだ!」

「いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ!改善を要求する!」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ?あまりに差が大きすぎる!」

堰を切ったかのように次々とあがる不満の声。

勉強という努力を怠った人が言える台詞では無いが、しかしここまですごい設備だと俺も奮起せずにはいられない。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、」

級友達の異常なまでの熱狂に満足したのか、自信に溢れた顔に不敵な笑みを浮かべて、

「これは代表としての提案だ！…FクラスはAクラスに《試験召喚戦争》を仕掛けようと思う！」

狂気の沙汰だ…Eクラスならまだしも、最高クラスに挑むなど無謀なのだから。

Aクラスへの挑戦状が意味するものなど誰も理解出来る。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんがいたら何もいらぬ」

須川が目を光らせた。

姫路さんという高嶺の花を抜け駆けして奪おうとはとはいいい度胸じゃないか。

それにしても、試験召喚戦争とは…ついにシステムを使う時が来た

んだな。

科学とオカルトと偶然により完成された《試験召喚システム》、これはテストの点数に応じた強さを持つ《召喚獣》を喚びだして戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

ちなみに、この学園のテストは点数に上限がないため、1時間という制限時間と、無制限の問題数が用意されている。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いた試験召喚戦争だ。

その戦争で重要になるのがテストの点数なのだが、AクラスとFクラスの点数は桁が違う。

Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうか、いや、相手次第では四、五人でも負けるかもしれない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせてみせる」

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があつてそんなことを」

雄二が何の根拠も無しに動くとは思えないが、現実是非情なものだ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのでき

る要素が揃っている。それを今から説明してやる。」

得意の不敵な笑みで、皆を見下ろす。

根拠…聞いてみるか。

「おい、ムツツリーニ。豊に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、ヤツは顔についた豊の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。

大変な事になる…俺はそう直感した。

第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦

視点：啓吾

「コイツがあ有名な性職者だ！」
ムツリーニ

《瞬撮魔》と呼ばれた男といえば、後にも先にも彼以外いない。

ビルからビルへ飛び移り、狙った被写体を驚異的な脚力で貪り、撮る。

やがて情報屋と化した男は今日も何処かで店をする…。

「なっ……あのムツツリーニか？」

「恐ろしい奴と同じクラスになっ たな；」

「見ろ、あそこまで否定してるぞ。」

「ムツツリの名に恥じない神の子…！」

要約すれば只の盗聴&盗撮犯、だが確かな腕を持つ。

雄二はさらに述べる。

「それに木下秀吉。演劇部部长にしてAクラスの木下優子の双子の弟だ。」

「む？そこまでいわれるものかの？」

弟…男だと…何という美貌だ、興味深い！

「可愛すぎだろ。」

「秀吉、結婚してくれ……！」

「まさに男の娘のホープだな。」

「……秀吉は新たな性別を開拓した功労者でもある。」

結婚するのは俺…ゴフツ…男とはお付き合いは出来ないな（「T」）
T（）でもお友達ならきつと問題は無い。

「それに姫路だっている。」

目覚める啓吾、男の娘は二次元だけで十分だつ。

「わ、わたしですか?!」

「ああ、頼りにしている。」

「が、頑張ります!」

目が癒される…それは正に、信頼と安心の女神だ。

「啓吾、みとれていないで早くこっちに来い。」

…ふう。

俺は欠伸をしながら、雄二のもとへ行く。

教室が一瞬にして静まり返った。

先程とは冷ややかな態度：結構落ち込むな。

「こいつが…：中学時代《武器商人》とまで呼ばれた男だっ！」

うわあ、いきなりさらけ出しやがった！

「…な、なんだって！？」「…」

うってかわってざわめくクラスメイト。

「改造、修理、造作の全てをやったのける…：本当にいたのか！？」

「数年前の名のある剣術使いはみな奴の造った物を使用したそうだし！」

「刀造りなら右に出るものはいない…：この学園にある竹刀は全て松下が提供したらしい！」

「さんを付けるよデコ助野郎！」

なんでそこまで知ってるんだ！

匿名で寄付したのに…：バレバレだっ！

兎に角、誤魔化そう。

「ま、松下啓吾、だ、…出来れば松下と呼んでくれ。昔は確かにそ
つちの仕事をしていたが、現在はまったくインテリアに関してやっ
てるから、引かないでくれよ、な？」

「「「師匠と呼ばせて頂きます！」「」「

もう遅かった…。

落ち込む俺に雄二が肩を叩く。

「済まなかったな。全ては士気を上げる為、なあに、七十五日経て
ば忘れるさ。」

こいつ他人事だと思って…ま、いつか。

俺が席に戻るなり、雄二が明久を呼びつける。

「最後に…このクズが吉井明久だ。」

Fクラスは無に帰した。

然り気無く酷いことを…。

「吉井明久？誰だそれ？」

「ってというか、吉井って奴うちのクラスにいたか？」

さっきまでダーリンと言われていたのに忘れられるのが余りにも早
すぎる。

「ちょっと、なんで今僕の名前を挙げるのさ雄二い！」

「分からないのかバカ久？だったら教えてやる。こいつの肩書きは
《かんさつしよぶんしや観察処分者》だ。」

沈黙の後、

「おい、観察処分者って……」

「確かバカの代名詞って言われてるよな」

「ち、違うよ。ちょっとお茶目な16歳につけられるあだ名みたいな物で……」

無駄なあがきだ。

「確かに観察処分者はバカの代名詞だ」

「雄二、キサマああああ……！」

俺は明久を押さえ、

「落ち着け、俺よりずっとマシだろ……。」

「……ごめん。」

二人悲しんでいると須川が雄二に意見した。

「話が反れたな…観察処分者って召喚獣の受けたダメージも召喚者にかえってくると聞いたが、それはろくに召喚出来ない奴が1人い

ると言って差し支え無いんだな？」

須川は中々筋がいいようだ。

観察処分者は、生徒に与えられる特別な称号だ。

成績も態度も最悪の生徒に与えられ、その名の通り、教師たちに一挙一動を監視されるのだ。

簡単に言えば学園側に明らか損害を被るといったとんでもないバカに与えられる称号だ。

更に観察処分者となった者の召喚獣が受けたダメージの何割かを生身に直撃する。

他にも特別な点が幾つかあるそうだが、そこまで詳しくないので省略する。

「居ても居なくても同じようなもんだから大丈夫だ。産廃と違ってくれればいい。」

明久が泣いている。

「もちろん、俺も全力を尽くす。」

スルー：明久よりも上野公園の鳩の方が良い待遇を受けているのだろうか？

「おい、坂本って小学生の頃神童って呼ばれてなかったか？」

Dクラスへの挑戦。

忙しくなりそうだ…回復試験でも受けるか。

- - - - -

午前中の授業も無事（授業をまともに受けていたのは姫路と俺と島田くらいだったが）に終わり、俺は明久と雄二と屋上に合流した。

屋上での昼食は清々しい…卓袱台がこんなに役に立つとは、他クラスの設備より良いかもしれない。

食事を何事もなくすませると、雄二が本題に入った。

「明久には宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる。」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている？」

「大丈夫だ、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

俺もフォローを入れる。

「高校生にもなって暴力を振るうバカがいる訳無いだろ。何なら俺が…」

「いや、それは駄目だ。」

しかし雄二は首を横に振った。

「どうして?」

理由は直ぐに分かった。

さっきの有り様を見れば、俺は有名で、士気を上げうるキーパーソンなのだろう。

雄二は極力Fクラスの有する数少ないカードを切りたくない筈。

ましてや成績がBクラス並の俺をわざわざ敵前にさらけ出すなど愚の骨頂、自滅するようなものだ。

雄二は端的に明久にそれを説明した。

明久は納得して、

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。行ってくる。」

「ああ、頼んだぞ。」

「雄二とけいちちゃんの足を引っ張らないようにするくらいなら僕だ
って出来るさ。」

明久も中々かつこいいい。

だが…そのやり取りは死亡フラグだ。

.....

「騙されたあつ!」

昼休み終了間際…明久の顔は原型を留めていなかった。

「やはりそうきたか。」

「やはりってなんだよ!やっぱり使者への暴行は予想通りだったん
じゃないか!」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

「少しは悪びれるよ!」

「しかしお前が生きていたのは予想外だったな。」

「ハナから僕を殺す気だったのかよ!」

「一々喚くな、日常茶飯事だったろうが」

「鈍ってるんだからしょうがないじゃないか！」

流石の明久も2、3年サボれば凡人の拳を捌けなくなるのも仕方がない。

「吉井君、大丈夫ですか？」

明久に姫路が傍に駆け寄る。

「吉井、本当に大丈夫？」

島田も近づいて来た。

「平気だよ。心配してくれてありがとう」

「そう、良かった…。ウチが殴る余地はまだあるんだ……。」

「ああっ！ 突き飛ばされたときに変な打ち方をしたみたいで今になって死にそうな激痛が！」

悔り難し、島田美波。

「そんなことはどうでもいい。放課後にミーティングを行うから逃げるなよ明久。」

雄二は自分の席に戻ると居眠りを始めた。

「あの、痛かったら言って下さいね？」

姫路は午後の授業の予習の最終確認に行った。

「大変じゃったの。」

美女…木下弟が明久の肩を叩いて席に戻った。

「……（サスサス）」

頬をさすりながら康太がそれに続く。

「今日の収穫は？」

「……水色。」

「パーフェクトだムツツリーニ。」

「……感謝の極み（ズパツ）」

やはりムツツリーニは凄腕のカメラマンであったか。

直後、チャイムの音がなった。

…Dクラス戦は明日の午後2時半。

万全の状態で立ち向かうとしよう。

第3話 バカ達の侵攻！Dクラスへの挑戦（後書き）

こんばんは。

何とか投稿に辿り着きました。

今回は登場人物紹介2を入れます。

登場人物紹介2（前書き）

Fクラスの主要となる男子の変更点について纏めました。

登場人物紹介2

土屋 康太（変更点のみ）

・傭兵として様々な任務を行ってきた。中学生時はカメラよりも暗器を持っている事が多く、情報収集よりも暗殺が主な仕事だった。

・身体能力は機動性のみ鉄人に匹敵。残像が残る程の速さで相手を翻弄する。

木下 秀吉（変更点のみ）

・幼少時に《万能演技》を発現し、物真似に関しては、声だけでなく動作や雰囲気まで完璧にこなしてみせる。

・本来の性格は木下姉だけが解放出来る。

坂本 雄二（変更点のみ）

・小型バイクの免許を持っており、たまに翔子と一緒にドライブに出掛けている。

・中学時代は、亮と源二とPTを組んでいた。

須川 亮（変更点のみ）

- ・ 数十疋もの大鎌を使いこなし、破壊活動や殲滅戦を得意とする。
- ・ 親友にしてライバルの女性がいるが、避けたいらしく、恋愛感情は無い。だからFFF団団長なのだが。

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（前書き）

問 以下の意味を持つ諺を答えよ。

『？得意なことでも失敗してしまう事』

『？悪い事があつた上に更に悪い事が起きる喩え』

姫路瑞希、松下啓吾の答え

『？弘法も筆の誤り』

『？泣きつ面に蜂』

・教師のコメント

正解です。他にも？なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、
？なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります
ね。

土屋康太の答え

『？弘法の川流れ』

・教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『泣きつ面蹴ったり』

・教師のコメント

君は鬼ですか。

坂本雄二の答え

『鉢を持っていた明久が木から落ち、鉢を割った上に泣いていたから蜂に目を刺された。』

・教師の答え

君は悪魔ですか。

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威

視点：明久

初日から一夜明け、昼休みの時間。

授業の内容を覚えることもなく、倦怠感に耐えていた。

昨日の内に回復試験は済ませたけど…焼き芋に水？だった。

雄二が僕達に指針を伝えたいらしいので、今日は皆で屋上に行くことになったのだ。

そして只今屋上への道中をまっしぐら。

「想像以上に酷いもんだな。」

雄二が不満を漏らす。

「地獄絵図だ。あんな設備じゃ誰も勉強する気なんか起こらないだろう。」

啓ちゃんも呆れた様子だ。

「Aクラスの設備は見たか？」

「あれは教室じゃなくてホテルだ。」

僕も話に入ろう。

「そこで、僕が提案したんだ。折角2年生になったんだし、《試召戦争》をやってみない？つて。」

「そうだったな。バカ久にしてはまともな提案だ。」

今更だけど雄二にだけはバカだなんて言われなくなかった。

難しい話は抜きにして欲しいけどさ。

「いやあ、だってあまりに酷い設備だからさ。」

雄二が怪訝そうな顔で覗いてきた。

「全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすってなあ…ありえないな。」

「酷いこと言わないでよ！僕だって、興味がなければこんな学校になんかいかないさ！」

雄二は欠伸をしながら啓ちゃんを見る。

「明久がこの学校を選んだのは、試験校故に学費が安いという理由が大きい。」

ぐっ…お見通しだ、啓ちゃんにも喋ったこと無いのに。

バカ雄二ならまだしも、啓ちゃんは賢いし僕のことをよく知っているんだつた。

「白状しろ。どうせ好きな女の子に好かれたいが為に成績だけでも上げようって魂胆だろ？」

雄二は鋭い！だが甘い。

究極の嘘について隠し通す！

「あー、えーっと、それは、その…姫路さんの為なんだ！」

沈黙。

雄二はポカンとした。

啓ちゃんは恥ずかしそうにしている。

僕は何かが終わった気がした。

「雄二、今の無し。」

無しにしてくれる程の脳を雄二は持っていない。

「雄二…明久はこんなに面白いことを言い漏らしたけど…こ、ここのうのは？」

啓ちゃんがデレデレした様子で額に手を当てる。

「あ、ああ、驚いた…理由を言い当ててやろうと思ったが…こんなToStraitに言うとは…明久らしいな。」

、一番知られたくない二人に知られた…もうお嫁にいけない！（）

「T | T」)

「そ、それより…明久が姫路の為に戦争を起こそうとしているのは分かった。大方振り分け試験のときに姫路が倒れてFクラスになったのをバカ久が聞き付けたか助けたかしたんだろ。」

見事に言い当てられた。

「だから明久は姫路にAクラス環境にいて欲しいと…かつこいな。雄二もホントは全部知ってて尋ねたな？」

「まあそんなことだろうと思っていた。だが理由はどうであれ、俺も戦争をやりたいと思ってる所だったし、勝てる作戦も思いついたからな」。明久に乗ってやってもいい。」

この発言は意外だ。

「え？どうして？雄二だって全然勉強なんてしてないよね？」

「世の中学力だけが全てじゃないって、証明してみたくてな。勉強だけ出来る奴等の鼻を明かすのも悪くない。」

何だか分からないけど凄いや。

啓ちゃんが微笑んで後ろを指差した。

振り返ると須川君と秀吉とムツツリー二が手を挙げて振っていた。

僕は暫く立ち止まっていたけど、直ぐに皆を追った。

.....

視点：啓吾

雲一つない空から眩しい光が春風とともに突き差されるのを気持ち良く感じる。

「さて、五時間目の後は戦争だ。」

雄二はそう切り出した。

「一応今日の午後２時半に開戦予定と告げてきたよ。」

明久は元気良く応じる。

「じゃあ、先に昼御飯を済ませるかのう」

「……栄養補給は大事。」

「そう思っならパンでもおごってよ。須川くん。」

「お前に金をかけるくらいなら溝に投げる。」

「マジ！？ばかぁ嬉しいよー！」

拾いにいくんかい！

明久とは対照的に、木下弟は真剣な眼差しだ…透き通った瞳の奥から熱いハートが垣間見える。

俺は明久に、

「明久…いくらまともに食べられないにしても、クレクレ厨の真似は…」

「明久。自業自得だ。」

雄二の言う通りだ。

「雄二…何が言いたいのさ。」

「お前の主食って…水と塩だろう？足りるのか？」

「失礼な。きちんと砂糖だって食べてるさ！」

水と塩と砂糖って、食べるとは言わないぞ…。(; ;)

「舐める、が表現としては正解じゃろうな。」

「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いんだよな。」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

明久も俺の両親が仕事の都合で海外にいる為、一人〜二人暮らしをしている。

親からの仕送りはあるが、その大部分はゲームや漫画に消える。

「明久…綺麗な美人さんと住んでいるのに、どうしてこうなるんだ。」

「（ガタツ）吉井、返答次第ではクロス」

「待つんだ須川くん。僕が、塩と砂糖以外のものを有している筈がないじゃないか。啓ちゃん変なこと言わないでよ！」

「確か…3-Aの《佐山 曉美》じゃ無かったか？」

雄二、ナイスアシスト。

「フーズイット」

俺は2、3年前から彼女と明久と何度も遊びに行ったり勉強したりしている。

須川の殺気を感じたのか明久は汗だくだ。

「……5W1Hの文末のイントネーションは」

康太の的確な突っ込みに明久はテヘッ っとした。

「松下。吉井を殺したいんだが。」

「落ち着け須川。ムツツリーニが調査した結果だと、明久は1%くらいギリギリセーフだ。」

「ツチ。異性行為を発見次第吉井を社会的に抹殺する。松下、観察をお願いする。」

雄二が声を荒げ、卓袱台を叩いた。

「お前らなあ。話をずらすな。作戦会議するぞー。」

「……居候プレイ。グハアツ！」

ムツツリーニ は たおれた

めのまえが まっくらに なった

「松下。バカはほつとくぞ。」

「うむ、わしらだけでもDクラスを倒す方法を考えるのじゃ。」

「ええ、木下ー」

「秀吉で良いぞ 啓吾よ。」

呼び捨てにされた拳げ匂に啓吾呼ばわり…最高じゃねえのお！

「さてと、皆の回復試験は殆ど終わった。後は松下と姫路が何科目か終わっていないくらいだな。思ったよりも回復のスピードが早い。感謝しねえとな。」

きのs…秀吉が疑問を投げ掛ける。

「雄二よ。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなのじや？段階を踏んでいくのならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「その事に関しては当然考えがあつてのことだ。」

「考えとはなんじやろうか？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めないのは簡単だ。戦うまでも無い相手な上に、メリットが無い。」

幾らなんでも無茶だ。姫路や俺はまだしも、後の面子は雄二以下だ。

試験の点数で振り分けを行われているので、Eクラスは俺達のFクラスより点数は高い。

「だとしてもFクラスとEクラスの平均の差はせいぜい2000点程度、姫路と松下の敵じゃない。」

「つまり、お主はAクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦つても意味が無いって言いたいのじやな。じやがDクラス以上は真つ向勝負だと流石に厳しい…そういうことかのか？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

俺も進言する。

「なら尚更Eクラスに挑んだ方がいいんじゃないのか？」

雄二は首を横に振る。

「駄目だ。初陣でEクラスを狙うようじゃ、あいつらに『やはりAクラスは無理なのか』と思われてしまう。そうならないように明らかに格上のDクラスを派手にぶっ潰して、今後の景気づけにした方が、土気は上がる。これは言うまでもなく、打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだ。」

成程。

秀吉は、

「その話、Dクラスに勝てなかったら意味が無いわけじゃな？」

「負けるわけ無いさ…本気になったFクラスに叶う奴なんかいると思うか？ま、お前らが俺に協力してくれるならの話だが。」

「とはいえ相手は格上じゃ。気を引き締めていかなばならぬのう。」

雄二は不敵な表情で笑う。

「俺らのクラスは最強だ。何故なら、お前らがいる。俺を信じる松下、中学時代に潜って来た修羅場を思い出せ。」

ああそつだ、忘れていた。

ここにいるのは…いい感じにネジのぶっ飛んだ親不孝者ばかりじゃないか。

「こつなつたらやるだけやる。雄二…俺を使いな。」

「勉強する。足を引っ張らぬようわしも頑張るのじゃ！」

戦いが始まる。

違った目的を志しながら、一つとなったFクラス。

打倒Aクラス。

「作戦は2時に説明する。」

ここに、最下層（Fクラス）が最上層（Aクラス）に対する下克上が始まった。

…あそこで戯れている3人は何しに来たんだろう。

- - - - -

視点：?????

「2・Fが新学期二日目から戦争か…。」

「Dクラスと殺るらしいね アンタはどっちが勝つと思う?」

「さあな。FクラスもDクラスも化物ばかりだし、荒れるんじゃないかな?」

「ああ、あの化物共がね。こわいもんだねー。」

「お前の方が恐いな…。」

「そーかな？アンタの頭の中身の方が余程ブツ飛んでると思うけど。」

「言ってくれるな。しかく楽しくなって来たじゃないか。」

「一心不乱の大戦争が出来るんだ…何でもありだね。」

「血が騒いで来たようだな？」

「アンタはどう？」

「昔から行動しないのは性に合わないタチだし…動き出すとしよう。」

「まっお手並み拝見といくよ。そしてその暁には…。」

「そうだ相棒。あいつらをあいつらを、かつて敗北に追いやり全てを失った俺達のように追い込み、酷いことをしてやるうぜ。なあに、急ぐことは無い、3年待ったんだ。数時間、数日、数ヶ月待つ事などどうということはない。今に見ている…恐怖に沈めてやる…クッククツクツ、ハッハッハッ！！！！」

第4話 作戦会議！Dクラスの脅威（後書き）

本日二話目の更新です。

いつの間にかPV3000、週間アクセス3000を達成しました。

これからも本小説をよろしくお願いします。

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（前書き）

問題（数学）

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、??の中から選びなさい

$$? \sin A + \cos B$$

$$? \sin A \cos B$$

$$? 3 \sin A \cos B$$

$$? \sin A \cos B + \cos A \sin B$$

姫路瑞希、松下啓吾の答え

$$(1) X = \frac{\pi}{6}$$

$$(2) ?$$

・教師のコメント

そうですね。角度を『 $\pi/6$ 』ではなく『 $\frac{\pi}{6}$ 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

(1) X II およそ3

・教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

・教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

須川亮の答え

(2) オーディエンスを使います！

・教師のコメント

これは某四沢クイズ番組ではありません。

坂本雄二の答え

(2) テレフォンを使わせてもらおう。

・教師のコメント

試験中に電話するのは禁止です。

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣

視点：啓吾

- 14 : 15 Fクラス -

試召戦争の準備も無事に済んだ。

雄二はクラス全員を再集結させた。

「今からDクラスを潰すが：厳しい闘いになるだろう。だが俺はお前らを百戦錬磨、一騎当千の強者と信じる！」

雄叫びを上げるバカども。

「そつだ！俺達がFクラスだ！」

「ここには姫路さんがいるんだ！」

「秀吉いい！俺と付き合ってくれええ！」

「島田！俺と結婚してくれー！」

誰かは知らんが、秀吉を貰うとは良い度胸だっ！

雄二は続ける。

「今回はクラスを突撃部隊、中堅部隊、近衛部隊、情報収集班、予備戦力の5つの部隊を作らせてもらう。割り当ては既に決めてある。」

注目しろ!!!」

雄二は黒板大きな紙を叩き付けた！

<突撃部隊>

人数：15人

主力：啓吾、明久

概要：一人でも多く道連れにしろ！死にかけたら撤退し、回復試験を受け次第何度も突っ込め！

<中堅部隊>

人数：15人

主力：秀吉、島田

概要：突撃部隊を支援し、回復試験をする時間を稼ぐ！

<近衛部隊&代表>

人数：10人

主力：雄二

概要：俺を護れ。むやみに突っ込むな！

<情報収集班>

人数：5人

主力：ムッツリーニ、須川

概要：敵の戦術を盗撮盗聴せよ！

<予備勢力>

人数：5人

主力：横溝

概要：全部隊への支援、回復試験の迅速を図れ！

明久が手を挙げ質問する。

「どうして主力に姫路さんを入れなかったの？」

「姫路はまだ全ての教科を回復していない。一応近衛部隊の所属になるが、出番は0に押さえるつもりだ。」

「……雄二は敢えて啓吾を最前線に入れ、姫路がFクラスに存在しないように見せかけるつもり。」

明久は俺を見て成る程という顔を見せた。

明久と俺は最前線か：雄二としては俺に点数の高い科目で勝負させ、敵の戦意を喪失させようとしているんだな。

数より質が重要になる試験召喚戦争では、基本的に下位クラスが不利となる。

だが質は点数だけで決まるのではない。

高度な連携、適材適所への配置、奇抜な作戦が噛み合う事が絶対だ。

雄二は俺の肩を叩く。

「基本的に俺の指示に従ってもらおう。だが戦争は現場で起こる。俺はお前を助けるつもりない：突撃部隊はお前と明久に任せきりにする。頼むぞ。」

「了解…基本的に独自に行動するが、お前が奇襲された場合はどうすればいい?」

「俺が奇襲されるまでに敵の代表の首を獲れると思うんだが。」

「無理難題を言うな。」

「自信が無いのか?」

俺は震える右腕を押さえる。

「まさか。武者震いだ。」

「お前は隊長だ。職人の手解き、見せてもらう。」

「ああ…期待に応えるくらいに頑張らせてもらう…しかし負担が重いな。」

「お前の力の高さはよく知っている…並の働きでは許さん。」

「…ッ。試されるのは好きじゃないが、良いプレッシャーだ。突撃部隊だけで勝つつもりでいかせてもらおう。」

俺は雄二と拳をぶつけ合った。

雄二は主力を全員呼び、最終調整に入る。

「先ずは松下率いる突撃部隊がDクラスと殺り合う。秀吉のいる中堅部隊は状況を把握しつつ援護しろ。ムツツリー二と須川は情報を

集める。近衛部隊と予備勢力はここで待機しろ！」

「合点承知じゃ。」

「……了解。」

「ムツツリーニの援護なら任せてくれ。」

「頑張つて援護するよ。」

秀吉、島田、ムツツリーニ、須川、横溝は部隊に指示を出しに向かった。

「松下。お前も逝つてこい。」

「征くさ……死ぬなよ。」

俺は明久とDクラスのある方向を見る。

チャイムが鳴り響く。

Fクラス対Dクラス……火蓋は静かに、激しく切つて落とされた！

.....

視点：源二

俺は清水さん、塚本君、そして美紀に協力してもらい、対策を講じているものの、深刻な情報不足に頭を抱えていた。

開戦時間まで20分も無いというのに、決定的な作戦が立てられない。

加えてクラスメイトの殆どが格下との戦いが面倒なのか、熱意を感じられない…。

美紀は心配そうに俺にお茶を出す。

「Fクラスが相手とは言え、コンディションは最悪だね…。」

「うん…降伏しようかな？」

「代表がそんな弱気じゃ駄目だよ。アキちゃんが可愛いと言つことと、坂本君が元《神童》って事くらいは知ってるし。」

俺が美紀と喋っていると、清水さんが紙飛行機を飛ばしてきた。

紙を開いてみるとそこには情報が記されていた。

< Fクラスについて >

・ Fクラスは殆どが豚野郎ばかり。女性といえばドイツからの帰国

子女が1人いるくらいですが…よく知っている人なので、美春に任せてください！

・豚野郎は大嫌いですが、過小評価は出来ません！徒党を組んだ姿は…厄介極まりない上にキモいんです！

・貴方も知っているとは思いますが、あの代表にくつついている土屋と須川は要注意です！あいつらの戦闘能力は並ではありません…美春も相応には鍛えてはいますが、苦戦は必至でしょう。

追記：あの豚共は隠すのが上手く、これ以上暴かせてはくれませんでした。美紀さんよろしく伝えておいてください。

「清水さんは凄いな…。」

美紀は感服している。

「ふう…塚本君を囿にして土屋を引き付ける作戦は成功したみたいだね。」

「アキちゃん、坂本君、須川君、土屋君…中学時代にケンカばかりしていた人ばかりだね。」

美紀は吉井の写真を俺に見せる。

俺は頭を抱える。

「成績ならこつちの方が高いけど、人材はFクラスの方に流れちゃ

つたみたいだね。この有り様じゃ、他にも危険人物が居るんじゃないかと思ってしまうよ。」

「奇遇だね、私もそんな気がするよ…。」

嫌な勘が当たらなければ良いが。

「でも…面白い戦いになるんじゃないかな？」

美紀は楽しそうにする。

「面白い？君が楽しむのはいいけど、負けられない勝負なんだから…美紀は勝負事になると盲信的になりがちだから敢えて注意させて貰うよ。」

「痛い所を突いてくるね…。」

苦笑いする美紀に俺は頬杖をつく。

「でも頼りにしてるよ。中学時代に何度も助けてくれたんだから…クラスメイトの皆もきつと協力してくれる筈だし、頑張ろう！」

美紀は笑顔を見せる。

ここで俺はふと思い出すように彼女に尋ねた。

「ところで美紀。Fクラスの使者をボコボコにしたのはいいけど、脅して吐かせた方が良かったかな？」

「うん。私の制止を振り切って皆アキちゃんをタコ殴りにしたし、

どっちにしても吐かせられなかったと思うよ。」

「だけど代わりに吉井君の腕が落ちている事は知ることが出来た。」

「一見ハイリスクローリターンだけど…実は大きいよね。」

「ああ。俺と美紀は今も変わらず、厳しい修行を続けているからね…
…皮肉にも彼等の奇襲に対応は出来る。」

「私達だけじゃないよ。昨日の内にクラスメイトの肉体を観察していたけど、清水さん、塚本君、後は…仲沢さんとか面白いね。」

「仲沢さん？」

「うん。窓側の一番後ろの席に座ってる子なんだけど…。」

「ああ。転校してきた子だね…ちょっと来てもらおう。」

俺は仲沢さん？と呼んだ。

ヒュバツ、トタツ

「私に何やか用かいな？聞かれたら直ぐに答えるのが義理ってもんやね！」

！？

美紀は仕込み棒を手に彼女を威嚇した。

ざっと10mは飛んだか。

バイオレンスな雰囲気を持つ仲沢さんはニツと笑い話し出した。

「おったまげるんは仕方無いや。さつき自己紹介した通り、わては今年の春に大阪から引越してきた《仲沢好美》ちゅうんや。いきなり脅かしてすまへんなあ…せやけどダンさんら中々の腕やな。驚いたで。」

茶色と金色の混ざった髪を1つに束ね、170cm程の仲沢さんはニツツとする。

「驚いたのは僕たちだよ。」

「堪忍なー。こないなことが日常茶飯事のトコに住んどったから、これが自然体になってしもたんや。」

「仲沢さん…大阪は危ない場所なの？」

「ちやうちやう・食べ物はずまいしい、皆好人ばかりやで。」

美紀は溜め息をついて仕込み棒を仕舞う。

「源さん…この子も私達と『同じ』みたいだね。」

「ああ…清水さんだけでも大変なのに。」

仲沢さんは少し焦った様子で、

「まさか…怒つとる？」

「うづん、どつって事ないよ。」

美紀が俺を見て返答する。

仲沢さんが美紀の両手をパシッと優しく握った。

「あんた…怖ないん？わては不束でちーとばかりし身体が先走る性格やねんで？」

「怖くないよ。むしろ大歓迎だよ。」

「おおきに！あんたとは上手くやれそうやわ！よろしゅうな！」

仲沢さんは安堵した様子で俺を見る。

「ええーっと…代表はん。何用やったつけ？そうそう、好美って呼んでええよ。」

俺は席を立ち上がり、美紀に、

「いい作戦を思い付いた！清水さんと塚本君を召集してくれ！」

「はいはい。好美ちゃん…こつちこつち」

美紀は好美さんと手を繋いで清水さんの元へ行った。

俺もその直ぐ後に二人を追い掛けて行った…。

色々楽しくなる…俺の勘がそう示した一時であった。

「なッ何よ（＾―＾；）」

島田さんは思わず動揺する。

「ああ胸か。」

「アンタの指を折るわ……。小指から順に全部綺麗に（こぎ、ばき）」

僕が言い張ると島田さんは攻撃態勢を取った。

啓ちゃんが怒鳴る。

「試召戦争に集中しろ！」

島田さんは仕方がない様子で教室へ戻って行った…助かった。

今現在、最前線にいるのは啓ちゃん率いる突撃部隊で、その遙か後方に秀吉が待機している。

「いたぞ！Fクラスだっ」

「叩き潰してやる！」

「Dクラスか！押しきるぞ！」

「秀吉を守るんだあああ！！！」

召喚フィールドが拡がり、交戦状態になった！！！！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 A」 67点

「2 - F : 突撃部隊 B」 61点

V S

「2 - D : 前線部隊 1」 103点

幾らDクラスの生徒でも2VS1では勝ち目は無い！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 A」 45点

「2 - F : 突撃部隊 B」 24点

V S

「2 - D : 前線部隊 1」 0点

「0点になった戦死者は補習ううううう！！！！」

「げツ鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだ！」

「黙れ！捕虜はこの戦争が終わるまで特別講義だ！何時間かかるかわからんがたっぷりと指導してやる！！」

「鬼の補習は嫌だ！たツ頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐えられない！」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人は二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやるから覚悟しろ！！」

「鬼だ！誰か助けッ、イヤアアアア・・・」

よし！このまま一気に行く！

「無駄な足掻きを！」

「点数が高いだけで勝てるかよ！」

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 A」 0 点

「2 - F : 突撃部隊 B」 1 4 点

V S

「2 - D : 前線部隊 2」 4 1 点

「2 - D : 突撃部隊 3」 8 1 点

「2 - D : 突撃部隊 4」 9 7 点

仲間が 1 人やられたか…流石に避けきれない！

啓ちゃんが大声を出す！

「その 3 人に数学で挑む！試験^{サモン}召喚！！！」

「松下が F クラス！？」

「怯むな！多対一に持ち込め！」

「させるか！まつさんを援護する！」

僕も啓ちゃんを援護しなきゃ！

<数学>

「2 - F : 突撃部隊 B」 4 点

「2 - F : 松下啓吾」 3 1 4 点

「2 - F : 吉井明久」 5 7 点

「「「何だあの点数は!?!?!」」」

3 対 5 か…だが得意科目なら啓ちゃんは負けない!

啓ちゃんの召喚獣が相手に投げられる!

相手も凄い…ナイフに当たりながらも啓ちゃんにダメージを通す!

だが甘い!僕は「F 突 C」と共に点数の殆ど無い召喚獣に止めを刺した!

< 数学 >

「F 松下」 1 7 2 点

「F 突 C」 3 8 点

「F 吉井」 4 1 点

啓ちゃんは死にかけている「F 突 B」を逃がす。

残りの D クラスの前衛 4 人の後ろから援護と思われる生徒たちが 5 人来た!

啓ちゃんとたち僕は数学フィールドを放棄し、保健体育フィールドに後退した。

< 保健体育 >

「F 松下」 3 0 8 点

啓ちゃんの高得点にDクラスの生徒は攻めあぐねる。

これに乗じて僕たちも啓ちゃんを援護し、相手の前線部隊を殲滅した。

「明久！7人やられた！F突の8人は回復試験を受けて来い！」

啓ちゃんは数学と保健体育のフィールドを消してもらい、今度は日本史のフィールドを展開してもらった。

僕は駆け寄って、

「啓ちゃん！作戦は無いの？」

「無い！日本史フィールドを消したらたちまち俺の苦手教科で奴等が流れ込む！そうなたら数秒もたない！」

Dクラスも中々だ…だからこそ作戦を思いつく！

「啓ちゃん。突撃部隊全員に通達。」

啓ちゃんは汗を吹いて振り向く。

「？」

僕はこう告げた。

「啓ちゃん以外総員退避！」

殴られた、…チヨキで。

「目がツ目があッ！…！」

目潰しされた哀れな僕は地面にのた打ち回ざるを得ない。

「目を覚ましなさい、この馬鹿…！」

「島田、流石にやりすぎだ。」

いつの間にか島田さんが戻って来ていた。

「部隊長が臆病風に吹かれてどうするのよ…！」

その覚ますべき目に激痛が…！せめてグーかパーで殴って！

僕は震えながら号泣する。

せめてビンタでお願いします。

「いい吉井？あなたの役割は出来るだけDクラスを惹き付けて前線を維持する事ですよ！」

島田さんは再度、僕に作戦の内容を述べる。

「あなたが逃げたらあいつらが補給出来ないじゃない！」

「このバカ久！」

島田さんも啓ちゃんも呆れている。

僕も流石に思い直した。

「ごめん…僕が間違ってたよ…この戦闘に勝利することだけ考えよう！」

「ええ！それに個別戦闘は弱いかもしれないけど、多対一で戦えばきつと大丈夫！」

「そうだね。よし、やるぞ！」

「その意気よ、吉井！」

僕はやる気を出す…が、

『……明久、啓吾、島田！Dクラス側の前衛に援軍が15人来ている！』

ここでムツツリーニから戦況の報告が入った。

……。

「総員退避よ。」

島田さんは退避命令を出した。

「問題ないわね？」

さっきと言ってる事が全然違うよ？

しかし僕もそうだと思った。

「仕方無いよ。僕らでは荷が重過ぎた。」

「そうね、ウチらは精一杯努力したわ。松下…。」

「言えば補習は大嫌いだ。死にたくない。」

3人の意見が一致、逃げよう。

そこへ横溝が報告しにきた。

「代表より伝令があります！」

どうやら雄二からの伝言のようだ。

「『逃げたらクロス、近衛部隊総出でな！』と！」

now loading...

「全員突撃しろおおおッ!!!」

「逝くしかないよな明久ああああ!!」

「その意気よ吉井!松下!!」

踵を返す僕と啓ちゃんと島田さん。

秀吉も合流する。

「生きておったか！良かったのじゃ。」

秀吉は嬉しいのか、いかにも女の子らしい表情を見せた。

「秀吉、いつも可愛い…。大丈夫？」

島田さんと啓ちゃんは啞然としている…。

「わしは無傷じゃが…お主らの点数がかなり削られてしまっておるぞ。」

今の状況はかなり点数が消耗した状態のようだ。

「これ以上の戦闘は無理じゃなかるうか」

「じゃあ、早く戻ってテストを受け直さないといけないね。そうしないとすぐにやられちゃうし。」

「そうじゃな…。時間的に一、二教科がいい所じゃな」

啓ちゃんも納得した表情だ。

「明久。俺は此処を死守する。俺がやられる前に戻ってこいよ！」

僕はすぐに点数を補充するために補給室へと向かった。

- - - - -

視点：啓吾

戦争開始から45分経過した。

明久を始めとするの突撃部隊8人が帰還した。

中堅部隊は6人戦死、重症5人とかかり削られたが、フィールドを世界史に変更、何とか前線を守りきり、予備勢力、情報収集班の援護もあり、犠牲者を出しつつも新校舎と旧校舎を繋ぐ渡り廊下をぶんどった。

土屋によれば、残存兵力はこちら31人、相手は24人：まだ油断出来ない。

やがて中堅部隊も回復試験を受け、島田だけが戻ってきた。

「試召戦争のルールは覚えてるか？」

俺は念のために明久に試召戦争のルールを確認させる。

「その科目の教師がいないと召喚は出来ないからね。」

俺と明久は新校舎へ差し掛かる。

試召戦争には色々なルールや制約がある。

とその時、ムツツリーニから連絡が入る。

『……緊急事態発生！Dクラスが五十嵐先生と布施先生を引っ張ってきた！松下は即後退！』

グツ…苦手教科か！

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。60点台常連よ」

「啓ちゃん！」

「無理だ…50点もない！」

「じゃあ五十嵐先生達に近付かないように学年主任の所へ行こう！」

「高橋先生ね？了解！」

そして急いで高橋主任の所へ移動しようとしたが…。

カッカッカッ…。

ゾクッ！

な、ん、だ？

足音が近付いてきた。

明久はポケットから棒切れを取り出す。

足音が消える。

「豚野郎…御姉様を汚す男は全て排除します！」

遂に出てきたか…Dクラスの主力にして危険人物…その名も《清水
美春》っ！！！！

第5話 Dクラス戦開幕！バカ達の初陣（後書き）

更新が遅れました。

駄文が多いのに、長く書きすぎた><

それでも読んで戴けるんですね…本当に有難うございます！

次回もお楽しみに！

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（前書き）

化学

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

・教師のコメント

姫路さんには簡単でしたかね？

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

・教師のコメント

君は科学を舐めていませんか？

吉井明久の答え

『B・E・N・Z・E・N』

・教師のコメント

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように

。

松下啓吾の答え

『B・E・E・N・N・N』

・教師のコメント

並び替えればいい話ではありません。

坂本雄二の答え

『ベ・ン・ゼ・ン』

・教師のコメント

あとで四人で職員室に來なさい…補習!

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！

視点：啓吾

「吉井、松下…。」

俺は唇を噛み締める。

「ああ…五十嵐先生と布施先生は化学教師だ！」

二年の化学を担当する両教諭が新校舎手前の渡り廊下に立つ。

化学は俺の苦手科目…奴ら気付いたのか？

「島田さん、啓ちゃん…」

明久は弱気になる。

「五十点も無い。」

「同じく。六十点台常連よ！」

お世辞にも良い点数とは言えないな。

「学年主任の高橋先生の所まで逃げようかな。」

「総合科目なら尚更勝てない。ここまで来て、逃げていまえば旧校舎で疲弊している中堅部隊をさらけ出す事になる。それに見上げてみるよ…俺達を返す気は無いみたいだぞ。」

明久と島田は天井を見た。

「嘘……。」「」

スタツ

「美波様。お久し振りです。」

「出来れば会いたく無かったわ。美春。」

「ふふ。強く美しい御姉様を慕い続けて1年。今日こそ美春が貴方をオトしてご覧に入れましょう！」

「

廊下の天井を這って来たのか。

理性が吹き飛ぶ。

「明久さあああ！島田を連れて教室に行けー！ツ！！！」

驚く2人だったが、明久は頷くと島田を抱え、全速前進で走って行った。

これでいい…。こいつはここで！倒しきる！

「ああ！麗しきお姉さま、待って！」

俺は遮る。

「俺が相手するよ…清水！」

空気が変わった。

清水は憎しみの籠もる目で睨む。

「ふん…醜い豚野郎の分際で美春と御姉様の恋路の邪魔をしないでくれませんか？」

「残念だが、お前を止める必要があるんでな；試験召喚^{サゼン}！」

銃剣と大きな日本刀を持つ俺の自慢の召喚獣が出現する。

清水は舌打ちした。

「しっかりルールは守らないといけないよな…隠し持っているフォークは捨てる！」

「気付いていたんですか。知らなければ教師を呼ばずに始末出来たんですが…。」

チャラチャラ！

清水は十数本のフォークを床に落とす。

「さて、どうする？補習室に行きたいなら勝手にしろ！」

試召戦争のルールの1つ…それは『相手が召喚獣を喚び出したにも関わらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける』という内容だ。

つまりこのまま奴が通り過ぎれば戦闘を放棄と見做され戦死者扱いとなり補習室へ連行される！

「美春の愛を邪魔するのですから、潰させてもらいます！試獣召喚！」

清水の召喚獣：西洋の刀と盾。

<化学>

「2・F：松下啓吾」47点

VS

「2・D：清水美春」95点

ダブルスコアかつ。

「ふ…噂には聞いていましたが、大した点数じゃないですか！」

「点数だけで決めれば戦争の意味は無いと思うがな！」

「ならやってみなさい…豚野郎があ！」

清水の召喚獣が剣を振りかざし俺の召喚獣を襲う。

ゴッ

「先手必勝…と思いましたが、武器の弱点は網羅しているようですね。」

清水のソードが空を切る。

「バックラーとブロードソード。バックラーは小さいが機動性が高い…防御は難しいが自分から接近し相手の剣に当てる事で、従来の欠点である死角を消すことが出来る。」

当然相手の攻撃を正確に読んで当てていく技術が要求される。

こいつ化物か！？召喚獣を操作するのは今年初めてだろ…なんだ？

まさか…一桁でゴリラ数匹分の戦闘力を有する召喚獣に身体能力が追い付いているというのか？

後ろに下がりがわし切ったが…や、ば、い！

俺は召喚獣を操作し、刀を抜く。

「豚の割には生意気に、頭腦的な方ですね。ゴリラに昇格して差し上げましょう。」

「嬉しくないな。俺はバナナは好きじゃないんだ！」

冗談言ってる場合か！満身創痍だボケ！

「はああっ！」

清水の連撃が始まった。

キンツキンツガッ！

「グッ…ちいい！」

防戦一方だ…清水は西洋剣のハウツーを知っている！

後ろに下がるだけではいずれ召喚フィールドの壁にぶつかってしま
う！

ブロードソード&バックラー…知識はあるがこんなに使いこなせる
使い手が居るのか…化物め！

思い出せ、知識を！

確か…右手に剣を握り、その拳の上にバックラーを被せるように持
つ。

基本戦術…『小さな盾は遠くに構える』原則は、籠手を必ず護る事
を意味する。

仮に籠手以外のところを狙おうとしても、俺は数十cmまで間合い
を詰めねばならない。

日本刀はそこまで間合いを詰めなくても相手を装甲ごとぶった斬れ
るが…バックラーによって手の内が隠されている以上、『構えてか
ら斬る』動作に要する隙を作ることを許さない！

「はあああああっ！」

清水は怒る事で闘気を上昇させている。

怒りは冷静さを奪い攻撃を単調化すると言われているが、言い換え
れば、こちらにとって不利な手段を繰り返される事と化す。

その道に携わる達人ならば、同じ手は通用しないのだろう。

だが俺は近接武器を造れるだけで、知識はあっても、実行出来る体力は無い！

「いい加減に美春の餌食になりなさい！」

俺は日本刀の鞘で受ける…西洋刀は斬れない刀だ！

だが何しろ位置が高すぎる…顔面を守る為に日本刀を顔の前に上げるしかない。

膠着が続く。

様子を見るべく刀を下げれば、もう一撃くる…突きを顔面に入れたら即死だ。

だが…片腕で受けられたのならばあ！

バキイイイ！

一瞬の刹那！

俺はナイフをクナイのように投げ、清水のバックラーを真っ二つにしました！

「こんのおーっ！Fクラスがあああ！」

…カランカラン。

日本刀を叩き砕かれたがな。

「く、くそ…。」

「ここまでよくやったと褒めましょう…あなたの負けです。」

清水は召喚獣に両手でブロードソードを持たせ、俺の召喚獣の元へ歩かせる。

ツーハンドソードか。

清水は冷徹な表情で現実を突き付けた。

「チェックメイトです。」

俺は目を開け言い放つ。

「ああ…覚悟は決まった。」

清水は剣を構え振り上げる。

「かかったな！その致命的な隙を見せるのを待っていた…清水美春！」

「何を根拠に…はっ！」

清水の焦り。

唯一彼女が気付かなかった誤算。

「お前は俺にフォークを仕込み、明久と俺を始末しようとしたよな…隠していたのはお前だけじゃ無いらしいぜ？」

点数差に関係なく急所…頭、首、心臓を貫けば召喚獣は即死する。

だからちよつとした武器でも殺しきれぬ。

清水は召喚獣を操作し俺から離れようとする。

バカが！ブロードソードは重い…振り上げた反動でお前の召喚獣は海老反りになって姿勢を崩す！

「しまつ「うおおおおー！！！」

落ちていたナイフを拾い、清水の召喚獣の首へ突き刺す！

「形勢逆転だな清水。一つ言い忘れていた…他に武器は持ってないつて事。嘘ついてごめんな！」

俺は気さくに清水の召喚獣に止めを差し、その場に座り込んだ。

清水は悔しそうな表情でフォークを拾い集める。

「ハツタリも使えよう。ポーカーフェイスの基本だ…覚えときな。」

「…次は勝ちます。勝って御姉様を戴く日まで美春は諦めません！飯は返しますから首洗って待っていなさい！」

「うるさいなー早く補習室に行けよ。」

この後、突如として現れた西村教諭に清水は補習室へと連行されて行った…。

俺はその場で寝転んだ。

「はあ、はあ、はあ… 全体力を使い切った… 帰るか。」

<化学>

「2・F：松下啓吾」4点

俺はフラフラな足取りでFクラスに戻るのであった。

- - - - -

Fクラスの教室に帰還した俺は畳の上で寝ていた。

「松下… 清水を撃破したそうだな。」

「何とかな。もう疲れたよ。」

「そうか、そいつは結構だ。」

「少しは誉めてくれよ…。」

「めんどくせえな。まあ、清水を倒した事は感謝しよう。少し休め

…島田と秀吉は頑張ってくれているし、時間はある。」

「雄二…明久は？」

「明久は島田に羽交い締めになったのを理由にサボりたいと言ったから、《逃げたら49人でランチする》と言って脅した。」

明久…強く生きろよ。

雄二と談笑していると、須川が駆け込んできた。

「坂本、松下！吉井からの伝言だ！先生たちに偽情報をながしてくれ、と。」

相当苦戦しているのか…Dクラスも必死になってきたな。

俺は会話に参加せずに黙って聞く。

「時間稼ぎか…ムツツリーニ！」

「……ここに。（シユタ）」

「Dクラスが呼んだのは誰だ？」

「……船越先生。」

「そうか。だったらこれを校内放送でながせ。」

須川が確認する。

「ほお。イカした作戦じゃないか。行ってくる！」

雄二が渡した紙を見た後、須川はとてつもなく笑顔になって教室をでていった。

「雄二、お前は何を渡したんだ？」

「そうあわてるな、そのうち嫌でもわかるさ」

「まあ、お前が言うなら期待する。」

俺は鞆を枕がわりにして寝ていると、

《ピンポンパンポーン》

校内放送だ。

「お！来た見たいだぞ」

《船越先生、船越先生》

この展開は…。

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「」「」「ぶっ！！」「」

眠気が吹き飛んだ。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「無理だな。」

「過小評価するのう。得意教科ならばAクラス最上位クラスではないのかの？」

「…本当の敵は点数の高い奴じゃない。」

「まさか…ワシ達の知らぬ刺客がいると言っののかの？」

俺は危機感を込める。

「清水がやられたのにも関わらずDクラスの連中、まるで動揺していなかったんだ…この引っ掛かる何かが、来ている。」

その時ムツツリーニから通信があった。

「どうしたのじゃ？」

『……松下。横溝が塚本を撃破した！』

「塚本は確かムエタイとボクシングを組み合わせた拳法持ちだったな…よく倒した。」

『……だが新校舎側にいる一部の突撃部隊が襲われ、回収が遅れている。中堅部隊及び啓吾は援護を！』

「秀吉、皆を。俺が先行する！」

「了解じゃー！」

嫌な予感がする…死ぬな明久！

- - - - -

視点：明久

『……残存戦力は24VS15！押しきれ明久！』

僕も島田さんも、持ち点尽き、作戦尽き、体力尽き…もう持たない。

<総合科目>

吉井明久：514点

島田美波：767点

ひっきりなしに続く連戦、乱戦。

雄二はもうすぐ戦争は終わると言ったけど、これは酷い。

「吉井…これ本当にやばいわ！」

「それよりも船越先生の方が恐いんだけど！いやあああ！（；；）」

船越先生の息が荒い…結婚の為なら単位を楯に脅す残虐非道、邪知
暴虐な教師だ！

僕は雄二に売られた：絶対ころす！

と思うのも束の間、Dクラスの教室から御下げのツインテと金と茶の混ざった髪の子が出て来た！

「アキちゃん！ハアハア！」

「わてが相手や！いてこましたるっ」

<総合科目>

玉野美紀：1567点

仲沢好美：1472点

後ろから啓ちゃんが走ってきた！

「加勢に来たぞ明久ー！試験召喚っ！」

「島田よ！よく耐えたの！下がるのじゃ！」

「秀吉！多分Dクラスの近衛部隊だ！」

<総合科目>

松下啓吾：1006点

木下秀吉：674点

何時もなら2000点ある啓ちゃんもボロボロだ…。

「手出し無用！わてが仕留めるから、あの二人を追っんや！」

「「「「「了解！」「」「」「」

Dクラスの生徒が10人走ってくる！

「逃げるな！」

「吉井と島田を援護するんだ！」

生き残っていた仲間たちが壁を組んで行進する！

「統制をとる暇はない！近衛部隊と中堅部隊、予備戦力は全員突っ込めー！」

この声は雄二か！

背後から雄二が渡り廊下を走り抜けてきた！

ここで会ったが百年目え！

「雄二！しねえええええ！」

僕は鉛筆を投げる！

「横溝バリアあああ！」

カカカカカッ

やるな雄二、だが負けな！

（ゴキッ）

左腕の感覚が無くなった。

「ナイス島田。」

「松下と秀吉が交戦してるわ。相手は玉野さんと例の転校生よ！」

僕がうずくまっていると、ムツツリー二と須川君も合流する。

「……Dクラス代表は平賀源二と断定。近衛部隊は玉野と仲沢だけ。」

雄二は時計を見てにやけた。

「そうか…他クラスの生徒の下校の時間だ。時間は稼いだ、人混みに混ざり全員逃げろ！」

島田さんが、

「木下と松下は!?!」

「あいつらはそうは負けない。」

「……残ったのは俺と須川だけ。Dクラスの歩兵は後3人。」

「8人残ったか。向こうは6人。」

他のクラスの生徒たちがぞろぞろと歩く…帰宅するべく。

「待って!逃げないでアキちゃん!」

「まだ勝負は着いてないで！」

啓ちゃんは秀吉を引つ張って逃げ出してきた！

でも相手の二人は凄い！人から人へつたっている。

「清水といい二人といい滅茶苦茶だ！」

駄目だ、追い付かれる！

…なら攪乱すればいい！

「明久！？バカ！自分の位置を見せびらかすな！」

僕は啓ちゃんに、

「大丈夫さ！喰らえええー！！！」

僕は消火器を二本持ち…噴射あ！

プシューウウツッ！

大混乱となる廊下。

「アキちゃ、見えな、何処！？」

「見失ってしもうた！」

…どうやら二人を撒いたみたいだ。

「勝手に消火器を使用したバカは誰だ！」

鉄人の怒声が聞こえる。

知るか！

逃げるためなら仕方無いんだよ！

僕たちは慌ててFクラスへ飛び込んだ。

- - - - -

視点：啓吾

Fクラス教室。

鉄人の怒声が鳴り響く中、

「それで、Dクラスの女子のコンビはどうだった？」

雄二が俺に聞いてきた。

「かなりのもんだ…二人とも清水並に強かった。《武器職人》と《完全演技》でさえ点数は削りきれなかった。」

「大問題だな…明久は。」

「あいつは《観察処分》者だ。実力を公には出来ないと言ったのはお前だぞ。」

須川が姫路を連れてきた。

「雄二ー！姫路の回復試験が終わった！」

「はあはあ…終わらせました！」

そこへ、この戦争の切り札であり、現在全科目のテストを受け直した姫路が到着。

最後に受けたテストは振り分け試験の為、途中退席した彼女は全科目0点だった…しかし彼女は無事に全ての科目を受け直す事が出来た。

「吉井君、大丈夫でした？」

「あいつなら大丈夫。生きてるよ。」

「本当ですか？良かった…。」

俺は姫路にガッツポーズをする。

「あいつとは幼稚園の頃からの付き合いだ…精神力は間違いなく学園全一だ。」

『ピンポンパンポン 船越先生、船越先生。至急2年Fクラスに来てください。吉井明久君が教師と生徒の垣根を越えた、』

明久が泡を吹いた。

「信じがたい？」

「あつ、あははっ……」

「秀吉：声真似をするのはいいが、死者が出るなら止める。」

「済まぬのう。一度からかってみただけなのじゃ」

<補足>

船越教諭

45歳独身

婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒に交際を迫る様になった女性教師。

「つくづく思うが、明久は可哀想だ。よりもよって船越女史の生贄に捧げるとは、雄二も中々やるな。」

「あつ、あの……。」

「明久、生まれの不幸を呪うがいい。」

「吉井君：本当に大変なんですね。」

身心ともに虚無と化した明久の姿に俺と姫路は苦笑いするしかなかった。

ガラッ

俺は立ち上がる。

雄二は不敵に笑う。

「代表自ら出陣か。」

雄二はにやにやしてDクラス代表を見る。

「散々コケにされたからね…坂本！俺が直々に手を下してやる！」

後ろには玉野と仲沢がいる…さらにDクラスの生徒が3人か。

「ま、済まなかったな…こつなつたらとことんやるっぜ、《皇王》さんよお！」

「舐めるな！地獄帰りの《悪鬼羅刹》程度にバカにされてたまるものか…!!」

FクラスVS Dクラス。

最後の激戦が始まる。

第6話 迫り来るDクラスの強者たち！（後書き）

初バトル：いかがでしたか？

更新のペースが不定期で済みません。

えー次回は登場人物を紹介します。

PV5000突破しました。

読者の皆様に感謝！

登場人物紹介3 (前書き)

三回目ですな。

前回紹介しなかったFクラスのメンバーに関して説明します。

登場人物紹介3

横溝 浩二（変更点のみ）

・《地獄の番人》と恐れられている。二年生の中でも屈指の持久力を有している。機動性は一般人クラスだが、フルマラソンをしても息切れ一つしないと言われている！

・ F F F 団副委員長。 F F F 団についてはここで一気に説明する。

< F F F 団：階級一覧 >

・ F F F ランク

戦闘力は軒並み高く、かつ能力が異常に高い者のみが在籍する。

メンバー：須川亮、ムッツリーニ

・ F F ランク

かつては非常に優れた実力を持っていたが、諸事情で鈍りに鈍った者が在籍する。

メンバー：吉井明久、坂本雄二

・ F F ランク - 非戦闘員

戦闘は不得手だがある分野で優秀な技量に富んだ偏屈者が揃っている。メンバー：松下啓吾、横溝浩二、木下秀吉

・ F ランク

メンバー：上記記載された七人を除く。

(備考)

- ・ F F F 団の参加資格は特に定められていない。
- ・ 3年前に須川と横溝が立ち上げた『リア充撲滅委員会』が元になっている。
- ・ 他クラスにもメンバーがいるが、詳しい情報は無い…資料の収集を求ム。
- ・ 下克上は盛ん。特に F F F と F F は入れ替わりが激しい。

島田 美波(変更点のみ)

- ・ 天性の怪力の持ち主で、総重量 150kg の衣類を身に付けられても何不自由なく生活することが出来る。
- ・ 日本に来てから護身術として、自衛隊格闘術(自衛官の白兵戦・徒手格闘戦の戦技として編み出された格闘術である。)の一つ、徒手格闘を学ぶ。
- ・ 柔道と相撲の投げ技で牽制し、合気道の関節技とプロレス技で畳み掛ける戦法をとる…近接格闘戦に持ち込まれぬよう心掛ければ勝てるだろう。

姫路 瑞希（変更点のみ）

- ・文月学園3年Aクラスに兄が在籍。
- ・それ以外に情報が存在しない…。

第7話 勝者と敗者と新たなステージ（前書き）

今回はバカテストはありません。

第7話 勝者と敗者と新たなステージ

視点：明久

「玉野さん…僕が君の相手だ！」

僕の眼に映る玉野さん。

「アキちゃんと剣よりも身体を交えたいんだけど…十分ね！」

「意味が分からないから…勝つ！」

玉野さんは僕の頬を触る。

「ふん。アキちゃんは私に勝つつもりなんだあ」

「な、なにさ。」

玉野さんが召喚獣を出す。

「玉野美紀…《皇女》が御相手します！標的はアキちゃん…私色に染め上げる！」

「屈しはしない！負けるもんかあ…！！！！！！」

玉野さんの召喚獣は…弓とソードかつ！

「先手必勝オ！僕に挑む相手は皆叩き潰す！」

距離の取り合い…先に仕掛けたのは玉野さんだ！

「アキちゃん…木刀だけ？真っ直ぐでいいねえ〜。」

点差はほぼ直角…啓ちゃんと秀吉が削ってくれたんだ！

「ふ…僕を見くびらないでよ〜！」

矢が飛んでくる…どれもこれも直撃コースだ。

頭の中でアーケードのコントローラーを思い浮かべ、操作して交わすんだ。

「交わすだけなんてつまんない〜！」

何とでも言ってる！

待つんだ…彼女が剣撃に走るのを！

それまでに玉野さんの癖を探す。

「拡散ツ〜！」

チエツ！三本の矢を同時に打てるのかよ！

精度が欠かれているから打たれてから避けるしかない。

付け入る隙は…矢を構える時くらい。

だがその間は召喚獣の姿勢を正すのがいっぱいいっぱいだ！

長期戦に持ち込まれたら不利だ！

よくやる…が、しかし。

「乱れ撃つ！」

玉野さんが声を荒げ、十数本の矢を飛ばした！？

動いちやダメだ…こつちに来る矢だけはたき落とす！

「直撃コースは3本！ガアアアドオ！」

僕は木刀をロツドの如く振り回し、弾き落とすのも束の間、玉野さんがソードを持って突っ込んでくる！

「隙が出来たねアキちゃん！覚悟お」

「望み通りに…なるかよ！」

ゴンッ！

「い、だあ…っ」

「頭突き！？」

僕の召喚獣は玉野さんの召喚獣に頭突きを喰らわせた。

フィードバックのせいで、頭が痛む。

「ネーミングセンス悪っ！って、わっ！」

玉野さんは右足を軸にして回転し、かわすが…体勢が崩れた！

チャンス！

「僕も攻め継続は得意なんだ！」

右拳を地面に突き刺し、

ギュルルルッ！

落ちた木刀を左手で掴み、そのまま廻す！

「地龍式足払い！」

「所詮は地を這いつくばるだけの存在！飛び上がれば…！」

「飛び上がるよねー読み通りだああ！」

体勢を立て直し、僕は木刀を左手で握り、右手を剣先に添える。

「牙突もどきいいい！」

「滅茶苦茶な技を連発しても、私には届きはしない！剣よ弓よ槍となれ！」

玉野さんがソードを数本の矢ごと握り、迎撃に出た！

ギイイイイ!

木刀とソードが真っ向からぶつかった!

「!?」

剣同士がぶつかった衝撃で、火花が飛び散り…僕の木刀が燃え上がりだす。

ポオウツ!

「木刀が火に…燃えちゃうね」

玉野さんは勝利への栄光に酔いしれ、身体をブルブルさせ…恐怖した。

「!?な、何それ…木刀が炎を纏う?」

フィードバックで身体中が熱い…焦げるような痛みだ。

「ぐ、偶然だけど…ね!」

「ハツタリを!諸刃の剣に何ができる!」

玉野さんは鬼の形相で睨み付ける。

「試験召喚戦争…科学とオカルトの交差…ふざけるな!召喚獣が意志を持つなああ!」

お互いの点数は…一桁。

「大人しく逝け！私はアキちゃんを玩具色に染め上げるんだ！何で死なないのー アキちゃんは死んでなきやいけないじゃないかああー！ー！ー！」

ギリリツと弓を引き絞り、止めに来たか！

「頼む…《皇女》をその一片を残らず燃やし尽くしてくれ！」

僕の召喚獣は応えるように…身体中が炎を纏った。

その姿は、

「い…イフリート…。」

木刀に宿る業火。

かつての戦場を想起させる…恐怖。

僕は、狂った。

「カカカ…クフフ…ハハハ…！謳え！ヘルファイアの名も無き炎人よおおお…！！」

ブウンツ！

一撃で召喚フィールド内が火の海となる。

「《金色の疾風》…お前は一体何だ、何なんだお前はー！ーツ！」

ギシャアッ

「火龍一閃。」

「も、燃える…燃えて朽ちる…い、いや、あああ……………」

玉野さんの召喚獣が燃え上がる炎の中に消え去り…玉野さんはその場に倒れ込んだ。

その直後…僕も気絶した。

(吉井明久…ってなんなんだろうね…。)

.....

視点：美波

ズバツ！シユン！ギギギ…。

ウチは闘っている。

「あんだ、思ったよりも強いじゃない！」

「まだや…この程度で、ワテの命はやれへんね。」

何度打ち合ったか分からない…決定打となる攻撃は一切ない。

転校生なのにウチよりもパワフルに動いてくれるわね…。

力だけは自信があるわ。

ドイツにいた頃は150kgの鎧を装着しても大丈夫だったし、日本に来て自衛隊格闘術も学んだもの。

身体能力では勝っている筈なのに…最大限に生かすように努力している筈なのに…あの子、本当に凄い。

身体能力に圧倒的隔たりがあれば点差に関係無く、容易く勝利を掴みとれる。

でも…。

「強いやろ、わては。」

「恐ろしいくらいにね。大阪から来たんですってね。ウチもドイツから来たの…負けないわ!」

「おもしろいなあ、あんさんは!」

「ホント、試験召喚戦争があつて良かったわ!」

召喚獣の操作に関してはど素人…大したもんね…だけど!

「だあああつ!」

「ぐ…！」

ドゥッ！

仲沢さんの召喚獣が武器を手放して倒れる。

「よく頑張ったわね。もうバテバテじゃない…それ以上動くと体に障るけど？」

「縁起でも無いなあ。ポツクリ逝く程わては脆くはないねんで！」

ぎこちなく立たせる仲沢さん。

「残念ね…出来れば転校早々、死なせたくはなかったんだけど。ま、それがアンタの意地なのね。」

「バカにされて悔しいわぁ…しゃーない、今回は負けたる…わけないやろー！」

仲沢さんは突撃させる。

「浪速魂やー！」

「意気込みはいいけど…顔洗って出直しなさい！」

斬ッ！

仲沢さんの召喚獣は首を落とされながらも、剣をウチの召喚獣の脇腹に差し込んだ。

「危ない危ない。紙一重の差ね。」

「厚すぎる一枚やな。島田はん。名前は覚えとく…だが心に一つ留めてくんはなれ！わてに宿る《西の天才肌》の義は、不屈にして無限っちゅう話や！」

戦死した仲沢さんはピースし、そして、

「暇あつたらまた付き合つてな…よろしゅうに！」

「ええ、また遊んであげるわ。」

ウチは西村先生が彼女を補習室に連れていくのを見えなくなるまで手を降り続けた。

(…危なかったわ。次に会うときまでにウチも頑張らなきゃ！)

ウチは一桁の召喚獣を見て眩いた。

.....

視点：雄二

ある奴は『光』を持つ。

切札として、主人公として活躍出来る。

実力も、運も、名声もある。

だが俺は『光』を持たざる屑である。

狡賢く生き、小細工を使い、自らに危険が及ばぬよう逃避行を続ける小悪党に成り下がった。

……。

……。

……。

憧れていた『主人公』に否定され、貶められ、軽蔑され。

『主人公の取り巻き』のように大衆主義に浸り、勧善懲悪に包まれて気楽に生きること出来ない。

『世間一般』に駄目だと、クズだと、奇人だと決めつけられる。

ついには『家族』にも見棄てられ……。

果てに『自分』をキエル、シヌ、ウセル、メザワリ、イナイ、……と認識して、認識しなくなる。

何度諦めれば助かると思ったか。

創作話の登場人物のように役割だけを演じ、ハッピーエンドを導き出す。

……。

……。

……。

違っただろーが！

俺は俺だ！

他者に教わり、他者に植え付けられ、他者にレッテルを貼られ、よくいる奴になるのが嫌だったんだ！

だから卑怯になろうが、冷酷になろうが、自分で自分を自分流に認識する！

『何か』にならなくとも『自分』になりさえすれば、想うように、願うように、目指すように生きる…諦めも絶望も無い！

人生を気儘に、自由に、我が儘に！

縛らずに、抑えずに…いけたなら。

過程も結果がどうであれ満足に納得出来るようになるんじゃないかな？

辿り着いた場所がゴールって事で。

お前は俺に成らないよう、俺はお前に成らないようにな。

じゃあな…楽しかったぜ。

次に会うときには『同じ』にならないことを望む。

《悪鬼羅刹》への、《絶対悪》からの『最後の手紙』から一部抜
粋。

闘いの過去、波瀾万丈な人生、生きるか死ぬかの瀬戸際を。

今も尚、戦い続ける俺を。

明るい道を捨て、暗い夜道をかけ上がっていった頃を。

……。

混沌の中にはただ二人！

《平賀現二》、《坂本雄二》。

響かせる。

「てめえ、死にやがれええ！」

「お前は死ぬべき存在だっ！」

掛け声を上げ、突撃をかけるは、《悪鬼羅刹》 ウウウ！！！！

「正拳勝負といくぜ！」

「皇王、後ずさるべからず。」

俺は玉碎覚悟の特攻を決意する。

平賀とのタイムマン…3年前のように、2年前のように噛み付け！

《悪鬼羅刹》は誰にも飼えぬ！

「おおおーっ！！！」

平賀は居合い斬りの構えをとり、

「《首斬地蔵》！」

「チィィィ！」

俺は召喚獣を正座し、上半身を後ろに曲げさせる。

古くから柳生街道の目印となる、滝坂の道沿いに点在する石仏の1つ。

お地藏様の首にある刀を入れたような跡は柳生十兵衛の弟子、荒木又右衛門が試し切りをしたという伝説がある。

江戸初期の話になるが、

荒木又右衛門は、槍を持って馬上にいた者の足を薙ぎ、返す刀で斬って即死させた。

時速50km以上で走る馬の攻撃に反応し、さらに槍を得意とする者に、リーチの差をもとめせず、刀の勝負で容易く殺害したのだ…神業と言えよう。

さらにその斬り合いの最中、余裕綽々で「おう、仇敵でござる」とか返事したそうだ…度胸には驚かされる。

かつ、逆上した者からの背後からの攻撃を、腰にあつた鞘で受け、さらに斬りかかられるころを振り向いて刀で受け、刀身を折られながらも劣刀を用い仕留めきつた。

愛刀は山城の名流『来家』を再興した『来金道』こと『和泉守金道』ではあるが…日本刀ではなく西洋の大剣でかの偉人を表現する平賀源二は間違いなく異常だ。

実際ヤツの横薙ぎからの回転斬りは見てからでは到底避けきれぬものではない。

知っているから回避した。

何度も苦勞させられた剣技。

「その程度か坂本？俺は無傷だが。」

汗が垂れる。

「驚いただけだ。ちっとも鈍っていないんだな…安心したぜ。」

平賀の召喚獣が俺の召喚獣から離れる。

「余裕綽々か。」

「そうだ。かつての荒木又右衛門のようになあ。」

と、薄ら笑う。

「模倣したのは俺だ。御前ではない。」

ジャキッ

大剣《修羅》が、俺の召喚獣の足元を狙いつける。

「やけにリーチが長い得物だな。だが外せば隙が出来るぜ…王様さんよ。」

当たる直前にボクサーの如くバックステップで下がる。

「ボクサーの基本動作は全て予習済みだ…反応には自信がある。」

「ならこの手はどうだ。」

平賀の召喚獣が修羅王に刺激を与えると、

ただの剣に過ぎなかった修羅王の表面が砕け落ち、槍と化した。

現実世界に換算すれば4m超…先端と末端の双方に刃が見える。

俺は召喚獣にナツクルをはめ直し、向かわせた。

「薙刀とは驚いた。」

「そつだ。俺の召喚獣は高火力の大剣と高機動の両刃槍の二種を使いこなす。反してお前は近接戦闘に特化したナツクルのみ。近付く事も出来ずに、死ね！」

ナツクルで受け止めれば数発は切り飛ばされねえ筈…そつから近接戦闘に持ち込む。

ナツクルダスターは、拳にはめて打撃力を強化する武器だ。

コンパクトなものでも打撃力を大きく高める隠し武器としての効果がある。

一見すれば指輪にしか見えず、闇討ちには最適だ。

対して大きなサイズのもは、スピードが遅くなり隠匿性が低下するもの、打撃力は絶大だ。

刃や棘があれば、硬い目標物の破砕もやってのける。

防御する側としては、素拳以上に厄介で、受け技などで防御した腕や手の方にダメージを与えられる。

バット、竹刀などで叩き落とそうにも、的が小さく当てづらい。

相手によれば、ナイフやサーベル以上の脅威となりうる。

ちなみに俺の召喚獣の武装は漆黒の棘つきナックルだ。

利点は多いが…近接戦闘が可能になるまで近付かないといけない。

平賀の両刃槍を回避出来なければ攻撃に移れない。

間合いに入り込めなければ、ダメージ負けし、敗北する。

明久達は自分のことで精一杯だろうから…助けは来ないか。

……。

「来い！圧倒してやる！」

槍を回転しながら向かってきた！

「そのリーチの差がめえの首を締め上げる。極端に近付けば対抗手段は無い！」

「貴様の反応が間に合う事はない！」

平賀は敢えて俺へ突っ込んだ！

意表をつかれる！

「《皇王》に後退など無い！」

槍がかすった。

「それでこそ『平賀源二』だぜ！こうなったら一か八かの大勝負に出る！」

もう勝利の秘訣など無い。

切札の切り方も、勝負に出るタイミングも、時の運も、意味を為さない。

己の実力だけが真実だった。

俺は雄叫びを上げ、接近に成功した。

「ド派手に決める！」

平賀の槍の刃にナックルを直接当て、しがみつくように全身で押さえる。

「ゼロ距離なら槍を突いても威力はゼロだな！平賀アアア！」

「振り落としてやる！」

既に点数は、互いに一桁になりつつある。

平賀は、巨大武器を持たせれば、手も足も出せない、無敵の防御を演出する。

「し、しつこい！」

だが槍の動きに合わせれば、遊園地のアトラクションに過ぎない。

やがて俺の召喚獣は槍から飛び上がり、平賀の召喚獣の真上へ飛ぶ。

「飛ぶ鳥を撃ち落とす俺に空中戦とは迂闊な奴！」

当然平賀は槍を上突き立てんとするが、

ガッ！

「ぶ、武器が長すぎて垂直に槍が向けられない！？」

平賀は飛び上がらずに槍をそのまま突き当てた。

だが長すぎる槍：身長よりも長い武器故に召喚フィールド：つまり地面に刺さり、素早く動かせなかったのだ。

「隙が出来たな。」

「グ…慣性で想つように操れない！」

俺が得意とする『間合い』。

一気に強力な拳を打ち出す。

リラックスした柔体から、力む事なくスムーズに拳を段階的に加速し、手首のスナップを最大限に生かして放つ打撃！

「二重の極み…知ってるよな。」

実用的な技とは言えないが。

「!？」

いかなる武器、障害物を粉碎する技法。

万物には固有振動というものが有る。

固有振動数にあわせて振動が与えられた状態を共振、共鳴という。

共振をすると振動が積み重なっていき、その力が大きくなりすぎると物質が崩壊するのだ！

実際、ワイングラスが高い声（速い振動）で割れる、風で橋が崩壊した記録が残っている。

この技は人の力だけでやってのける…習得は至難と言われている。

物質には強度、硬度が存在するため、その衝撃が完全に伝わらない。

だが刹那の瞬間に二度の衝撃を打ち込む。

すると第一撃目は通常通り物体の抵抗で緩和されるが、刹那の瞬間に打ち込まれた第二撃目の衝撃は、抵抗を一切受けることなく完全に伝わるため、物質の硬度に関わらず粉々に粉碎することができるのだ!!!

ゴッ…ガッ…バギヤアッ!!!

いかに強力な武器でも、粉々に砕け散れば無となる。

「まだまだアーツ！」

平賀の召喚獣が俺の召喚獣の両手を掴んできた！

「これならナツクルは使えない！肉弾戦で…！」

「肉弾戦は苦手じゃねーの…か？」

短い気合いと共に追撃の膝蹴を、才蔵の召喚獣の顔面に叩く、叩く、叩く…！！

この徹底的に無慈悲で、執拗なまでの攻撃こそが、《悪鬼羅刹》だ！

「どうせやるなら、徹底的にな。お前が俺の弱点を知っているのなら、尚更だ。修羅さえ凌駕し、俺は『俺』で居続ける。」

それがかつての俺、そして今の俺だ。

「《皇王》が…敗北に墮つるのかっ！」

「そつだ。てめえの負けだ。敗因を教えてやるよ。」

「な…に…？」

俺は膝蹴で浮き上がった才蔵の召喚獣の頭部に踵落としを喰らわせ、消し去った。

「プライドに束縛され、妄信的に猛進するから首を絞めた。世間知らずもいとこだぜ…《皇王》が選ばれた人間と勘違いするお前の姿はお笑いだつたぜ。」

俺は平賀の肩を叩き、Fクラスから出ていった。

「この勝負…Fクラスの勝利！」

鉄人の宣言を背景に、《悪鬼羅刹》は次なる目標へ走り出した。

第7話 勝者と敗者と新たなステージ（後書き）

ごり押しになったものの、Dクラス戦を描ききれました。

知らないうちにPV7000を突破！

ありがとうございました！

次回は戦後対談、そして……！！！！

第8話 さらばDクラス！強者達との別れ（前書き）

問 『やんごとない』の意味を書き記しなさい。

吉井明久以外の二年生の答え
『貴い』

・教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え
『ヤバくない』

・西村先生のコメント
お前の頭がヤバいんだ！…流石は『観察処分者』の面目躍如といっ
たところか；

第8話 さらばDクラス！強者達との別れ

視点：啓吾

「という訳で、D組代表は死んだ。」

『……勝った。』

無線越しから伝えられるムツツリー二の報告に、俺達は安堵した。

だが、被害は大きく、玉野、仲沢、清水、塚本、そして平賀の5人に極限に追い詰められたのだ…危なかった。

「雄二…凄いな。」

「いや、大したことはない。平賀があそこまでやるとは思わなかった。」

文字通りの『激戦』だった。

姫路抜きに勝ったからいいものの。

すると明久が1点だけ稼いで戻ってきた。

「雄二…船越先生の誤解を解いたよ。」

近くの御兄さんを犠牲にしたとのこと。

須川、島田、ムツツリー二、秀吉も無事に帰還した。

「D組に行くぞ。戦後処理だ…姫路も来い。」

卓袱台で作られたバリから姫路が、

「は、はい！」

ひよっこり出てきた。

俺もDクラスへと足を運んだのだった。

Dクラス。

全員戦死したらしく、教室に居たのは平賀だけだった。

こちらも42人死んだ…が、1対8での対談は平賀としては嫌だろう。

雄二に倒された平賀も、戦後処理が終わり次第、回復試験の義務を負うことになる。

「坂本…見事な腕だった。完全なる敗北だ。で、教室の明け渡しは、いつにする？」

切り出す平賀。

「その必要はねえ。」

雄二は、平賀にそう返した。

「…要求を飲め。そういうことか。」

「ああ。お前のクラスには5人の強者がいる。しばらくの間借りたいのさ。」

「パシリ…か。」

「まあな。俺は…ここでは止まらない。次に目指すのは《絶対悪》率いるBクラスだっ…!!」

「…さ、坂本!?!?!」

俺も叫ぶ…てつきりAクラスに仕掛けると思っていたからだ。

Dクラスでこれだけ苦戦したのに、より格上のBクラスに仕掛けると言うのだ…!

平賀は驚く。

「あ、あの男に挑むと言うのか!?! 《絶対悪》に…!」

「無謀と罵るなら好きにしろ。俺は奴を打倒する。」

「あいつは狂気そのものだ…!」

雄二は頷く。

「だろうな。アレはまともではない。」

「坂本…お前は…何をするんだ？」

「説明の手間は、省く。クラス設備降格と引き換えにお前らを差し出す…交渉をしたいが、どうする。」

「俺と美紀、仲沢さんと塚本は問題ない…それで済むなら儲けモノだ。」

「清水は？」

雄二の質問。

「清水は美紀の親友だ。彼女に任せるつもりだが…多分大丈夫だと思っ。」

「わかった。」

島田が前に出てきた。

「平賀。美春にはウチからも伝えておくわ…そうね、今流行りの、駅前の喫茶店『ラ・ペデイス』は、美春の実家だし、食事するついでにね。」

平賀の表情が緩やかになる。

「仲沢さんも呼んでいいかい？君と話がしたいんだと。」

「いいわよ。ウチは大歓迎よ。」

雄二は、その発言に、友好関係を深めるのは悪くないという態度で話を続ける。

「合意って事でよろしく。」

「ああ。だが、坂本…《絶対悪》には気を付けろよ。」

「ああ…奴ほど卑怯かつ錯綜した作戦を考えうる『常人』はいないからな。」

すると平賀は暗い表情を見せる。

「《絶対悪》だけじゃないぞ。」

「なに？」

流石の雄二も難解そうに頭をかく。

意味が分からないという顔をする雄二に、

「実は俺達もBクラスに勝利すべく、調査をしていたんだが…相当の実力者の存在を突き止めた。」

平賀は雄二に一枚の紙を突き付けた。

「じ、こいつは…!？」

雄二の顔が驚愕に歪む。

俺も明久も、ムツツリー二も秀吉も驚きを隠さざるを得なかった！

その名前を知らない者は居ない。

「ま、まさか：去年の二年生でただ一人、『留年』しちまったアイツが、Bクラスに在籍してるとっていつのか!？」

平賀は頷き、

「ああ。一昨日、学園長室を横切ったときに聞いたんだ。」

- - - - -

視点：カヲル

一昨日、午前8時

文月学園長であるあたしは、一人の女子生徒と談話していた。

「まさか：文月学園初の『原級留置者』がアンタとはね。」

「は、はは……。」

175cm超えの美女は苦笑いをする。

蒼色の瞳と長髪…女性とは思えぬ筋肉のつきよう。

「でも！わたしが悪いんじゃないんだ。高速道路でバイクを運転してたらスリップしてきたダンプカーと正面からぶつかって、撥ね飛ばされて住宅地に頭から突っ込んで…大怪我して、最近まで病院暮らしを強いられたんだ！」

「確か、《去年の九月初旬から十二月中旬まで》入院して、それで出席日数が足りなくて留年…だったかね？」

大きく頷く美女。

「まあ死ななかつただけマシさね。」

「も、もっと心配しなよー！」

あたしは溜め息をつく。

「学園のルール…『総出席日数が2/3に満たない者は成績、功績に関わらず原級留置とする』…きっちり守ってもらおうよ。」

「残酷過ぎる…。」

「ま、アンタの家族も『ああいう』タイプだし、1年くらいは苦勞してもいいと納得したんだ。退学よりはマシさ。」

「うん…。」

「まあBクラスに入れる成績だから留年することもないだろう？あ
たしも応援するから、頑張りな。」

「はい、学園長……。」

その女子生徒：『滝川 水瀬』は、Bと書かれた紙を持って、部
屋を出ていった。

- - - - -

視点：啓吾

「その情報はモノホンか？」

無理もない。

信じ難い情報だ。

学力至上主義の権化の文月学園。

テストの点数さえあればいい考えだ。

だから文月学園の生徒は、

1：成績・功績は高い上に性格・存在・行動も理想的である。

2：成績・功績は高いが、性格・存在・行動に欠陥がある。

3：成績・功績はそこそこ安定していて、性格・存在・行動に突出した部分は無い。

4：成績・功績は低いが、性格・存在・行動においては評価に値する部分がある。

5：成績・功績は低く、性格・存在・行動にも問題がある。

と、五つに区分される。

姫路と霧島は1に、横溝は4に入ると言えば理解できるだろう

しかし…この5つの区分以外にもう1つ階級が存在する。

6：ある分野に關した時、異常なまでの実力を発揮できる

タイプだ。

《完全演技》もとい『木下秀吉』がいい例だ。

一度見ただけで完璧に真似をし、『音楽・美術』の試験に限り40
0点以上稼ぐ。

当然だが、明久も雄二も俺もムッツリーニも、6つ目に入る。

そして…《絶対悪》も《あの女》も。

……。

平賀は雄二に警告する。

「《絶対悪》は戦闘は不得手だが、《あの人》は、ガチだ。」

「知ってる。《金色の疾風》を秒殺した話は有名だ。」

明久はガタガタ震えていた。

「……俺は殺されはしなかったが、隙は無かった。盗撮出来ていない数少ない女だ」

ムツツリーニも実力を認める発言をする。

ここで俺は平賀に言う。

「《絶対悪》…《あの人》を利用出来るのか？」

平賀は首を横に振る。

「もう一つ噂がある…《あの人》が入院していた頃、その病院に《絶対悪》が幾度と出入りしていたのを美紀が見ている。親しい可能性がある。」

雄二は少しばかり考えてから、

「Bクラスについて調査しろ、ムツツリーニ。二人以外に厄介な奴が潜んでいるかも、だ。」

「……了解。」

消えた。

「気を引き締める必要があるな。情報提供、感謝する。」

「礼には及ばない。」

「しかし…まさか姫路さんがFクラスだなんて信じられん。」

平賀は姫路を見て驚く。

「す、すみません。」

謝ろつとする姫路の肩に俺は手を置いた。

「謝る必要は無い。」

「松下君の言う通りだ。姫路さん…俺はFクラスを甘く見ていた。」

明久も平賀に話し掛ける。

「平賀君、いい勝負だったよ。ね、秀吉」

「うむ。皆満足に闘えたのじゃ、不満を持つとる人はおらぬよ。」

「うん…でもなんで雄二はAクラスに攻め込まないんだろ。」

雄二が横入りしてきた。

「少しは自分で考える。そんなんだから、お前は近所の中学生に」

馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！そんな半端にリアルな嘘つかないでよ！」

「スマンスマン。近所の小学生だったか」

「……人違いです」

「明久、お前言われた事が……？」

まさか。

俺と雄二は明久を憐れみの目で見た。

「兎に角、Dクラスの設備には一切手を出さない。かわりに、俺の指示に従ってもらおうように交渉したんだ。分かったかバカ久。」

雄二は平賀に目を向け、

「指示については後日詳しく話す。今日はもう疲れただろう。今日はこの辺で御開きとしよう。」

「ああ。有り難う。お前らがBクラスに勝てるよう願う。」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろ？」

「無理ではないさ。FクラスにはBクラスに対抗しうる手立てがあるじゃないか。…さてと、俺も補習室に行くよ。次は勝たせてもらっよ、雄二。」

じゃあな、と手を挙げてDクラス代表平賀源二は去っていった。

…さらばDクラス。

必ず勝つ。

俺達は第一歩に出ただけなのだから。

第8話 さらばDクラス！強者達との別れ（後書き）

少し風邪気味です。

でも更新頑張りますよ！

次回からBクラス戦に入ります。

EX1 化学兵器『ミスキ』！逃げる作者

視点：アルたん

「姫路瑞希の楽しい料理教室うー！ー！」

俺は何故ここにいるんだろう。

半ばごり押しで、気味が悪いほどの、明るい雰囲気が始まったこの企画だが…。

『化学実験室1』…どうということなの？

「ええっと…このコーナーは、吉井君や坂本君に美味しい料理を召し上がって貰えるよう、練習する為に私が考案しました！今日のゲストははるばる近畿から文月学園にお越しくださいました、『アルたん』さんです！」

パチパチパチパチ！

信頼と安心の一人握手。

そんな企画で大丈夫か？

「大丈夫です、問題ありません さて、今日は肉じゃがを作りたいと思ってるので、アルさん、実況を御願います！」

「ああ、頑張つて！」

材料

「まずは肉じゃがの材料の紹介をしますが、在り来たりな既存物は万人受けしないので、変わった肉じゃがにしますね。」

「おお！wkwkしてきたよ！」

「腕によりをかけますから、期待して下さいね！」

うん…その前に家庭科室に行こうよ。

5分後

「それでは材料の紹介です。」

「やりましょう、やりましょう！」

「材料は、4人分です」

メイン

じゃがいも大4個

たまねぎ大1個

しらたき1玉
牛肉（薄切り）200g
グリーンピース大さじ3
サラダ油大さじ3

煮汁

砂糖大さじ3
みりん大さじ2
しょうゆ大さじ4
水カップ2

おまけ

秘密のレシピ

凄く……豪華です……。

作り方

「じゃがいもは皮をむいて、適当な大きさにきります。10〜12個くらいに切り分けるのがいいでしょう。たまねぎは芯を落としてから厚みを3等分して同じ大きさのくし形に切り分けます。牛肉は3〜5cmくらいに切りましょう。好みに合わせて多少大きさが変化しても構いません。」

これだけの作業をスムーズにこなすとは…相当の上級者だ！

「しらたきはサツとゆでてアクをとりましょう」

「それは…流行りの『灰汁取りブラシ』…出来る!」

微笑ましい光景だ。

「鍋でサラダ油を熱し、たまねぎをいためます。少し透明になるまで炒めるのがコツです。」

大変だ…玉葱全体的に同じ色に炒めるのは難しい。

姫路さんはせつせと作業を続ける。

「たまねぎが透明になるまで炒めたら、そこに牛肉、水けを切ったしらたきとじゃがいもを加え、全体に油が回るように炒めましょう。」

ここまでミスは無い…何事もなく終わりそうぞで安心した。

「牛肉の色が変わったら分量の水を加え、最初は砂糖・清酒・みりん・しょうゆ各大さじ2で調味をしてください。すぐふたをし、火加減は煮立つまで強火、煮立つたら少し火を弱めてアクをすくい取りましょう!」

ここまでテンプレ。

「ではここで…秘密のレシピを使いましょうううう!!!全体に煮汁の色が均一になったら、濃硫酸を45ccを加えましょう。」

「じゃがいもに含まれるデンプンを加水分解させ、単糖類を生成す

るんだな。」

硫酸 (H_2SO_4) + デンプン ($\text{C}_6\text{H}_{10}\text{C}_n\text{H}_{2n}\text{O}$) = 単糖
類 ($\text{C}_n\text{H}_{2n}\text{O}$)

デンプンを希塩酸または希硫酸と加熱すると、加水分解が起こり、グルコースが得られる。

これ以上加水分解されることはない：グルコースのように、これ以上加水分解されない糖類を単糖類という。

単糖類は糖類全体を作り上げる基本単位として考えられる。

覚えておいて損はない。

「これで甘味は付加された。で、次のポイントは？」

「ちなみに薬品は必ずラベル側を持ちましょう。次ですが、仕上げとして、一煮立ちした所でいったん火を止めます。」

ほうほう。

「そして隠し味に、酸味を強調したいときはクロロ酢酸を加えましょう。さっぱりした酸味が食欲をそそりますよ。」

クロロ酢酸とは、酢酸に似た刺激臭を持つ潮解性の物質である。

腐食性が強く、劇物に指定されている。

除草剤の一種として知られる2,4-ジクロロフェノキシ酢酸の原料として利用されている。

クロロ酢酸は赤リン、硫黄もしくはヨウ素といった触媒の存在下で酢酸を塩素処理することで合成される。

また、硫酸を触媒にしてトリクロロエチレンを加水分解させる方法でも合成できる。

「酸味が増えたが、腐食性があるんじゃない、日持ちしないな。」

「対策済みです 最後に硝酸カリウムとグリーンピースを入れましょう。防腐剤として硝酸カリウムが働き、グリーンピースのおかげで彩りも豊かになります。」

化学式の纏め

食塩 (NaCl) + クロロ酢酸 (CH₂ClCOOH) = クロロ酢酸ナトリウム (C₂HClClON₂) + 塩酸 (HCl)

硝酸カリウム (KNO_3) + 硫酸 (H_2SO_4) ≡ 硝酸水素カリウム (KHSO_4) + 硝酸 (HNO_3)

塩酸と硝酸が残ったな。

…ん？

塩酸 + 硝酸 ≡ 王水

玉水

王水とは、硫酸や塩酸よりもはるかに強力な溶解力をもつ液体で、金やプラチナをも溶かしてしまう。

旧ベルギー領コンゴは、1960年に独立を得たものの、1961年、初代首相パトリス・ルムンバは、軍人により打倒され、処刑された。

噂では、死刑執行人は、地上に何も残さないために、硝酸と塩酸の

混合物、「王水」で彼の死体を溶かしたとか何とか。

ガタガタガタガタガタガタ……………。

盛り付け

「そのままにしておくで鍋まで溶けちゃいますから、すばやくガラスの器に盛り付けましょう。ガラスは溶けないので、安心してくださいね（ニコツ）」

試食

「アルさん。味見と感想を御願います」

「見た目は最高だ。」

「食べてください。」

「匂いだけで十分お腹が満たされた。」

「食べなさい。」

「綺麗なガラスの器だな。」

「召し上がね。」

姫路さんの料理を口に運んだ。

「しょうゆと砂糖でうまく味付けが出来ていて、食材の食感がしっかり残っている。何より舌がトロリと溶けるように……じゃあの。」

俺の意識はそこで飛んだ。

「あらあら、アルさんたら、牛になっちゃいますよ。では皆さん、さよ～なら～」

追記

料理番組はもう沢山だ！b yアルたん

EX1 化学兵器『ミスキ』！逃げる作者（後書き）

初めてのおまけ、どうでしたか？

PVが徐々に増えていくのを見ると、頑張れる気がします、有難う！

後は…姫路さんの真似をしないように！

登場人物紹介4（前書き）

今回はDクラスの主要メンバーの解説をやります。

PVが9000を突破しました。

この勢いで次へ次へいきます。

登場人物紹介4

平賀 源二（変更点のみ）

・かつて《皇王》と呼ばれ恐れられた。百人規模の生徒を率い、一大勢力を築いた。

・雄二や亮とは、『喧嘩する程仲が良い』付き合いで、鎧を削り合っていた。

・美春に豚呼ばわりされていない。美紀とは小学生高学年からの修行仲間。

・戦闘では3m以上の大剣や槍を用いる。

清水 美春（変更点のみ）

・男嫌いだが、実力が高く優れた者に対しては男女問わず敬意を持つ（恋路を邪魔する者は例外無く潰すが）。

・父は五ツ星レストランの元料理長、母は五ツ星ホテルの元バーテンダー。美春も幼い頃から料理修業に明け暮れていた。

・料理に必要な体力や集中力は身に付けており、戦闘もこなせる。フォークを投げ、フライパンの蓋でガードし、模造ナイフで近接戦闘をするスタイルでどの距離でも対応可能。

玉野 美紀（変更点のみ）

・昔は《皇女神》を名乗っていたが、神を否定し、《皇女》に至る。

・戦闘時は集中力を高めるために敢えて狂人となる。

・弓矢や剣は後付けに過ぎない。本来の使用武器は『二丁の鉄製ト
ンファー』だ。実力は非常に高く、明久以上源二以下。

塚本 光太郎（変更点のみ）

・ボクシングとムエタイを合体させた独自の拳法を使用する。

・須川をして『間違いなくプロだ』と言わしめた実力：老朽化した
壁にパンチで穴を開け、ピアノ線の入らない強化ガラスをキックで
割る事が出来る。

・召喚獣はムエタイの選手がボクシンググローブを装着した感じ。

なかざわ
仲沢 好美

身長 164cm

外見 金と茶のふんわりスウィートボブ

性格 浪速魂、負けず嫌い、マイペース

趣味 映画鑑賞

特技 水中で30分間息を止められる

好き 優しい、ノリの良い、熱血な人

嫌い 生真面目な人

・概要

大阪から来た《天才肌》。

祖父の『もつと落ち着いた人にならんかい!』の一言がきっかけで文月学園に転校してきた。

明朗快活にして限り無く野性的。

大阪にいる家族と親友は全員、半端ない強さとのこと；

喧嘩時には一切の武装を使用しない。

上半身はサラシのみ、下半身も伸縮ゴム製の短パンしか穿いていない。

スタイルは完全なまでにカウンター型：もれなく相手の戦術や知略を楽しめます。

・成績

全12科目において、120点前後を行き来している。

・召喚獣

転校したばかりらしく、まだ調整中なのだ。

現在はテストプレイ用の召喚獣を使用。

第9話 策と対話と卑怯者（前書き）

バカテストはありません

第9話 策と対話と卑怯者

視点：松下

「うあー……づがれだー」

「お疲れさん。船越女史の一件も片付いたし、良かったじゃねーか
！」

へタレる明久に声をかける雄二。

今日は朝から昨日のDクラス戦で消費した点数の回復を目的とした
補充テストを受けていた。

因みに船越女史の一件は、明久が近所に住むお兄さん（39歳/独
身）を紹介する事で片が付いた。

「お疲れ様じゃ明久に啓吾よ。」

「……………（コクコク）」

何時の間にか近くに秀吉とムツツリーニが来ていた。

「秀吉は今日も可愛いな。」

「啓吾よ／＼／」

秀吉が照れる…本当に男子なのか？

「よし、昼飯食いに行くか！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな…買ったら屋上に持っていくぜ。」

勢い良く立ち上がる雄二からは疲れが感じられない。

「うん。俺は購買に寄ってから屋上に行くけど、明久はどうする？」

「僕も屋上に行くよ。」

「ウチは食堂に行くわ。今日、お弁当作ってこれなかったのよね…済ませたら屋上に行くわ。」

「……………購買に行ったらそっちに行く。」

「僕も屋上に行くとするかの。」

「わ、私も屋上に。」

「俺も行くぜ」

食堂に行くのは俺、雄二、美波、ムッツリーニの4人。

屋上に行くのは明久、姫路、秀吉、須川の4人となった。

「今日も良い天気だなあ。」

須川は欠伸をしながら呟く。

「今日は黒胡椒と醤油も追加したよ。」

明久は弁当を広げた。

「明久、いつか死ぬぞ。」

俺は呆れて天津飯にスプーンを入れ、明久に分ける。

「啓ちゃん…命の恩人だあ。」

パクツと食べる。

「昔からなんだよな。明久の調味料癖は」

「昔からかよ！」

須川は日替ランチのウィンナーを明久の口に投げた。

「うん…明日は飯抜きにしよう、バチが当たるから。」

「明久よ、ほれ。」

秀吉の投げた卵焼きを明久は受け取った。

「う、これは！？う、うまああいつ！」

「美味しいと言われると、嬉しいのじゃ」

食事を終えて、暫くすると雄二達が屋上に到着した。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？試召戦争のか？」

「うん、相手はBクラスなの？」

「ああ。そつだ」

雄二が美波の言葉に頷く。

「雄二、どうしてBクラスなの？目標はAクラスなんじゃないの？」

島田の言葉に雄二は、

「正直に言おう。どんな作戦でも、Fクラスの戦力じゃAクラスに勝てやしない。例え、姫路が居ようが松下の一部の教科が高かろうが、それは個人の戦力だ。Aクラス相手じゃあつと言つ間に倒される。」

雄二の言葉に俺も姫路も頷く。

無理もない。

この文月学園はAクラスからFクラスの6クラスから成るが、Aクラスだけは格そのもの違う。まさに別次元だ。

五十人からなるAクラス生徒の内、四十人はまだ良いだろう。Bクラスより少々点数が上の普通の生徒ばかりだ。

だが、残りの十人がヤバイ。

首席の霧島翔子だけではない。久保 利光、木下 優子、習志野 桃花。あいつらの実力は想像を絶する。

例え、奇襲をかけ俺達が奴等を取り囲んだ所で、返り討ちが関の山だ。

どんな作戦でも、代表を討ち取れぬ限り勝利は無い。

止めを刺せない以上、俺達に勝ち目は無い。

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変更って事？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「雄二、さつきと言ってる事が違っじゃないか」

美波の言葉を引き継ぐ様に明久が間に入る。

「聞け。クラス単位じゃ絶対に勝てない。だからこそ一騎打ちに持ち込むんだ。」

「一騎打ちに？どうやって？」

「Bクラスを使う。」

雄二の言葉に明久が首を傾げる。

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知ってるな？」

「え？も、勿論！……。」

（明久君、下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんですよ。）

姫路が明久に助け舟を出す。

「せ、設備のランクを落とされるんだよ」

「……まあいい。つまりBクラスならCクラスの設備に落とされる訳だ」

雄二が明久をジト目でみながら告げる。

「そうだね。常識だね」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい！」

清々しい誤答に俺はイラッとした。

「松下。」

「自作ペンチだ。殺れ。」

「ややつ。僕を爪きり要らずの身体にする動きがっ」

「雄二も啓吾もやめてやれよw」

須川が雄二と俺の肩を引つ張った。

「相手と設備が入れ替えられちゃうんですよ」

またしても瑞希のフォローが明久に入る。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるんだね」

「ああ。そのシステムを利用して、Bクラスに交渉する。」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたらFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラス設備で済むからな。旨くいくだろう。」

「ふんふん。それで？」

「それをネタにAクラスと交渉する。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな。」

いい作戦だ。

俺は素直に雄二を評価した。

学年二番手のクラスと戦った直後に休む暇もなくまた戦争。

これはキツイだろう。

Fクラスも連戦になる…だが、体力のあり余る俺達にとっては何ら問題ない。

だが、Aクラスはそうではない。

勝つても得られる物も無く、Fクラス相手に時間を浪費するのは嫌な筈だ。

モチベーションの差は歴然としている。

「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎打ちよりも試召戦争の方が確実にあるのは確かじゃからな。」

秀吉が疑問に思つのはもつともだ。

「そもそも一騎打ちで勝てるのじゃろうか？此方に啓吾がいるということは既に知れ渡っている事じゃろう？」

FクラスがDクラスに勝つたとなると、当然その勝ち方に注目が集まる。

俺の存在は周知の事実だ：姫路がDクラスにしか知らされていない
とはいえ、相手は彼女の行方を探す筈だ。

「その辺に関しては考えがある。心配するな。」

皆の不安と対照的に自信満々な雄二。

「兎に角Bクラスをやるぞ。細かい事はその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

いくら雄二でも勝算無しにこんな事は言わないだろう。

「で、明久」

「ん？」

「今日のテストが終わったら…。」

雄二の言葉を俺が遮る。

「雄二。明久にまともな交渉は出来ない…《絶対悪》のこともある。」

雄二は俺を見る。

「それもそうだな。バカ久は何をするか分からんし。松下に任せる。
会議は終わり…どうした姫路？」

姫路はもじもじしている。

「あ、あの。」

「何？」

「吉井君はいつもそんなお食事なんですか？…迷惑じゃなかったら、明日皆さんに作りますけど。」

「「御願います！」」

須川と明久が土下座した。

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ。」

姫路の弁当…イエエエエイツ！！

「迷惑なもんか！ね、雄二、啓ちゃん！」

「ああ、そうだな。ありがとう」

「是非とも。」

「そうですか？良かったあ」

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……。」

「……島田、がんばれ。」

「明日が楽しみじゃ。姫路よ、有難う」

「女の子の手作り弁当か…キョロキョロ」

「良かったな須川。」

「それならウチも作るわ！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

島田も自信満々そうに腕捲りした。

「悪いな。それじゃ頼む」

「は、はい！」

「無理はするなよ。」

「大丈夫。ウチは体力には自信があるの」

島田と姫路は先に教室へ戻って行った。

俺達も卓袱台を片付けてから、少しばかりDクラスの生徒たちと交流し、教室へ入った。

.....

俺は完全武装をした。

制服の下に防刃ベストを付け、背中に模造刀を付け、ポケットの中

に煙球を仕込み、暗視スコープを装着する。

明久は…装備無し。

「とうわけで明久、午後のテストが終わったら松下と共にBクラスに宣戦布告に行け。」

下位勢力の宣戦布告の使者は酷い目にあうよな。

「断る！雄二が行つてよ！」

「やれやれ…ジャンケンで決めるか。」

「よし、望むところだ！」

俺は無心になる…《武器職人》の真の強さを引き出すべく。

「ただのジャンケンじゃ面白くない。心理戦ありで行こう。」

駆け引きか…。

「じゃあ僕はグーを出す」

「それじゃあ俺は…明久がグーを出さなかったら打ち殺す」

心理戦の欠片の一つも無いんかい。

「いくぞ、ジャンケン……」

「ぽ、ぽ、ポン！」

パーヴスグー

「こ、この僕が負けた…」

明久…後出して負けるとはな。

「よし、逝ってこい明久。」

「絶対に嫌だ！」

「Dクラスのと看みたいに殴られるのを心配しているのか？」

「言つまでもない！」

「それなら今度こそ大丈夫だ。保障する…松下がなつ！」

「俺かよ！」

雄二はニヤツとする。

「Bクラスには美少年好きが多い」

「そつか、それなら大丈夫だね。」

「でも、お前不細工だしな……」

「失礼な！365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ〜！」

実質5度だな…。

「微妙じゃのう。」

「皆大嫌いだ!!!」

俺は明久を慰めるのに小一時間かった。

- - - - -

15:00

昼休み、そして午後の回復試験をこなした俺は明久と一緒に新校舎の屋上で佇んでいた。

カッカッカッ

ボブカットの男が手を挙げながら、俺の前に立ち止まった。

「今日は俺の我儘を聞き入れてくれたこと、感謝する。」

「ふん…定刻通りの到着とは、良い身分だな。」

「悪かったな、松下。」

「まあいい。卓袱台と座布団を用意してやったから、とつとと座れ。」

俺と根本は卓袱台を隔てるように座る。

「まさか…お前がFクラスとはな。バカが感染ったのか？」

「お前の卑劣さに影響されるよりはマシだな。」

「おやおや、悪口をぶつける為に俺を呼んだのなら帰らせてもらおうが…まあ良いとしよう。Bクラス代表の根本恭二だ。よろしく。」

根本は握手を求めたが、明久は拒んだ。

「画鋏なんかねーよ。で、松下…用件は何だろうつか？」

俺は大きく明瞭に叫んだ。

「俺達Fクラスはお前の率いるBクラスに宣戦布告する！！！」

十数羽の鴉が飛び立った。

根本はピュウツと口笛を吹く。

俺は奴に憎しみを籠め、私情を挟む。

「以前からお前は目障りだったんだ。これを機に、引導を渡してやるから、部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする準備をしとくんだな…棺桶くらいは用意してやるよ。」

「そこまでする必要は無いと思うが」

焦る根本。

「お前は、世間の規則に従順な『お子ちゃま』じゃないからな。二度と立ち上がれなくなるまで、叩き潰してやる。」

状況を把握したのか、根本は首を傾げながら返答する。

「冗談には聞こえないな…お前らのような卑怯で冷酷なクズは何をするか分からない上に、どんな手でも躊躇無く使ってくるからな」

「それをお前が言うのか。」

俺は嘲笑する。

「俺はお前らのようにバカでも無ければ、性悪の小物でも無い。『卑劣さ』の度合いが違うんだよ。」

「性悪で卑怯な小物が代表とは…Bクラスの連中には同情せざるを得ない。」

根本は背筋を伸ばす。

「人望が無いから、自分勝手にやれるのさ…。」

俺は冷笑を浮かべる。

「だから傲慢で器量が小さいんだよ。所詮は、Bクラス…俺たちの敵じゃないな。」

「根拠もない自信は何処から湧く？」

「さあな？ま、《小山 友香》を盾にしているようでは、卑怯な手を使う覚悟つてのが出来ていないらしい。」

根本は、ハハハと笑い、

ドンッ！

と、卓袱台を強く叩いた！

「図に乗るな！さつきから聞いてりゃ、馬鹿にしゃがって！！！！何が言いたい！？」

根本が俺の襟首を掴む。

「Fクラスが恐いからCクラスを後ろ楯にしたんだろ？」

根本は卓袱台に爪を立て、睨んできた。

明久は畏縮しているが…。

「離せ。」

「けっ、Fクラスごときが。」

根本は手を離した。

「さて、開戦の時刻は？」

根本はかなり気が立っていたが…直ぐにその表情は消える。

「明日の午後2時から…ただし、午後5時までに勝敗が決まらなければ。」

「決まらなければ?」

「戦闘を中止し、午後5時の状態を保ったまま、次の日の午前9時に持ち越し…というのはどうだ。」

「理由は?」

「Bクラスには、予備校に行っている者が少なくない。戦争をするのは言いが、学業が疎かになるのは戴けないだろう?」

「本当にそれだけか?」

「それだけだ。」

…大した男だ。

根本が小物ならば、今の挑発を自身に向けられたとして、怒りを隠しきれずにヒステリックになり、冷静さを保てなくなる。

しかし奴は見事、『クラス代表』として、役割を果たしきったのだ。人格と人望を除けば、是非とも欲しい人材…というのが俺の本当の気持ちだった。

・昼休みに根本が明久をボコボコにしなかったのは、明久を下手に血祭りに上げれば、Fクラス中の憎悪を受ける事に繋がってしまうから。

・根本の手引きで明久と俺が無傷で帰れば、Fクラスの生徒は根本に対し疑念を浮かばせ、不安を煽ることになる。

・そして、俺と明久を新校舎の屋上で待ち合わせをするように指示を出す。Fクラスの生徒に二人を人質に取ったと思込ませれば…動きを制限する事が出来る。

「要するに、根本はこの3つの目的を、話し合うまでに全て達成していたんだ。後はBクラス側の情報を言い漏らさなければ、挑発に乗ろうがハツタリに動揺しようが、どうでも良かったのさ。」

「な、なるほど…」

「冷静に考えれば簡単な作戦だ、引つ掛かる道理はない。しかし、『根本』恐怖』という観念が、俺達を疑心暗鬼にさせ、冷静さを欠くことになった。」

俺は明久に先に教室に戻るよう指示した。

屋上で一人きり…俺は唇を噛んだ。

最初の対決は、完全な敗北だ。

根本はこうなる事を予想した上で、俺との対話を望んだ…見事に『自分を危険に曝さない』ように。

だが逆に手に入れた情報は大きい。

携帯が鳴った。

「土屋。成果は。」

『……………お前が話を長引かせてくれたお陰で教室に忍び込むのは簡単だった。Bクラスの生徒の人間関係を調べたが面白いことが分かった……………今日の夜に雄二とお前にメールを送る。警戒が厳しいので切らせてもらおう。』

ツー、ツー、ツー……………。

俺は携帯を閉じ、旧校舎へ向かった。

明日は…天気も学園も大荒れになるな。

第9話 策と対話と卑怯者（後書き）

皆様：本当に感謝感激であります。

3週間でPVが、10000を突破しました！

オリ展開を入れるのは難しいですが…これからも頑張ります!!!

次回からBクラス戦が始まります…かなり長くなると思いますが、ご了承ください！

第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖(前書き)

問 以下の空欄を埋めなさい。

「女性は() ()を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める。」

姫路瑞希の答え

「初潮」

・教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

「明日」

・教師のコメント
随分と急な話ですね。

土屋康太の答え

「初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経と言う。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が43?に達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪

れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される」

・教師のコメント
詳し過ぎです。

松下啓吾の答え
「禁則事項です。」

・教師のコメント
何を想像したんですか…。

須川亮、横溝浩二の応え
「俺との出会い」

・教師のコメント
欲望を書かないで下さい。

坂本雄二の答え
「鬼嫁への変身」

・教師のコメント
女性関係で悩みがあるなら、相談してください…解決の道を探しま

第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖

視点：恭二

昼休み…俺は2人で食事をしてた。

「と、いうわけで…Fクラスと闘う事になった。」

「面倒な状況になったね…大丈夫？」

「策は用意している。」

俺は、稀代の美少女、『芳野 智里』に報告していた。

芳野は、珍しく俺に友好的であるらしい。

「策？」

「説明は開戦直前だ…盗聴される可能性がある。」

俺はポケットから小さな黒い機械を取りだし、潰す。

「うわ……………」

「俺や水瀬さんが居ない間にな。連中、やりたい放題だ。」

芳野は息を飲んだ。

「奴等の手足は想像以上に長い。油断すれば敗北は必至だ。」

「どうすれば、誰にも気付かれずにそんなものを仕掛けられるんだろ。」

「学年中が2・Fの話題で持ちきりさ…混乱に乗じて、仕掛けた。」

「恭二君の言う『ムツツリー』君は、危険なんだね。」

「ああ。一番の厄介だと思う…奴にプライバシーを隠し通せる人は、水瀬さんくらいだろうな。」

策士として暗躍した為に、表向きな仕事をする『代表』を務めた経験が無いせいかな…参謀をやってるみたいだ。

「恭二君…Bクラスで有用な人は？」

「御前と水瀬さんならよく知っているが」

一区切りして続ける

「芳野は近衛部隊にして特秘事項だ…现阶段では、表には出せない。水瀬さんは…最前線で指揮を執るタイプだ。前衛に置かなければ、利点を潰す事になる。」

芳野はうーん、と考え、意見を述べる。

「恭二君…私が代表代行になるよ。」

「いいのか？代表代行は仕事は多い…全力で補佐するが、臨機応変に的確な指示をする指揮能力が必要だ。」

「やれるだけやってみる。」

「戦争の準備が整った。」

俺は芳野の真つ直ぐな意思を汲み、

「Fクラスに敗北し、弱小クラスという肩書を貼られる訳にはいかない。仮に負ければ：途端にDクラス、Eクラスが特攻に来るのは明らかだ。負けられない戦い、厳しい闘いになるが：覚悟はあるか？」

「覚悟：あるとは言い切れないけど、私はいつも貴方の味方だった。」

「お前は本当に優しいんだな。」

俺は芳野の頭を撫でた。

「恭二君？」

「ちょっと昔を思い出してな。」

「そう…2時までもう少しだね。」

「そうだな。水瀬さんに連絡しよう。」

俺はBクラスの代表にのみに支給されるノートパソコンを広げ、水瀬さんのコンタクトを開始した。

水瀬さんは退院後、リハビリついでに、学校に内緒で、バイトや内職でお金を稼ぎまくったらしい…4ヶ月で150万貯めたんだと（笑）

そして最新モデルのノートPCを自腹で購入したそうだ。

俺はスカイプを立ち上げ、水瀬さんとコンタクトをとることに成功した。

「あー、あー、マイクテスト。水瀬さん、聴こえますか？」

『大丈夫だよ。今3-Fで隼人と喋ってきたんだ。下が煩くて居眠り出来ないって困ってた。』

「今どちらにいますか？」

『新校舎の時計塔の天辺だけど？』

「どうやって登ったんすか…てか、今日雷雨でしょう…」

『傘持ってるし、慣れたら簡単さ。で、どうした？』

「五時間目が終わったらすぐ半に作戦会議するんで、来てくださいね。」

『直接言いなよ。授業は出るからさ。』

「いや、試験召喚戦争でも使うんで、テストしたかっただけなんで

す。」

『ああ、成る程。…休み時間が終わるみたいだから、戻るよ。』

「だからと言って、そこから飛び降りて窓から侵入しないで下さい…吃驚するんで」

『あいよ。精密機械は丁寧に使わないといけないからね。』

俺はパソコンを閉じる。

「芳野。十分休んでおけ…長い闘いになるからな。」

「はい。」

.....

視点：啓吾

翌日。四時限目が終わり、昼休みが来る。

「今日は姫路の手作り弁当か。」

「ああ…楽しみだ。」

坂本と俺は、立ち上がる。

「……………だが外は生憎、雷雨。」

外は真昼なのに、暗い。

秀吉が俺に近寄って話しかけてきた。

「昨日とは違ってかわって、酷い天気じゃのう。」

嫌な予感がよぎる。

「でも、私は皆さんと一緒に過ごしてるだけで、楽しくなりますし、雷なんて怖くないです。」

姫路は優しいんだな。

「お喋りはこの辺で。今日は5Fの多目的広場で食べようぜ。俺は飲み物でも買ってくるから先行つてろ。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？」

「俺達の分とっておけよ。」

「大丈夫だつてば、あんまり遅いとわからないけどね。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる。」

坂本と島田は財布を持って一階の売店に向かっていった。

「僕らも行くろうか」

「そうですね」

吉井は姫路が抱えていたバックを受け取る。そして俺達は屋上まで歩く。

.....

「「「ひ、広い! ! !」」」

多目的教室は非常に広く、1000人は収容出来る広さだ。

弁当を食べるにはもってこいの場所。

ここには俺達以外はいないらしく、貸しきり状態だ。

「気持ちいいね!」

「.....」(コクリ)

「清々しいなあ。」

「あの、あんまり自信はないんですけど.....」

姫路が重箱の蓋を取る。

「「「おおっ！」「」」

俺達は同時に歓声をあげた。

から揚げ、エビフライ、おにぎり、アスパラ巻き……重箱には夢が詰まっていた。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先にー」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツツリーニっ」

吉井が取ろうとしたエビフライを土屋が素早く摘み取る。

「まだ慌てるような時間じゃない。」

「まあ、それもそうだ」

バタン！！！

ガタガタガタガタ……トサアツ。

俺が明久を諭した直後……土屋が豪快に倒れ、小刻みに震え……死んだ。

「……」

「……」

「……」
「……」

俺、明久、須川、秀吉は顔を見合わせる

「わわっ、土屋君!？」

姫路が慌て、配ろうとした割り箸が散らばった。

「……（ムクリ）」

起き上がる土屋。

「……（グッ）」

そして、姫路に向けて、親指を立てる。

「あ、お口に合いましたか？良かったですっ」

土屋の言いたい事が伝わったらしく姫路が喜ぶ。

しかし、土屋の足は未だにガクガクと震えている。

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路がどんどん笑顔で勧めて来る。

……。

姫路に聞こえないくらいの小声で4人で会話する。

(どう考えても演技には見えぬ)

(ってことは、今のアイツ相当やばくないか？)

(だよ。ヤバイよね)

(吉井に松下。身体は頑丈か？)

(正直胃袋に自信はないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるか
ら)

(そっちの方が深刻じゃないか…でも姫路の弁当は喰いたくない。)

(ならば、ここはワシに任せてもらおう)

無謀にも秀吉が名乗りを上げる。

(そんな、危ないよ！)

(大丈夫じゃ。ワシは存外頑丈な胃袋をしていてな。ジャガイモの
芽程度なら食ってもびくともせんのだ)

おお…というか、喰ったんかい；

(安心せい。ワシの鉄の胃袋を信じて)

木下が、頼もしい台詞を言おうとした時、

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

坂本が現れた。

「あつ雄二」

吉井が止める間もなく素手で卵焼きを口に放り込み、

パクッ！

ボタンーガシャガシャン！！！！

ガタガタガタ……………ドウッ

ジューズの缶をぶちまけて倒れた。

あの《悪鬼羅刹》が一発でくたばった！？

「さ、坂本！？ちょっと、どうしたの！？」

遅れてやってきた島田が坂本に駆け寄る。

坂本は土屋と同じように震えている。

「あ、足が……………攀ってな……………」

そのザマで姫路に気を使うか…凄すぎる。

「あ、はは、ダ、ダッシュで階段の昇り降りしたからじゃないかなあ、かなあ？」

「うむ、そつじやな」

ギリギリ過ぎる……

「そうなの？坂本ってこれ以上ないぐらい鍛えられてると思っけど」

島田が不思議そうな顔をする。

「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ」

吉井がビニールシートに腰を下ろしている島田の手を指差す。

「ん、何？」

「さっきまで、虫の死骸があつたよ」

「ええっ！？早く言ってよ！」

島田は慌ててよろける。

「ごめんごめん。とにかく手を洗ってきた方がよいよ」

「そつね。ちよつと行ってくる」

明久の素晴らしい嘘…島田の命は護られたのだった……。

さて、この悪魔をどうするか。

（明久、今度はお前が行け！）

(む、無理だよ！僕だったらきつと死んじゃう！)

(流石にワシもさっきの姿を見ては決意が鈍る……)

(坂本…生きているなら、何とかしろ)

(…………。)

(どっぴうことだおい…こいつ、死んじまってるじゃねえか…)

(須川君！FFF団の団長なら！)

(無茶言うな！)

(ならば！)

明久は窓を指差し、

「あつ姫路さん、UFOだ!？」

「えっ?どこ、何処ですか!？」

吉井の指した明後日の方向を姫路が見る。

(おらぁ!)

(も…あぁっ!?)

明久は坂本の口の中に弁当を押し込んでいた…今度こそ死んだな。

「ふう、これでよし」

「……お主、鬼畜じゃあ（ガクブル）」

明久は、秀吉をスルーした。

「姫路さんごめん、見間違いだっただよ」

「そ、そうですか……。」

残念そうにする姫路。

「あれ、早いんですね。もう、食べちゃったんですか？」

「うん、雄二が『美味しい美味しい』て凄い勢いで」

「そうですかー嬉しいです。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

「う……う……。あ、ありがとうな姫路……。」

目が虚ろだった。

土屋も再度グーサインを出す。

「あの、実はですねー」

「ん、どうしたの？」

姫路が鞆を探る。

「デザートもあるんです」

「デザートならば大丈夫!!!」

須川が素早く取り、アップルパイを食す。

ハムツ…ダツ!

立ち上がる須川。

涙を流している。

「舌が融けるようなつま…さっ!」

ドサアアアッ!!!

(明久!次は俺でもきつと死ぬ!)

坂本がゴロゴロ転がり、逃げる。

(ワシがいこう。)

(秀吉!?無茶だよ、死んじゃうよ!)

(秀吉…考え直せ。)

(大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろっ)

ラスボスに木の棒だけで挑む勇者がいる；

「どうかしましたか？……あっ！」

姫路が顔を曇らせる。

まさか、嫌がったのがバレたのか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてきちゃいましたっ」

（（天然過ぎるー！ー！））

ズコーツ！！！！

階段を下りていく姫路。

「では、この間に頂くとするかのう」

秀吉が容器に手を触れる。

「……………気を付ける。」

「木下、お前がナンバーワンだ。」

「秀吉。君のことは忘れない。」

「お前も意外と命知らずなんだな、感謝する。」

「死ぬなよ。」

俺達5人の希望が託された。

「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない。」

容器を傾け、一気に口に…かきこむ。

「むぐむぐ、なんじゃ、意外と普通じゃとゴバあっ！」

自称『鉄の胃袋は』白目で泡を吹いた。

「…雄二」

「…なんだ？」

「…さつきは無理に食べさせてゴメン」

「…わかってもらえたならいい」

明久は残りのおかずを食べ、昇天した。

俺は、おにぎりを取り出す。

パクパクパク……。

梅が入っているよう……ゴバアッ……！！

『満身創痍！』

「最初からやり直す」

「このステージからやり直す」

「リプレイに保存する」

「ゲームをやめる」

- - - - -

視点：明久

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

全ての回復試験を終えたFクラス。

教壇に立った雄二は皆の方を向いている。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「「「おおーっ！」「」」

一向に下がらないこのモチベーションはFクラスの武器と言っても過言ではない

僕は殺る気を出す。

「明久、ここまで来て今更逃げるなよ？」

「明久：言い出しつぺなんだからしつかり頼む。」

雄二と啓ちゃんに最終確認を取る。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルがBクラス戦開始の合図となった。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

「「「うおおおおっ！！！！」」」

僕たちの大半が、全力でBクラスへと向かうべく、廊下を駆け出した！

第10話 Bクラス戦開幕…悲劇の連鎖(後書き)

何だかんだで、10話目を更新しました。

ユニークが2000間近…達成する日が待ち遠しいです^^

次回からBクラスとの闘いが始まります。

読者の皆様に感謝。

第11話 シンクロを捉えろ！最強ペア発進（前書き）

バカテストはお休みです。

第11話 シンクロを捉える！最強ペア発進

視点：啓吾

BクラスVS Fクラス…苛烈を極める闘いとなっていた。

「いたぞ、Bクラスだ!!」

「高橋先生を連れて居るぞ!!」

昼休みのチャイムが鳴り終わると同時に、戦いは始まった。

前線の指揮は俺と姫路に任せられ、突撃するのは明久と秀吉となった。

「松下君は、中堅部隊なんですね。」

「現国、理科、家庭科、音楽美術はFクラス並なんだ…。」

「私も同じです。文系科目はちょっと苦手です。」

根本は15人を寄越してきたな…こちら、突撃するFクラスは30人。

今回も渡り廊下を制することが最重要項目…しかし。

Bクラス 野中長男 1976点
Bクラス 金田一祐子 2002点
Bクラス 里井真由子 1948点

V S

Fクラス 近藤吉宗 794点
Fクラス 武藤啓太 819点
Fクラス 君島博 775点

Dクラスとは格が違うな…乱戦に持ち込み、こちらは7人撃破したが、11人落とされた。

「やられそうな奴は回復試験に行け！」

フィールドが数学ならば、戦える。

《数学》

Bクラス 工藤信二 175点

V S

Fクラス 松下啓吾 337点

「なにつ!?!」

「全教科出来ないとは言っていない。」

「まじかよ!?!」

召喚獣の武器は基本的には近接武器。

銃や弓と言った遠距離武器は少ない。

つまり…ホームグラウンドで戦う場面が多いって事だ。

「1人撃墜。」

「Bクラス、真田由香。松下啓吾に数学勝負を!」

「野中長男も松下に!」

「殺られるものか!」

「啓吾よ、助太刀いたす!」

《数学》

Bクラス 真田由香 217点

Bクラス 野中長男 142点

V S

Fクラス 松下啓吾 304点

Fクラス 木下秀吉 88点

「野中は疲弊している。押し込むぞ！」

「承知した！」

点数を見て、敵二人が秀吉に飛び掛かる！

「点数が低くとも！」

「迂闊だな！」

敵召喚獣にナイフを飛ばし、武器でガードさせ…硬直を狙うように、日本刀で武器を破壊する。

「し、しまった！」

「ハアアアツ！！！」

そこをすかさず、敵召喚獣の首を撥ね飛ばす！

「秀吉が押されている！」

「野中をぶちのめせっ！」

「1対3に持ち込まれ…グウツぬう！」

数で追い詰め、野中が餌食となる。

「秀吉、よく耐えた。」

「しかしまだ油断は出来ぬ。」

「よし、松下と秀吉に続け！！」

しかしBクラスも負けじと攻めてくる！

「古典で松下啓吾に勝負を仕掛ける！」

「古典は得意だが…最近調子が悪いな。」

「Fクラスには負けないわ！金田一祐子、木下秀吉に古典で勝負します！」

「ワシも得意じゃ、啓吾はもう一人を頼む！」

《古典》

Bクラス 鈴木次郎 247点

Bクラス 金田一祐子 261点

「流石は文系専門じゃのう。」

「だがこちらも点数は持っている！」

Fクラス 松下啓吾 270点

Fクラス 木下秀吉 237点

「Aクラス並とは、驚いた。」

「啓吾の足は引っ張れぬからの。」

「Fクラスなのは総合科目だけってことか…金田一！」

「やるしかないでしょっ」

敵召喚獣の攻撃を、薙刀で捌く秀吉…演劇部主将の名は、伊達では無い！

「止めじゃー！」

「惜しかったな…名前だけは覚えてやる」

「た、確かに強い…だが、」

「あの二人には勝てない…わ。」

ドサアッ、ドスウッ

数学の教師のフィールドに撤退した。

古典の点数を70点未満にまで減らされるとは…根本のクラスメイ
トも捨てた物ではないか。

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」

「姫路よ、大丈夫かの？」

「はい……平気、です……」

息絶え絶えだが…勝負の女神が舞い降りた

「まさかね…代表がもしやと言っていたけど。」

「姫路さん…Fクラスだったんだ。」

二人の少女が迫り来る。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！Fクラス姫路瑞希さんに、
数学勝負を申し込めます！」

「律子、手伝うわ！」

ただならぬ雰囲気…土屋の情報が正しければ、

「姫路、俺も援護する。あの二人は…強い。」

「は、はい…」

岩下と菊入だったな…。

「サモン!!」

《数学》

Bクラス 岩下律子 257点

Bクラス 菊入真由美 242点

Aクラス並…俺は点数を消費しているから、苦戦は避けられないな。

「受けます。試験召喚!」

魔方陣と数字が浮かび上がり、姫路の召喚獣が登場した。

岩下と菊入はその姿に驚愕する。

「あつ、腕輪!」

「腕輪：400点をオーバーした者だけが使用できる特殊能力を秘めているらしいわね。」

「でも…点数差は、数で埋めれば!」

《数学》

Fクラス 姫路瑞希 458点

Fクラス 松下啓吾 243点

ちよwたけえwって、マジか！

姫路：理系科目だけの総点は、霧島さえも上回ると聞いたことがあるが、これ程とは思いもなかった；

Fクラスの生徒もBクラスの生徒、そして観戦している者も、彼女を見ずにはいられない！

「律子：アレをやるわよ。」

「そつね：行きましょう。」

岩下と菊入が、手を取り合い頬と頬を密着させた。

スウッ

なん、だ、この、い、わ、か、ん、は

「「岩下は二人、菊入は二人。貴女は私、私は貴女。」

「百戦錬磨の」「強者たちを」

「「討ち取る一つの闘志なり。」

演舞を始める二人。

素晴らしい。

噛み合っている…まさか!?

「あれは『同調』です!」

「「よくご存知で!」!」

『同調』とは、テニ又漫画の技の1つだ。

シンクロ
同調

・テニスやバドミントンなどの競技の、ダブルスでのみ発動が可能。

・サイン無しに、お互いがお互いに、次の動作、次の思考を先読みし、正確に判断出来る。

・故に、隙なく無駄なく動ける。

何故姫路が知っているかはさておき、あの『同調』は本物だ。

「姫路…俺が前に出る。」

「はい。」

Fクラスの『最高得点』ペアとBクラスの『同調』ペアが…激突したのだった。

- - - - -

視点：雄二

14：38

俺は卓袱台でバリを組み、ブルーシートで窓という窓に被せた。

教室にはムツツリー二と近衛部隊が5人いる。

「ムツツリー二。状況を報告しろ。」

「……………根本は人望が無い。クラスを動かしているのは芳野と水瀬

先輩。」

「ヤツは今何してる？」

「……………大きな動きは見られない。が、松下が取り付けた協定にも裏がある可能性はある。」

「ふむ。『17時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。それと、その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。』姫路の体力を考えれば、長期戦は無謀だ。こちらに有利と思つて承認したが、怪しい。」

「……………しかし、変なものだ。あの根本にしては、真っ直ぐで素直過ぎる。小細工をしてこない。」

「『喧嘩に刃物は常時装備』、『カンニングの天才』、『裏切りのポーカーフェイス』、『八百長とヤラセの演出家』…そう呼ばれた男が何もしない筈がねえ。」

「……………根本は卑怯でクズだ、しかし、冷静沈着で、決して感情を前に出すような小物ではない。」

「ああ。松下と明久と対話していた間の根本の行動。あれは、」

「……………間違いなく演技。」

「おそらく人望が無いのも嘘だ、な。」

やはり、一筋縄ではいかねえか。

「……………気付いているのは俺とお前と松下だけだな。他の連中は奴への憎しみで、何も見えていない。」

俺はニツとして、

「だからこそ、纏まるんじゃねえのかな…共通の敵を見れば、協力する。Fクラスの人間はそういうタイプなんだよ。」

「……………《卑怯者》と《曲者》。お前はどちらだ？」

「ティッシュ一枚の差…孤立するか、率いるか…ただそれだけの違いだ。」

「……………流石は『悪鬼羅刹』。悪鬼と羅刹の二つの側面を持つ男は、面白い。」

ムツリニと俺は拳を合わせた。

「世間話はここらで切るぜ。明久は？」

他の面子の動向を確認する。

「……………水瀬さんにタイムンを持ち掛けられた。」

「で、どうした？」

「承諾した。15:00から運動場で、『家庭科』の召喚獣バトルをするらしい。」

「三年前に、木刀を所持していない明久を潰すような真似をした自

分が気に食わなかったんだろうな。」

「……………勝ち目はあるか。」

「ゼロだ。しかし、一矢報いると信じている。」

ガラッ

横溝がムッツリーニに紙切れを渡す。

ガラッ

「……………松下と姫路は岩下&菊入ペアと交戦中。明久は水瀬さんとの闘いの準備中。須川は加西を撃破した、との事だ。」

「そうか。残存兵力は？」

「……………Fクラス31人、Bクラス26人。だがFFF団の士気が下がりだした。」

「成績の格差は埋めきれないか。ならば、少し強硬となるが、保険をかけておこう」

俺はポケットから、紙を取り出し、ムッツリーニに手渡す。

「……………シンプルかつ、素晴らしい。」

ヒュバッ

ムッツリーニは消え去る。

…ここからが本当の勝負だ！

.....

視点：啓吾

「律子」「真由美」

「「頑張ろつね」「

到底、微笑ましくは思えない。

格闘家風の服装にハンマー装備と、剣士風の服装にメイス装備か。

「姫路！」

「は、はい！」

姫路の召喚獣に装着されている指輪が光輝いた。

「《ハイ・メガ・キャノン》！！！！」

激しい轟音と共に極太のビームが迫る！

「クッ！！」

一撃必殺のビームに対して、岩下と菊入の召喚獣は左右に避ける。

「姫路！擬似タイマンで、分断しろ！」

「はい！」

「律子」「真由美」「挟撃に出る！」「」

俺と姫路を挟み撃ちするように動いてきたか。

俺は半ば特攻するように、突っ込む。

「ちいい！」

岩下のハンマー：『ウォーハンマー』か。

ウォーハンマーは、鎚状の柄頭を備えた殴打・打撃用武器だ。

基本的な構造は『金槌』や『トンカチ』と同じで、柄の先に垂直に接合された鎚頭を備える。

頭の両端が打撃部位となっており、どちらかを相手に打ち付けるように振って使う。

ウォーハンマーの形状は大きく2つに分けられ、

直方体や円筒型のいわゆる槌型と、

片方を鈍頭として反対側につるはしや斧を組み合わせた型がある。

槌は旧石器時代から使用されていた人類の基本的な工具の一つで、道具としてのみならず狩猟や戦闘にも使用された。

『武器』専用として活躍し始めたのは、金属製鎧による重装化が進み、十字軍の戦訓などから、それら堅固な鎧にも有効な打撃武器が見直される動きが起きた頃からだ。

ウォーハンマーは打撃用武器の一つとして13世紀頃から使われはじめ、14世紀から16世紀にかけては一般的な武器の一つになっていた。

銃の登場により殆どの大型のウォーハンマーは廃れてしまったものの、

杭を打つのに使用する障地作成に欠かせない工具であり、純戦闘用が開発されていないものでも、急場の戦闘に用いる事が出来るため、現在でも重宝されているのだ。

「ハンマーは近接武器の創造にはもってこいの工具でな…敵に廻すと怖いなあ！」

「ダアアアツ」

ズドオツ!!!

轟音を上げるウォーハンマー。

凄い威力だ…受け止められない！

召喚獣の点数差も少ない…直撃すれば、日本刀ごと肉体が潰されるな。

「しかしどでかいハンマーだな。」

平賀や姫路の大剣に匹敵する大きさだ。

反面日本刀はせいぜい5尺いくかいかない程度…こりゃあ、突っ込まないと。

「こ、攻撃が当たらない！」

「そりゃそうだ。出が遅いからな。」

ハンマーは、横に振るか縦に振るかの二択しかない。

闘い方は単純な上に、非常に重く、動きは鈍くなりがちだ。

加えて岩下は召喚獣の扱いがまるでなっっちゃあいない。

「20n2なら断然有利なのに！」

「お前らの戦い方に合わせるバカが何処にいる!？」

「一騎討ちだなんて、聞いてない！」

「日本史で習わなかったか？昔の武将さんな、名乗りを上げて一騎討ちしたもんだぜっ！」

「じ、こんのおー！！！！」

岩下が自棄になり、ウォーハンマーを横に振った！

ゴッ！

俺の召喚獣の腰辺りに打ち当たる。

「殺ったか!？」

カランカラン！

折れたナイフが辺りに飛んでいく。

「殺ってないフラグ…せ、い、り、つ。」

戦死は免れた…ナイフが衝撃を和らげたのだろう。

「…捕らえた。」

「うそだっ！こ、こんなことって！」

ウォーハンマーをつたい、岩下の召喚獣の肩から胴を日本刀で切り飛ばす。

「俺の勝ち…鉄人がお待ちかねだ。」

「西村先生の補習は、いやぁーっ！」

岩下は鉄人に担がれていった。

.....

視点：真由美

「タイムンかぁ…苦手なんだよね。」

「……………」

「しかもあの姫路さんが相手だなんて…律子が羨ましいわ。」

「菊入さん、済みませんが…倒されてください！」

「シンク口を潰した程度で、勝てると思うっ!？」

…強がっている私がいる。

(姫路さんのとの点差は約二倍……やばいかも。)

松下君に押されている律子を横目に、召喚獣にメイスを構えさせた。

姫路さんは気難しそうな表情を見せる。

「まあ、西村教諭の補習は嫌だしね。必死に足掻かせて貰うわ!」

「邪魔をするのなら退いてもらいます!」

メイスは棍棒から発達した武器。

重量のある柄頭と柄の二つの部位からなり、複数の部品を組み合わせて構成される合成棍棒の一種。

でも柄の先に重い頭部を有することにより単体棍棒なんかよりもずつと高い打撃力を生みだせるわ!

「ハイ・メガ・キャノ」させない!」「」

私は姫路さんの隙を、

ガキイイイツ

「!」

姫路さんの召喚獣がメイスの一撃に反応した!?

点数差が顕著なので、直ぐに弾き飛ばされた。

「優等生の癖に、味のある真似を…ね。」

熱線を撃つ素振りをし、迂闊に突っ込んだ私を迎撃したんだ。

「行きますっ！」

スタタタタッ！

は、はや！

まるで弾丸じゃないの！

「タアッ！」

激しい剣撃が私の召喚獣を襲う。

「貰います…！！！」

「格下だって、殺る時は殺るんだ！」

剣とメイスがぶつかり、激しい火花が飛び散る！

「う、受け止めたんですか！」

「この距離で、ハイ・メガ・キャノンを撃てば、姫路さんも巻き込まれるわ！」

「でも、近接格闘の間合いに入りましたね…！」

罅迫り合いの中、姫路さんの召喚獣の拳が飛んできた。

「……ッ」

点数が徐々に減らされていく。

私の召喚獣の装甲が破壊された。

「終わりです！」

「ま、まだぁー！ー！」

メイスを放棄し、格闘戦に移行する。

姫路さんはメイスを遠くへ放り投げた。

姫路さんの点数は319点…私は109点か。点数差は戦闘前よりは縮まったけど、三倍か…詰んだかな？

もう、ダメか。

シンクロが無いと……ん？

辺りを見回すと、律子の召喚獣が持っていたウォーハンマーが落ちていた。

ガチャッ！

傷だらけのハンマー…不思議と手触りが良い。

「私にもっ！意地を張るくらいならーっ！ーっ！ーっ！」

槍のように突っ込む！

ガキイツ！

「はあ、はあ、はあ……………」

私の召喚獣は姫路さんの召喚獣の装甲を破壊しただけだった。

無慈悲に振り降ろされる武器に反応すら出来な……………！

……………

視点：啓吾

「姫路、見事な腕前だ。」

「あ、有難うございます。」

俺と姫路は古典のフィールドまで撤退していた。

さて、どうしたもんかな。

「松下！明久と水瀬さんの試合が始まる」

「そうか…見に行きたいが、教室に戻って回復試験を受けないとな」

「吉井の事が心配じゃないのか？」

「アイツは必ず乗り越える。そういう奴だから、お前も心配するな」

「ツチ…どうなっても知らないぞ。」

須川は窓から運動場へ跳躍した。

「姫路…教室に戻るぞ。」

「はい。」

俺はFクラスの教室へ入っていった。

第11話 シンクロを捉えろ！最強ペア発進（後書き）

次回は明久と水瀬さんのタイムマンを書きます

登場人物紹介5（前書き）

ついに五回目の紹介です。

今回はBクラスの『同調』ペアの二人を紹介します。

登場人物紹介5

岩下 律子（変更点のみ）

・数学のみAクラス並。

・真由美とは『一心同体』と言える程の深い関係を持つ。

・『シンクロ同調』は真由美とだけでなく、波長と振幅さえ噛み合えば、誰とでも出来る。

・中学時代の恭二を知る、数少ない人物。

菊人 きくいり 真由美 まゆみ

・数学のみAクラス並。

・律子とは『唯一無二』と言える程の親密な関係を持つ。

・『シンクロ同調』は律子とだけではなく、波長と振幅さえ噛み合えば、誰とでも出来る。

・中学時代、水瀬の傘下にいたらしく、彼女を慕っている。

登場人物紹介5（後書き）

PV12000、ユニーク2000を突破しました！

今回は、明久VS水瀬さん！

長くなるので更新は遅くなりますが、待っててください。

第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬（前書き）

バカテストは今回もお休みです、ごめん！

第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬

視点：明久

僕も水瀬さんも、びしょびしょに濡れていた。

雷は激しく鳴り響き、雨は一層強くなっていく。

「何を今更、召喚獣に頼るものかつ！」

15時過ぎの運動場で、ただ一人の女性を見つめ続ける。

「あああああ！！！」

僕は全速力で、水瀬さんへ突っ込む。

シユバババババツ！

右に左にフットワークを繰り返す！

障害物の無いフィールドの戦い方を思い出すんだ！

前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ 前へ ！

腰の木刀を抜き、

「デヤアアアツ！！！」

水瀬さんの眼前で、運動場を叩く！

ブオオツ！

砂煙の向こうの人影へ、

「判子を押しす！」

水瀬さんの掌へ、

ドオ！

「大した威力だっ！」

ズササササア！

「しかし！」

聞こえる。

「『蒼天拳舞』！！！」

僕は木刀で受け止める。

刀がギシギシと音を鳴らす…！

ダツ！タンツ！

あの人の間合いから出る！

「やる。三年前の迂闊な振る舞いに謝罪しなきゃね。」

……。

「決めたわ。ちょっと、本気出す。」

ゾクッ！

走る悪寒。

「後で西鉄の野郎に反省文書いてやるから……不登校になるんじゃないかね、よお！」

「ちいいい」

僕は野球用のバックネットの上へ飛び上がる。

水瀬さんの脚が……運動場を踏みつける。

ビキキキッ！

足を中心に地面がひび割れた。

恐れるな……。

『竜光』に手をかける。

「『一の剣：竜爪』オオオ！！！！」

重力、全体重を乗せた一撃。

相手の頭上から突く！

「迎え撃つてやるよ。」

渾身の一撃に、水瀬さんが片手で倒立し、脚を振り上げる！

クルッ

「！」

僕は水瀬さんの脚の上に木刀を軽く突き立てた。

「勢いを相殺し、私の上に立つか。」

振り上げた足の慣性で、水瀬さんが直立する。

「もう一撃！」

木刀を肩に叩き込む。

バシィッ！

「機敏さだけは二流…素晴らしいな。」

水瀬さんが僕を見逃さず訳はない。

「『銀狼乱舞』ッ！」

「そう来ると思った！『九頭龍閃』！」

剣術の基本である9つの斬撃、

「壹：唐竹」

「貳：袈裟斬り」

「参：右薙」

「肆：右斬上」

「伍：逆風」

「陸：左斬上」

「漆：左薙」

「捌：逆袈裟」

「玖：刺突」

を同時に繰り出す乱撃術。

一度入れば、相手に抜け出す術は無い。

初めて水瀬さんの表情が歪んだ。

サツ、ササツ、パシィツ、ガツ、ガツ、ググツ、サツ、パシツ、ダ
ンツ……！！

この連撃を抜け出した！

「だが、交わした場所には僕が居る！」

防御を捨て、鳩尾へ木刀を突く！

キ…キキキ…ギイツ！

なんて反応の早い！右腕で受けられた；

「か、勘弁して下さいよ！」

水瀬さんはニツとする。

「まだいるじゃないか。私に迫り来る《強者》がさ。」
張り詰めた空気。

「降伏するかい？あんたの体力は一時間くらいで尽き果てるよ。」

「残念だけど、お断りするよ。貴女に負けるつもりはない。」

「私に挑んだだけはある。………来な！」

ヒュバツ。

「ほお。」

「まだ闘いを楽しむその余裕…消し去ってやる！」

「諦めの悪い奴だ…ね！」

ゴツ！

僕は撥ね飛ばされた。

水瀬さんは上着を脱ぎ去る。

「大したもんだけど…鈍り鈍ったその鈍刀じゃあ、やれてその程度だね。」

「そ、そうだから…諦めない！」

「だよね。こんな所まで自分を追いかけてきたアンタが、諦める筈がない。」

パンツ！！！！

僕は頬を叩く。

水瀬さんがどんなに強くとも、無茶でも何でもあろうと、僕は足掻く！！！！」

木刀を握り、走る走る！

狙うは、顔面。

真っ直ぐに木刀を！

- - - - -

視点：水瀬

「バカが！同じ手が通用する……か!？」

私の足が…運動場の砂…水を含んで泥となっていたのか！

泥濘に足が深く入り…抜けない！

こいつ…最初からこれを！

動きが止まる。

足が使えないなら、拳を振って牽制するしかない。

ニヤリと笑う吉井。

そして……

「牙突一式い！」

助走がつけられない…打ち負ける！

パァーーン!!!

威力負けした衝撃に突き刺さっていた身体が吹き飛ばす！

ダン！と重々しく着地して、吉井の剣撃を着地の衝撃を利用し、流すように投げ飛ばす！

「く、くそ！何でも出来るのかよっ！」

「潜った修羅場の数が多いからね。」

「なら、力づくで、圧倒的な力で、押し伏せる！」

「アンタが言える立場かい！？」

私は全速力で、奴に狙いを定める。

打て、撃て、射て、討て！！！！

放て、拳撃、脚撃、肩撃、肘撃を！

接近して、接近して、接近しろ！

「あああああ！！！！！」

ズガアアアアアア！！！！！！

吉井の顎に、拳を打ち抜いた！

ズサアアアアア……………。

高く、彼方へ吹き飛ばす！

「ふう…やっと殴れたわ。」

溜息をつき、吉井の側によるが、

「おかしい。確かに殴った感覚はあったんだけど…。」

完全に入った攻撃。

しかし…吉井は再度立ち上がったのだ。

「……………」

雨と雷が止み、日光が遮った。

閑散としている……二人以外に誰もいない世界が広がる。

「夜中の満月の日に闘えたら良かった…吉井…ムカつき以上に嬉しいよ。さあ、やってみな！」

腕を振り下ろす。

吉井を捉えた一撃。

しかし、

「おおおっ！！！！」

吉井は雄叫びを上げ、私の一撃を素手で正面で受け止めた！

こいつ…痛覚を感知していない！？

啞然とする。

一瞬の間、されど隙…。

ゴオオツ！！！！

「！！」

眼下から木刀の一撃が頬を撃つ！

ダアア！

右足で奴を踏み潰すべく、勢いをつけ…下の地面を砕く！

だが吉井は寸でのところかわし、再度突撃する！

「上等ツ！」

笑う吉井。

来る！

最早、一切の常識が通用しない。

ダン！！

地面を蹴り、私目掛けて、跳ぶ吉井。

「『百烈剣』！！！！」

「『蒼天百掌』！！！」

子供でも解る理屈：武器に素手は、不利！

タンツ！

長い長い撃ち合いに終止符が打たれた。

- - - - -

視点：明久

「カ…カハツ」

体操服は泥にまみれていた。

準備運動は入念にしたのに：身体中が痛い。

倒れ込む僕に、水瀬さんが歩む。

「バカが、無理しすぎなんだよ。」

「し、勝負はまだ、つ、続いています。」

「無茶するんじゃない。」

水瀬さんが僕の腰を軽く叩いた。

「い、だあ……………」

筋肉痛に陥っていた。

「保健室に行くよ。」

水瀬さんに担がれながら僕は気を失った。

……………

目を覚ますと、保健室にいた。

「起きたか。」

「……………水瀬さん。」

ブラしかつていない水瀬さんが、僕の頬つぺたを触っていた。

「あんな事に付き合わせてしまった。済まなかった。」

「大丈夫です。僕から頼んだようなもんですから。」

「強がりな止しな。」

ガラッ

「終わったらしいな…ほらよ。」

啓ちゃんが水瀬さんにバスタオルを投げた。

「シャワールーム、空いています。職員室に來いとのことです。」

「西鉄は何て？」

「『校内暴力』は校則違反…ペナルティとして、『戦死』扱い、後に『処罰』も与えられるでしょうね。」

「そっか…根本には？」

「伝えました。」

「よし…行くわ。」

下着姿で、水瀬さんは出ていった。

「無様に負けたか。」

「？」

「悔しいだろ。」

！

「……まるで齒が立たなかったよ。」

「加えて彼女は『病み上がり』だったしな。窓の外から見ていたが……あいつ、一度も左脚を使わなかった。」

「……………」

啓ちゃんは溜め息をついた。

「は、はは……。今何時？」

「16:18」

「状況は？」

「お前が水瀬さんを退けたことで、Bクラスは守りに入った。」

「さ、最悪な形でだけどね……」

「過程はどうあれ、これは戦争だ。カードを生かすも殺すも、クラス代表次第だ。それに、水瀬さんは停学を覚悟でお前に挑み、真剣勝負をした。」

「それでいいのかな？」

「それでいい。でなければ、彼女に失礼だ。」

啓ちゃんは、

「あの《銀狼》を相手によくここまで持ちこたえた。坂本は大喜びだ…立てるか？」

「うん。水瀬さんが包帯巻いたり消毒してくれたから。」

僕は保健室のベッドから飛び降りる。

啓ちゃんは僕を支えるように教室まで介抱してくれた。

第12話 雨の中の決闘！明久VS水瀬（後書き）

思うように状況を説明できません；

今回は屈指のggdggdさ…まだBクラス戦は続くのに…焦りを隠せません。

しかし！

今回の内容はまだ、編集しやすい場面ですので…イケると思います！

次回もお楽しみにっ

第13話 沈静を破れ！人質作戦を打破せよ

視点：啓吾

これは酷いな…。

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯だね」

教室に引き返した俺と明久を迎えたのは、
辺りに散乱する卓袱台と、引き裂かれたブルーシートだった。

「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

秀吉と明久は教室を見渡していた。

姫路が暗い表情で、しかし、唇を噛み締めるのがみえる。

「姫路よ。どうしたのじゃ？」

秀吉は心配そうに声をかける。

「わ、私が居ながら…」

「姫路よ。警戒を怠ったワシにも責任はある…済まぬ。」

俺は畳に座り、

「しかし…徹底した手際だな。」

「バリを全てぶっ壊されてしまった。」

俺は坂本と面面向かう。

「幸い個人の貴重品や所有物に手は出されていないな。」

「だが…こちらが判断を誤った…事を、皮肉にも明瞭にされた。」

「坂本。何故気づかなかった？」

坂本は答える。

「根本へ確認に行っていたのさ。念のために『5時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日の午前9時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する』協定の確認をしていた。故に教室は空になってしまった。」

「出来れば5時までにはケリ…着けておきたかったな。」

「だがそうはいかなかった。それに、俺達は神経を使い、疲弊している。根本と芳野に有利に働いたって訳だ。」

時計は16:42を差している。

「残り18分。前線にいる島田と須川が気になる…坂本、どうすればいい。」

「明久を休ませたい…頼む。」

俺は廊下を走り抜け、一階の大広場へ駆け降りた。

.....

二階で須川と合流した。

「須川……。」

「根本はこの程度で終わらせる男ではない。気を引き締めよう。」

一階に下り立つと、大変なことになっていた；

「待たせた。戦況は！？」

「団長、職人！」

横溝に現状を聞いてみると、島田が人質になったのを聞いた。

人質か……！

俺は須川と横溝と共に、現場に到着した。

「島田！」

「ま……つし、た……。」

ガチャッ!!!

「止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

島田を捕らえている敵の1人が声を張り上げた。

「止めを刺せ。俺に脅しはきかん。」

「待て。島田がやられたら、後ろから残党が押し寄せる。」

須川の忠告は耳に入らなかった。

「総員突撃用意。」

俺は部隊に指示する。

「ま、待て、松下！コイツがなんで捕まったと思っている？」

「捕まるようなクズに、理由を聞いてもつまらんだだけだ。」

「ま、松下！戦死は嫌よ！」

俺は冷淡に続ける。

「こちらの教室を破壊し、人質をとる。根本の指示とはいえ、非人道的な行為に走ったその報いに：覚悟はあるのか？」

「言うまでもないんとちゃうかあ？」

玄関の掃除用具入れの中から、一人の男が出てきた。

ゴツゴツとした顔付き…髭を濃く生やした大柄の大男であった。

「笹倉。」

須川が笹倉の眼前に飛び上がる。

「変わらず面白いやつちゃ。須川あ。」

「久しいな。」

「勝負するとすつかねえ。西さん、笹倉俊二郎、須川亮に総合科目で挑みますわ…試獣召喚!!!」

「応じる。試験召喚！」

召喚獣が出現する。

「オオオオオツ!!!」。

すれ違う二人の召喚獣。

須川の召喚獣は大鎌で人質をとっていたBクラスの生徒を皆殺しにし、

笹倉の召喚獣は島田と他に人質になっていたFクラスの生徒を捻り潰した。

「な、何！？」

「俺たちまで巻き込むなよ！」

「ウ、ウチ…補習は嫌！」

「恨むぞ！須川あ！」

何処からか、

「戦死者は補習！！」

「……て、てつ、じん；」「」「」

「この戦争が終わるまで特別に講義してやろう！何時間かかるかわからんがたっぷりと指導してやる。」

「たッ頼む！見逃してくれ！あんな拷問は耐えられない！」

「ウチも嫌よ！あれは国際法に違反する…拷問よ！」

「あれは立派な教育だ。終わる頃には趣味が勉強で尊敬する人が二宮金次郎といった理想的な生徒に仕上げてやるっ」

「鬼だ！誰か助けッ、イヤアアア！」

「あ、あ、アッー！！！」

4人は叫び声を残し、鉄人に連れて行かれた。

「笹倉。勝負と行くつぜ。」

《総合科目》

2 - F 須川亮 1074点

VS

2 - B 笹倉俊二郎 2371点

「須川…得意教科は何や？」

「数学には自信がある。」

「そうか。西さん、数学に変えてくれへんか？」

鉄人は4人抱えたまま、フィールドを変更した。

「これで対等や。戦争よりも一騎討ちの方がおもしろいわ…！」

「後悔するんじゃないぞ。」

《数学》

2 - F 須川亮 228点

V S

2 - B 笹倉俊二郎 197点

「松下。明久と残存戦力を連れて逃げろ」

「わかった。任せる。」

俺は須川とハイタッチし、撤退した。

- - - - -

視点：亮

俺の召喚獣はFFF団長に相応しい装束と、巨大な大鎌を、そして
カッターを有している。

対する笹倉の召喚獣：でさえ。

召喚獣の身長は本人の身長のおよそ1/3になると言われているが…70
cmくらいある。

俺の身長は177cm…換算すれば約59cm。

大きさの違いは一目瞭然だ。

「中々の点数や。根本に僅かに届かんのが惜しいわ。」

「根本はBクラス代表。一番Aクラスに近い男だからな…卑怯だが。」

「あいつにはBクラスがお似合いや。Aクラスに入ってもたら、つまらんわ。」

「さて、やりますか。」

「さ、来いや。」

笹倉の召喚獣の装備は、刺付棍棒か。

俺は召喚獣に鎌を持たせ、相手に向かって突っ込ませた。

ぶつかり合う武器。

「点数差はパワーでカバーや！」

お、重い！

「機動性は下がるが、速いだけの半端な攻撃は、分厚い装甲には通じまい！」

間合いを取る。

「死神：お前の渾名やったな。」

互いに点数が減る。

「なに、まだまだ、これからだろ？」

笹倉の召喚獣の突進を、紙一重で避ける。

「厄介な素早さや！せやけどなあ！！！」

笹倉の召喚獣がカウンターの体勢になる。

「「恨みっこ無しの、死合だ（や）！」」

召喚獣の左腕を吹き飛ばされるが、片手で……奴の右腕を切りとばす！

その時だった。

チャイムが鳴り響いた。

……。

「次の攻撃で、相討ちになったみたいや」

「笹倉。今度は素手でやろうぜ。」

「何時でも構わん。」

「呼吸つく。」

「また近い日にな。清涼祭が楽しみや！」

「今日は引き下がる…しかし、やることが一つ残ってるんだよな。」

「奇遇や。儂もやること思い出したわ。」

俺と笹倉は、自分で自分の召喚獣の首をぶっ潰した。

「西さん、今日は遅くまで補習してください。」

「待て笹倉、お前はBクラスなんだから、Fクラスの俺が優先だろ？」

鉄人が二人の肩を叩く。

「今日はもう遅い。俺は朝の5時から出勤している…補習なら何時でもしてやる。」

「朝5時やて!?!」「朝5時だと!?!」

俺と笹倉は苦笑いをしながらも、鉄人の後を追うのだった。

- - - - -

視点：啓吾

協定通り…17時に停戦し、戦況をそのままにして明日の午前9時に持ち越しとなった。

予定通りに新校舎に進撃できたので明日はそこからとなる。

今は明日の事で話し合っている所だ。

土屋がスタッと参上した。

今回の戦争も、土屋は戦線に出ず情報収集を任務としていた。

「……………Cクラスが試召戦争の用意を始めている。」

坂本は、

「相手はAクラスか…いや、それはないだろう。Bクラスの設備を横取り…漁夫の利を狙うのか…目障りな連中だ。」

「……………加えてCクラス代表の『小山 友香』は、『若女将』と呼ばれた実力者だ。」

「雄二…どうするの?」

「そうだな。CクラスにDクラスを攻め込ませ、疲弊させられれば、俺達に攻め込む気もなくなるだろ。」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね。」

「協定は早く済ませよう。姫路…今日は助かった。」

「有難うございます。」

「よし。松下、明久、亮、横溝。Cクラスに行くぞ。」

「別にいいけど。」

「分かったよ。」

「俺も行くか。」

「やろっ!」

秀吉が時計を見て、

「急がんとCクラス代表が帰ってしまうぞい。」

「うん、そうだね。急がないと。」

5人でCクラスに向かう事になった。

.....

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

Cクラスの教室には、二人しか居ない。

土屋の情報が正しければ…戦争の準備をしているらしいが…隠したみたいだな。

スタッ

紅茶を持ちながら、一人の生徒が御辞儀した。

「ごきげんよう。私がCクラスの代表の『小山 友香』です…よろしく。」

「悪いが単刀直入にいかせてもらおう。俺はFクラス代表の『坂本雄二』。クラス間交渉に来たんだが…時間はあるか？」

「ふう〜ん…見掛け通りの野性味溢れる良い男ね。気に入ったわ。」

小山は雄二の言葉を聞き、いやらしい目付きでこちらを見る。

「不可侵条約を結びたいんだが。」

「不可侵条約？どうしようかな…宮野くんはどう考える？」

「却下。FクラスはBクラスと試召戦争に関する行為は一切禁止する内容の協定を結んでいる。」

宮野と呼ばれた男が、こちらを見た。

「Cクラスは第三者。関係は無いだろ？」

宮野と坂本が対峙する。

「噂には聞いていたが、Fクラスは屑の集まりのようだな…心中を察する。」

困った事になったな…坂本と宮野が口論を始めやがった。

「御互い様だな。根本の尻に敷かれた割には、強がりか上手いに見える。」

「校則違反に暴力…身勝手な思想で、迷惑をかけるばかりの輩。まだペットの方がマシだ。」

「フン…。」

呆れる坂本を尻目に、明久が宮野の胸倉を掴む。

「沸点の低さには脱帽せざるを得ない。」

「明久。」

坂本は明久の襟首を掴まみ、後ろへ放り投げた。

「汚い手で触るな…気持ちが悪い。」

「俺は話し合いに来たんだ…侮蔑な発言は控えてもらっ。」

落ち着いた口調で坂本。

明久の行為に対して、謝る気はゼロ。

「遠回しな言い分は面倒だ。」

「従う義理は無い。」

「俺の発言に法的拘束力は無いが、まともに意志疎通すら出来ないゴミは、さっさと消えな。」

坂本は宮野の言葉を鼻で笑い、宮野は小バカにしているらしく、呆れる。

「俺は、真面目で明朗快活な人は信用するが、社会不適合者の連中を信じるつもりはない。」

「よく言う。身勝手な尺度に心酔しているのはてめえのようだぜ？」

「友人を売り飛ばしたり、日常的に暴力を奮う者に言われる筋合いはない。考えれば…真の卑怯者は、Fクラスだ。」

「……………」

「専ら、頭より身体が先に動く哀れな連中だ…反論は出来ない。」

「心配するな。自覚はある。」

「自覚があるなら、『Fクラス』など存在しない。少し、勘違いしているようだな」

宮野の発言に隙は無い。

「この学園には、普通に過ごしたい者も沢山いる。」

「派手に過ごしたい奴もいるぜ。」

「規則の遵守無くして、ほざくのか。」

「縛られるのは嫌いでね…楽しんで通る道など、こつちから願ひ下げだ。」

「だから犯罪紛いの行為が許される訳がない。盗聴、盗撮、器物損壊、名誉毀損…社会が容認するとはとても思えない。」

坂本は目を細めた。

「宮野…俺達が『学園や社会にとって+となる功績』を出せば、どうする?」

「信賞必罰。『過程』における『非人道的行為』は一切許さないが、良い『結果』が出た場合に限れば褒め称える所存だ。」

「そつか…なら同盟を結べ。」

須川、横溝、明久は完全に論破された様子で、ポカンとしていた。

宮野は頷いた。

「小山…どうする。」

「宮野…ちよつと言ひ過ぎよ。彼等はDクラスに勝利しているもの。既に『結果』は出しているのだから、少しは寛容になりなさいな。」

小山は坂本をじっと見つめた。

坂本は俺達に帰宅するよう命じ、

宮野を強くぶん殴ったっ！！！

ズササアーーーーッ！！！！

「「「「坂本！？」「」「」

小山は呆然となりながらも、宮野に駆け寄る。

「小山：宮野に伝えとけ…明日になったら『ぶっ殺すっ！！！！』ってなあ！」

怒りを露にする坂本を、俺達は追いかけて行った。

第14話 運命の朝：防衛線を突破せよ！（前書き）

問・以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい。』

姫路瑞希、土屋康太の答え

脂質、炭水化物、たんぱく質、ビタミン、ミネラル

・教師のコメント

正解です。土屋くんは珍しく正解です。

吉井明久、須川亮、坂本雄二の答え

砂糖、塩、酢、醤油、味噌

・教師のコメント

それは五大調味料です。

松下啓吾の答え

岡崎正宗、国友善兵衛、芝辻清右衛門、八板金兵衛、三池典太

・教師のコメント

歴史上で有名な鍛冶屋は5人だけではありません。

第14話 運命の朝：防衛線を突破せよ！

視点：啓吾

Bクラス戦初日から、夜は明け、時刻は8：30を廻った。

「松下：あの作戦を実行する。」

「了解した。」

俺は秀吉を呼ぶ。

「本当に成功するかの；」

「秀吉にしか出来ない作戦だ。否応なしに、してもらおう。」

Bクラスとの戦争再開まで約30分。

坂本は文月学園の女子制服を取り出した。

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「秀吉には双子の姉がいる。演技し、『Aクラス所属の姉がCクラスを挑発する』構図を偽装するんだ。」

木下姉と秀吉は二卵性双生児…しかし、見分けがつかない程似ている。

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……。」

坂本から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉。

『『『『『おおっ!!!!』』』』』

明久をはじめとするFクラス男子は、着替えの光景に興奮した。

土屋もすごい速さでカメラのシャッターを切り、その光景に釘付けとなる。

俺も、ハアハアと動悸が激しくなる。

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあ？」

「さ、さあな／＼／」

秀吉と坂本は疑問符を浮かべ、俺を見た。

「作戦開始だ。ムツツリーニ…宮野の動きは？」

「……………現在図書館で、『プレジデント』を読解中。」

「よし。急ぐぞ。」

「ええ、分かっているわ。」

「その一言、そのまま返すわ！」

「ああ、臭っ！私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！増してブタ臭い貴女達なんて、豚小屋で十分だわ！」

「言うに欠いて、私達がFクラスがお似合いですって!？」

徐々に、小山の顔が歪み出した。

「手が汚れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。あら？試召戦争の準備をしてるんだ…丁度いいわ、近いうちに、始末してあげる。」

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉はCクラスの教室を出ようとする。

「待ちなさい！これだけ言っておいて、只で帰れるとでも？」

「私はAクラスよ。忙しいの…学園の品格を護るためにね！」

小山が持っていた鉛筆を握り潰し、ヒステリックに声を荒げる。

秀吉が教室を出たと同時に、

「朝から巡礼とは、御務め御苦労。」

「私はこれで失礼するわ。」

「Fクラスと組むとは…木下姉も、人を見る目がないようだな。」

「元々、小細工ばかり使う貴方達にイライラしていたからね…これを機に、潰させてもらおうわ。」

「Cクラスの実力を見くびらないように、しておけ。」

「ほざいときなさい。敗北した貴方の顔を見るのが楽しみだわ!」

宮野と秀吉は、元の教室に帰還した。

午前9時…Bクラス戦の再開に備え、俺達はDクラスの教室前で立ち止まった。

「明久。坂本の指示通りに動けるかは分からない…根本がどう動くかまるで読めないからな。」

「敵を教室内に閉じ込めればいいんでしょ？僕に任せてよ!」

「お前が一番頼りないが、居るだけマシ…だな。」

「ひ、酷い!」

「まあ…Bクラス攻略の為に、姫路が任務を果たすまでに、明久達

を犠牲にしても、時間稼ぎするぞ。」

友軍が戦死しないようにフォローしたいところだが…Bクラスの生徒は形勢をひっくり返す為に、大勢で突っ込んでくる。

数分前、坂本は今回の作戦の問題点を指摘した。

突撃された場合の対抗策がない。

Bクラスの主力の生徒の殆どは、撃破したが…こちらの被害も少な
くはない。

チャイムが鳴る!!!

「全員、Bクラスの教室へ突っ込め！」

ダッダッダッダッダッ!!!

ここで負けたら…終わりだ！

「走れ走れ走れ!!!」

横溝が、Bクラスの残党とかち合う！

「ウオオオツ！」

「雑魚は死ねええ！」

戦況は…御互いに最悪な状態だ。

俺か姫路のどちらかが根本にタイムマンを挑める状況を作ることま
まならない。

Bクラスの教室の前に差し掛かる！

俺は明久に命令する。

「明久：水瀬さんに認められたその实力を見せてやれ！」

「うん！」

「勝つぞ…相手の護衛が来た！」

横溝を始めとする仲間が、

「彼処を見張れ！死んだFFF団だけが、真の幸福者だ！」

「……「おおー！！」「……」

Bクラスの護衛も負けじと突っ込む！

「！？15人くらい出てきたよ！啓ちゃん…どうしたらいいのさ！」

「根本…Bクラスの教室を手薄にしてまで、残存戦力を全て出撃に
回したようだな」

根本め…こちらの手を読んでいたか！

「松下を潰すんだ！！」

「吉井は無視しろ！」

「雑魚に構わず行くんだ！！」

「お前ら！松下と姫路さんを妨害する不届き者を蹴散らすんだ！」

Bクラスも特攻してくる。

「横溝が受ける！！」

「『『『FFF団が相手だ！』』』」

Bクラスの教室まであと少し…だ！

.....

視点：恭二

「友香か。見ての通り、苦戦している。」

「ええ…姫路さんには手を焼いているみたいね。」

試召戦争二日目。

「その様子だと…何かあったらしいな。」

「ありありよ。」

友香は、明らかに不機嫌そうだ。

「宮野が坂本に暴力を受けたり、木下姉が挑発に来たり…ね！」

「坂本は『クズで性格の悪い筋肉男』だが、木下姉が挑発？」

友香の様子に俺は溜め息を吐き、芳野は居づらいのか、もじもじする。

「気にするな。挑発に乗る必要はない。」

「喧嘩を売られたのよ！？買わないで傍観しろって言うの…冗談じゃないわ！」

友香と共にBクラスの教室に来た宮野が、俺に話し掛ける。

「根本。」

「Aクラスは部外者だ。」

宮野は面白く無さそうにして、

「FクラスとAクラスが同盟を結んだ可能性はある。」

「習志野がそんなバカな事をするかよ。」

俺は宮野の危機感を否定する。

「第一、Aクラスがそんな事で、勉強時間を割いたりしない。」

「だが、木下優子は挑発した。」

「挑発されたくらいで、致命傷にはならな…?」

宮野は首を横に振った。

「根本…その挑発が、Cクラスの俗物共に怒りを植え付けた。ほぼ全員が、Aクラスへの宣戦布告を望んでいる。」

唐突な展開に俺は驚く。

「勝算はあるか。」

「ない。吉井が霧島に挑むようなものだ」

「おいおい、その言い方は遠回しにお前のクラスを侮蔑する事になつてるぞ。」

「事実を述べただけだ。」

友香は宮野の発言に苦笑いをする。

「宮野くん…貴方は直ぐ口に出すタイプなのね…」

「昔から本音と建前の使い方が下手だと言われていてな…反感を買いやすい体質なのは、自覚している。」

「そ、そう。」

友香は引いているようだった。

宮野は俺に別れを告げると、素早く教室を出ていく。

「恭二…私、代表失格ね。」

俺は彼女の手を握った。

「俺はお前に意見できる立場じゃない。」

次の言葉が浮かばない。

友香は俺に寄り添う。

「俺は…お前に何もしてやれないし、力も無い。」

「恭二…私も同じよ。我が儘ばかり言って、ごめんね。」

俺は友香を抱き締める。

「友香…お前は我が儘でいい。Aクラスが許せないなら、彼奴らに見せてやれ…Cクラスの意地と意思を」

「恭二？」

「実はな、俺も…怒りを感じていた。Aクラスは本来俺達を先導しより高みを目指す憧れの存在であるべきだ。だが、その誇りを失い、修羅と化したなら。」

「恭二……。」

「やりたいようにやればいい。成功しても失敗しても、悔いのないようにな。行け……皆が心待ちにしているぞ。」

「……Fクラスなんかには負けないでよ。」

友香は俺の頬に口付けをして、Cクラスへ走っていった。

「うわぁ……大胆／＼／」

顔を赤らめる芳野に俺は最後の指揮を取った。

「戦死していない奴は、教室から出る！Fクラスに特攻する……！」

……

視点：雄二

「……坂本、今日で決まりそうだな。」

「ああ、是非とも勝利したいところだ。」

「……そうだな。」

ムッツリーニは制服に着替えていた。

「しかし、芳野は根本以上に厄介だな。」

「……………芳野の護りは固い。」

「芳野は自ら前に出て指揮する気質ではないが…根本よりは、発言力は大きいか。」

「……………根本を無視して芳野に集中攻撃させるべき。」

「松下と明久は？」

「……………Bクラスの護りに、致命打を打ち込めないでいる。」

「姫路と秀吉を投入するか？」

「……………お前が丸裸になってどうする。」

ムツツリーニは俺の顔を見上げ、

「……………大島教諭を連れてくるか？」

「駄目だ。Aクラス戦まで、明るみには出来ない。」

「……………そうか。」

ムツツリーニは、Bクラスに関する情報を、出し尽くしたらしく、
退屈そうにする。

「……………少し横になる。」

畳に倒れ込むムツツリーニ。

姫路がやって来た。

「土屋君、疲れちゃったんですね。」

「ああ…情報収集を夜通しやっていたらしい。」

「私も土屋君みたいに頑張ります。」

気難しそうな顔をする俺を心配したのか、姫路は、

「坂本君、どうしたんですか？」

「何でもない。」

姫路は知らないだろう…根本恭二、いや、《絶対悪》の存在を。

「気合いを入れる…姫路、お前が俺達を勝利に導く神になれ！」

「…はいっ！！！！」

姫路は兎の髪止めを外し、額に白いハチマキを締めた。

「お！気合い十分じゃねえか。」

「皆さんの為に頑張るって、決めましたから…。」

姫路は本当に優しいのだな。

近衛部隊のメンバーも皆、立ち上がる。

俺は近衛部隊を召集する。

「お前ら！姫路を護衛しつつ、進軍しろ…後退は許さん！」

「「「ラジャー！」「」」

「お前らの命は俺が預かった！持ち場が墓穴だと思え！根本を血祭りにし、あのクズ野郎を出し抜いてやるうぜ！」

「「「おおーっ！！」「」」

「……………（ビシッ）」

「お、おー。」

俺は一人一人とハイタッチする。

「坂本君…絶対に勝ちます。勉強よりも成績よりも大切なものがあるって、皆さんに見せてやりましょう！」

「……………俺の命を吸え。」

「ワシは何時も御主の味方じゃぞ。」

姫路、ムツリーニ、秀吉。

「良し、行くぞ…姫路は芳野と一騎討ち、ムツリーニは大島教諭

を連れ、秀吉は明久と松下の援護に入れ！」

デスマッチといこうぜ…根本っ！！！！

- - - - -

視点：恭二

「Fクラスめ…これ程の実力を備えていやがるとは。」

俺は携帯電話で、現在の状況を聞く。

『代表！姫路が戦線に出ました。』

「文系科目のフィールドに誘え。」

『代表、土屋が大島教諭を連れ、屋上に待機しています。』

「Bクラスの教室の窓と扉を封鎖しろ！」

俺はクラスメイトに指示する。

『Dクラスの生徒たちが新校舎側の階段にバリを組んでいます！』

逃げ道を塞がれたか。

Dクラスと設備を交換しなかったのは、この為か…チツ！

俺は平賀と玉野を思い出す。

『職員室に向かえません！文系科目の教師を確保出来ません！』

「バリを崩してでも行け！教師に一言言えば、Dクラスの奴等は退けられる！」

『りよ、了解！』

俺は電話を静かに切る。

教室で回復試験を受ける生徒は8人、被弾していないのは6人、前線で疲労しているのは10人。

「恭二君…このままだと、いずれ」

「言つな。」

芳野は俺の制服をギュツと握った。

「悪いな芳野…打つ手がない。俺はやはり…クズなのか。」

諦念と絶望が押し寄せた時、

「恭二君…私は、貴方を信じたい。」

静まり返る教室で、彼女は俺を見る…何て綺麗な、濁りのない目だ

ろうか。

「恭二君…苦しかったんだね。苦しんでも苦しんでも、誰も貴方に手を差し伸べてくれなかったんだよね。知ってたよ…どんな形でも、ぎこちなくても、戦い続けていた事を！」

「…芳野。」

「貴方は私の命の恩人…私だけじゃない！水瀬さんも俊二郎君も友香さんも、救われた。」

「……………」

「恭二君…貴方はもう《絶対悪》じゃない！」

「俺は三年前、水無月学園と神無月学園の戦争を引き起こし、一年半に渡る戦いを挑み、人を傷付ける事を快感に思い、責任から逃れる為に逃げたクズだぞ…そんな俺が、救われてはいけない。贖罪するんだ。」

「恭二君…貴方は十分過ぎるくらいの償いをしたよ。だから！」

「……………」

「孤独にならない、で…。」

俺は芳野の手を払い除ける。

大馬鹿野郎…何でお前は、俺に優しくするんだ…！

「俺に関わっても…どうしようも無いってのによ…！」

俺は立ち上がる。

「芳野、もう何も言っな。聞きたくない」

「そ、そんな…。」

「黙っていりゃ、勝手な事ばかり言いやがって…！心配される程、俺はヤワじゃねえんだよ。俺を誰だと思ってる？」

俺は《絶対悪》と呼ばれた最低の卑怯者。

「芳野。外にいる味方呼び戻す。籠城して、回復試験の時間を作るぞ。」

執拗なまでに『俺』を探求する男だ。

「黙って従え。勝たせてやる。」

俺は教室外へ出た。

- - - - -

視点：啓吾

「ドアと壁を使い戦線を拡大させるな！」

Bクラスの連中は教室に逃げ込んだ。

姫路は…緊張のあまり、身体に柔和さを欠いている。

「姫路の点数が減っている…明久、援護しろ！」

「分かった！」

姫路は多対一に持ち込まれ、防戦の一方を辿っていた。

「姫路は文系教科は苦手だから、指輪が使えない！」

「啓吾よ！古典の先生を除去して欲しいのじゃが…。」

秀吉に俺は、

「竹中先生なら…この手を使う！」

古典の先生の近くに行き、背後に回る。

「竹中先生…ネクタイがズレています。」

竹中先生は頭の違和感に気付いたらしく、

「しょ、しょう…しょ、少々席をは、はず、外します！」

竹中先生は全速力でトイレへ駆け込んだ！

「これで暫くは大丈夫だな。」

「ナイスじゃ。船越先生に数学のフィールドを張って貰うかの。」

「Bダツシユ!!!」

明久もトイレへ突っ込んで行く。

「両側の出入り口が現国になったぞ!」

FFF団の一人が叫ぶ。

「数学のフィールドで牽制するんだ!」

Bクラスの生徒達が現国のフィールドで、待ち伏せを始める。

「松下は数学と古典が得意だ!これで来られないはずだ!」

「くそ...突っ込めない!秀吉!」

「無理じゃよ!150点切っておる。」

と、その時、

「あ...!!」

姫路が声を上げた。

根本が出て来たのだ...。

第14話 運命の朝：防衛線を突破せよ！（後書き）

PVが15000を突破しました！

連載開始から一月！

今回は登場人物紹介、そしてBクラス戦いが終了します！

登場人物紹介6（前書き）

Bクラス戦も大詰めになってきました。

今回はBクラス所属のオリキャラを二人紹介します。

登場人物紹介6

滝川 たきがわ
水瀬 みなせ

身長 177cm

外見 蒼色の癖毛風ショートウルフスタイルル

性格 姉御肌、

趣味 中華街で買い食い

特技 アルバイト掛け持ち

好き 好戦的な人

嫌い リハビリ

・概要

《銀狼》の名を持ち、中学時代に『五帝』の一人として、絶大な人気を誇っていたが、一年前に『スリップしたダンプカーと正面衝突し、20tトラックに跳ねられる』事件に巻き込まれ、意識不明の重体に陥った。

息は吹き返したものの、酸素欠乏により左脚に重い障害を抱えることになった。

無茶な手術を繰り返し、最低限の生活を送れるまでに回復したが…

以前の絶大の力を使いこなせなくなっていた。想像を絶するリハビリの末に、左脚以外の機能をほぼ取り戻すことが出来た。

恭二とはライバルの関係、智里とは命の恩人の関係であり…親しい。現在も、左脚のリハビリを継続中。

《銀狼》の名は、完全回復した後に取り戻すようだ。

私生活は昔も今もだらしなく、女性の持つ可愛さを一切持ち合わせていない。

仕草、振る舞いは男そのもの…恭二曰く、『こんな格好いい奴が、男の筈がない!』

・成績

Bクラス中堅。

副教科は100点程で、それ以外の科目は200点前後。

総合科目は約2100点。

・召喚獣

銀色に輝く改造制服を着こなす。

武器は手に装着された鉄鋼。

笹倉俊二郎
ささくら しゅんじろう

身長 213cm

外見 黒色のワイルドベリーショート…顎髭と口髭を生やしている。

性格 ノリが良く仁義深い中年

趣味 ゲーセン巡り

特技 FPS

好き 力をぶつけ合える強者

嫌い チートじみた万能者

・概要

中学時代は何処の勢力に入ることなく、《雇われ用心棒》として活躍した。

大きな肉体から繰り出される全てが凶器…力勝負ならば、《銀狼》や《悪鬼羅刹》を遥かに凌ぐが、機動性は皆無に等しい。

鉄人とは面識があり、トライアスロン大会にて幾度と対決しているが、勝負にならない…本人曰く、『西さんは僕の生涯の師』なのだ。

外見は中年にしか見えないらしく、学割の適用などに苦労している。

中身は今時の高校生…昔の誼で、水瀬・恭二・亮と、今の誼で利光と仲が良い。

FPSをやり込んでいる…実は明久と同じクランでワンツーを争っているが、互いに知らない。

・成績

Bクラス次席で、Aクラス候補生と呼ばれた程の実力者。

総合科目は2400点間近。

定期的に恭二と智里と勉強会を催す。

どの教科も2000点前後。

・召喚獣

並の大きさではなく、素手の格闘でさえ、大きな破壊力を生み出し、防御力も並大抵ではない。

武器は棘付棍棒…その絶大な威力は、多少の点数差なら引っくり返してしまう。

が…動きが遅いため、戦法は迎撃一つに絞られる。

第15話 絶対悪よ目視せよ！闘いの終焉！（前書き）

問 以下の文の（ ）に入る正しい言葉を答えなさい。

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（ ）年に（ ）を始めたのは（ ）である』

姫路瑞希の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（334）年に（東方遠征）を始めたのは（アレクサンドロス？世）である』

・教師のコメント
正解です。

吉井明久の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前（334）年に（東方遠征）を始めたのは（アレクサンドロス大王）である』

・教師のコメント
正解です。吉井くんは歴史が得意なようですね。

吉井明久以外のFクラスの男子の答え

『アケネメス朝ペルシアの最後の国王を破り、紀元前(334)年に(女装)を始めたのは(根本恭二)である』

・教師のコメント

根本君を女装癖の変態に仕立て上げるのは辞めてください。

第15話 絶対悪よ目視せよ！闘いの終焉！

視点：啓吾

「Fクラスは…俺が始末する。」

9時半過ぎ…FクラスとBクラスの生き残り全員が対峙した。

根本はニヤニヤし、俺をガン見してきた。

「大した役者だったぜ松下さんよ。此处をてめえの墓場にしてやる。」

明久も秀吉も根本に対し、憎悪と恐怖に溢れていた。

「さあ、殺ろう。戦争をしよう。」

根本の傍らには芳野がいる。

「松下…お前だけは、入念にクロス！」

俺は腹を抱えて笑う…このクズが俺を殺すだと？

「表舞台にすら立てないお子ちゃまがほざいても仕方無い。こっちに来い！」

「はあ？裏舞台に怯えるだけのクソ餓鬼が喚く台詞かよ。」

一言も喋られないようにしてやる。

範囲外だろうが、範疇外だろうが。

殺してやる。

「姫路は居ないな…殺れ。」

Bクラスの生徒達が一斉に流れ込む。

「思い知らせてやれ。」

ザッザッザッ

「行進！」

Bクラス相手にまともに勝負しても勝ち目はない…理系科目で戦えるにしても、点数差は大きい。

「Bクラスの奴らを暗殺しろ！」

「フィールドを消して、物理的に殴れ！」

「フルボッコにしてやんよ…!!」

なのに…負ける気がしない。

「啓吾よ。ワシも逝くぞ。」

秀吉もFFF団へ足を運んでいく。

同時に根本は芳野の手を引き、再び教室へ戻った。

俺は進軍するFクラスから距離を置く。

根本はどう来る？

思えば…翻弄されっぱなしだ。

奴は卑怯な手を一切使っていない。

理系科目の教師を排除しようとしな…受容的過ぎる。

奇襲も強襲も無く…迎撃するだけ。

(……………)

一つの疑念が浮かぶ。

岩下、菊入、加西、滝川、笹倉。

どの闘いも有利な状況だった。

何故だ…まさか、Dクラス戦を観戦しなかったのか？

否、断じて否。

隙が露呈した瞬間を見逃す根本ではない。

以前に、根本は俺達と面識がある。

必ず、あの卑怯者は何かする。

Fクラスは校則違反や退学に脅え怯える真面目さはゼロ……真っ向勝負で勝てる輩ではない。

その気になれば、

- ・土屋が窓を割って強硬突入
- ・明久が扉を破壊
- ・坂本や須川が壁を破碎。

が可能なのだ。

当然根本も知っている……なのに対策をしない。

FクラスはDクラスに勝っている。

なら尚更、文系科目で連戦を挑むべきだ。

(……………。)

やばい……根本が分からない；

奴は何をしようというんだ？

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

視点：雄二

「……………坂本。根本が動いた。」

「ああ。そうらしいな。」

姫路は身体を震わせ、拳を握る。

ガラッ

「何かあったのか？」

松下が教室に入ってきた。

「丁度良かった。」

俺は手紙を出し、松下に向けた。

《手紙》

『姫路瑞希へ』

邪知暴虐の王が涙を流すから、

過去から現在に到る真実を理解する。

心は朽ち、意は無となり虚と化し、

故に拒み、悪道に墮つる。

径行の贖罪が、小康となり果てん事を。

今一度、悪手を用いて卑怯と墜つ！

貴様の大切な物を奪い去つた。

尚、我魂を燃え葬る所存であるならば。

根本恭二より』

松下は溜息を吐いて、

「時間の無駄だ。そんな事よりも、」

「……………啓吾！」

ムツツリーニが松下を制する。

「……………お前は友人の危機を何とも思わないのか？」

「今は戦争中だ。小さな事に構っていたら、身体が幾つあっても足りない。」

ムツツリーニは松下の肩を握り、

「……………何時もお前は、自分に関係無い問題に対しては無関心だな。」

「根本の策略に嵌まる事が気に食わないだけだ。無口で寡黙な癖に、口数が多い。」

バギヤアツ！

「黙れや！…！」

俺は鉛筆を叩き割った。

「後にしろ…今は戦時中だ。姫路が根本の作戦に巻き込まれた以上、代表として黙る訳には行かない。」

「……………（コクッ）」

「気が立っていた。済まない、土屋。」

俺は叩き割った鉛筆をゴミ箱に投げた。

松下とムツツリーニは教室から出て行く。

「姫路…二人に同行しろ。」

「…はい。」

視点：明久

啓ちゃんが姫路さんの部隊に指示を出す。

「左側出入口、押し戻されています！」

「現国の戦力が足りない！援軍を頼む！」

押し戻されているのは左側、現国のフィールド…文系のBクラス相手ではきつい！

「姫路さん、左側を掩護して！」

「え！？あ、あの…明久！ここは俺がやる！」

41点…このままじゃ、啓ちゃんが！

「姫路さん、どうかしたの？」

明らかに様子がおかしい姫路さんに声をかける。

「そ、その、なんでもないんですっ」

ブルブルと首を横に振るけど…何かあるのが見え見えだ。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし。」

秀吉も駆け寄る。

「そうじゃ。本当に何か困っているなら相談に乗るし、場合によっては雄二に話してクラス全体で解決するぞい。」

「ほ、本当になんでもないんです！」

……。

「右側の出入り口も押されています！」

「……………数学教師はどうした。」

「Bクラス内に拉致された模様！」

FFF団の必死な抵抗も、長くは…。

「わ、私が行きますっ！」

そう言っつて姫路さんが戦線に加わろうと駆け出す…でも。

「あ……………！」

急にその動きを止めて俯いてしまった。

何かを見て急に動きを止めるように。

視線を追ってみると、根本君が無表情で見ている。

目を凝らして見てみる。

「!!!!」

金色の文字が彫られた剣を握る根本君の姿があった。

姫路さんが涙を流した。

成る程ね…そういうことか。

啓ちゃんは僕から眼を反らした。

「秀吉。」

「何じゃ?」

「姫路さんの体調が悪いみたいだから保健室に連れていってくれないかな?」

「承知した。」

「姫路さん、ちゃんと保健室で休んで。」

秀吉は僕の手を軽く握り、姫路さんを連れて行く。

根本君…理由は知らないけど。

姫路さんを泣かせちゃったんだ。

…許さない。

あの屑野郎…ぶっ殺してやるううう!!!!

- - - - -

「雄二!!!!」

「脱走でもするなら…許さねーぞ。」

「違うよ。は、話があるんだ。」

雄二は教卓の上から降りた。

「とりあえず聞こうか。」

雄二は僕の様子を見て…からかうのを止める。

深呼吸。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

ズコー

「真剣に頼むなボケが……どうした？」

笑いを堪える雄二。

言い方がまずかった！

僕は変態じゃないからね！

「い、今のは無し！僕は……根本君を殺したいだけなんだ。」

「それだけか？」

「それと……姫路さんを今回の戦線から外して欲しいんだ。」

「理由は？」

「ゴメン……理由は言えない。」

「どうしても外さないとダメなのか？」

「うん。」

ハッキリ言って無茶苦茶な御願いだ。

主戦力である姫路さんを外すという事は戦力の大部分を失う事を意味する。

「それでも…頼みたい事なんだ！」

僕は深く頭を下げた。

雄二は静かに返答する。

「……………条件がある。」

「条件？何？」

「姫路が担う筈だった役割をお前がやれ…手段は選ばなくていい…必ず成功させ、活路を開け。」

「もちろんやってみせる。絶対に成功させる…で、何をすればいいの？」

「バカ久…何の考えも無く来たのかよ。」

呆れられるくらいならどうでもいい。

「タイミングを見計らって根本に攻撃を仕掛ける。教科は何でもいい。」

「皆のフォローは？」

「ねーよ。Bクラス入口は今の状態のままだ。」

「……………難しいなあ。」

「お前なら殺れるぞ。」

雄二は僕の額にデコピンをした。

「根本の強固な守りに隙を作れ…ムツツリーニの奇襲をアシストするんだ。」

「分かった。」

「根本を撃破してしまっても構わん。戦果を期待する。」

雄二は僕が「本気」だと分かってくれた。

「《金色の疾風》と《絶対悪》か…楽しくなってきた。明久…総合科目の点数は？」

「えっと…750点くらいだけ。」

「よし。作戦は………」

.....

視点：啓吾

「明久…無謀すぎる作戦だが、覚悟は？」

「勿論！」

明久の提案以外に打つ手は無い。

「援護はする。無茶は…しろよ。」

誰かの為に…全てを尽くす『バカ』そのものだ。

作戦開始直前。

「明久…戦況は膠着しつつある。」

「良かった。」

「だが油断は出来ない。Bクラスの教室前は敵で一杯だ。」

先程までバリケードのあった2階から3階へ、Bクラスに奇襲すべく降りようとした時、話し声が聞こえてきた。

あいつら…習志野と宮野か！

こっそり聞くべく、俺は明久と2階で聞き耳をたてた。

-
-
-
-

「根本も人が悪い。」

「ええ！素晴らしいまでの手際だわ。」

「しかし姫路の弱みを握り行動不能に持ち込むのは…根本らしくないな。」

「そうかな？私だって同じ手を使うけど…姫路さん程度の生真面目さんなら引っ掛かるし。」

「習志野…霧島に睨まれるぞ。」

「大丈夫だって。私は学年4位よ？」

「派閥が多くてギクシャクしているんだ…油火に水を注げば、3年の連中も刺激する事に繋がる。」

「貴方も大概だけど？」

「否定はしない。ところで、Fクラスの対策は？」

「木下姉に確認したけど、虚偽だった。」

「そうか。だが…小山は宣戦布告をしてしまった。」

「まあ、戦争に負けたら、大人しくなるでしょ。」

「Dクラスの設備に格下げするくらいならば、此方としては都合が良い。」

「小山さんも納得するわ。でも…Fクラスは思ったより、やるわね；

「だが…Fクラスの士気を上げるには都合が良い。今は彼奴を笑わせておこう。」

「だよ。形はともかく、Cクラスへの挑発は成功したんだ。」

「ああ…Bクラス戦に影響は無い。根本を倒す。」

俺と明久はUターンし、Dクラスに入って行った。

- - - - -

視点：恭二

「済まない…姫路を止めるにはこうするしかなかったんだ…済まない！…！」

芳野に怒りの感情は無かった。

「何も言わないよ…落ち込まないで。後で姫路さんに返せばいいから、ね。」

俺は愚かな男だ。

正攻法でも、姫路を打倒する手はあった。

だが…芳野を信用しきれなかった甘さが連中の怒りを買っミスに繋

げてしまった。

謝罪も彼等の怒号を鎮静する事は出来ないだろう。

加えて、幾度の作戦ミスが重なった。

Bクラスのメンバーの意見を重んじ、好きなようにさせたのが裏目に出てしまった。

・人質を取った故に、笹倉を失った。

・岩下と菊入に姫路と松下を相手に真つ向で勝負を挑ませてしまった。

・水瀬さんと吉井のリアルファイトを別日に設けなかった。

・相手の教室の設備を滅茶苦茶にするだけでなく、姫路の所有物を盗んだ

・Cクラスと同盟を結ばなかった。

「これで、本土決戦を覚悟しなければならなくなったな。」

「仕方無いよ…私が恭二君の言うままに指示しちゃったし…止める手立てはあったのに、私が弱気だから…こんな事に。」

机の上に置かれているのは、姫路が大事そうに持ち歩いていた模造刀だった。

省みれば…窃盗した時点で敗北は決していたのだな。

「恭二君…。」

芳野は俺に寄り添った。

溜め息をして、現状を確認する。

室外機の故障で教室内は蒸し風呂状態となっている…芳野には辛すぎる。

窓は開けられない…開ければ、忽ちムツツリーニが突っ込み、俺に保健体育を挑むだろう。

「芳野。ゲームに例えると、どうなる？」

「そだね…王将と金将が一つ、敵の成金に盤面の角で囲まれて、ガタガタ震えて命乞いしてるんじゃないかな？」

「惜しいな…飛車や角は撃破しているが、持ち駒には出来ないだろう？ 試召戦争はチェスだ、ぜ。」

「キングとクイーンだけじゃ、何も出来ないかあ…。」

俺も芳野も決心が着いていた。

ガラッ！！！！

扉の向こうに…坂本が腕組みし、こちらを見ていた。

.....

視点：雄二

遂にヤツとの御対面だ。

根本は芳野を後ろに下がらせ、近衛部隊を前身させた。

芳野は窓際まで後退する…ムツツリー二の存在を危惧しているな。

根本は…小者らしく声を張り上げた。

「お前ら、いい加減に諦めろつての。昨日から教室前で蟻のように集りやがって…暑苦しい事この上ないんだよ！」

「どうした？軟弱で卑猥なBクラスの代表さんは早くもギブアップつてかあ？」

「はア？クズ共が…舐めてんじゃねえ！」

「そのクズに敗北する事になるんだがな…覚悟出来てんのかあ！」

「姫路不在の最下層が、調子に乗るな！」

「姫路が出るまでも無い。お前じゃ、役不足なんだよッ！」

「口だけは達者らしいなあ、負け犬の代表さんよお？」

「負け組？もうすぐで負けるお前に相応しい称号だな。」

ドンッ！…！ドンッ！…！

向こうの壁からドン、ドンと、何かを叩きつけている音が聞こえる。

明久はどう奇襲するんだ…。

「……さっきからドンドンと、壁がうるせえな。不愉快だ！」

「知らねえな？もしや…人望が皆無なお前に対しての嫌がらせじゃないのか？いい気味だぜ！」

「フンッ！言つてな…！！！」

根本が近衛部隊の半数を更に前進させた。

「……態勢を立て直す！下がれっ！！！」

「逃げるなら勝手にしな…逃がすなあ！」

後退するFクラスを追うべく、Bクラスの近衛部隊の片割れが迎撃するが…間に合いはしねえよ。

時刻は12時ジャスト、叫びとともに轟音が響いた！！！！

「だああーっしゃあーっ！！！！」

ドゴオッ！！！！！

Bクラスの壁がぶち抜かれた……！。

.....

視点：恭二

なあ、ん……だ、とお！？

「くたばれーっ！根本恭二いいい！！！！」

ば、バカな野郎だ！

奇襲に備えて教室内のフィールドは総合科目にしてんだよ！

吉井率いる奇襲隊の成績じゃ……近衛部隊の足下にさえ及ばない！

「芳野！吉井達を喰い止めるんだ！」

スタツ！

「はいつ……！！」

「残念だったな…奇襲は失敗だ！」

俺は、近衛部隊に囲まれて身体を震わせる吉井を誹謗する。

「常識と言つ名の壁の破壊は素直に評価する。が、愚かだな…教師陣に取つ捕まるには充分すぎるぜ！」

「残念だけど…鉄人には殴られ慣れてるから、怖くもなんとも無いさ！それに…今の攻撃で、活路を開くことが出来たんだ！」

「な、に…？」

俺が疑念を浮かべた後に、吉井が破壊した壁の隙間から…松下が現れたのだ。

「根本…バカを怒らすと怖いな？」

芳野と近衛部隊の支援は…無理そうだな。

「お陰様で、回復試験を受けられた。」

「総合科目なら苦手教科で勝負しなくて済むから、か。」

「さあ…血祭りで行こうか！」

.....

視点：啓吾

「姫路の刀は…丁重に扱ったようだな。」

「他者の所有物を奪つんだ。丁寧に管理する事は当たり前だ。」

根本は周りの生徒を静かにさせ、

「Bクラス代表の根本恭二…Fクラスの松下啓吾に、総合科目で挑む。」

「受けて立つ…高橋先生！」

『承認します！』

根本は芳野に、

「助太刀は要らない…吉井を撃破しても、俺を手伝うな。」

根本は俺から距離をとる。

「臆病者が強がるか…惨めだな。」

「……………」

「俺を教室に進撃させてしまった瞬間、お前の敗北は決した！」

「…来やがれ。」

《総合科目》

2 - F : 松下啓吾 2278点

VS

2 - B : 根本恭二 2706点

「「「なっ!?!」」」

俺以外の面子は驚愕する。

「根本…御前ほどの男が何故、あんな安い手に出たんだ。」

「俺は《絶対悪》…卑怯者に問うとは、ナンセンスだぜ。」

「恭二君!!!!」

「明久、秀吉!」

俺は二人に指示し、芳野を阻む!

「芳野智里に吉井明久と、」

「木下秀吉が」

「古典で勝負を」

「挑むのじゃ!」

根本は芳野を援護すべく鎖鎌を投げるが…異なる科目のフィールドなので、境目で撥ね飛ばされる。

《古典》

Fクラス吉井明久 34点

Fクラス木下秀吉 206点

VS

Bクラス芳野智里 237点

「先程の迎撃のせいで、ダメージが蓄積したようじゃの…済まぬが、終わりにする！」

「あ、あ…う、くっ！」

芳野は二人の猛攻に、根本を援護出来なくなった！

「松下あ！倒すっ！」

根本は鎖鎌を突き出す！

「鎖鎌はどの距離でも対応できる厄介な武装だったな！」

鎖鎌：草刈り鎌に鎖分銅を取付けた様な形をした武器で、農耕具を武器として発展させた物だ。

江戸時代、帯刀を許されない身分の者（農民・商人・職人）の護身用の武器として用いられた。

根本の召喚獣は2種類の鎖鎌を有する。

1つは：4尺程の鎌の付け根に鎖分銅を取り付けられた基本的な形状。

もう1つは：鎌は無く、鎖分銅だけが装着されているようだ。

根本は4尺の鎌をくるくる回す。

手首や足に鎖を絡めさせられたら終わりだ：動きを封じられた後に鎌刃で斬りつけ止めを刺される。

頭頂部に鎖分銅を取り付けたものは、片手で鎖を振り回しながら、敵との間合いを計りながら分銅を打ち付けて用いられる。

だが：弱点や隙は必ず生じる。

鎖分銅は一度投げてしまうと投げた鎖を巻き取り再度振り回して攻撃態勢が整うまで非常に時間がかかるのだ。

「喰らいな！」

ヒュン！！！！

俺は鎖分銅をナイフで弾き、接近する！

遠距離から近距離において、優れた性能を発揮する武器だが…完全に使いこなすには相当の鍛錬が必要とされている。

踏み込めば…奴の攻撃が来る前に一手をぶちかませるのだ！！！！

「根本…降伏しろ。お前の物語は結末を迎えつつある。」

「結末は新たな物語へ繋ぐ切っ掛けだ！」

「そうか。ならば全力を出して殺す！」

「全力で仕掛けてえ…届かせてみせな！」

鏝競り合い！

「どうした！？松下あ？点数差が大きくて、犬みてえに泣き叫ぶのかよお！」

「たかが500点の差など、押し出してやる！」

「バカな事は止めるお！」

「やってみなければ…わからない!!!」

鎖分銅が直撃しながらも、根本の召喚獣にナイフを突き刺す！

返り血で…互いの召喚獣が赤く染まる。

「おおおーっ!!!」

ギシャアッ！

鎖鎌がワイヤーのように腕を撃つ！

「根性見せろっ！俺は!!!」

「何だあ！？コイツはよ!!!」

「意地だよ…Fクラスのなあ！」

俺の召喚獣の日本刀の鞘が根本の召喚獣の鳩尾に入った！

「ガッ…アア！」

根本は完全に崩壊した…余りの歯軋りに…口から血が垂れて行く。

根本の召喚獣の動きが鈍くなる。

松下啓吾 1574点

VS

根本恭二 1767点

「首を撥ねてやる！」

日本刀を召喚獣に向かって振りかざさんとするが…。

「デヤアアアアア!!!」

ゴギヤアツ!

鎖分銅が脇腹に直撃したのだ…!

ズキイツ!

「ち…い、いいい!!」

「痛いよな痛いよな!もっと痛くしてやらあ」

「は…ハハツ…あああああ!!!」

勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ勝つ!

「諦めろ!認識せずに、消えろお!!」

根本…もう死ぬしかねーみてえだなあ。

根本君は俺の眼前…姫路の刀を持つ。

「姫路さえいなけりやなあ…卑怯になる事も無かつたんだ！姫路の存在があ、俺を《絶対悪》に押しやつたんだよ！悲劇の悪役はもう御免なんだよおー！ー！ー！！！」

「言いてえことはあそれだけかあ！」

「悪いかよっ！！！！！」

「やつぱ、御前の価値全てを喪失しなきゃ駄目だなあ！」

精神が本能を抑制しなく、なつ、た。

松下啓吾…0点

VS

根本恭二…8点

ち…く…しよ…う。

坂本の召喚獣が根本の召喚獣を仕留めた。

意識はそこで途絶えた。

第15話 絶対悪よ目視せよ！闘いの終焉！（後書き）

今回は吹き出しばかりで…状況を掴みにくいかもしれませんね；

何とかBクラス戦に終止符を打てましたが…正直、出来栄はよろしくない><

Aクラス戦で挽回して魅せますから…気長に御待ちくださいっ！

第16話 新ジャンル：女装趣味×悪鬼羅刹（前書き）

問・次の（ ）に正しい年号を記入せよ。

□（ ）年 キリスト教伝来『

姫路瑞希、松下啓吾、根本恭二の答え

□1549年『

・教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

□雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993年『

・教師のコメント

□マンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

吉井明久の答え

□異国に向かう救世主の壮大な物語…全ては1592年に始まった
『！

・教師のコメント

映画の告知としては素晴らしい出来栄え。

土屋康太の答え

『世紀末に舞い降りた救世主…1999年、世界が核の炎に包まれ
たっ！！！！』

・教師のコメント

ハッヒャー！汚物は消毒だ〜！

第16話 新ジャンル：女装趣味×悪鬼羅刹

視点：啓吾

目覚めた時…召喚フィールドが消滅する。

根本恭二の戦死により、Fクラスの勝利が確定したのだろう。

「根本…勝ちを貰ったぜ。」

根本は床に座り込み…胡座をかいた。

坂本はニヤニヤして、近くの椅子に腰をかける。

「根本…嬉しい楽しい戦後対談といこうじゃないか。」

「……………」

根本の顎を掴み、クイツと上げた。

「無様だな…お、ま、え。」

嫌な笑みを浮かべると、根本は俺の手を振り払う。

「対談を始めよう。芳野…Bクラスの皆に結果を報告に行ってくれ。」

芳野は根本を一目見てから、

「はい。」

ガラッ!

教室に、水瀬さんが息切れしながら駆け込んできた。

「根本!」

「済みません!全ては俺のミスです...。」

「...そうか。」

滝川さんは坂本に、

「詳しい話は放課後にしよう...遅くまで皆を帰らせない訳にはいかないだろ?」

「分かった。午後3時にBクラスで対談をしよう。根本と笹倉とア
ンタ以外はとつとと家に帰してやる。」

笹倉が須川と共に戻ってきた。

続々と戻るBクラスの生徒達...誰もが悔し涙を流していた。

明久は根本に何からの口約束をし、俺達は一旦Fクラスに戻る事
にした。

-
-
-
-

放課後。

約束通り、根本は俺達を丁重に響応する。

珈琲を飲み干した坂本は本題に入る。

「根本。」

「好きにしろ…。」

対談が始まった。

「笹倉。提案がある…聞いてくれ。俺はAクラスを狙っている。だからBクラスの設備に手を出すつもりはない。」

笹倉は巨体を起こす。

「条件はなんや？」

坂本は根本に指を差した。

「条件は簡単さ。負け組代表の根本恭二が…俺達の要望に従いさえすれば、このクラスに手出しはしない。」

笹倉は、

「根本…ええな。」

根本は、

「俺の命を差し出すだけで、お前らに危害が及ばないのなら承諾する…で、何をすれば良い？」

坂本は、

「お前は去年から目障りだったからな。憂さ晴らしも含めて、数名の要望に応えてもらうぜ。」

「自業自得…肝には命じている。」

「よし。コイツを着て…俺達のAクラスへの宣戦布告をフォローするんだ。」

雄二は女性用の制服を持ち出した。

「…準備が早いな。」

根本は溜め息を吐いた。

「カツラと化粧用具は一式用意しておる…御主はルックスは良いから、化けるかもしれんの？」

秀吉はスーツケースから女物の衣装を取り出す。

土屋は追い打ちに、

「……………撮影会も開く。」

流石に根本も動揺したようだ。

不登校になるレベルだな；

「敗者に口無し…何でも、する…。」

坂本は明久に、

「明久…根本は何でも聞くつてよ。」

明久は根本の方を向いた。

「根本君…姫路さんから盗った刀を、返してくれないかな？」

「……………それだけでいいのか。」

「壁を壊したら、スッキリしたからね。」

「吉井…怪我がなくて良かった。」

根本はガラスケースを手渡した。

「吉井…後々、姫路に謝罪に向かう…本当に済まなかった。」

根本は明久に再度謝罪した。

「じゃ、後でね。水瀬さん…昨日は有難うございました！」

水瀬さんが明久に微笑む。

「とつとと行きな。お姫様を待たすなんて…男として恥ずかしい事さ。」

「はい！」

明久が教室から出るのを見てから、俺は根本に突っ掛かる。

「明久が優しく助かったな。」

バキィッ！！！！

根本の頬を殴った。

水瀬さんは根本が殴られるのを止めない。

笹倉は教室のドアに鍵をかけた。

「坂本…この屑野郎を拷問する。」

「色々聞きたいしな…須川。」

須川が根本を縄で縛り上げた。

「根本…知っている事を全て吐け。」

「黙秘する。」

ゴッ…！！

「黙秘権など無い。」

坂本が根本の鳩尾に蹴り入れる。

「カハツ…そうだったな！」

俺は単刀直入に尋ねた。

「《習志野 桃花》は何が目的で動いている？」

「お前…何処で知ったか知らないが、深入りがバレたら、彼奴に消されるぞ。」

「忠告は心に留める。しかしな…習志野はAクラス戦に備えて、必ず何らかの策を立てる。」

「まさか…闘うのか？習志野は《学力筆頭主義》の創設者…優等生や教師から絶大な信望と信頼を寄せられている。」

「知ってるから、根本に手を貸してもらおう事にしたんだよ。」

「マジか…習志野は苦手なんだよ。奴は卑怯者らしき美学を持ち合わせていない。」

「卑怯者に美学があるのか？」

「色々な。」

窃盗を犯したクズが美学を語るなよ…。

俺に構うことなく根本は話を続ける。

「ま、こんな事を言っても…Aクラスに挑戦するのだろうか？坂本。」

坂本はコップを握り割った。

「クククツ…ハハハツ！」

狂喜の笑い。

根本もあの嫌らしい笑みを見せていた。

「坂本…Aクラスにできる算段は見付かったか？」

「俺は元《神童》だからなあ…頭の出来が違うんだよ。《悪鬼羅刹》を舐めんじゃねーよ。地獄に葬ってやらあ。」

「はあ？知略は《絶対悪》の方が遙かに上なんだよ…十字架に打ち付けて、悲しみの道を歩かせてやるよ！」

二人が向き合い、嘲笑し、ほざき合う。

《絶対悪》と《悪鬼羅刹》。

俺は…余りの恐怖に言葉を失う。

視点：明久

根本君から姫路さんの刀を取り返した僕は教室に向かっていた。

「……………明久。お姫様が待っているぞ。」

「有難う。」

「……………Aクラスの調査に出掛ける。」

ムツツリーニは手を降ると同時に消え去った。

ガラッ

「吉井君…。」

「姫路さん。」

「有難うございますっ!」

姫路さんは涙を流していた。

「……………。」

「皆…必死に頑張ってるのに、何も出来なかったから…。」

「自分を責めないで…姫路さん。」

涙目で見上げられると、恥ずかしい。

「取り敢えず…座ろっ。」

姫路さんとの距離が近い。

「刀…返すね。」

僕は姫路さんに刀を渡した。

ガラッ！

須川君がじーっと見る。

……。

沈黙の後に、大鎌を壁に立て掛けた。

「良い感じになっている所、済まないが…坂本が大事な話をするそ
うだ。」

「もしかして…今の会話聞いてたの？」

「全部な。本来なら磔刑を執行するが…壁を壊した事、鉄人が怒り
狂っていたぞ。」

それはまずい！言い訳しに行かなきゃ！

「姫路さん！また明日ね！」

「え？明久君待つてください！」

「さよなら！！！」

「あ、待つてください！！明久君！！！」

「レディを放っていく事は許さんぞ！」

須川君に追い掛けられながら僕は、職員室へ全速力でBダッシュした！！！！

視点：啓吾

Bクラス戦が終了し、翌日。

只今の時刻は14時半過ぎ。

坂本がAクラス戦についての説明会を開始した。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している。」

最高潮に達した。

「ここまで来たんだ… Aクラスを打倒し、成績だけでは生きていけないと、あいつらに突きつけてやるっぜ！」

俺は拳を高く挙げる。

向かうところ敵無し… 本当に殺れるかもしれないな。

「Aクラス戦だが、代表同士での一騎討ちで決着をつけようと思う！」

クラス中がざわめいた。

ざわめきが広がった。

Aクラス代表の霧島とFクラス代表の坂本… 実力が違いすぎる。

相手は学園主席… 姫路でさえ圧倒する驚異の高得点を有して、

「雄二が勝てるわけがなああっ!?!」

余計な事を口にした明久の頬をカッターがかすり、俺の横に突き刺さった。

「次は耳を飛ばす。」

俺は立ち上がり、カッターを坂本に投げ返す…。

パシッ!

「まあ、明久の言うとおり確かにヤツは強い。まともにもやりあえば勝ち目は無い。」

カッターを投げた男はあっさりと認める。

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにもやりあえば俺達に勝ち目はなかった…だが、勝てたじゃないか。俺を信じて任せてくれ…過去に神童とまで言われた力を皆に見せてやるぜ！」

「……「おおーっ！！」「」「」」

誰もが坂本を信じている。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

「…………霧島は日本史もかなりできる。どうする？」

「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負だ。」

「なるほど、その条件だと、満点が前提になって、ミスした方が負けになるから注意力勝負になるな。確かに召喚獣勝負よりかは勝ち目はあるが…同点だったら、延長戦になる。ブランクのあるお前には厳しくないか？」

「確かに啓吾の言とおりにじゃ。」

秀吉が肯定するが、坂本は、

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものが。」

「霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるの？」

「いいや。アイツなら集中してなくても、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろう」

せやな。

「雄二。あまりもったいぶるでない。そろそろネタを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの連中も木下の言葉に頷く。

すると坂本は自信満々に声を張り上げた！

「俺がこのやり方を選んだ理由は。それは…ある問題が出たらアイツが必ず間違える事を知っているからだ。その問題は、『大化の改新』だつ！！！！」

中大兄皇子が645年に発布した政治的改革か。

昔…《蘇我を蒸し殺す大化の改新》と語呂合わせで覚えたなあ。

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

明久が雄二に問う。

「そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ。」

「単純というところ何年に起きた、とかかのう？」

「おっビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

「坂本…笑えない冗談だ。」

須川が疑念を浮かべるのは無理も無い。

小学生レベルの歴史問題でも簡単な方だからな明久だってこれくらい…？

明久は俺から顔を逸らした。

……………。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ！」

「あの、坂本君！」

姫路が珍しく挙手する。

「ん？なんだ姫路。」

「霧島さんとは…仲が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

「」「総員、狙ええ！」「」

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？松下と須川までっ！！！」

「黙れ男の敵！Aクラス戦の前に貴様を殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

「遺言はそれだけか？…待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後で口に押し込むんだ。」

「了解…松下、カッターは？」

俺は大きな袋を開け、

「一人五本までだ。」

姫路が慌てて俺達を制止した。

舌打ちの大合唱。

「あの、吉井君。」

「ん？姫路さん？」

「吉井君は…霧島さんが好みのタイプなんですか？」

「美人だもの。凛々しいしカッコイイ！」

姫路が殺気を漂わせる。

「姫路さん？な、なんで僕に向かって攻撃態勢を取るの！？」

秀吉がパンパン手を叩いた。

「皆一旦座るのじゃ…泣いちゃうぞっ」

ザッザッザッ！！！！

身体が勝手に動き…席に座る俺達。

「それに冷静になって考えて見るがよい…相手はあの霧島じゃぞ？男である雄二に興味があるとはおもえんじやろうが。」

そう言えばそうだったな。

霧島は去年から男には興味がないらしい。

噂によると、彼女は同性愛者で…今は姫路を狙っているとの事。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えたんだ。アイツは一度覚えた事は忘れないほど頭が良い、でも今回はそれが仇になる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら

俺達の机は……システムデスクだっ！！！！」

第16話 新ジャンル：女装趣味×悪鬼羅刹（後書き）

お久しぶりです。

ユニークが2500を突破しました！

半ば展開がゴリ押しですが：大丈夫な筈。

次回からAクラス戦に突入します。

島田さんの存在をすっかり忘れていました：待って！そっちの腕はこっちには曲がらないっ！

ボキイツ！

「ハロハローー ウチは次回から復帰するからよろしくね」

第17話 若女将散る！恐怖の習志野一派！（前書き）

問 以下の問いに答えなさい。

「PKOとは何か、説明しなさい」

根本恭二の答え

『Peace - Keeping Operations（平和維持活動）の略称。』

『国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動を指す。』

・教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

土屋康太の答え

『Pants Koshitzuki Oppaiの略。』

『世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事。』

・教師のコメント
君は世界の平和を何だと思ってるのですか。

須川亮の答え

『P a s t a K a n s a s O i s h i

『カンザス産のパスタは美味しい。』

・教師のコメント
先生もパスタは好きです。

横溝浩二の答え

『P u c h i - T o m a t o K a r a - A g e O k a r a

『ある一家の昨日の晩御飯。』

・教師のコメント
その手は卑怯だと思います。

吉井明久の答え

『パウエル・金本・岡田の略』

・教師のコメント

それはセ界を護る人達です。

第17話 若女将散る！恐怖の習志野一派！

視点：根本

Bクラスが敗北し、二日が経つ。

Aクラスへの宣戦布告を支援すべく…男子更衣室の前で、木下弟と吉井に挨拶を交わす。

「根本よ、逃げなかったのじゃな。」

フンツと鼻を鳴らす。

「今日は忙しいんだ…Aクラスへの宣戦布告に撮影会。喋っている時間は無い。」

「御主はどの立場からワシに物申しているのじゃ？」

「演劇なんて下らない事を隠れ蓑にして、学業を疎かにしているバカに言っているんだよ。」

ギンツ！

「その目障りな顔を向けるな。成績が悪いのは事実だろ？」

「ワシは何と言われても良い。演劇や舞台そのものを侮辱される事は赦さぬ！」

俺は今、心中で後悔した。

演劇を愛する実直な気持ち。

木下弟が演劇に対して特別な思いを持っている事を忘れていたのだ。

俺は…。

「木下弟。Fクラス所属の生徒が優先しなければならぬのは『勉強』だ。少しばかり、ずば抜けているだけで図に乗るな。」

否定する事しか知らないのだ。

「勝手に言っておれ。着替えは更衣室の中じゃ…明久よ、着付けは任せたぞい。」

沈黙の後に、

「ね、根本君…。」

更衣室の真ん中に置かれた女性用の制服を手に取る。

「悪口じゃねえよ…単に第三者の立場から意見しただけだ。」

吉井は手に包帯を巻いている…素手で鉄筋コンクリートを破壊したらしい。

真紅に染まっていた。

刹那の感情に…虚無の色を見る。

「吉井…頼む。」

「……………」

胸に下着とパッドを入れ、女性用の制服を着る。

メイクが始まる。

Dクラス所属の玉野が、黙々と作業する。

スタッツ！

「……………根本、分かっているな？宣戦布告の前に撮影会だぞ。」

「土屋か。」

「……………（コクッ）」

松下も更衣室に入ってきた。

「根本…中々笑える面をしているな。」

舌打ちをする。

「3ヶ月間ボロボロの教室に縛られる方がマシだったと思ってるんだろ？」

「49人の苦痛よりも1人の犠牲を選択する…舐めるな。」

玉野が俺の髪の手入れに移行する。

土屋と松下と相違する気分が苛立つ。

「……………松下。根本はこれから想像を絶する苦痛と屈辱を受ける。」

「プライドはズタズタ、精神も可笑しくなるだろうな。」

「……………根本はそれだけの悪行を重ねた。自業自得。」

「卑怯者の哀れな末路だな。」

吉井は気難しく二人を見ていた。

玉野はカツラを選び始めた。

「御免ね。もう少しだから我慢してね…このカツラは…あ、凄く似合ってる！」

ロングヘアーか…花柄の髪止め同梱。

土屋がOKサインを出す。

松下は汚い者を見るように嘲笑する。

吉井は目を逸らした。

「玉野。強力感謝する…後々、例の写真を無償提供しよう。」

松下は更衣室のドアを開けた。

「了解」

玉野は化粧用具を片付け、帰って行く。

「……………これは酷い。」

「土台が腐ってるからな。まあいいだろ？根本。お前の制服は焼却処分してや」

バキィッ！！！！

「……………明久！？」

吉井が…松下を殴り飛ばした！？

「啓ちゃん。姫路さんがいつどこでそう命令したのかな？」

ゾクッ！

「カ…カハッ…あ、きひ、さ…！」

ゴッ！

吉井は松下を蹴り、気絶させる。

「ムツツリーニ。啓ちゃんは、時々、おいたが過ぎちゃっんだ。」

「……………俺の仕事を増やすな。」

ムツツリーニは松下を引き摺って行く。

吉井は松下から俺の制服を取り上げた。

「根本君…行こう。宣戦布告が終わったら返すからね。」

「制服が燃やされるぐらい、どうでも良かった。」

「根本君は僕達の要求を吞んでくれたし、姫路さんに泣いて謝ってくれたからね。」

更衣室を出た先には、坂本が居た。

「根本…まあ、頑張ってきて来い。明久…松下への暴行は不問にしてやる。」

「ごめんね、雄二。」

「吉井、坂本…。」

「お前は習志野突破の糸口を握っている。利用価値がある奴は丁重に扱うのがマナーってもんだろ？」

「……………」

「ん？どうした。」

「悪いな。いつも…。」

俺は背中を押される。

「キビキビ歩け。撮影会が待っている。」

「雄二！急ごうよ。」

.....。

吉井には何時か、借りを返そう……。

- - - - -

視点：雄二

根本が去るのを見てから、明久を呼ぶ。

「明久。話がある。」

「いいけど？」

場所を移し……屋上に来た。

「Aクラスに習志野って奴が居るだろ？」

「うん。確か……優等生から絶大な人気を得ているんだよね。」

「ああ。誰でも知ってる有名人だ。」

俺はノートを見せる。

「根本の要望で、最近の習志野の動向を調べるように…ムツツリー二に依頼した。」

「ムツツリー二は、隠密に長けてるしね」

俺は首を横に振る。

「残念だが、ムツツリー二はしくじった」

「ええ！？」

明久が驚くのも無理は無いか。

「Aクラスに設置した盗聴器や盗撮器が全て発見されたそうさ。御丁寧に、探知機を使用されてな。昨日：Aクラスの連中が重そうに運んでいただろ？」

「そんな…。」

「驚くのはまだ早い。習志野は：無線機、ピアノ線入り強化ガラス、覗き見防止シート、赤外線センサー、特殊警棒、消火器：セキュリティに関する備品の入荷を申請した。」

「そんなに沢山！？」

「業者や教師を利用すれば簡単だ。Aクラス所属の生徒は、『学園に致命的な損害を与えない』程度の希望は、無条件で通されるから

な。」

「へえ…凄いな。」

「感心してる場合じゃねえぞ。習志野はさらに…Aクラスに自分の派閥のメンバーを盛んに出入りさせているようだ。」

「派閥？」

「《劣等排斥一派》。かつて『根本 恭二』が最高幹部を務めたこともある、一大勢力だ！」

明久が持っていた制服を落とした。

「待つてよ、雄二。《劣等排斥一派》は3年前に内部分裂を引き起こして、散り散りになったよね？残党も、雄二や水瀬さんが壊滅させたし。」

「あの時はな。だが…習志野は再び、俺達の前に舞い戻った。優等生と教師を味方にしてな！！！」

俺は、憎しみを籠めた。

-
-
-
-

《習志野 桃花》は5年前に『劣等排斥一派』を立ち上げた。

彼女は某大企業の社長の一人娘：金を使えば、幾らでも人は集まった。

そして：不良や成績不審者を排除すべく、《水無月中学》に『宣戦布告』した。

宣戦の証に、13人の不良を全裸にして十字架に吊り上げて。

優等生はペンを取り、不良は剣を取る。

二つの世界が交差した瞬間だ。

習志野は周辺の中学の侵略に乗り出す。

初めての謀略は、《水無月中学》の主力であった《神虎組》の《騙し討ち》である。

不良から優等生への『一方的な暴行事件』を演出し、警察沙汰にしたのだ。

《神虎組》筆頭の《武神 隼人》は大打撃を被るが、《劣等排斥一派》のNo.2であった《根本 恭二》と手を結ぶ事に成功。

《神無月の変》を引き起こし、《神無月中学》の不良や成績不審者を味方につけようとしたのだ。

《劣等排斥一派》に買収された教師や保護者の実態を晒す。

だが：事前に習志野が謀略をキャッチ。

《宮野 孝文》を利用し、根本を反逆の罪で捕らえたのだ。

数日もの間の拷問により、心神喪失と判断された根本は失脚する。

邪魔者が居なくなつた習志野は更に、排斥を進めた。

同時に、闘争の規模が拡大。

《悪鬼羅刹》、《金色の疾風》、《瞬撮魔》、《若女将》らが続々と参戦。

最終的に30校以上が参戦するに至る。

中学だけでなく高校にも飛び火し、『戦争状態』と化した。

『優等生』VS『劣等生』の構図の明瞭化が闘いを激化させ、派閥争いの泥沼化を導いたのだ。

病院は怪我人で溢れ、

警察は事態を黙認し、

学校は対応出来ない。

そんな状態が続き、全勢力が疲弊し、続々と戦線を撤退していく。

膠着状態となり、睨み合いが続く。

しかし…半年後、拮抗が崩れる。

《悪鬼羅刹》・《破滅の死神》・《皇王神》が同盟を結び、《Resistance》を結成。

《吉井 明久》と《滝川 水瀬》が《金銀連合》を組織したのだ。

2つの軍は、習志野の籠城する『神無月中学』へ進軍。

1ヶ月に及ぶ攻防の末に、『神無月中学』を遂に落城するに達したのだ！

本土決戦に敗れ、味方を失った習志野は《劣等排斥一派》を解散し、行方不明となった。

その僅か三日後、『Resistance』と『金銀連合』の最終戦争が勃発。

全勢力の壊滅により、戦争は終結する。

「第一次学生戦争」

期間 ：1年11ヶ月

重軽傷者 ：21741人

警察沙汰 ：84件

転校者 ：1745人

損害総額 : 不明

-
-
-
-

「明久：習志野を殺す。本当に殺す。」

「習志野さんには、負けられないよね。」

「午後3時：根本と俺、平賀の3人で宣戦布告に行く。」

習志野を討たずして、戦争は終結しない。

三年前のケリを着けてやる！！！！

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

視点：源二

異常な光景であった。

此処がAクラスの教室か！

「…豪勢なこつた。」

「Bクラスの設備より上があるとはな。」

Aクラスに到着した俺、坂本、根本。

周りの設備を見た俺達は、余りの豪華さに戸惑う…凄い！

「俺が学園生活を送るには相応しい設備だな…楽しみだ。」

坂本の言葉に適当に相槌を打つ。

根本はカウンターを見渡す。

「見るよ。平賀に坂本…飲み放題&食べ放題みたいだ。」

フリードリンクコーナーにお菓子が置いてある場所を見つけた根本。

珍しく毒の無い笑顔が見える。

「凄いものだな。」

タッパを取り出し、人目を盗んで…素早くお菓子を詰め込む。

折角Aクラスに来たんだ…後で美紀や清水達に分けてあげよう。

「BOURBONよりも美味しいぞ！」

「坂本に平賀…そんな物に…驚いてたら足元を見られるぞ。お菓

「な…なんですって!？」

木下姉はかなり驚いている。

「バ、バツカじゃないの!?二年の主席に一騎打ちですって。貴方Aクラスを甘く見てない…?」

「勿論、甘くは見えていない。普通に戦うよりは効率的だからな。」

「うーん…狙いは何？」

不安を抱く木下姉は坂本に問いかける。

「言うまでも無い。俺達Fクラスの勝利が狙いだよ。」

「リスクを冒すべきでは無いわ。貴方の提案には乗れない。」

「賢明な判断だ。Cクラスの連中との試召戦争が長引いたようだが。」

「余計な御世話ね。時間は取られたけど、それだけだったよ?何の問題も無いし。」

根本が木下姉に近付く。

「流石はAクラス。大した余裕だな。」

「気持ち悪い顔を近付けないでよ。女装趣味の変態!」

「痛い所を突かれたものだな。女装趣味の変態を弟に持つと苦勞す

るらしい。」

「秀吉がFクラスのゴミなのは認めるけど…同類の貴女に言われる筋合は無いよ？」

坂本は根本を下がらせる。

木下姉は坂本を見詰め、

「BクラスもDクラスも、Fクラスと戦争して負けたんだし…3ヶ月経たないと試召戦争は出来ないはずだね。」

彼女の言う通り、戦争で負けたクラスは三ヶ月の間、宣戦布告は不可能だ。

負けたクラスがすぐ再戦を申し込んで泥沼化させない為の取り決めであるが…。

「残念だが…対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』となっているんだ。その規約を適用する事は出来ないぜ。」

さらに、

「幸い、宣戦布告はされてはいないが…三連戦にAクラスは耐えられるかな？」

坂本は不敵な笑みを溢す。

「…それって脅迫？」

「人聞きが悪いな。只のお願いだよ。」

「うーん…何を企んでいるのか知らないけれど、どうしよっかな？」

「慎重に考えるんだな。条件を飲んで俺と霧島の一騎討ちだけで済みますか、回復試験を受ける暇なく連戦に挑むのか。」

木下姉は悪寒に身体を震わせる。

「そうね…あんな格好をした代表の居るクラスと戦争なんて、嫌なもの。」

「だろうな。」

「でも、私の提案も聞いてくれない？」

「何だ。」

「呼吸置いて、」

「7VS7。一騎討ちを7回するの。どうかな？」

「姫路や松下が出てくる可能性を警戒してるのか。」

「多分：大丈夫だと思うけど代表の調子が悪かったら問題次第では、万が一があるかもしれないし。」

「代表戦は必ず俺が出る。安心しろ。」

坂本は胸を張る。

「信用できないわ。その言葉を鵜呑みには出来ない。これは競争じやなくて戦争だからね。」

坂本は溜息を吐き、

「そうか…それならその条件を呑むとしよう。」

「本当？嬉しいな」

条件を呑んだ坂本に、木下姉は微笑ましい雰囲気で満面の笑みを浮かべた。

「但し。勝負の内容は此方で決めさせてもらう…そのくらいのハンデはあっても良いと思うが。」

「え？うーん…。」

考え込む木下姉。

すると、

「その話、乗るわ^^」

スタツ！

「坂本雄二の提案は面白そうだからね」

俺は声のする方向を見た。

根本は顔を歪ませる。

坂本は不敵に笑い、近くの席に座った。

「漸く御出座しか…《習志野 桃花》。」

「はあ…相変わらずだねーねもっちゃん。冷たい目で見つめちゃって…ホレチャウヨ？」

俺はアイマスクとiPodを装着し、眠る。

習志野VS根本の痴話喧嘩に付き合いたくないからだ。

視点：恭二

「さて…感動の再会といこーよ！」

「さっさとしろ。坂本は交渉に来たんだ…手短に頼む。」

感情を抑えろ…奴に流されたら、終わる。

坂本は木下姉と談笑を始めた。

「手短にはしないよ。だってえ…ねもっちゃんは、私の最高の奴隷

「だっ たもん！」

「ああ。月に20万くれた事には感謝してる…お陰で、今日まで桃花への恨みを忘れなかったからな。」

「感心に値だねーおめでと」

「ふん。」

俺はスタンガンをその場に落とす。

「にしてもー何でかな？何で友香ちゃんを選んだの？」

「今は関係無いだろうが。」

桃花はへらへら笑い、

「ふう…甘い、温い、緩い！『危ない橋は叩かず渡る』事に命を投げ出すなんてね。何をしたいのか、全然分かんない！」

「安全な道は渡っても、何一つ得られない。誰かに照らされた舗道を渡る程、臆病ではないんでね。」

「ピュウッ〜（・・）」

バカにしゃがって。

「ねもっちゃんも同じ事を言っただね…友香ちゃんは元気かな？」

「知らん。彼奴は三日前から学校を休んで…おい、まさか!？」

「うはあ！察しが良いね。見なよっ！」

俺はAクラスの教室を見渡す。

そして……………見てしまった。

友香…何を…してるんだ…？

何故に、ステンドグラスのど真ん中で…十字架に貼り付けられているんだ！？

「思い出したかな？私に楯突いた者の悲劇的結末を。」

ダッダンッ！ゴツ…ギキキツ！！！！

俺の拳が桃花の直前で止まった。

「おおおおおっ！！！！！！」

「いやはや、惜しかったね。強化ガラスが無ければ即死だった…あーこわかった」

グ…ギ…！！

「どしたの？顔が真っ赤だよ卑怯な手に頼らざるを得なくなったかな？」

『『『HA、HA、HA！！！！』』』

桃花の周りの生徒達が、便乗して嘲笑してくる。

「はあ、はあ…御前は…何処までっ！」

「ねえ、ねもつちゃん。私が憎い？今どんな気持ち！？キャハハッ
！！！！」

ゴンッ！

俺は強化ガラスを頭突き、痛覚で、怒りを無理矢理に沈める。

ポタ…ポタ…。

視界が赤黒くなる。

「はあ、はあ、はあ…。」

「あゝ？意外だね。君が他人の為に怒りを露にするなんて。」

桃花は唇を吊り上げ、ニヤっとする。

「《絶対悪》は悪逆非道の代名詞。卑怯にして『五帝』に君臨した、昔馴染みの典型的強者。でも惜しいね…穢れに穢れても、汚れに汚れても、『悪』と為らず・成らず・生らず…ねもつちゃんは『常人』に足りうる存在なんだよ。」

……………。

「人は世界が無常と信じる。『物語の主人公』で在る事を望み…不可能など無いと『全知全能』と信じ…絶望するんだよ…己が孤独で

矮小で認識出来ぬ肉塊と知る。」

桃花は十字架を握り潰した。

「《超越者》である『私』は違う。」

桃花の周りに居た生徒達は、彼女を崇拜する……。

「ねもつちゃん…『私』はキミを『主人公』に出来る。」

「！」

「友香ちゃんを救いたいなら…『私』は協力するよ…さあ、どつする？」

「断る。」

俺は教室内の洗面所で顔を洗い、即答。

「俺は『俺』だ。」

「迂闊だね。状況を再度分析してみなよ…そんな余裕があるのかな
」？」

迫り来る桃花。

「友香は御前が思う程、柔じゃない。あいつは…死にはしない。」

「楽観的だね！。」

「ああ。御前は殺人を忌み嫌っている節があるからな。」

「まあ、その分、精神的に肉体的にしゅーりょーってなるまで痛み付けるの。友香ちゃんは今中々しづとかったよ？半日やって、声一つ上げないから、興奮めでねえ。」

「違っただろ…声一つ上げられなくなるまでやったんだろっがっ！」

「まあまあ、そう怒らないで落ち着きなよ。友香ちゃんは返す…もう用済みだからね…あんた達、友香ちゃんを解放してあげてくれな
い？」

『『『神の仰せのままに！！！！』』』

十字架が降ろされる。

友香は明らかに衰弱している…俺は彼女に駆け寄った。

「よく頑張ったな。もう大丈夫だ！」

「う…め、ん…な、さ…い。」

桃花は舌打ちし、

「あら？まだ息をしてるんだ。生命力だけは天下一品ね〜〜。」

皮肉を漏らす。

坂本はやれやれと言うと、平賀を起こす。

平賀が近くに来る。

「小山…習志野の野郎…許さん！」

坂本も他人事だと言えないらしく、

「流石の俺もドン引きだ。たかだか、試召戦争を挑んだだけだったのにな。」

霧島は何をしていやがったと嫌悪を示す。

「グツ……………カ…カハツ！」

友香が血を吐き出し、独りで立つ。

平賀と坂本は慌てて支えてくれた。

「さ、か…もと。わ、たし…Aクラスに負け…たわ…。」

俺は友香の頬に触れ、

「もう喋るな！」

「き、恭二…私、を見くび、ら…ないで、よ…！でも、流石…に、ヤバ、イかも。」

「何をされたんだ！？」

「気を、付け、て…あいつ…悪魔、だから…何だって…し、ちゃ…う。」

平賀が小山を抱きかかえる。

「根本、小山を保健室に連れていくよ。」

「悪い…頼む。」

平賀が友香を背負った直後、

ガラッ

「…習志野、何かあったの？」

俺と坂本は声の主の方を振り向いた。

「別に？それよりも、坂本の提案…受け立つか聞きたいんだけど？」

俺は席に座る…頭がクラクラしてきた。

視点：雄二

習志野は翔子の耳元で囁く。

暫し考えていた翔子だったが、直ぐに、

「・・・雄二の提案、受けても良い。」

「代表！？いいの？」

Aクラスの代表にして正真証明の学年主席である『霧島翔子』。

習志野は後ろに下がった。

奴は合格やそれ以上の相手に対しては、絶対に手を出さない。

翔子は俺にニコツと微笑む。

「・・・でも、その代わり条件がある。」

「条件とは？」

翔子は頷き、次にこう告げた。

「・・・負けたら何でも1つ言うことを聞く。」

「分かった。良いだろう。」

木下姉が話に割って入る。

「坂本君。代表自らが引導を渡してくれること、感謝しなさい。勝負内容は…7つの4つまで決めさせてあげる。3つは…」

「おいおい、俺達の勝利の御膳立てをしてもいいのか？」

「勘違いしないで。アタシ達Aクラスには『学園の治安と品格を守る義務』があるの。一学期早々、何の努力も積まない内にやらかしたバカ相手に、本気を出したら、可哀想でしょ？」

「大した自信だ。成績最下層のクラスと戦争しても、結果は見ええるってか？」

「そうよ。ま、手加減するつもりは無いけどね。」

木下姉は高圧な態度で、その余裕を告げ…威圧を漂わせる。

習志野に付き従う者達も、俺を見下す。

俺は木下姉を睨みながら、

「交渉成立だな。習志野、異論は？」

視線を習志野に向ける。

「代表には逆らわない主義でね。元来、一騎討ちは嫌いじゃないしいゝ。勝手にすればあ？」

「ん？《軍師》にしては珍しいな。無策で挑んで勝てる相手では無いと思うが？」

「勝てるよ。カードの切り方をミスらなければね。それにい、代表戦までに4勝すれば《悪鬼羅刹》の出る幕は無いよあ？」

「習志野の指摘は間違いではないが、立場が逆だな。」

「まあ、言っただけ。日程はいつになるの？」

「明日の朝10時からでどうだ？回復試験はちゃんと受けておくんだな。」

根本は…交渉の一部始終をメモし、翔子に確認させた。

「・・・雄二。」

「ああ。」

俺は翔子と握手を交わし、根本と共に教室を出た。

第17話 若女将散る！恐怖の習志野一派！（後書き）

丸々一週間空いてしまいました；

先週は行事が重なったので：更新する間が無かったもので。

一応構想だけは練ったので、随時更新していきます。

登場人物紹介7（前書き）

根本恭二に関しては変更点が多いので、仕様を変更しました。

次回からAクラスとの激戦を描写っ！

登場人物紹介7

根本恭二（変更点のみ）

中学時代、《劣等排斥一派》屈指の精鋭であった。

当時、《絶対悪》として、習志野と共に非道の限りを尽くす。

『集団カンニング』、『劣等生への集団イジメ』、『教師や保護者の買収』など当たり前。

しかし…《若女将》であった《小山友香》と運命的な出会いを果たす。

交流を重ね、様々な戦場を駆け抜ける内に『第一次学生戦争』に疑念を抱き、本来の『優等生』の姿を探求するようになる。

故に《劣等排斥一派》解散を企てるが、失敗。

習志野による200時間以上に及ぶ拷問の末に火炙りにされ…失脚。

全治半年の重症を負い、自宅にて静養。

完治後に戦争が終結し、戦後処理に明け暮れる日々後に…習志野に代わり、《劣等排斥一派》の解散を宣言した。

現在は、小山と芳野と行動を共にする。

習志野への復讐心は徐々に薄れつつあるが、《劣等排斥一派》関連

になると周りが見えなくなる。

未だに《絶対悪》と名乗っているのは、贖罪を忘れない為。

総合科目は2450、2750点…全科目200点オーバーでAクラス候補生並。

芳野よしの
智里ちさと

身長 149cm

外見 ボブ・デジタルパーマの黒髪、赤縁の眼鏡を掛ける、地味系美少女。

性格 物静か、頑張り屋、世話焼き

趣味 古都巡り

特技 書道3段

好き 積極的な人、温厚な人

嫌い 落ち着きの無い人

・概要

元《劣等排斥一派》No.7。

中学時代は《演出家》と呼ばれた。

『小説』に愛着を持ち、現実世界に投入せんとする《妄想家》と批判されるようだ。

演劇部の脚本を担当しており、他の部員達から頼りにされている。

友人の殆どが、元《一派》所属 or 元《金銀同盟》所属。

特に恭二に対しては、特別な想いを抱いており、尊敬に近い憧れを持つ。

明久と水瀬とも面識があり、秘密裏に交流を重ねている模様。

・成績

現代国語と古典は350点オーバー。

英語と地歴公民は250点前後。

保体、家庭科、美術音楽は150点前後。

数学と理科は大の苦手で…70点以下と悪戦苦闘している。

総合科目は2200～2400点

・召喚獣

自然系ロギアの能力を有する。

《炎》を操り…火炎弾を飛ばす、炎剣を形成する、炎壁を張る…事が出来るが、攻撃に特化している為、防御は皆無に近い。

また、自然系持ちの召喚獣の操作は非常に困難であり、長期間の鍛練が必要。

第18話 〈AクラスVSFクラス〉 開幕（前書き）

今回はバカテストは休みです。

第18話 〈AクラスVS Fクラス〉 開幕

視点：啓吾

5F・多目的広場

『Aクラスの生徒』と『Fクラスの生徒』の一騎討ち。
学年クラスを問わずに、多くの生徒が駆け付けていた。
果たして…俺達は勝てるのだろうか。

立会教師の鉄人が坂本と霧島に確認する。

「……双方、準備は出来ているか。」

坂本は敬語を使わずに、

「ああ。勿論だ。」

霧島は落ち着いた様子で、

「……はい、大丈夫です。」

観客席に座っていた生徒達が騒がしい。

俺が今居るのは、出場者専用の座席だ。

「啓ちゃん…昨日は御免なさい。」

明久が気まずそうに隣の席に座る。

「もういい。悪いのは俺だ…何故謝る？」

「えっ？」

「殴った事、感謝してるんだよ。あのままいけば…習志野と同じ様になっていた。」

俺は明久の手を握り、有難うと礼をする。

「啓ちゃん…。」

「根本には後で謝らないとな。さてと、開戦まで間も無くだ。」

「僕達…何処までやれるかなあ…。」

「自信を持ってよ。DクラスとBクラスに勝利しているんだからな。」

「どうしたバカ久？恐いのか。」

須川が後ろの席から明久の頬をつねる。

「いたた…。」

「まあ、俺も怖い。俺達のような落ちこぼれが…此処まで辿り着いただけでも奇跡だからな。」

土屋がスタッと降り立つ。

「……………習志野・久保・木下姉は絶対に出場する筈。」

島田が後ろから身体を乗り出す。

「豪華なメンバーね…学年主席、次席、三位つて…本当にウチ達、勝てるの？」

姫路も不安げそうに、

「明久君…。」

「アキ…。」

明久を見つめる。

「二人とも、心配しないで。雄二が何とかしてくれるさ！」

「……………自分達を信じるしかない。」

俺はDクラスの観客席をふと見上げた。

.....

視点：源二

「あの豚共、あんなに御姉様の近くに！」

「落ち着いて、美春ちゃん。」

美紀は齒軋りする清水さんを宥める。

仲沢さんはワクワクしているらしく、

「雄二さん達！わてがしつかり、応援したるから〜〜がんばって
えやあ！」

文月学園の紋章が印刷された大旗を懸命に振り回している。

先の試召戦争で敗北を喫した俺は…Bクラスをも破ったFクラスが
心配で心配で堪らなかった。

塚本が俺に話し掛ける。

「代表。坂本達…心配ですね。」

「そつだな…昨日の事もあるからね。」

「小山の容態は？」

「小山さんなら…観客席に居る。」

「ええ！？重傷を負ってるんじゃない？！」

「本当は安静にしてなくちゃいけないんだけど…聞かなくてね。保
健室を抜け出して来たみたいだ。」

俺はBクラスの観客席に座っている小山さんを見た。

- - - - -

視点：恭二

俺は友香を支えている。

友香は座席の手摺を掴みながら、必死に前方を見ている。

「恭二…私は大丈夫…離しても、良い。」

「阿呆！無理するな。」

「い、いいか…ら！」

友香は脂汗を垂らし、座席に腰を掛けた。

芳野が友香の額に濡れタオルを乗せる。

「友香さん、傷が痛くなったら、言って…保健室に連れていくから。」

「だ、めよ。私は見…届けるの！ほら、大丈夫大丈夫。」

友香は平静を装っているが、脇腹を強く抑えている。

脂汗を垂らし、呼吸は荒い。

「根本、此処は儂等に任せい。御前は、坂本達に助太刀せねばならんからな。」

笹倉が俺の背中を押す。

「笹倉…有難う。」

「感謝するのは速いで。《劣等排斥一派》に終止符を打ってからにせい！」

「ああ…行く。必ず帰る。」

岩下と菊入は…俺に、

「女装癖だつて知った上に、習志野さんに敗北したら…小山さんが悲しむわよ！」

「そうよ。女装、卑怯、変態の三重苦を背負ってるんだから、頑張らないと…男が廃る！」

湯を入れてくれた。

……………。

俺は坂本達の下へ足を運ぶ。

- - - - -

視点：桃花

Aクラス出場者専用座席

「貴女の思惑通りになってきたわね。」

「ええ。Fクラスのバツカなゴミ共が小細工をしないように、『公開処刑場』を用意した甲斐があったわ。」

「ふあ…眠。早く終わらせてよね。」

優子は欠伸をする。

私は膝を組んで座り、優子に顔を向ける。

「随分とノリが悪いわね。気に食わないって感じで気分が害されるわ。」

「小娘一人の邪気、目障りに感じるとは小さい。」

「ひつどいもんだね。」

優子は如何にも高級の珈琲を飲み干す。

「一騎討ちの順番は？」

私は優子にカンペを渡す。

「！」

優子は驚きを隠せず、私に問う。

「桃花：あんだ。」

「私が最初に出るわ。勿論：勝つけど？」

「姫路さんが来たらどうするの？」

「それは無いね。」

即否定。

「姫路さんは『Fクラス最強のカード』。確実に勝てる場面以外の起用は迂闊すぎるでしょう？」

「確かにね。」

トットツ…スタツ。

「……………習志野、優子、大丈夫？」

Aクラス代表『霧島 翔子』が尋ねる。

「準備万端。最終戦まで持ち込まれないよう、精一杯頑張るわあ」

「代表の手を煩わせる迄も無いです。」

「……………頑張つてね、みんな。」

久保は眼鏡を掛け直し、残りの三人も礼をする。

私は席を立ち、今か今かと待つ！

……………

視点：啓吾

「では、両名共準備は良いですか？」

Aクラス担任かつ学年主任の高橋女史が再度確認を取る。

「ああ…勝つぞ。」

「良いよ。出鼻挫いてやるっ」

周りの観客達の興奮が最高潮に達する！

習志野は俺に侮蔑の笑みを見せる。

「しっかしねえ…まつつんが相手とは、私も高く見られたもんだね。謝礼として、科目選択権…譲ってやるよっ」

「大した自信だな、学年4位。だが、油断するなら…勝ち目はあるらしい。」

「召喚獣の操作に慣れたとしても…『Aクラス所属』かつ『トップ5』に位置する《超越者》であるこの私に勝てると安易に考えるべきだねー」

後ろを振り返ると、明久達と目が合う。

俺は頷き…

「Fクラス松下啓吾…Aクラス習志野桃花に『日本史』勝負を挑むっ！」

…

視点：雄二

「習志野はオールラウンダー。苦手科目は一切ねえ。」

「だから、啓ちゃんを投入したんだよね…勝てるかも。」

俺は首を横に振る。

「いや、勝ち目は0に等しい。習志野は全科目300オーバーだが

らな。」

「400点を超えてないだけマシだね…啓ちゃん…。」

明久が不満ありげに呟く。

松下は精神統一の為、黙り込んでいる。

習志野は俺を見て、

「坂本！失策したねえ…捨てれば良かったってのにさ！」

「おいおい、もう勝ったつもりか？」

「負け惜しみを！Aクラスが勝ったら、アンタを十字架に磔にしてやるう」

悪趣味な野郎だ。

「松下…奴に足掻いてみせろ。」

「啓ちゃん！頑張れっ！」

「習志野を吊し上げるんだ！」

明久と須川の声援を受けた松下は、開眼し…声を張り上げる！

-
-
-
-

視点：啓吾

「高橋先生。お願いします。」

「はい。これより、『第一回戦』を始めますっ！」

召喚フィールドが形成される。

「習志野…科目選択権について、感謝はしない…後悔しろ！」

「来なよ！『武器商人』！！！」

互いが互いを見据え、

「『^{サモン}試獣召喚！』」

<日本史>

Aクラス 習志野 桃花 351点

VS

Fクラス 松下 啓吾 326点

木下姉は意表を突かれたらしく、

「Fクラスの間際で、300点超！？」

Aクラスの生徒達は慌てふためく。

反面、Fクラスの生徒達は歓喜する！

「僅か25点差…いけるぞ！」

「啓吾は凄いのう。」

「ウチ…驚いて、声も出ないわ…」

「……………大した奴だ。」

「す、凄いです…。」

明久も流石と言わんばかりに、

「啓ちゃん…やっぱり、凄い！」

根本も笑みを溢している。

「松下…見せてやれ。俺と互角に闘ったその実力を。」

俺は召喚獣に構えさせる。

習志野は嫌な笑みを消し去った。

「どうやら…侮蔑するべき対象では無いね。」

「怖じ気づいたか？」

「まさか。どっからでも架かって来なよ…十字架に磔にしてやるか

らぞあ」

習志野の召喚獣…近接武器で無いらしい。

ならば、近接戦闘に持ち込めば良い！

習志野の召喚獣がバズーカを打ち出す。

「ああ、火力が足りない。英語なら指輪使えるってのにさあ。」

だが…それでも、直撃すれば、致命傷になる。

確実に避け、接近！

「…ッ」

習志野の召喚獣に蹴りを入れ、続けて拳を叩き込もうとするが…。

ビリッ！

「！」

俺の召喚獣がスタンした！？

習志野はニヤニヤする。

俺は直ぐに察知する。

「電気鞭かつ！」

「近接武器に詳しいようね。正解」

2つ武器を持っているのは俺だけでは無かったか！

根本は鎖鎌の長さを変え、鞭のように操っていたが…習志野は長さは変えられないが、高圧電流を帯びているらしい！

「さあ！踊りなウスノロ！対策を編み出す前に仕留めてア・ゲ・ル

日本刀やナイフは電気を通す…ガードしたら、感電してしまう…

俺は距離を空け、ナイフを乱れ撃つ！

牽制して、動きを止める。

習志野の召喚獣が迎撃の為、足が止まる！

電気鞭を巧みに操り、全弾はじいたか…。

だが…習志野の注意はナイフに向いた！

日本刀を習志野目掛けて飛ばす！

電気鞭の防御は間に合わない！

「小癩なあ！」

バズーカ砲の前にかざし、日本刀の一撃を受けさせる！

…隙が出来た！

全速力で間合いを詰める！

銃口が向けられる直前に、残しておいたナイフでバズーカ砲を弾き落とす！！！！

「…ッ！」

習志野の召喚獣が俺の召喚獣を蹴り飛ばし、後方へ下がる。

空かさず、日本刀を拾い上げ、着地！

「コイツ…バズーカ砲の対策を！」

「Cクラスの教室まで行つて、小山と一騎討ちをした報いだ…手の内は全部、読ませて貰った！」

「Cクラスの監視カメラ？土屋の仕掛けた盗撮用カメラは探知機で取り除いた…って事は、『学園が仕掛けた防犯用カメラ』に『ハッキング』しゃがったんだね！」

「賢いな…流石は『軍師』だ。《劣等排斥一派》現『NO.1』と
いうだけはある。」

習志野はニヤツと嫌な笑みを浮かべた。

「《武器職人》は面白いねえ。ブラックリストに載せておくよ。」

「いくぞ！」

ダッ！

俺は日本刀を手前に押し出す！

「リーチじゃあ、鞭が勝ってるよ」

電気鞭が日本刀に絡まんと近付く。

故に、足下がお留守になる！

俺は足でバズーカ砲を蹴り上げ、

「！」

習志野の反応が僅かに遅れるのを見計らってから、電気鞭にバズーカ砲を接触させた。

習志野の顔が青醒める。

次には、火薬に火花が引火し大爆発を引き起こした。

教室を揺らす程の爆音に、耳を塞ぐ。

爆風で巻き上げられた煙が晴れる頃には…双方の召喚獣は消し炭と化していた。

<日本史>

Aクラス 習志野 桃花 0点

VS

Fクラス 松下 啓吾 0点

「互いに点数が0点になりましたので、勝者無し…引き分けとしま
す！」

高橋女史は淡々と述べた。

習志野は結果に不本意そうであつたが、欠伸をすると俺に握手を求
めた。

「引き分け。自身を犠牲にするとはねえ…考えが及ばなかつたよ。」

「日本刀じゃあ、鞭に対して…何も出来ないからな…打つ手がアレ
しか無かつた。」

「ところで…宮野は何処かしら？」

「奴なら保健室で寝てるよ。睡眠薬の入つた御茶を飲んでな。」

「あつそ…次は完膚なきまでに叩きのめしてやるから、覚悟してね
っ」

「その言葉、そのまま返す。いずれ…《劣等排斥一派》に引導を渡
す…!!」

…

俺は…皆の所へ帰還した。

「皆…済まない、勝てなかった。」

「何言ってるのさ。あの習志野さんを相手に引き分けたんだ！」

明久は俺の手を強く握った。

坂本達は、俺を暖かく迎えてくれる。

「負け戦を見事イーブンに持ち込んだか…最高じゃねえか。」

「本当じゃ。よく頑張ったの。」

「……………（コケッ）」

根本は無言で習志野の居る方を見ていた。

- - - - -

視点：優子

高橋先生は平静を保ってるけど、内心ではかなり焦っているように見える。

桃花は無様に引き分けたけど…仕方無いわね。

松下君の点数の高さは称賛に価するもの。

高橋先生はコホンと咳き込んでから、

「《第二回戦》を始めます。両者前へ。」

私は無言で腕を組み、佇む。

「ワシがやろう。」

相手は…秀吉か。

廻りの観客が騒がしい。

『姉妹対決か；』

『この試合…混沌になるな。』

『秀吉！結婚してくれー！』

……。

「秀吉…聞きたい事があるんだけど。」

「なんじゃ？姉上。」

「Cクラスの小山さんって知ってる」

「はて誰じゃ？」

惚けても無駄…観客席にいるじゃない；

「ふうん。じゃあさ、こっちに来てよ。」

「うん？」

ガシイッ！

「姉上…どうしてワシの腕を掴む？」

「アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしている事になっているのかなあ？」

秀吉は自信満々に答える。

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して…

…あ、姉上？」

「ふう…全く、困った愚弟ね。『演劇』なんて遊戯に現を抜かさずに、真面目に勉強していれば…成績は上がるし、こんなバカな真似をする事も無かつたろうに。『演劇』なんてくだらないことばかりしているから…文月学園の恥晒しよ！」

「な、ん…じゃ！とお！！！」

ゾクッ！

談笑していた観客は、皆黙り込む。

「姉上。演劇を下らない遊戯と言いおつたな。」

「ええ、言ったけど。何？」

「ワシは幾度と謝ろう…：Cクラスのことと姉上の顔に泥を塗ったのじゃからな。しかし、『演劇』の事まで侮辱するとは、赦さぬっ！」

「学業を疎かにする塵が言える事？今赦さないって言ったけど…：どうするつもり？」

「謝れ…『演劇』を愛し、夢を持つ者全てに！」

「は？何で？考え様は人それぞれ。否定される筋合いは無いよ。」

「勉強だけして、夢すら持たぬ姉上に…：夢に向かって努力する人を貶す理由こそ無かるうが…！！！」

「だから…：どうしたの。そんなに嫌なら…：勝って見せなさい。」

「無論、勝つ！姉上には土下座をしても、泣いてでも、『誠意をもって』謝罪して貰うのじゃあ…！！！」

「フンッ…：土下座でも何でもしてやるうじゃない。」

高橋先生が私に尋ねる。

「木下さん。き、教科は何にしますか？」

「科目選択権の1つや2つ、譲って上げる…：選びなさい。」

「『美術・音楽』じゃ…」

「確か…アンタが特に秀でている科目ね…良いわ、何点であること叩き潰す！」

観客が静まり返る中、

「「^{サモン}試獣召喚！！！！」」

<美術・音楽>

Aクラス 木下 優子 378点

VS

Fクラス 木下 秀吉 402点

再度歓声に包まれる。

『すげえ…流石は演劇部主将だ！』

『だが、木下姉もかなりの点数だ！』

- - -

視点：秀吉

「姉上…絶対に謝罪してもらおうぞい！」

「アンタに負けたら何でもするわよ。」

「ほざいておれ！」

「その言葉、そのまま返すわ。」

ワシの召喚獣は袴を着て、薙刀を装備した軽装。

姉上の召喚獣は西洋の鎧を纏い、大きなランスを装備しておる。

得点は…僅か24点差。

《音楽・美術》は屈指の得意科目じゃが…流石は姉上。

じゃが、負ける気は起きぬ！

ダッ！

「先手必勝！」

試合開始の合図と共に姉上の召喚獣が迫り来る。

「ハアアア！」

指輪を光らせ、

「《俊足》！！！！」

「速い！厄介な腕輪ね！」

ランスの突きに直角にかわし、

「ハッ！」

胴体を撫で斬りにせんと、薙刀の刃を首筋に廻す…

ゴッ！

「なっ！」

「迂闊ね…愚弟！」

姉上はワシの斬撃の直前に、蹴りを入れたようじゃの。

ランスの突進速度を乗せた一撃は軽いものではない。

ワシは距離を取り、薙刀をブンブン廻す。

「上昇！」

風圧で高く跳び、真上を取る！

「上からの攻撃！？小賢しい真似を！」

二撃目を繰り出さんとした姉上は、滞空防御にパンプレストを上
突き出す！

ガッ…！

姉上の召喚獣を全体重で踏みつける！

与ダメは少ないが、一矢は報いたぞい。

「私を踏み台にして…Fクラスの癖に！」

姉上の猛攻が始まる。

-
-
-
-

視点：啓吾

「防戦一方だな。」

坂本は気難しい表情で見る。

秀吉は木下姉の猛攻に、隙を見出だせないでいる。

「木下姉の優勢だな。」

「松下、近接武器の専門家なら…ランスについて知ってるだろ？弱点は無いのか？」

「一応ある。『乱戦に弱い』という、致命的な弱点がな。」

「…ッ」

「木下姉のランスは4〜5m。2m弱しかない秀吉の薙刀では…リ
ーチに差が在りすぎる。」

「つまりタイムンじゃ、圧倒的に強いって訳だな。」

「ああ。ランスは本来、乗馬して使うんだ。馬のスピードに力を乗
せるだけで、分厚い装甲でも破壊できる。」

「馬に乗っていない場合は？」

「軽装の秀吉を八つ裂きにするくらい、朝飯前だ。木下姉のランス
は、ある程度の白兵戦を想定していると見える。」

「そうか…点差が顕著になってきたか。」

点数の表記を見る。

<美術・音楽>

木下 秀吉 164点

VS

木下 優子 213点

Fクラスの観客席が諦めのムードに包まれていく。

「木下弟はランスの一撃こそ回避している。だが…回避した際に、
拳や蹴りを入れられている。」

俺は唇を噛み締めるが、固唾を飲んで見守るしかない。

- - -

視点：恭二

俺は習志野を見ながら、吉井に問う。

「吉井。木下姉の操作技術：どう見る？」

「上手いと思う。かなり練習しなきゃ、あの域には到達出来ない。」

「そうか。」

「でも…どうやって、練習したんだろ？」

「Aクラスの連中が召喚獣を使ったのは、Cクラス戦の一度きり。」

なのに…習志野、木下姉の操作技術は…経験豊富なFクラスの生徒と互角以上。

俺達が試召戦争をやっている間に召喚獣の操作の特訓をしていた？

いや、それは不可能だ。

『試召戦争・各種イベント』以外での『召喚システムの使用』は『教師陣』と『観察処分者』にしか許可されていない。

この規則は、『Aクラスの生徒』にも例外なく適用される。

ならば…やはり、Cクラス戦…ものの数時間で高い操作技術を会得してみせたのか；

……。

俺は悔しさに拳を握り締めた。

『才能』とは、『天才』とは。

何時の時代も《半端者》に闇夜を歩かせるのだと。

- - -

視点：秀吉

「な、何故じゃ…ワシは、夢を否定する不埒な輩にさえ勝てぬのか！？」

姉上は侮蔑の冷笑を浮かべる。

「夢を叶える奴は、一握りの『優等生』だけなの。『劣等生』が必死に努力しようが…結果は見えているわ。」

「グッ…ま、まだじゃ！」

<美術・音楽>

木下 秀吉 87点

VS

木下 優子 143点

姉上は腕を組む。

「はあ……いい加減諦めなさいよ。」

「まだ勝負は着いておらぬじゃろ！」

「五月蠅い。負け犬の遠吠えなんか、聞きたくもないの。」

ワシは姉上に再度仕掛ける。

「遅い！」

薙刀を振り回す前に、ランスに視界を遮られ……また蹴られる。

「……………」

ワシの召喚獣は距離を置いて、膝をつく。

悔しいのう。

姉上の方が、『歌と演技』以外では、ワシを遥かに凌駕しておる。

……………。

『こんな所』で終わるのじゃろうか？

幼少の頃から、『演劇』に夢を持ち続けてきたと言つのに。

挫折し、諦念しなければならぬのか？

.....。

「姉上。何故ワシの夢を否定するのじゃ」

「叶う筈が無いからよ。」

「それは違う！人は夢を持つから、一生懸命に頑張っていていけるのじや！それを否定する権利は、誰も持ち合わせてはおらぬ！」

姉上は溜め息を着き、ランスをワシの首筋に突き立てる。

「貴方は何時もそうやって、『物語』を誇大化し、『三文芝居』を用いて、感動的に演出しようとする。もう止めなさい。」

ランスが降り下ろされる刹那！

ガッ……！

ギリギリ反応し、回転してかわす！

「チッ！まだ、動けるだけの体力がつ！」

ワシは薙刀を拾い、姉上の間合いから脱出する！

<美術・音楽>

Fクラス：木下 秀吉 68点
VS

Aクラス：木下 優子 131点

態勢を立て直し、姉上を睨み付ける。

「何よ…Fクラスの癖に。」

「姉上。ワシは、ワシ達は、絶対に負けられぬ理由があるのじゃ！」

「成績最下層の分際で…！」

姉上は完全にFクラスを見下しておる。

Aクラスの人たちは成績も良いし、それに見合うだけの努力もしてきたのじゃろう。

じゃが…だからと言って、劣等生の夢や希望を否定して良い筈がなかろう！

「楯突くんじゃない！」

姉上の召喚獣が突進！

「雑魚は消えなさいっ！」

全速力で全体重を乗せただけの一撃。

「ワシには通用せぬ！」

ガッ！

「はあああつ！」

ランスを左の刃で受け流し、勢いを殺す。

「愚弟！武器はランスだけじゃないの！」

姉上はバンプレストを前に押す。

「右側の刃で胴体を通つ二つにしようっていう算段だったみたいだけど、お見通しよ！」

「見通したのはワシじゃよ！」

ゴッ！

「な、なにっ！？」

姉上の召喚獣の足下へ、カ一杯に蹴りを叩き込む！

<美術・音楽>

Fクラス：木下 秀吉 57点

VS

Aクラス：木下 優子 81点

-
-
-
-

視点：優子

まさか：秀吉が此程迄に意地を張るなんて：そして、此程迄に追い込まれるなんて。

点数差は24点：試合開始時の点数から見れば：互角である。

これで結果は分からなくなった。

私は深呼吸し、ランスを構える。

「……………」

秀吉は鋭い目付きで：薙刀を槍のように握った。

「秀吉。『演劇』なんかの為に、全てを捧げ、尽くして：ホントにバカな奴。」

「何が言いたいのじゃ。」

誉め言葉なんて言わない。

特に『勉学』が疎かな『バカ』にはね。

「一生『演劇』だけやって『理想の追求』とやらに尽力して：成功でも失敗でも、好きにきなさい。」

「姉上。」

「試合を続けましょう…私に謝罪をさせたければ…勝つことね。」

「言われる迄も無い！」

秀吉の召喚獣の腕輪が先程以上に強く輝いて行く。

成る程：手始めの《俊足》は演技だったのね。

教室の照明に指輪を反射させ、光っているように見せたんだ。

「《剣劇演舞》は《完全演技》にて活かされる技巧…行くぞい！」

秀吉の髪止めが外れ、髪がバサツと落ち、

最後の罅ぜり合いが始まり…。

グシューウウウ！

秀吉の召喚獣の左胸をランスが決る。

ギシャアアア！

薙刀が私の召喚獣の眉間に直撃した。

<美術・音楽>

Fクラス：木下 秀吉 0点

VS

Aクラス：木下 優子 0点

秀吉の召喚獣は死んでも尚、立ち続け…後に消滅した。

高橋先生は淡々と結果を述べた。

「第2回戦、両者0点により、勝者無し！引き分けとします！」

第18話 《AクラスVSFクラス》 開幕（後書き）

無理に纏めようとしたので、すっごく長くなってしまった；

オリ展開の挿入の難しさ…試行錯誤の末に漸く投稿にありつける。

次回もg d g dな展開が続きます。

無愛想ながら、引き続きAクラス戦をお楽しみくださいm（――）

m

第19話 明久奮闘！学年次席VS女神（前書き）

問・バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい。

姫路瑞希、習志野桃花の答え

『エトニア ラトビア エストニア』

・教師のコメント
その通りです。

松下啓吾の答え

《バスタードソード》

両手、片手持ちの両用の剣。

《ルーン》

決して狙いを外すことのない毒槍。
血に餓えており、毒液の大釜につけておかないと柄が燃え上がって
しまう。

《トマホーク》

刃先が反っている小型の斧。
狩猟のほかにも、日常の中で幅広く利用されている。
手で持って使用するほか、投擲も有効。

・教師のコメント
バ、ル、トで始まる武器ではありません。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

・教師のコメント

土屋君にとつての国の定義が気になります。

吉井明久の答え

『高知 愛媛 徳島 香川』

・教師のコメント

正解不正解の前に数があつていないことに違和感を覚えましょう。

第19話 明久奮闘！学年次席VS女神

視点：秀吉

引き分け。

「あと…ちょっとじゃったのに…ウ…アアア…。」

ワシはその場に寝転び、悔しさに手を握りしめ…涙を流す。

姉上がワシの傍に座り、手を掴む。

「秀吉、良い勝負だったわ。よく頑張ったわね。」

「じゃが…結局勝てなかった。『夢』に対する『甘さ』と『軽率さ』が、ワシを敗北させたのじゃ…。」

ワシは最後の死合、奇跡を信じ、勝てると思っておった。

『勉強』を疎かにしてきた者などに、奇跡など舞い降りる筈が無い。

ワシが顔を上げられぬ…そんな中、姉上は静かに、優しく言い放つ。

「何言ってるの？《美術・音楽》も『勉強』の一つよ。努力を重ねるに重ねて、この境地に辿り着いたアンタを、誰も侮蔑出来やしないわ。」

「姉上。」

「秀吉、ごめんなさい！アンタの夢を否定し、侮蔑を繰り返したこと…許して。」

姉上はワシにそう言つと土下座をした。

ワシは姉上を強く抱き締めた。

「謝らなくても良い。悪いのはワシの方じゃ…『演劇の才能』さえあれば『勉強』など必要ない…そう愚直に考えていたのだからのう。」

「秀吉…夢を知らぬアタシが、夢に向かって一生懸命に頑張っているアンタを馬鹿にして…こんな愚姉で、本当にごめん…。」

姉上はワシの顔を見上げ、立ち上がる。

「次は勝つ。今度は…御互いを認めた上で…正々堂々と勝負をしましょう。」

姉上はワシの眼前に手を差し出す。

「ワシは…更に精進し、『勉強』に励ませてもらう。次は勝つからの！」

ワシと姉上は力強く握手をした。

「あ、姉上…痛いじゃ…」

「愚弟…小山さんに、しっかり謝っておくよ。」

「う…うむ…」

ワシは拍手喝采の中、Fクラスの陣営へ帰還する。

視点：啓吾

2試合目を終えて、現在0勝0敗2分。

高橋先生は感情を起伏させることなく、

「第3回戦を始めます。両者、前へ。」

坂本は明久の肩を叩く。

「頼むぞ、明久。ここが正念場だ。」

「え！？僕！？」

島田と須川が反論する。

「坂本…アキで大丈夫なの？」

「試合を捨てるようなもんだぞ…」

坂本は席を立つ。

「大丈夫だ。バカ久は《観察処分者》であるが故に高い《召喚獣の操作技術》を有しているからな。」

俺は明久の背中を押す。

「明久、頑張つてこい。」

「あ、明久君。頑張ってくださいねっ」

「……………頑張れ。」

明久は俺達の声援に、得意気な顔をして、

「ふう…やれやれ、僕が本気を出す時が来たようだね。」

「そうだバカ久！今まで隠してきたお前の本気を見せてやれっ！！」

観客達が騒然とする！

「吉井つて、あのかスだろ」

「《観察処分者》の屑が何言ってるんだ」

「Fクラスでも屈指のゴミに何ができる」

酷い言われようだが、確かにその通りだ。

だが、明久はBクラス戦で『常識という名の壁』を壊し、根本撃破の鍵に化けた。

だから…何か仕出かしてくれるかも…。

そんな淡い期待を抱いていると、

スタツ！

ボブカットのメガネっ子が降り立った。

「佐藤美穂…以後、お見知り置きを。」

明久は一礼し、彼女に立ち向かう。

佐藤は眼鏡を外し、ケースに仕舞った。

「高橋先生、科目は物理で御願ひします」

習志野と木下姉が『科目選択権』を放棄した為、最初で最後の『Aクラス側の科目選択』となる。

「はい、分かりました。承認します！」

佐藤は目を細め、

「サマシ試験召喚。」

《物理》

Aクラス：佐藤 美穂

397点

明久がニヤツと笑った。

佐藤は息を呑み、恐れ恐れに訊ねる。

「吉井君でしたか？あなた、まさか！」

佐藤は冷や汗を掻く。

「あれ、気付いた？ご名答。今までの僕は…ぜんぜん本気を出しちやいない。」

「それじゃ、あなたは…！」

「そうさ。君の想像通りだよ。今まで隠してたけど、実は僕……両利きなんだ！」

明久は両手でペン回しを披露し、そして、

「試験^{サモン}召喚！」

《物理》

Fクラス：吉井 明久 66点

おお…明久の奴、Fクラスの間レベルにまで点数を上げたようだ！

「明久：少しはマシな点数を取ったようじゃねえか。」

「学年最下位を脱したかもしれないな。」

その時、佐藤は静かに口を開く。

- - -

視点：明久

「私も嘗められたものですね。そのなけなしの点数で、私に挑むとなどと…無謀にも程がありますよ。」

佐藤さんの言う通りだ；

点数差は300点以上…だけど。

「僕だって、負けるわけにはいかない！僕を信じてくれる仲間の為に…全てを賭して、勝つ！」

「！」

僕は振り向かず、木刀を佐藤さんに向ける。

「僕は、昔も今も《金色の疾風》…疾風怒濤の如く駆け抜けるだけさ。」

佐藤さんは静かに、召喚獣の装備を持ち上げ…構えをとる。

「…そうですか。なら、私も本気で。」

佐藤さんはスポーツ用の眼鏡を掛け、《敢為邁往》と印字された腕章を掲げた。

四字熟語は詳しくないから、意味は解らないけど…何だか凄そうだ；

高橋先生は、手を挙げ、合図を送った！

「それでは…第3回戦、始め！」

佐藤さんの召喚獣が、鉄球を振り回しながら、突っ込んできた！

「！」

シュンツ！

紙一重でかわす…この点差では、擦るだけで致命傷になる。

僕は召喚フィールドの境界線を蹴って、真上に飛び上がる！

ビュンツ！

改造制服で佐藤さんの視界を遮り、木刀をバットの如く、叩き飛ばす！

「あなた…卓越した操作技術を会得しているようですね。」

「日頃から《召喚獣》で教師の雑用を任されてるからね。」

「おまけに《金色の疾風》時代に培われた超人的身体能力…狡いで

す、ね！」

佐藤さんは苦笑いをしつつ、再度、突撃に出る！

低く振られる鉄球を跳躍して躲す。

「同じ手には引っ掛かりません！」

拳を突き出してきた。

武器を使用せずに、肉弾戦だけで僕の召喚獣を撃破するつもりか……でも、甘い！

木刀で拳を上から抑え、地面に向かって一気に降ろす！

ガンツ！

「動きを読まれた……バランスがっ！」

その隙は逃がさない！

僕は佐藤さんの召喚獣の顎に木刀を引っ掛け、

「引っくり返れ……！！！」

グルンツ……ズガアアア！

頭から激突させる！

「……ッ！」

佐藤さんも負けじと、胴に廻し蹴りを繰り返して来た！

「ちいい！」

直撃は防いだけど、ダメージを受けてしまった。

《物理》

Fクラス：吉井 明久 47点

VS

Aクラス：佐藤 美穂 276点

フィードバックか：右肘が痛む。

《観察処分者》は学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分であり、教師の雑用として働く事を主に活動する。

本来、生徒の召喚獣は物理干渉は出来ないけど《観察処分者》は召喚獣を使って教師の雑用をこなす義務があるので、特例として物理干渉が可能になるんだ。

でも：召喚獣の使役の代償として、数割ほどの痛みや疲れが召喚者にフィードバックされるんだ；

今、佐藤さんの召喚獣の攻撃が僕の召喚獣の右肘を擦った：だから、右肘が痛い。

：長期戦は無理だな。

僕は覚悟を決め：抜刀術の構えを取った。

佐藤さんは鉄球を吊り上げる…迎撃体勢に入ったか。

次の一撃で、頭か心臓に木刀を貫き…仕留める！

-
-
-
-

視点：雄二

中々やるじゃねえか…明久。

まさか、400点間近を相手に善戦するとはな。

「アキ…凄い；」

「……………（コクッ）」

「明久君…。」

そんな中、根本だけは厳しい表情だ。

俺は根本に話し掛ける。

「根本。何か不安要素があるのか？」

「ああ…吉井の顔を見ても。汗だくで、息も荒い。」

俺は根本の指摘に面倒臭い顔をし、明久の様子を伺う。

「坂本…吉井は『召喚獣』とリンクしているんだったな。」

「ああ。明久は召喚獣の受けたダメージの数割を受ける…物理干渉能力の短所だ。」

この間にも、激戦は続く。

佐藤の召喚獣の点数が200を切った。

「勝てるかもしれぬぞ！」

「ここが踏ん張り時だ！気合い込めろ！」

秀吉と須川は身を乗り出して応援する。

「根本。何が言いたい？」

険しい顔で訊ねる。

「召喚獣の『痛み』が召喚者に伝わるって事は、召喚獣の『疲労』も召喚者に伝わっている…違うか？」

「その話…詳しく聞かせろよ。」

松下が後ろの座席から顔を出す。

「松下に坂本。召喚獣を操作する時、何を考えてる？」

「斬る、投げる、避ける、跳ぶ、弾く…ただだ。俺はその五種類の基本動作を組み合わせて戦っている。」

俺は松下と同じように闘っている…基本動作さえ踏まえてしまえば、応用など幾らでも利く。

「だが…吉井の召喚獣の動きは、機械じみた固い動作が一切無い。まるで、《金色の疾風》のように…」

成る程…確かに明久の召喚獣の動きは人間そのものだ。

明久の召喚獣は、右に左にステップをしながら…木刀を投げた！

「!?!」

佐藤は飛んできた木刀に反応出来ない。

スタツ！

ダンツ！ダンツ！ガンツ！

右ストレート、左アッパー、廻し蹴り。

余りに美しい三連撃。

「な、なぜ!?!」

明久はニツと微笑んだ。

「佐藤さん…動きが鈍くなってきたね！」

その様子を見ながら、根本は解説を続行。

「恐ろしい男だ；奴は…点数以前に、召喚獣の『基礎体力』も把握している。」

佐藤の召喚獣の動きが明らかに鈍い…点数の減り以上に、身体にガタが来ているか。

松下は汗を拭く。

「明久は見ただけで正確に判断しているのか；」

根本は拳をグッと握る。

「そして…豊富な戦闘経験。何処を攻撃すれば効率的にダメージを与え、どう回避すればダメージを軽減できるか…論理と直感の双方で理解してやがる。」

試合の主導権は完全に明久が握っていた。

-
-
-
-

視点：明久

幾度と攻撃は命中したけど…点数に差がありすぎる。

佐藤さんの点数は176点…対して僕は32点…やはり、頭か心臓を抉るしかない。

考えていると、佐藤さんが立ち上がった。

『佐藤！あの屑を仕留めるんだ！』

『負けたら許さないからな！』

『絶対に勝って下さい！』

『頑張れー眼鏡っ娘！』

『吉井っ！一気に決めちまえ！！』

『負けたらクロス！』

『殺せ！あいつをぶっ殺せ！』

『FFF団の希望になれ！』

AクラスとFクラスの声援が飛び交う。

「吉井明久…貴方だけは、倒します！」

佐藤さんが鉄球をぶん投げた！

咄嗟に躲し、受け流す！

鉄球に装着された鎖が掠ろうが構わない！

「たあああ！」

「させません！」

ガキイイイ！

甲冑に阻まれてしまう！

急所への攻撃は…流石に読んでくるか；

「頭と首と左胸を突かれなければ、どうと言うことは無いですよ！」

ヒュルツ！

鎖が弛むのが見える…鉄球を押し戻して、僕にぶつけるつもりか！

真横に躲す程の余裕は無い！

ゴギヤアアアア！

手加減を知らぬ鉄球が無慈悲に直撃した。

左肩甲骨が逝く程の痛々しい音が響く。

「ガツ…アアア…。」

声に出せない程の想像を絶する痛みに顔は歪み、唾液を吐き散らす。

「アキいいい！」

「明久君っ！！！」

美波と姫路さんの悲鳴が脳裏を過った。

そして。

グシュウウウツ！！！！

相手の首筋を貫くと同時に、僕の召喚獣の左半身が千切れ…消滅した。

佐藤さんの召喚獣も…後ろに倒れながら消え去った。

《物理》

Fクラス 吉井 明久 0点

VS

Aクラス 佐藤 美穂 0点

高橋先生は結果だけを素早く述べた。

「第3回戦…勝者不在の為、引き分けとします。」

僕はその場に横たわり、床を殴り付ける。

悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい！

右手を巻いていた包帯が深紅に染まる。

何度も何度も床を殴り付ける。

パシッ！

佐藤さんが僕の腕を取った。

「そんなになるまで頑張ったんですね。」

佐藤さんは眼鏡を外す。

「佐藤さん……。」

悔しさを胸に秘め……泣く。

僕は佐藤さんに支えてもらいながら、雄二達の居る席まで歩いた。

「済まないな、佐藤。」

雄二はシートに僕を寝かせた。

「優等生として当たり前前の事をしただけですから。では、私はこれで。」

佐藤さんは一礼すると、Aクラスの観客席へ向かって行った……。

視点：桃花

「済みません、習志野さん。」

「別に謝らなくてもいいわ。」

私は佐藤さんにお絞りを手渡した。

さて…Fクラスはどう来るかな？

坂本が声を張り上げる。

「姫路…頼む！」

「はいつ！」

ふうむ…彼女を此処で投入してきたか。

その時、誰かが私の肩を叩いた。

「姫路さんの相手は僕が引き受けよう。」

彼は《久保 利光》。

入学試験から《姫路 瑞希》と壮絶な次席争いを繰り広げてきた『
強者』だ。

常に煩悶し、人生の創造に励む。

それが摂理であり、彼を《努力家》へと導いた。

因みに彼とは中学の頃からの友人だ。

「利光：姫路に勝てる算段はあるの？理系教科で挑まれたら、瞬殺されちゃうよ？」

「心配は必要無いよ、桃花さん。彼女は必ず《総合科目》で僕に挑んでくれるぞ。」

「ふん。ま、頑張つてね。」

利光はフツと笑い、戦場へ向かった。

私は紅茶を啜る…すっかり温くなってしまった液体は、飲み込むのも一苦勞である。

-
-
-
-

視点：利光

「君と闘える日を待ちに望んでいた。」

姫路さんは、腰に刀を携帯し、白い鉢巻きを締めていた。

「私は…負けません。絶対に勝ちます！」

それは僕も同じだ。

Aクラスの皆、そして…愛する人の為に、勝利して見せる！

だが、内心では不安に思っていた。

僕と彼女の实力は…ほぼ互角っ！

過去から現在までの試験における総合科目の点数差は10〜20点程度。

御互いに4000点を超えている筈なので、優位に闘いを進められそうに無い。

万が一、姫路さんの实力が大幅に上がっていれば…負ける可能性が非常に高くなる。

「勝負する科目は何にしますか？」

高橋先生が姫路さんに声を掛けた。

「姫路さん。君の好きなようにするといいよ。」

「では、御言葉に甘えて…総合科目でお願いします！」

廻りの観客がワァァ！と歓声を上げた！

やはり…総合科目を選んできたようだね。

姫路さんは真剣な目で僕を見ている。

なら、それに応え…敬意を持って迎え撃つとしよう！

「それでは…第四回戦、始め！」

御互いに構え、

「「^{サモン}試験召喚！」」

《総合科目》

Aクラス 久保 利光 4398点

VS

Fクラス 姫路 瑞希 4509点

桃花さんでさえ呆気に取られていた。

「マ、マジか！」

「この点数、学年主席に匹敵するぞ…！」

僕は驚愕し、冷や汗を流す。

100点以上も差をつけられるとは…何が彼女を突き動かしたと言
うのか…

「いつの間に…これ程の実力を！」

互いの召喚獣が切り結ぶ中、

「私、決めたんです。頑張ろうって！」

鏢せり合い…だが、圧倒されている！

僕は素早く後退し、距離を取る。

姫路さんから、何かが見えたような；

恐怖は感じない…暖かい光？

「私は…Fクラスの皆さんの為に、頑張ると決意したんです。」

「何を、決めたんだい？」

僕は疑念を表情に露にした。

ギキイ！カンツ！カンツ！シュバアアア！

二丁の大鎌で大剣を受け止めていく。

ビシッ…ギッ…！

鎌に罅が生じ、深くなっていた；

「私は…Fクラスの皆さんの為に、一生懸命に尽くすと決めました！
す！」

クロスさせた大鎌の斬撃を受け流され、大剣に弾き飛ばされた！？

「私を必要とし、私が必要とされる…大好きな皆の為にっ！」

姫路さんの召喚獣の腕輪が光を灯し、熱線が放たれた！

「Fクラスが好き…？」

僕も腕輪を発動する。

黒龍を召喚し、受け止めさせる！

「努力を怠り、低次元にて妥協するような連中に…何を抱く！？」

熱線の放出と共に黒龍が消え去り、煙が舞い上がる。

それを大鎌で払い除けた先に、姫路さんの召喚獣が突撃を仕掛けてきた！

「優等生である君が、何故！？」

バキヤアツ！

片方の大鎌の刃が何処かへ飛んでいった。

「やあああ！」

「まだまだ！僕は…敗北などしない！」

もう一方の大鎌で防御せんと…

ゴキィ！

「!？」

大剣は、防御の為に突き出した大鎌を両断していたのだ。

僕は無言で破砕された大鎌を見る。

幸い、折れたのは柄だけだ…刃は罅が入ってはいるが、鈍器としてなら使え…無い。

手詰まりだ…武器を破壊された時の対策など考えもなかったのだから。

努力を怠り、学年次席の座に固執し妥協していたのは…僕だったらしい。

「……………」

黒龍を再度召喚し、その上に乗る。

「オオオオオーッ!!!!」

姫路さんの召喚獣目掛け、飛び出す!

龍爪と大剣が交差する。

刹那、僕は敗北を悟った。

黒龍が真っ二つに斬り裂かれ、召喚獣が消滅するのを見届けていたからだ。

-
-
-
-

「し、勝者… Fクラス、姫路瑞希！」

学年次席の敗北… それは、高橋先生を焦燥とさせるには十分であった。

僕は膝を付き、肩を落とす。

敗者の苦痛。

姫路さんは刀を握り締め、僕を見下ろす。

「私の勝ちです…。」

僕はその場に座り込み、俯いた。

「彼処に居る皆さんは、誰かの為を想って行動出来る良い人ばかりです。」

「姫路さん… 残念だけど、到底そうは思えない。」

僕が敗北したのは、『姫路 瑞希』であって、『Fクラスの生徒』ではない。

優等生の語る『劣等生』に納得出来ない。

彼女は続ける。

「確かに…久保君の思う通り、Fクラスの皆さんの成績は良くありませんし、色々問題も起こして来たと思います。他人に迷惑を掛けた事は紛れも無い事実です。」

それでも…と、彼女は毅然と述べる。

「勉強や成績よりも大切な物を持っているから…自身を犠牲にしても、他人の為に頑張ってくれたんです！」

僕は彼女の眼から、溢れる感情を垣間見ていた。

彼女は本気だ…本気だからこそ、Fクラスを好きだと言えるのだろう。

…これ以上の反論は、水掛になるだけだ。

反論すればするだけ、屁理屈を良い並べる泥沼の口論に発展し兼ねない。

それは文系の僕としては面白く無かった。

僕は身体を起こし、姫路さんを見る。

「Fクラスの為に一生懸命になれる清く強い心…僕は嫌いじゃないよ。」

僕は、姫路さんに軽く頭を下げ、

「何時か…Fクラスの面々と、真っ向勝負をする日が訪れるだろう。敗北すれば…意見を改める事にするよ。」

振り返り、本陣へと戻って行った。

-
-
-
-

視点：明久

「明久君」

僕は顔を火照らせていた。

近い…姫路さんとの距離が近すぎる。

「姫路さん、頑張ったね。」

ほんの数cm先に姫路さんの、僕が…尊敬している女の子の顔があるのだ。

ちょっと顔を動かせば…。

姫路さんと目が合った。

顔がポーツとして状況が分からない。

「明久君？熱でもあるんですか？」

「僕は大丈夫：ありがとう、姫路さん。」

姫路さんは笑顔で、はいっ、と返してくれた：僕には眩し過ぎる程に。

雄二が姫路の肩に手を起き、

「貴重な一勝だ：感謝する。」

「いえ、私は出来る事をしたまでです。」

姫路さんは謙遜し、頭を下げる。

僕は席を立ち、

「姫路さんが同じクラスで良かった。だって、一緒に居ると楽しいし。」

「あ、有難う御座いますっ。」

姫路さんは恥ずかしいのか、僕を横目で見ると、俯いてしまった。

第19話 明久奮闘！学年次席VS女神（後書き）

ユニークが3500人を突破しました。

最近、更新ペースが非常に遅くなっていますが…頑張っ
て、EXを
入れます！

引き続き、Aクラス戦をお楽しみください

第20話 闘いの果てに…決着を告げる金鐘（前書き）

今回はバカテストはお休みです。

ネタが浮かばない…。

第20話 闘いの果てに…決着を告げる金鐘

視点：啓吾

只今、1勝0負3分。

後半戦に突入した。

「……………行ってくる。」

「頑張つてね、ムツツリーニ！」

「……………（コクッ）」

アナウンスが響く。

『それでは、5人目の方…どうぞ。』

「……………（スック）」

土屋が立ち、戦場へ向かった。

「じゃ、ボクがいこうかな」

Aクラスからはボーイッシュな女子が出てきた。

島田の如く、ペッタ…イダダダダッ！

「ウチの胸が何ですって…?」

心眼…だと…？

関節が痛むのを堪えながら、フィールドを眺める。

「一年の終わりに転入してきた『工藤 愛子』です。よろしくね」

外見は美少年だな…男装が似合いそうだ。

『教科は何にしますか？』

「……………保健体育。」

《保健体育》は土屋の唯一の武器だ。

「ムツツリーニ君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだねえ？」

工藤が土屋に話しかける。

転校したばかりの為、互いに実力を知らないに見える。

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？…君と違って、実技で、
ね」

土屋が鼻から血を垂らし、ずっこけた。

ガタツ！

俺と須川は勢いよく席を立ち、

「是非、御教授を願いたい！」

「……………」

島田が俺達に呆れたような視線を向けていた。

そんな目で見るなよ。

男として、当たり前前…反応なんだから。

しかし、工藤は吉井に顔を向けていた。

「ねえ…吉井君？君は勉強苦手そうだし、勉強を教えてあげようか？もちろん実技で、ね」

「フツ。望むところー」

島田と姫路が明久の両腕を掴んでいた。

「アキには永遠に、そんな勉強なんか…必要にはならないわっ！」

「そうです！明久君には金輪際、必要ありません！」

「そうだ。FFF団所属の吉井が、女子と行為出来る筈がねえ！」

「……………」

坂本は苦笑いをし、額に手を当てる。

「姫路。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが…。」

哀れなり、明久。

この流れに、高橋先生は溜め息を吐き、

『早く召喚してください。』

二人に告げる。

「はい。召喚つと」

「……………試獣召喚。（フキフキ）」

ムツツリーニは鼻血をハンカチで拭く。

2人に似た召喚獣が、それぞれ武器を持って出現する。

土屋は忍者装束に小太刀の二刀流。

工藤は…巨大武器か！

「なんだ、あの巨大な斧は！？しかも…腕輪付きかつ！」

腕輪は土屋も装着している。

しかし、あんな軽装では…斧の一撃には耐えられない！

「実践派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ！」

工藤が艶っぽく笑いかけると同時に、腕輪を光らせながら召喚獣

が動いた。

巨大な斧に雷光をまわせ、目にも止まらぬスピードで康太の召喚獣に詰め寄る！

「土屋！一撃で仕留めなければ、迎撃で敗北するぞ！」

俺は手摺を叩き、叫ぶ。

すると、土屋が振り向き、フツと微笑む。

「……………問題ない。《加速》！！！」

康太の腕輪が輝き、召喚獣の姿がブレた。

残像が浮かび上がる程の速さだ…目視すら出来ない；

「は、速い…だけどっ！」

斧が勢いよく降り下ろされた。

雷光さえ掠れば、土屋の召喚獣はスタンし…隙を作ることが出来る。

しかし、そこに彼の召喚獣の姿は無い。

「……………筋は良い。だが、『経験』が少なすぎたな。《加速》終了。」

土屋の召喚獣の腕の装束がヒラリと落下。

一呼吸の後、工藤の召喚獣が身体中から血を吹き出し…倒れた。

《保健体育》

Aクラス 工藤 愛子 537点

V S

Fクラス 土屋 康太 658点

滅茶苦茶な点数だ…明久の総合科目に匹敵するに達しているのか；

振り分け試験の時は出来がイマイチだったらしいが…まさか、これ程とは！

「悔しいけど…ボクの負け…素直に認めるしかないね…。」

工藤が床に膝をつく。

相当ショックだったのだろう。

土屋が工藤に駆け寄る。

「……………良い勝負だった。名前は覚えておく。」

工藤は土屋の手をキュッと握る。

「次は負けないからね。」

「……………次に闘う時が楽しみだ。」

二人は別れ、土屋は戻ってきた、が…！

「…………カハアッ！（ドクドク）」

鼻血は垂れ、息が荒い。

実技と聞いて興奮するのを我慢していたというのか。

ブシュッ！！！！

「……………。（ガクッ）」

鼻血を噴出したムツツリーニは辛うじて意識を保っている。

制服が紅黒く染まっていく。

「平賀、玉野。土屋は熱があるから、保健室に連れていってくれ。」

平賀と玉野は、担架に土屋を乗せ…教室を出ていった。

根本は顔を引き攣り、苦笑いしている。

『勝者…Fクラス。』

高橋女史はAクラスが追い詰められたという現実には、目を背けたいように見えた。

直後、FFF団のメンバーが、高らかに叫ぶっ！

「ムツツリーニ…無茶しやがって。」

「告別式に成人向けの本を捧げてやるとしよう。」

「Aクラスの奴等…精神攻撃で、土屋を葬りやがって…許せねえ！」

「習志野…あの悪魔じみた狂人めっ！」

「購入予定の商品が届かなくなったら、どうしてくれるんだっ！」

秀吉の写真…先払いだったんだが、大丈夫なのだろうか；

まあ、いい。

これで『2勝0敗3分』。

次の試合に勝てば…Fクラスの勝利が確定するっ！！！！

視点：雄二

『第6試合を始めます。』

高橋女史は冷静さを欠き、汗を掻く。

追い詰められた事が、骨身に染みているのだろう。

「アタシが行きます！」

Aクラスからは…《北沢 佳奈》かつ！

奴は中学時代、《蒼龍》と呼ばれ…『学生戦争』を最後まで闘い抜いた強者だ。

蒼剣を腰に携え、自信満々に佇んでいる。

…誰をぶつけるべきだ？

島田は数学はAクラス中堅だが、日本語の読み書きを大の苦手としており、最近の良い結果を出せていない。

須川はFクラスで俺に次ぐ成績を有しているが、数学はAクラスにギリギリ手の届く程度だ。

「…島田、頼まれてくれるか？」

「うち？数学は日本語が読めなくても、解けるけど…Aクラスの上位には勝てないわよ…」

島田の数学は良くて250点前後。

召喚獣の操作に苦戦している事もあり、Aクラスの上位に勝つのは無理だな。

明久ぐらい、上手く操作が出来れば…話は別だが。

暫く考え込んでいると、須川が立った。

「Fクラスからは俺が出る。」

俺は須川の肩を掴む。

「勝ち目はあるのか？」

「無い。だが…FFF団の団長として、譲れない物がある。それに、」

須川は大鎌を突き立て、団長用の装束を身に付けた。

「俺は北沢の事をよく知っている。奴に関する知識は、俺が一番多く持っている。」

だから…俺に任せてくれないか？

……。

俺は無言で須川の背中を押す。

「悔いの無いようにな。頑張れよ！」

「ああ、任せてくれ！」

明久と姫路も応援する。

「須川君、FFF団の底力を見せよう！」

「頑張ってくださいねっ！」

須川は拳を上げ、北沢の待つフィールドへ駆けていった。

- - -

視点：亮

俺は佳奈と向かい合う。

「亮！久し振りに闘えて…嬉しいよ！」

佳奈は蒼剣を抜き、俺に突き立てる。

「お前なあ…召喚獣での勝負なんだから、そんな物騒な剣を振り回すんじゃない！」

「ふふっ！絶対に負つけないからね」

俺は身構え、

「先生！科目は数学で御願います！」

『数学ですね。承認します！』

佳奈は蒼剣を鞘に戻し、笑みを見せる！

「学生戦争以来の大勝負と行くよっ！」

「来い！」

勝つのは…Fクラスだ！

「『試^{サモン}獣召喚！』」

北沢の召喚獣は…サファイアを連想させるような、透き通った剣を有している。

《数学》

Aクラス 北沢 佳奈 439点

VS

Fクラス 須川 亮 214点

『ダブルスコア…やれるのか？』

『北沢さん！殺っちゃって下さい！』

点数では完敗か…だが、他の科目よりはマシに闘えそうだな。

「へえ！バカな亮にしては、良い点数じゃん！」

「悪いが、一矢は報わせてもらっぜ！」

「その口、直ぐに塞ぐ事になるよ！」

北沢の召喚獣の腕輪が光る。

「『蒼閃剣技』の神髄、見せて上げる！」

シュンッ！

俺の召喚獣の傍を、一筋の光が駆けた。

「な…『蒼閃』だと…」

「召喚獣は力が強いからね。慣れたら簡単に打ち出せるよ！」

「腕輪の能力か？」

「正解 私の腕輪の能力は『一閃』で、鎌鼬の様に射出が出来るんだ。」

「チツ…卓越した剣術に加えて、飛び道具持ちかよ。」

大鎌を担ぎ、此方も構えを見せる。

「相変わらず、超弩級の鎌だね。」

「総重量90kg…コイツを喰らって立って居られる化物はそうは居ない。召喚獣の武器に反映されたのが幸いだ。」

「だけど、機動性は私が上だ…よ！」

ヒュン！

瞬きする間も無く、眼前に現れる敵。

大鎌を頭上に翳して、受け止める。

「幾ら点数が上だとしても、そんな軽々しい蒼剣だけじゃ、鎌は砕けないぜ！」

「甘いね、亮！足払い！」

ギョルツ…ゴツ！

佳奈の召喚獣は無理矢理に体を捻り、俺の召喚獣の脚に蹴りを入れ込んだ！

「そんな小細工が通用するか！」

軽い攻撃を何度受けようが、戦死などしない！

俺は大鎌を引き、佳奈の召喚獣の胸へ蹴りを入れようとするが、

「あらよつと！」

佳奈がそう言うと、彼女の召喚獣は俺の足に手を駆け、バック転した。

その反動で、地面に倒れ込む俺の召喚獣。

「私の召喚獣は限り無く軽量化されていてね…機敏さには自信がある！」

「クソツ…防御が低い代わりに、機動性はずば抜けて高い！」

佳奈の動きを先読みし、確実に攻撃を当てるしかないって事かつ！

俺の考察を待ってってくれる訳も無く、佳奈の召喚獣が立ち上がり…蒼剣を持つ。

（右か左か、正面か？）

ダンッ！

スピードを増し、武器を構え突っ込ませる佳奈。

（しょうめ…違う、こいつは！？）

真上だ！

蒼剣が強く光り、視界を遮る。

俺は勘で大鎌を上に向けー

ドウッ！

胴体に衝撃を感じ、見ると…。

「拳だと！？」

刹那、蒼剣が真上から落下し音を立てる。

完全に出し抜かれた…。

態勢が崩れ…致命的な隙が出来てしまう。

「悪いけど、とつと決めさせて貰うから！」

佳奈の召喚獣は蒼剣を鞘に仕舞い、姿勢を下げる。

抜刀術か！？

「いくよ！《蒼龍の太刀》！！！」

蒼い閃光が視界を眩ませる。

（駄目だ…見えない！）

放たれる複数の《一閃》で、召喚獣の位置が把握できない；

胴体を蒼刀に貫かれた。

しかし。

「一矢は報いると言った筈だああ！」

胴を斬られる直前、鎌を降り下ろし、佳奈の召喚獣の左腕を斬り落とした。

《数学》

Aクラス 北沢 佳奈 178点

VS

Fクラス 須川 亮 0点

『勝者、Aクラス！』

「心配するな。FFF団で一番点数が高く、召喚獣の操作が上手い御前が負けたんだ。誰が出ようが北沢には勝てねえよ。」

「…悪いな。」

俺はリベンジを果たす為、勉強に励んでみようかと思うのだった。

現在、2勝1敗3分。

今は坂本を信じるしかない。

.....

視点：桃花

「北沢さん、お疲れ様。」

私はタオルを北沢さんに渡す。

「ありがとう。」

北沢さんが教室を出るのを見た私は、此処までの展開を思い返す。

全ては、私の手の中で踊っている。

坂本は予想通り、松下を私に挑ませた。

松下は厳密に言うと《優等生》であるし、学園の利潤に貢献している為、『模範的な生徒』の立ち位置に居る。

その男を相手に、不利な条件下で闘い、引き分け以上に持ち込めば…私の名に傷は付かない。

《Fクラスの成績不振者》が《学年4位》に叶う筈が無い…その先入観が、松下をぶつける要因になる。

次に…土屋と姫路の勝負を捨てる。

捨てる方は簡単

因縁の相手をぶつけるだけで、観客の心を掴み取れるのだから。

最後に…木下弟と吉井くん。

優子が勝手な真似をした時は、余りの怒りに、手が出そうになったわ…

幸い、引き分けになったから良かったけど…負けていたら…優子は二度と日の光を浴びることは無かったでしょうね。

佐藤さんは吉井くんを相手に、よく引き分けに持ち込んでくれたわ…後で褒美を取らせるとしましょう。

須川は雑魚だったし、勝ち確ね！。

そして…現在、1勝2敗3分。

最終戦で、霧島さんが《悪鬼羅刹》を撃破すれば、延長戦になる。

あと一息。

『第8戦』に持ち込めば…絶対に勝てる。

島田さんは数学だけはAクラス並だけれど…Fクラスが使える科目
選択権は4回。

本来は…木下弟・須川・土屋・坂本で使い切らせる予定だったけど
…ね。

……………。

絶対に引き分けでは終わらせない。

Fクラスの生徒を全員、奴隷にする。

勝敗が着かなければ、面白くないでしょう…坂本!!!

- - - - -

視点：啓吾

最終戦か。

2勝1敗3分…試合は大詰めに迎える。

『最終戦を始めます。両者、前へ!』

高橋生徒が最終戦を開始の宣言を出す。

「……はい。」

学年首席の座に君臨する《霧島 翔子》は表情一つ変えず、無表情で舞台に出た。

「当然、俺が相手だ。」

坂本は不敵に笑い、席を立つ。

二人が対峙し、観客の緊張が最高潮に達する。

「……雄二、貴方との対決を心待ちにしていた。」

「良い勝負にしようぜ、学年首席。」

「……本気でいく。それが夫に対する、妻の務めだから。」

え？今、爆弾発言が飛び出した気が；

坂本は青醒め、身体を震わせている。

「おい待て、翔子。俺は御前と付き合っただけ無いです。」

「私が勝ったら、雄二を嫁にする。」

婿と間違ってます。

「絶対に勝つぞおー！ツ！！！」

坂本の大声に、習志野は呆れ顔だ。

俺は思考を再稼働させ、状況を把握する。

霧島が男子からの告白を全て断っていたのは、雄二の事を思い続けていたからだっただんな…。

試合開始前に、彼女が姫路さんや島田を見ていたのは…坂本の周りにいた女子が気になっていただけか。

坂本め…殺したい程、妬ましいぞ。

明久と須川が、FFF団の面子にカッターを配布している。

「啓ちゃん。あの腐れ外道の雄二に、霧島さんが…。」

「もう死ぬしかないな、坂本。」

『『『異端者に鉄槌を！！！！』』』』

俺は手を叩き、制止する。

「落ち着け、皆。坂本が勝利すれば…霧島の縁談は無しになるぞ。」

「『絶対に勝てよ、坂本ツ!!!』」

負けたら、俺が直々に引導を渡してやる。

「そこ、静かにしてください！（怒）」

教師からの注意に、俺達は沈黙した。

「俺は御前の夫に絶対にならねえ；絶対に勝つ!!!」

「……私も負けない、手加減しない！」

「俺の人生、節操；死守する！」

坂本、冷静さの欠片も無いが、大丈夫か？

「それでは科目を指定してください。」

坂本は深呼吸し、霧島を指差す。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

雄二の条件に；観客達がざわめく。

習志野は腕組みを外し、舌打ちをする。

「上限有りだって!?!」

『しかも小学生レベル…満点確実だ。』

『注意力と集中力の勝負になる…』

高橋先生が鉄人に相談をしてから、眼鏡を掛け直し、

「分かりました。そうになると、問題を用意しなくてはいけませんね。少しばかり、このまま待っていてください。」

高橋先生と鉄人が教室を出て行く。

正気を保ったFクラスの俺達は、坂本に近付く。

「雄二…絶対に勝つてよ！」

「ああ。」

「問題文はよく読むんだ。漢字を忘れた時は、平仮名で書けよ！」

「言われるまでもねえ。松下達には随分助けられた。感謝している。」

姫路さんと島田も駆け寄る。

「坂本君、落ち着いて下さいね。」

「頑張つてね、坂本。」

「ああ。必ず勝ってみせる。」

直後、高橋先生と鉄人が戻って来た。

『試験の準備が出来ました。参加者の霧島さんと坂本君は《視聴覚室》に向かってください。』

「……はい。」

「じゃ、行ってくる。」

勝てば、Fクラスの勝利が確定。

負ければ……いや、考える必要は無いか。

『皆さんはここでモニターを見ていて下さい』

高橋教諭が機械を操作し、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される。

『では、問題を配ります。制限時間は30分。満点は100点です。』

画面の向こうでは、日本史担当の先生が二人の机に問題用紙を裏返して置いていく。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

筆記用具を取り出す二人。

『……はい。』

『わかっているさ。』

流れる沈黙。

『では…始めっ!!!』

二人が問題用紙を表にする。

泣いても笑っても、これが最後だ。

坂本の秘策は『大化の改新の年号』。

この問題が出れば《完全記憶能力》を持つと言われている霧島に勝利出来るらしい。

俺は問題を見ていく。

問・次の（ ）に正しい年号を記入せよ。

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

来た…例の問題が；

「じゃあ、ウチらの卓袱台が……」

「うん！最下層に位置した僕たちの、歴史的な勝利だ！」

『『『うおおおおおお！！！！』』』

念願の問題が出て、Fクラスの生徒達は勝利の雄叫びを上げた。

だが…根本は、気難しい表情を浮かべ、俺に話し掛けてきた。

俺は耳を傾け、互いに小声で会話する。

「松下、水を差すようだが…。」

「坂本が敗北すると見ているのか。」

「ああ…残念ながら、坂本は勝てない。」

「…根拠は？」

根本は憶測だと強調し、答えた。

「奴は中学の頃、《悪鬼羅刹》と呼ばれるくらい荒れていた。『学

生戦争』にも参入して…勉強など一切していないだろうか？」

その一言だけで、十分だった。

坂本が神童と言われていたのは、本当に昔の事だ。

中学の頃の坂本は、酷いものだった。

授業は毎日サボり、他校へ殴り込みに行ったり、試験で俺の解答を丸写しにしたり…悪事に悪事を重ねていた。

中学時代、坂本が勉強をしているのを、俺は見た事が無い。

成績は常に最下層…教師の呼び出しは日常茶飯事だった。

そんな『不真面目』な奴が、『数日間』だけ勉強して、『満点』を取れる訳が無い。

「……………」

俺はスクリーンを凝視する。

「だが、不思議な事もあるんだな。坂本のペン捌きを見てみる。」

俺は坂本の手付きを見て、驚嘆した。

制限時間をもともせず、坂本は…姫路の思わせる程の速さで、ペンを進めている？

「流石は『神童』と呼ばれた男だ。奴は考える事も無く、機械的に

解答を記入していやがる。」

坂本…お前…。

「身体が『勉強』を記憶してるんだよ。小学生の頃に培われた『型』が、今もしつかり残っていたようだな。」

それでも、坂本は敗北する…『知識』が欠落している現状では…そういうことか！

「もし、奴が中学の頃も本気で勉強に励んでいたら…考えるだけでも恐ろしいな。」

俺と根本が会話する中、試験終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

第20話 闘いの果てに…決着を告げる金鐘（後書き）

PV25000を突破しました！

ありがとうございます。

次回…遂に、《原作第一巻編》完結！

登場人物紹介8（前書き）

オリキャラとオリ設定が増えてきました。

全て活かせるように、頑張ります。

Cクラスのあの二人を紹介！

登場人物紹介 8

宮野 みやの 孝文 たかふみ

身長 164cm

外見 ナチュラルテイストの短い茶髪、黒縁の眼鏡を掛ける。

性格 ポーカーフェイス

趣味 オペラ鑑賞

特技 変装

好き 演劇、駆け引き

嫌い 不真面目な人

・概要

習志野に古くから付き従う、腰巾着。

魅惑の美少年であり、女生徒からの人気が高い。

変装が得意な為、中学時代は《スパイ》として情報収集を主に活動していた。

現在は、『演劇俳優』を志しており、《演劇部》副部長として、木下秀吉と共に修行中。

演劇部においても、変装の技量を存分に発揮し、衣装関係の一切を任せられている。

友人は《劣等排斥一派》と《演劇部員》が大半を占める。

感情を露にする事は滅多に無い…野心家であるが、木下秀吉を除く生徒には、心中が全く読めない。

・成績

美術・音楽は400点オーバー。

それ以外の科目は、150点前後

総合科目は2000点程で、Cクラスではトップクラス。

・召喚獣

西部劇のガンマンを思わせる風貌で、二丁拳銃を使用している。

腕輪を使用した時は、弾速と威力が格段に上がるが、点数の消費が激しい。

小山 友香（変更点のみ）

・中学の頃は、《若女将》と呼ばれた。和服に身を包み、鉄扇や小刀などの『仕込み武器』を駆使して戦闘を行った。

・『学生戦争』では《劣等生》側に付き、坂本と平賀と同盟を結んだ時期もあった。

・原作と異なり、根本の事を本当に愛している。『彼の向く処、彼女在り』

第21話 エピローグへ原作第1巻編完結（前書き）

最後の部分…俺は何を考えていたのか；

しかし、一応…長い長いチュートリアルが終わりを迎えました。

こんな作品を手に取り、熟読なされた全ての読者に感謝！！！！

今回は閑話を入れます。

第21話 エピローグへ原作第1巻編完結

視点：啓吾

ディスプレイに試験結果が映し出された。

《日本史：限定テスト（100点満点）》
Aクラス 霧島 翔子 96点

『『『『『よつしやあああ！』』』』』

Fクラスの男子が歓声を上げる。

だが…俺も根本も、表情が暗かった。

直後、坂本の点数が表示され…結果を見たFクラスの生徒達は、啞然とする。

《日本史：限定テスト（100点満点）》
Fクラス 坂本 雄二 76点

ガラッ！

坂本と霧島の帰還と同時に、スクリーンに2人の答案用紙が映った。

大化の改新の年号を問う問題…二人とも『625』年と記述していた。

根本は坂本の肩に手を置く。

「坂本… ナイスファイト。惜しくも、引き分けとは行かなかったな。」

FクラスとAクラスの戦争は《2勝2敗3分》という結果になった。

座り込む坂本に、明久達が流れ込んだ。

「……殺せ。」

明久がカッターを掲げ、

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食いしばれ——！！！」

「明久君、落ち着いてください！」

姫路が明久を必死に抑える。

須川達は鎌を持ち、坂本を囲む。

「大体、76点って何だよ！0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数は！？」

「いかにも、俺の全力だ。」

「この阿呆があーっ！」

島田も明久の腕を掴む。

「アキも須川達も、50点も取れないでしょ！」

「それについては、否定はしない…だけど、この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なんだ！」

「それは体罰じゃなくて処刑です！」

この流れ…鉄人が黙る筈も無く、

FFF団の面子を掻き分け、振り返る。

『貴様ら…俺の眼前で、校内暴力とは…良い度胸だな。教育的指導が必要か？』

殺気が込め、関節を鳴らす鉄人の恐怖に、明久達は黙り込み、観客席へ戻って行く。

坂本は立ち上がり、鉄人を見上げた。

「FクラスとAクラスの試合結果は、2勝2敗3分となった。この後どうするか、双方の代表者で話し合い、決めるんだ！」

雄二は俺と根本に軽く礼をし、

「済まない…一緒に来てくれ。」

俺達は会場の闘技場へ向かう。

Aクラス側からは、霧島、習志野、木下姉が出て来た。

「降伏する？『A級戦犯』さん？」

木下姉は坂本を見下す。

「習志野、木下姉を黙らせてくれないか？あの金切り声…頭に響くんだがー。」

習志野は木下姉の髪を軽く引つ張る。

「優子。貴女のせいで、引き分けに持ち込まれたんだから…身の振り方、考えた方がよいよ。」

木下姉は息を詰まらせ、口を閉ざした。

坂本は感謝すると言い…習志野に要求を提示する。

「俺達Fクラスは…Aクラスに和平交渉を申し込む！」

習志野は坂本を睨み、舌打ちをするが、

「良いよ。このまま延長戦に突入しても、勝てるかどうか…分からないし。」

「桃花、私達が負ける筈が」

パンツ！

木下姉は強く叩かれ、頬を抑える。

「習志野桃花・木下優子・佐藤美穂・久保利光・工藤愛子の5人が戦死し…北沢佳奈も疲弊している。Fクラスも…松下啓吾・木下秀

吉・吉井明久・須川亮を失ったけれど…姫路瑞希は久保君を相手に4000点以上残して圧勝し、土屋康太に至っては無傷で工藤さんに勝利してしまったわ。」

更に…根本がダメ押しに一言。

「霧島、『今の』御前の日本史の点数は何点だったかな？」

思わせ振りの発言。

霧島さんの眉が僅かに動いた。

「……今の私の日本史の点数は、97点。総合科目も3000点近く減っている。姫路との点差は殆ど無い。」

根本はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ、

「Aクラスの上位10人の内、5人が補習室行き、2人が疲弊してゐるんだ。それが何を意味するかは、分かるよな？」

木下姉が拳を強く握る。

坂本はFクラスの観客を指差す。

「反面、此方には42人の無傷の奴隷と、ムツツリーニ・姫路・島田の3人が居るんだが…それでも、延長戦に持ち込むか？《劣等排斥一派》筆頭『習志野 桃花』さんよっ！」

坂本の大きな声に圧倒され、木下姉は黙り込んだ。

習志野はAクラスの生徒達を見渡し、静かに返答した。

「分かった…今回は手を引く。後は代表に任せるから。但し。」

習志野は背を向け、振り返る。

「引き分けになった上に、坂本は敗北したんだ。公的に、私的に条件は呑んで貰うから…じゃ、後は代表に御任せします。」

習志野は俺を見て笑みを溢し、会場を出て行った。

「ま、待ちなさいよ！ちゃんと代表と皆と相談しないと。」

「……優子。」

「代表…済みません！」

霧島さんが坂本と向かい合った。

「……危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してなければ負けていた。」

「言い訳はしねえ…煮るなり焼くなり好きにしろ。」

「……約束通り、私の言う事を聞いてもらっから。」

そういえば、宣戦布告の時に霧島は坂本が敗北した時の条件を出していたな。

「………！（カチャカチャカチャ！）」

土屋が撮影の準備の為にカメラを弄り始める。

「霧島さん…まさか…」

明久と須川が撮影機材を運ぶ。

「…覚悟は決まった。何でも言え。」

観客達が固唾を飲んで見守る中…。

「……………」

霧島さんは姫路さんと島田を一瞥していたが、坂本に視線を戻した。

そして…。

「……………雄二、私と付き合って。」

霧島さんが坂本に愛の告白をした。

嘘と信じたかった…勝負の前の発言が、坂本を精神的に追い詰める為の策略だと思いたかった。

『『『『……………』』』』』

FFF団全員が凍り付いた。

坂本は額に手を当て、冷や汗を掻いた。

「やっぱりな…お前、まだ諦めてなかったのか？」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好きだから。」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかいない。」

ナンテコツタイ！／（＾Ｏ＾）＼

雄二エ…あんな美人な嫁を貰いやがって…絶対に許さない！

「拒否権は？」

あるわきゃねえだろうが！！！！

リア充爆発しろっ！

「……無い。約束だから、今からデートに行く。」

霧島さんが雄二の襟首を掴み、そのまま会場を出て行くこととする。

「ぐあっ！放せ！やっぱりこの約束は無かった事に…。」

サッ！

霧島さんがスタンガンを取り出し、

ズブズブ！

坂本の首筋へ押し当てた。

直後、観客達の拍手喝采を浴びる。

『御幸せに!』

『夫婦として円満に生きていけよ!』

『霧島さん、おめでとう!』

『坂本め、あんな美人さんを…絶対に幸せにしろよ!』

霧島さんは少し照れくさそうであった。

「何だ、この流れは…まあ良い。霧島、おめでとう。坂本と仲良くな。」

根本でさえ巻き込まれるか；

「……………皆、有難う。(* v . v) 。 。 。 」

霧島は坂本を引き摺り、未来へ踏み出す。

(; ;) イイハナシダナ!

-
-
-
-

視点：恭二

全く：坂本の奴、とんでもないバカだ。

吉井達が憤るのも無理は無い：坂本はFクラスの同士達に期待させておいて、無様に敗北したのだから。

ブランクがある時点で、敗北すると分かっていただろうに。

俺を散々振り回しやがって：愚痴の一つ、言わないと気が済まないな。

「坂本は自分を過信した挙げ句、勉強を怠った。日頃から努力している奴に、付け焼き刃で勝てる筈がねえんだよ。」

松下も溜め息を付き、不平を言う。

「そうだな。坂本だけじゃない：引き分けたとはいえ、明久達は授業でさえ最後までまともに受けない屑共だからな。」

俺は松下の発言を受け、不満を漏らす。

「坂本は『世の中学力だけじゃない』と証明したいと言ったが：肝心の言い出しっぺが、学力勝負を用いる暴挙に出た末に、敗北しやがった。何を考えてたんだ。」

松下は頭を抱え、

「自分の力を過信したんだろ。今まで、坂本の策は全て成功していたし…特にDクラス戦では、平賀を撃破したからな。」

俺は会場の照明を見上げ、息を吐く。

「だったら、総合科目で霧島に挑めよ。奴に一矢でも報いることが出来れば…少なからず、『学力だけではない』と証明も出来たつてのにな…中学の頃から思っていたが、つくづく詰め甘い男だ。」

俺と松下が愚痴を言い合っていると、木下姉が此方にやって来た。

俺は身体を起こす。

「坂本と霧島が居ないんだ、代行として勝手にやらせてもらう。」

観客達が続々と会場を出ていく。

友香が笹倉達の介抱で、支えられながら退出するのを見た俺は、提案を申し出た。

「霧島が戦争前に言っていたな…確か『何でも1つ言う事を聞く』だったか。」

吉井が観客席から飛び降り、

「根本君、雄二が居ないのに…勝手に進めちゃいけないよ。ちゃんと姫路さん達と相談しないと。」

「恩を仇で返すような真似はしないから安心しろ。」

俺は木下姉に嫌な笑みを見せる。

「引き分けて『はい、御仕舞い!』では御互いに不満が残るだろ?そこで…御互いに要望を1つ聞くってのはどうだ?」

AクラスとFクラスの生徒達がざわめく。

「嫌だとは言わせねえ…俺は『弱り切った最強クラス』が相手でも一切の情無く叩き潰す卑怯者だからな。」

吉井と松下は俺から視線を反らし、

木下姉は齒軋りし俺を睨み付けていたが、

そのざわめきを、一声が沈黙させた。

「僕は根本君の提案を受け入れるべきだと思う。」

「久保君!?何を…こんな女装趣味の卑怯者に頭を下げるっていうの!?!」

「落ち着くんだ、木下さん。残念だけど…今の状態で、F・B・Dの3クラスと連戦して…全勝出来る確率は0に等しい。」

久保は木下姉を説得する。

「僕達はFクラスを相手に、これだけ追い込まれたんだ。『最下層のクラス』と引き分けた上に、『下位クラス』に敗北したら…Aクラスは尊厳と品格を喪失する。」

工藤と佐藤が頂垂れ、北沢は唇を噛み締めた。

よし、このまま…畳み掛ける！

「《和平交渉は一時の恥、敗北は一生の恥》。さあ、どっちを選ぶ？」

狙いの見え透いた言葉は、逆に強固な誘導力を生じる。

Aクラスの生徒達は顔を見合わせていたが…やがて、次々と賛同の声を上げていく。

「交渉成立だな。」

木下姉は拳を握りながらも、

「…その交渉、受けます。」

俺は今度は毒気の無い笑みを見せ、

「有難う。松下…後は御前等の問題だ。俺は保健室に行つて、友香の様子を見に行きたいから、帰るぜ。」

俺がそう言うと松下は頷き、木下姉の方へ歩んで行つた。

俺は背を向け、会場を出て、己の教室へ向かう。

……。

風が変わつたな。

『清涼祭』。

新たな闘いが、幕を開ける時…果たして俺は《絶対悪》を貫けるのだろうか？

- - - - -

視点：啓吾

Fクラスの教室。

「はあ…三ヶ月間、戦争が禁止かー。」

明久は卓袱台に突っ伏し、顔だけ上げる。

「だが、それと引き換えに『Aクラスの備品倉庫の道具一式』を譲渡してもらったんだ。明日にも、隣の《準備室》に移動してくれると、学園長も言ってただろ？」

「はあ…雄二がちゃんと勉強してれば、今頃システムデスクだったのに。」

明久は姫路を向き、溜め息を付いた。

ガラッ！

2 m近い中年の大男が教室に入ってきた。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

「あれ？鉄人、どうしたんですか？」

生活指導担当の西村教諭：一体、何をしに来たんだろうか？

「ああ。今から我がFクラスに補習についての説明をしようかと思
つてな。」

「え？」

補習だと…。

「後、重要事項を伝えに来たんだ。今度から…福原先生に変わって
俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強出来る
ぞ。」

は？

俺は背筋がゾクゾクとした。

……。

……。

……。

『『『』』』』何iiiiiiiiiiii!?!?』』』』

姫路と島田を除く、男子生徒全員（坂本は不在）から悲鳴が上がった！

「いいか？確かにお前等はよくやった。Fクラスがここまでくるとは正直思わなかった。でもな、いくら『学力が全てではない』と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の1つなんだ。だからないがしろにしてもいいものじゃない。」

ソウルジェムが一気に真っ黒になるような絶望に、俺は全身が震えた。

あれは補習ではない…拷問だ！

「特に…吉井、坂本は…念入りに監視してやろう。なにせ、開校以来初の『観察処分者』と『A級戦犯』からな」

吉井が卓袱台を叩き付け、ヒステリックに叫ぶ。

「ちょ、ちよっと、ま、待って下さい！僕は何も悪いことしていません！」

鉄人は明久から眼を反らし、

「BクラスとDクラスとの間に大きな穴を空けたり、俺の私物を売り飛ばしたりしたのは…誰だ？」

明久はガクガクブルブルしながらも、鉄人に食い下がる。

「だけど、そうはいきませんよ！なんとしても監視の目をかいくぐって今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

俺は苦笑いし、明久から離れた。

「…御前には悔い改めるといふ発想はないのか？」

鉄人は溜め息混じりに、怒る気力が削がれるように教卓に肘を置く。

「取り敢えず…明日、明後日は休日だから仕方無いとして…来週からは授業とは別に補習の時間を設けてやろう。まあ休日はゆっくり休むといい。」

鉄人が

明久は安堵し…姫路の側に行き、謝った。

「ごめん、姫路さん…。」

「え？」

「僕のせいで、システムデスクが…。」

「いいえ、良い教室ですよ。」

「え？」

「私、大好きです！このクラスが！」

「姫路さん…。」

「それに…」

「アキ！帰りにクレープ食べに行こっ！」

姫路が何か言おうとしたが、島田が遮り…明久の腕を掴みながら言った。

「え！？それは週末って約束じゃ…」

「週末は週末、今日は今日！」

「そんなあ！！2度も奢らされたら、今月の僕の食費がああああああ
ああ！！！」

「ダメですよっ！」

今度は姫路が明久の手を取りながらこう言った。

「明久君は私と映画を見に行くんです。」

「ええー！？姫路さん、それは話題にも上がって無いよ！」

「はい。今決めました！！！」

「ほら早く！クレープ食べに行くんでしょ！！！！！」

「吉井君はどんな映画に連れてってくれますか？」

「そんなあ、僕の生活費が！栄養があああああ！！！！！」

二人に引き摺られる明久。

明久は教室のドアに手を引っ掛け、振り向く鉄人に助けを求めた。

「鉄人！今から補習をやりましょうよ！《思い立ったが仏滅》ですつ！！！」

鉄人は明久の額を指で軽く弾いた。

「《吉日》だ、大馬鹿者。まあ…貴様がやる気なのは嬉しいが、無理をする事はない。女子との交流が吉井の更正に繋がるのならば、止めません。」

「おのれ鉄人！僕が苦境にあると知った上での狼藉だな！？こうなったら卒業式の日、伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ！！！」

鉄人に詰め寄ろうとした明久、しかし…美波と姫路に襟首を捕まれる。

「逃げようつたってそうはいかないわよ、アキ。」

「では明久君、行きましょう」

バタンツ！

直後、須川達が血眼になって明久を追い回した事は…言うまでもない。

- - - - -

視点：？？？

一連の騒動から一夜明け、放課後。

職員室のある一室。

「2 - Fが2 - Aを相手に、引き分けるとは…私は彼等を侮り過ぎたようだ。」

「そのようですね。」

「まあいい…試験召喚戦争の話はこれで御仕舞いだ。これからは《清涼祭》の事を懸命に考えてもらうよ。」

「はい…で、何をすれば良いんですか？」

「君は《清涼祭》を有りの儘に遊び呆ければ良い。後は私がやる…」

「あの人には、癖の強い厄介な強敵が一杯居ますが…大丈夫ですか？」

「ああ。狂気の科学者、財閥の御曹司、希代の人外、重火器系の玄人、国家公務員…あの『糞餓鬼』共に幾度と足止めを喰らってね…不愉快極まりない。」

「だから僕を呼んだんですよね…《文月グループ》の重役を親に持つが故に。」

「申し訳無いね。当時は、元《文月グループ》経理部『専務』の私だけで、計画を進める予定だったが…奴等の邪魔立てのお陰で、精神病院送りにされて、出るのに数カ月も掛かったんだ！」

「恐ろしい高校生達も居たものですね。」

「だが…今回は絶対に失敗せんよ。汚名返上の為に、外国の《試験校》に不安因子を全員寄越してやった。『長期留学無償制度』を餌にしてね。」

「成る程。《証拠隠滅》《時既に遅し》って事ですね？」

「察しが良くて助かる。流石は…。」

「謙遜なさらなくても結構です。貴方に幾度も助けて戴いたのですから。」

僕とあの方が喋っていると、外から騒音が響いた。

窓越しに外を眺めると…2人の女子が1人の男子を引き摺り、校門へ歩いていった。

あの方はその様子を明らかに目障りそうに見る。

「吉井明久（笑）か。先日も教室に穴を開けやがって…尻拭いをする私の身にもなって欲しいものだ。全く、学園の恥晒しだと言う

のに。今すぐにも退学にしてやりたいよ。」

「退学させられないのが、現実ですね。あんな危険人物が社会に出て…重大犯罪を引き起こされれば、貴方にも責任が及びますよ。」

「グッ！吉井といい坂本といい…あんな問題児を入学させたとはい、学園長と入試課は大した節穴を御持ちであるようだ！」

「過去の事を幾ら追及しても、どうしようもありません。今は《清涼祭》で如何に計画を進めるかだけを考えましょう。」

あの方が御怒りであるのも仕方が無い。

経理を放って試験召喚システムの研究ばかりに没頭する学園長に愛想が尽き、

問題児の《奇行》の隠蔽に、事或る毎にスポンサーへ謝罪し…文月グループの重役会議にて必死に弁明し。

文月学園が《試験校》で、社会から注目されるが故に…実情をひた隠しにし、『スポンサー』『国家機関』『特秘事務局』を相手に取引や駆引を全て一人でやりのけて来たのだ。

「私は『指示待ち人間』では無いし、『事態を黙認する愚劣な教師』でも無い。この30年、俺は常に社会貢献を最優先に、御社の為に心身を削って来た。」

僕はあの方の愚痴を聞くつもりは無いが、その言葉から発せられる苦悩に同情せざるを得なかった。

「済まない。今の話は聞き流す程度に願おう。えーっと…何処まで話したか？」

「学園長が気に喰わない…までは。」

「感情的に会話していたか。教師陣と生徒達の派閥争いも激化しているからな…しかし、キミ程の優秀な人材が…何故私に協力を？」

あの方は全てを察したような目付きを見せ、吸い殻を灰皿に押し付けた。

「プライベートに差し障る事には一切答えないと両親から教わったので。」

僕は話を聞き流す。

「君の父方は疑心深き男だったね…大事業が成功すれば、『大学への推薦状』を出し、『文月グループの出世街道』を手配する事を約束しよう。」

「有難う御座います。」

p r r r r r ! ! !

あの方は失敬と言い、電話に出る。

数十秒の後、あの方は笑みを浮かべ、

「君の父方と連絡が着いた。清涼祭二日目な午後に御越しになられるそうだ。」

「そうですか…後は、僕が《大会》で優勝か準優勝するだけですな？」

「おや、随分と余裕だね？ま、君の学力なら出来ない事はないだろうが…格下の相手に油断して敗北しないように。」

「忠告、肝に命じておきます。」

僕は話を切り、一礼して職員室を出る。

そして、人気の無い廊下で写真を取り出し破り捨てる。

……………。

吉井明久。

僕の大切な大切な瑞希。

僕から奪い取り、心を奪った。

絶対に許しはしない。

僕は瑞希を救い出すんだ。

悪魔を殺し、天使の加護が満たす世界と一緒に一つに溶け込むんだ。

ハア、ハア…抑えなきゃ、興奮を抑えなきゃ…。

は、は…ははははは！…！

《原作第一卷》編、終了。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

EX2 悪魔の〇文…燃え盛る暴徒たち（前書き）

久しぶりの閑話です。

今回は3・5巻の恋文騒動をアレンジしましたが…在り来たりな展開に；

EX2 悪魔の〇文…燃え盛る暴徒たち

視点：啓吾

Aクラスとの試召戦争が終了し、鉄人が担任になって休日を経て、月曜日。

朝7時…ここは通学路。

すっかり馴染みの道だ…吹き抜ける風が、清々しい。

俺は数本の竹刀をケースに入れて、文月学園へ向かっていた。

今年の新人部員は多く、既存の竹刀だけでは足りなかったのだ。

「啓ちゃん、おはよう」

「明久！？お前に一体何があった…まさか、頭でも強打したのか！」

明久は必ず遅刻数秒前に登校する男だ。

有り得ない…。

「失礼な！僕だって、早起きぐらいはするよ！」

「いや、しかし…毎晩、深夜まで起きてゲームをしてそのまま寝過ぎす奴だぞ？まさか、一睡もせずに出たのか！？」

「実は昨日はゲームをしてないんだ。フィードバックと右手の痛み

で…そんな余裕も無く、そのまま寝ちゃったんだ。」

「ゲームをしていない…だと…?」

『一時の勉強』<<<『一生のゲーム』を掲げて生きる男が…天変地異が起こるぞ；

身体が震える俺に気付く事無く、明久は背筋を伸ばし、

「それにしても…早起きも悪くないね。《早起きは3円の特》って言うし、何か良い事があるといいなあ」

《三文の徳》だバカ久。

「啓ちゃん…疲れてるの?」

「呆れて物が言えないだけだ。それよりも、学園に着いたぞ…挨拶くらいしろよ。」

校門付近で箒を持って掃除をしている、見知った後ろ姿を見た。

紛れもない、Fクラスの新任である西村宗一先生だ。

「鉄人…学校に来るの早いんだね。」

「普段のお前よりはずっとな。」

「ま、僕達のクラスの新しい担任だし、挨拶だけでもしとこっ!」

「何事も挨拶から始まるしな。俺も挨拶して行こう。」

俺と明久は西村先生に近付き、

「先生！おはよう御座います。」

「鉄人、おっはー」

西村先生は手を振り上げ、笑みを浮かべ、

「御早う！松下…今日は早いのだな。」

「試験召喚戦争で忙しく、剣道部に顔を出せなかったの…久し振りに朝練に出ようと思っていたんです。」

「ほう！確か、松下は剣道部のマネージャーだったな。部活に懸命に打ち込むのは良い事だ。」

俺に笑顔を見せる西村先生…しかし、明久を見た途端に動きが止まった。

「どうかしたんですか？僕の顔に何か付いてます？」

「吉井。こんな早朝に学校に来て…昨日の試合のフィードバックで、頭に支障を来したのか!？」

大変、非常に失礼な質問だ；

「身体は痛みますけど、僕は何時も通りですよ?。」

「信じられん…昨日の発言は本意だったのか。貴様に疑念を抱いて

済まなかった。」

西村先生は補習を初日から受けると（その場凌ぎに）言った明久の言葉を気に留めていたらしい。

「それはそうと…丁度良かった。《観察処分者》のお前がいるなら手間が省ける。」

「うげっ！《観察処分者》って事は…また力仕事ですか！？」

「俺は《清涼祭》に向け、今から職員会議に出席せねばならんのだ。週明け一番、済まないが…古くなったサッカーゴールを校門前まで運んでおいてくれ。」

明久は落ち込み、項垂れる。

「先生。微力ながら俺も手伝います…監視も兼ねて。」

「部活が忙しいなら無理はするな。しかし、万が一に備え…吉井が召喚獣で悪さをしないよう、見張っていて欲しい。」

「分かりました。」

明久は両手と両膝を地面に付け、『Orz』の態勢になった。

「はあ…観察処分を受けるような真似をしなければ、な。」

西村先生は呆れながら明久の顔を見て溜息を吐く。

「撤去するサッカーゴールは彼処にある…サボるなよ。」

「…はい。」

西村先生は駆け足で新校舎へ向かった。

俺と明久はグラウンドを歩く。

陸上部の朝練：横溝が全速力で走り抜けている。

横溝も中々の強者で、この学園で一番体力があるらしい。

フルマラソンを難なく完走出来るのだと；

「おはよう、職人さん！今から学園の外回りを5周して来ますっ！」

横溝は俺に手を振り、校門を出て行った。

「吉井、頼む。」

「了解。試獣^{サモン}召喚！」

大島先生の立会いの下、明久は召喚獣を出した。

「俺も召喚するか…。」

《保健体育》

吉井 明久 39点

松下 啓吾 314点

「明久、逃げたら戦死に追い込む。さっさと終わらせるぞ。」

「…うん。」

明久は召喚獣を巧みに操作し、身の丈の何倍もあるサッカーゴールを軽々と担いだ。

物理干渉…凄いな。

笹倉や滝川さんでも、持ち運ぶのに苦勞するサッカーゴールを難無く持てるのか；

「吉井、それを町外れのごみ処理場まで運ぶんだ。」

「ええ！？十数kmはありますよ；」

大島先生は冗談だと笑い、体育館倉庫の近くを指差した。

「ゴールネットを外して、登校する生徒の邪魔にならないように置くだけでいい。」

「ふう…良かった。」

明久は安堵するが、大島先生は容赦無く、

「貴様が破壊した校舎の修繕費用は竹原教頭が、学園の利益を割いてまで全額負担してくれる事になったんだ。それを考えれば…」

「グツ…で、でも…あれは事情が。」

「事情が何だろうと…器物を破壊させ、学園に明らかに損害を被っ

た事に変わりはない。それだけは肝に命じ、二度とするなよっ！」

「…はい。」

明久は愚痴を漏らしながらも、サッカーゴールを所定の位置に置いた。

明久がゴールネットを外している時、大島先生が俺に話し掛けた。

「松下、貴様も大変だな。」

「もう慣れました。毎日のように騒ぎを起こしていますから…この間だって、」

「苦労しているんだな…外したネットは別口で処分するから、取り敢えずは体育用具室にでも置いといてくれ。」

作業は数分で終わった。

ゴールネットを外すのを手伝った俺は、時計を確認し、明久に別れを告げ、ケースを持って体育館へ走っていった。

- - - - -

視点：明久

靴箱を開けた僕は驚愕していた。

「こ、これは!?!」

それは偽りの無い、青色の便箋。

「五月蠅い…朝くらい静かにしてくれ。」

僕が急に叫び声を上げたので、平賀君が不機嫌そうな顔を浮かべ、階段を上がって行く。

誰も居ないのを確認し、片手に掴んだ便箋を…もう一度確認する。

僕に春が訪れた…雄二達には悪いけど、

「どうした、バカ久。週末は楽しかったかー?」

「!?!」

雄二が行き成り現れ、声を掛けて来た。

ササッ!

僕は咄嗟に持っている手紙をポケットに隠す。

「どうしたの?」

「ああ。今日は朝早くから翔子と勉強しに行くんだ…図書館で待ち合わせだ。」

「この週末、何してたの？大分仲良しになったみたいだけど。」

「明久：御前も昨日見ただろ？奴は：鬼嫁だ：今日だって、図書館に寄らなければ、婚姻届を提出されちまうんだ：。」

雄二は身体を震わせ、

「で、明久。今：何を持ってたんだ？」

流石は雄二、勘が鋭い。

だけど、便箋には気付いていないみたい。

上手く誤魔化すんだ。

ポケットをぐそぐそさせ、秀吉の写真を取り出し、

「秀吉のラウンドガール、7枚セット！」

「ふう…ラブレターなら面白くなったのにな。じゃあ、後でまた逢おうぜ。」

あぶねw一瞬見破られたと思ったよ；

雄二はそのまま図書館へ直行した。

僕はカバンの中に便箋を仕舞った。

放課後まで隠し通し、帰宅するぞっ！

- - - - -

視点：啓吾

竹刀を剣道部室に置き、教室に入る。

丁度チャイムが鳴り、西村先生が出席を取り始めた。

「坂本」「へい。」

雄二、どうしたんだ…血の気が無い；

「島田」「はい！」

「須川」「へい！」

元気一杯の返事だ。

淡々と進む朝の出席確認。

そんな静かな教室に…土屋が沈黙を破る！

「土屋」「……………明久が恋文を入手。」

え？

『『『『『……』』』』』

顔を見合わせる須川達。

考えている事は同じであるらしい。

『『『『『殺せええつ！！』』』』』

明久が慌てふためいた。

「ム、ムツツリーニ！何て事を言うの！」

土屋に怒鳴る明久、だが遅い。

『どう言う事だ！？吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それなら俺達だって貰ってもおかしくないはずだ！自分の席の近くを探せつ！』

『ダメだ！ 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『…出てきたつ！秀吉の写真がつ！』

『1000円で譲ってくれ！』

腐りかけと食べかけのパンは早く食べるか捨てるかしろよ、

後…秀吉の写真を1000円で買える筈が無い！

怒号が飛び交い、クラスの殆どが明久に妬みの視線を送りながら怒り狂った。

「坂本…あいつら静かにさせるよ。」

「無理だ。土屋が翔子の事を漏らしたら、俺まで殺られる。」

ドンッ！…！

『貴様等っ！静かにせんかっ！！！！』

……。

西村先生の一喝で教室が静かになる。

正に鶴の一声だな；

「出欠確認を続けるぞ。」

再び出欠確認が開始された。

「手塚」「吉井クロス」

「東藤」「吉井クロス」

「戸沢」「吉井クロス」

明久が席を立ち、

「落ち着くんだ！返事が『吉井クロス』に変わってるよ！」

『吉井、静かにしろ！』

おいおい・流石に物騒な返事をしている奴等を注意しろよ。

「でも、このままじゃ…クラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えま
すよ…！」

西村先生はスルーし、出席確認を続ける。

「新田」「吉井クロス」

「布田」「吉井ガチでクロス」

「根岸」「吉井ブチ殺す」

エスカレートしてる；

「松下」「明久は死ぬ！」

ほら、俺にも伝染したじゃないか…80%は本気だがな！

「姫路」「明久君、浮気ですかっ」

姫路さん…ニコツとするが、半眼開きだ。

島田からも殺気が溢れている。

「吉井」「はい。(泣)」

鉄人は出席簿を閉じ、

「遅刻欠席は無しだな。今日も一日勉強に励むようにっ！」

「待つて先生！行かないで！可愛い生徒を見殺しにしないで！」

明久は保身の為に必死になり、西村先生を呼び止めた。

「吉井：貴様は一つ重大な事を忘れてる。それは、お前が可愛い
げの無い、バカだと言うことだ。」

「鉄人に不細工とは言われるとは思わなかったよっ！」

「授業は真面目に受けるように。」

ガタンっ！

明久は見捨てられた：日頃の行いが悪いが為に。

直後、島田が明久をガン見する。

「アキ、ちよつと話を聞かせて貰える？」

島田が明久の肩をグワシッと関節が外れてしまいそうな勢いで掴んでいた。

「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」

「手紙を貰ったの？ 誰からのの？ どんな手紙なの？」

余りの殺気に、明久は呂律が回らない。

「いいから大人しく指の骨を…じゃなくて、手紙を見せなさい！」
恐ろしい脅しだ。

「美波ちゃん…明久君に酷い事、しないで下さい！」

姫路が島田を引き留める。

「明久君が気絶したら、手紙の隠し場所が分からないじゃないですか…。」

明久は丁重に御断りし、

「姫路さん、ごめん。コレばかりは」

「私にも譲れないものがあります！」

「ちょっと待って！姫路さんまで！」

姫路…Fクラスのノリに馴染んでしまったのか！？

パンツ！

「皆、ちょっと…落ち着けよ。」

雄二は卓袱台に足を乗せ、欠伸をする。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃねーだろうが。」

俺は後ろの卓袱台にもたれ掛かる。

「問題は…明久を如何にグロテスクに殺すか…だろ？」

須川達は鎌を持ち上げ、雄叫びを上げた。

「戦略的撤退！！！」

明久は窓から飛び降り、見事、芝生に着地し…グラウンドのフェンスを乗り越え、逃げて行った。

「逃がすなっ！」

「手紙を奪い、奴を捕縛せよ！」

「見敵必殺！サーチ&デストロイ！！！」

島田を含む、追撃隊が一斉に教室を出て、明久を追い掛けて行った。

坂本はニヤニヤしながら、ゆっくりと教室の窓を飛び降りた。

教室には…秀吉、姫路、俺だけが残った。

「啓吾よ。この事態、どう収束させるのじゃ…。」

俺は携帯を取り出し…鼻をつまみ、電話を掛ける。

文月学園の生活指導部に。

「西村先生。2年Fクラスの…姫路瑞希、木下秀吉を除くメンバー全員が授業をボイコットしてます。」

『校内の携帯の使用は禁止だが、緊急時だ。至急、学園の封鎖を行い…全員《確保》する。』

電話を切り、俺は二人に、

「姫路と秀吉は授業を受けていてくれ。」

「授業はもう、始まるぞい。」

教室を出ようとする俺だが…。

「皆さん、おは…えっと、これは…どうしたんですか？」

英語担当の遠藤先生が教室に入ってきた。

一時間目の授業は…苦手な英語か。

「遠藤先生、体調が優れないので保健室に行つて来ます。」

俺は遠藤先生の静止を振り切り、教室を出た…。

-
-
-
-

「明久は何処に逃げた、坂本達は何をしているんだ。」

靴を履き替え、グラウンドに出た時、

「『ぎゃあああつ!!』『』『』『』」

俺は…西村先生がバカ達を相手に無双しているのを見た。

一瞬にして30人程が泡を吹き、倒れる。

次に…ゴールネットに12人が絡まり、身体をガクガクさせていた。

俺は横溝に問う。

「何があった!?!」

「よ…吉井が…俺達に濡れたネットを被せて…スタンガンで…。」

明久、お前…こういう時に限って、悪知恵が働くのかよ；

「ま、つした…吉井を…俺達の代わりに…ぶっ殺してくれ…!」

「放課後なら手伝っていたが…悪いが、今は授業中だ。」

ドスッ!

横溝の鳩尾に竹刀を突いた。

「明久と坂本達は何処に行った?」

「屋上だ…吉井は…旧校舎の蔦を伝って行った…ガクッ！」

西村先生が40人以上の生徒を抱え上げ、

「松下か。こいつらを教室に連れ戻してくる。」

あんだ…人間じゃねえ…;

-
-
-
-

二階の渡り廊下で。

「須川…。」

「お前は吉井が幸せになる事を、妬まないのか？」

「妬みはするが、殺しはしない。」

「その余裕振り…お前も、恋文を貰った事が有ると見える。ならば…。」

「召喚獣でケリを着けてやるよ！」

高橋先生が呆れた表情をして、

「総合科目で承認します！」

須川は表情を歪ませた。

《総合科目》

松下 啓吾 2418点

VS

須川 亮 1043点

「FFF団の生き残りはお前だけだ！」

「今日の俺は、阿修羅さえ凌駕する！」

日本刀と大鎌が交差し…須川が敗北した。

西村先生が43人のFFF団全員に、

「授業をサボるとは良い度胸だ！最終下校時刻まで補習を講じてやる！…！」

『『『『アッー！…』』』』

西村先生は須川達を連れ、補習室に押し込んで行った…。

視点：明久

屋上に出た僕を迎えたのは、雄二とムッツリー二だった。

「観念しろ、明久。素直に手紙を渡せ。」

「……………殺したい程、妬ましい。」

再び、屋上から飛び降りるか…いや、駄目だ…ムッツリー二に追い付かれる。

木刀も持っていない…素手じゃ雄二に瞬殺される。

「雄二、どうして此処が…。」

「下の階は鉄人が徘徊してるんだ。屋上の鍵を締めて、新校舎に逃げるつもりだったんだろうが…そうはいかねえ。」

雄二は銀色の鍵を見せ付けた。

「職員室前の身障者用トイレに隠れば、誰にも邪魔されずに済んだものを。」

僕は齒軋りし、雄二を睨む。

「雄二…どうして、邪魔ばかりするんだ！？美人な彼女を嫁に持つ癖に！」

雄二が近くの手摺を握った。

「明久：俺の苦しみは知ってるだろ？肘間接を外されながら、無理矢理バイクを運転させられ、3時間の映画を3回見せられ、スタングンを首筋に突き付けられ、手枷に手首を嵌められ、婚姻届を市役所に提出されるんだ……。」

雄二の言葉の重みに僕は冷汗を垂らす。

「明久が羨ましいぜ。てめえ……愛のあるデートだけでなく、二股掛けやがって……絶対に赦さねえっ……！！！」

雄二は上衣を脱ぎ捨てた。

「大人しく手紙を寄越せ。抵抗するなら『紐なしバンジー』か『一方的なタコ殴り』をプレゼントしてやらあ。」

180cm後半の雄二の身体はしなやかで、無駄の無い理想的な筋肉の付き方をしていた。

「ムッツリーニ。」

「……………（コクッ）」

雄二が近くに落ちていた鉄柱を僕に投げ飛ばした。

パシッ！

1m弱しか無いけど、殺る！

ガラッ！

「明久！」

啓ちゃんが屋上に上がって来た。

僕も上着脱ぎ捨て、

「啓ちゃん…お願い。」

啓ちゃんは上着を受け、ムツツリー二と共にその場から離れる。

「《金色の疾風》…来やがれ。」

「《悪鬼羅刹》ウウウ!!!」

試し斬りに、落ちていたアルミ缶を叩き割り…雄二へ駆け込もうとしましたが…。

「明久、手紙がポケットに入ってるが…読んでもいいか?。」

啓ちゃんがニヤニヤした目付きで、僕を見下ろすように嘲笑した。

「松下…お前、中々良い芝居だったぜ。」

「そいつはどうも。」

あれ?こ、これってまさか。

「悪いな、明久。この間の暴力の仕返しなんだ、テヘッ」

啓ちゃんは…雄二の味方だったんだ。

ガシィ!

鉄柱を奪われ、僕は雄二とムツツリー二に羽交い締めになされてしまった。

その間に、啓ちゃんは便箋から手紙を取り出した。

手紙を覗き込み…朗読を始めた。

《手紙》

親愛なる吉井明久君へ。

初めて逢った時に、君に一目惚れし…以来、君だけを想って生きて来ました。

この恋は…世間一般から道が外れているかもしれない。

だけど、『僕』は自身の気持ちに嘘は付けないと…この間の一騎打ちで気付かされたのです。

苦悩の末…告白する事を決意しました!

僕で良ければ、是非、お付き合いをして戴けませんか?

伝説の木の下で、返事を待っています。

久保利光より

屋上は一瞬にして、閑散となった。

「……」

啓ちゃんは手紙を破り、細切れにした。

雄二は僕の肩を叩き、ムツツリー二はカメラをカバンに押し込む。

「明久……お前も、苦労してるんだな……済まん。」

雄二は床に落ちた紙屑を……マッチに灯された火で炙った。

手紙は灰と化し、風に煽られ、何処かへ吹き飛んで行った。

……鉄人がやって来たのは、それから数分後の事である。

EX3 作者『反省会やります…。』(前書き)

お久し振りです。

放置してました…御免なさい。

EX3 作者『反省会やります…』

視点：アルたん

俺「第一回『反省会』始まり始まりー！」

啓「主人公なのに、出番が少なく解説ばかりしている松下啓吾！」

明「何だか、すつごく強くなった気のする吉井明久です！」

啓「じゃ〜早速、本題に移ろうか？今回の小説の出来が最悪だったらしいしな。」

俺「グツ…展開が在り来りになった上に、心情表現や行動を詳細に書き過ぎたのは…否定できない！」

啓「しかも、俺のキャラが安定しないんだよな。一人称も変わった気がするし。」

俺「以後、注意するよ。」

明「啓ちゃん、あんまり作者を責めないであげて。」

啓「誤字脱字が多い奴には、これぐらいで良いんだよ。」

明「Aクラス戦は特に酷かったね。無理に文字数を稼ごうとしていたし、構想も中々定まってなかったし。」

啓「あと、清涼祭への展開が強引だ。あの内容は清涼祭編が始まっ

てからにするべきだったな。」

俺「ウエヒヒヒw」

明「後、どさくさ紛れに…他の人の小説に出てくる登場人物を利用したよね。ちゃんと許可は取ったの？」

俺「名前は出していない。(キリッ)」

啓「セウトだバーカ。」

俺「指摘されない=問題無い」

啓「感想なんて、一ヶ月に2回しか書かれてないしな。逆お気に入りに一桁だし。」

俺「だが、この2ヶ月でPVは3万近くいったんだ。更新頻度を上げれば…」

啓「そう言つて、《ブラウザクエスト》で近接武器でも無い『転生武器』を得る為にPCガン見してた屑は誰だよ…。」

俺「攻撃力400オーバーの為なら、俺は夜中全てを注ぎ込むくらいの覚悟はする…そこいらの放置勢と一緒にするなよ！」

啓「お前：明久レベルの馬鹿だな。」

俺「失礼な事を平然と言うな。昔は明久以下の大馬鹿だったが、今は違う。」

力してあの位置に立っているし、それは紛れも無い事実だ。だがな…『自分は超越物だから、何でも出来るし、何でも許される』と思うのは間違っている。」

雄「ほう？それは…あの著名な作者達を真っ向から否定するような言い回しだな。」

俺「挑戦するさ。王道な展開と揶揄されてでも…弱者が強者を倒す光景を書き切り、物語を完遂させる。だから…明久達には悪いが、『強大な権力』を有する相手達と一杯戦ってもらうぞ。」

雄「おもしれえ。俺は逃げも隠れもしない…。」

俺「期待している。」

明「痛いのはヤダだけどね…。」

俺「嫌でも、天才少年や天才少女、大富豪の御曹司、現役の国家公務員、外国の有名大学の卒業生、教師以上の高得点者と対峙する事になるから…せいぜい勉強やって、腕が鈍らないようにするんだな。」

？「…：…なら早速、結婚して永久に雄二と勉強する。」

雄「げっ！どうやって嗅ぎ付けた…。」

翔「…：…匂い、かな。とにかく、雄二と一緒に結婚式のプログラムを計画する。」

雄「ちよっと待って…クペッ…!!！」

雄二は霧島さんに拉致された。

俺「今回は短めに切り上げる。」

啓「清涼祭編を書きたいんだな。」

俺「構想は練った。2日ごとに更新するのがベストだな。」

啓「御互い頑張ろうぜ。」

俺「まあ、その前に登場人物紹介するけど…頑張るよ。」

啓「じゃあ、お開きにしよう。」

俺「お付き合い頂き、誠に有難う御座いました…引き続き、小説をお楽しみに…」

登場人物紹介9（前書き）

Aクラスのオリキャラを紹介します。

登場人物紹介9

北沢 きたざわ
佳奈 かな

身長 156cm

外見 肩上の白色のショートボブヘア。トップからふんわりとした質感と丸みがあり、前髪はカールしており、目ギリギリで下ろしている。

性格 天真爛漫な、戦闘狂

趣味 ジム通い

特技 片足立ち6時間

好き 戦闘好きな人

嫌い 他人を見下す人

・概要

Aクラス中堅クラスの成績を持ち、女子からの人気が高い『強者』。

中学の頃は『蒼龍』と呼ばれ、蒼く透き通った剣を用いて、戦場を駆けた。

より身体を素早く動かす為に極限な迄に減量をしており、体脂肪率は1%以下…にも拘わらず、本人は健康体である。

戦闘時は素早い身のこなしと剣撃を併用するスタイルを取る。

回避と機動性に極端に特化しているので、『被弾0』が鉄則。

派閥に関係無く、広範囲に渡って友好関係を築いているようだ。

《須川 亮》とは小学生以来、永遠のライバルと呼び、事或る毎に剣を交えている。

・成績

数学のみ400点オーバー。

それ以外の科目は250点前後。

総合科目は3000点とAクラス最上層に劣るが、召喚獣の操作は人並み以上に高い腕を持つ。

・召喚獣

蒼剣以外の武装を一切持たない。

火力は最低レベルで、相手が此方の半分以下の点数でも数撃直撃させなければ撃破出来ない程。

代わりに、抜群の機動性を獲得し、驚異的な回避能力を有する事となった。

指輪の能力は『熱閃』：強い光は相手の視界を遮るが、武装が強く

なる訳では無い。

習志野なつしほ 桃花ももが

身長 163cm

外見 桃色がかった茶髪を肩まで伸ばしており、髪型は全体的に柔らかなウェーブを描いている。

性格 指導者に相応しく、律儀さと偏屈さを併せ持つ非常識な優等生

趣味 オークション

特技 拷問全般

好き 自分と正面に向かい合える人

嫌い すぐ感情的になる人

・概要

4年前、『全犯罪組織壊滅』を掲げた若者達の蜂起の波に乗るように、《劣等排斥一派》を立ち上げた張本人。

犯罪者の温床が高等教育以下にあると論じ、多くの信者を寄せ集め、犯罪を横行させる全ての勢力の抹殺を目論んだ。

最終的に計画は失敗に終わり、人前から姿を消して隠居していたが、

高校進学を目処に再起。

《習志野グループ》跡継ぎでだけでなく、若くして財界や経済界と強く結び付いており、完全敗北した今も尚、幹部達から『世界変革の獅子』と呼ばれ慕われている。

文月学園のスポンサーであるが、本人は決して驕るような態度は見せず、常に向上心を持っている。

『感情的に身体を動かす者』や『身内で野心を抱く危険因子』には容赦が無く、『自身より優れた人物』や『実力が高いと認められる強者』には親切に従順に接する。

優等生や一部の教師から絶大な信頼を寄せられており、木下姉や久保と親しく…姫路と何らかの関係があるようだ。

実は《劣等生》を全否定しておらず、排斥対象は『犯罪に手を染めた人』に限定されていた筈だが、大戦末期は《劣等生》を無差別攻撃している。

組織を纏め切れなかった可能性があるにしても、原因は根本の裏切りが有力としか判断されていない…情報求ム。

・成績

霧島、姫路、久保に次いで学年4位の実力を有している。

英語は500点を超えており、数学と理科は400点間近、地歴公民と国語は350点オーバーである。

反面：美術音楽と保健体育、家庭科は200点前後とのこと。

総合科目は4100点…流石はAクラス最上位といったところか。

・召喚獣

バズーカ砲は打ち切り非リロード方式を採用しており、一出撃15発まで。

弾切れになっても、高圧電流によって加熱された鞭である程度の近接戦闘が可能。

指輪スキル使用時はバズーカ砲が1丁追加される。

第22話 新章突入！〈清涼祭編開始〉（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

1．あなたが今欲しい物はなんですか？

姫路瑞希、島田美波の答え

『クラスメイトとの思い出』

・教師のコメント

成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかも
しれませんね。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正） 成人向けの本』

・教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え

『カローリー』

・教師のコメント

この回答に、君の生命の危機が感じられます。

2・清涼祭に掲げる目標は？

習志野桃花の答え

『全生徒が一丸となって懸命に努力し…全世代が楽しめる催し物を提供しつつ、《試験召喚システム》や《学園の教育方針》を宣伝し、スポンサーの獲得に努める事。』

根本恭二の答え

『学年、クラスを問わず…様々な立場の人が協力し、交流出来るよう…自由度の高いオリジナリティのある学園祭になるように…生徒1人1人が行動に責任を持つ事』

坂本雄二の答え

『学力主義に縛られず生徒の意見や要望を尊重し…敢えて協力体制を取るのでは無く、それぞれが独自のアトラクションを考案し…より高い次元に至る為に競い合う事』

・教師のコメント

色々な意見が聞けて、アンケートをして良かったと先生は思いました。でも…これは目標と言うよりはスローガンですね。無理はしないように。

第22話 新章突入！〈清涼祭編開始〉

視点：啓吾

新学期が始まり、1ヶ月が経った。

毎年5月中旬に開催される…文月学園の学園祭『清涼祭』を二週間後に控え、生徒達が意気込んで準備をしている時。

「てめえの顔面に打球をぶつけてやる！」

「舐めんなよ！松下の打球なんか、容易く受け止めてアウトにしてやるぜ！」

「後悔するなよ！勝負だ、須川あああ！」

俺達Fクラスは草野球をしていた。

現在4回表、1アウト…1点差を追って俺が打席に立っていた。

（1ストライク2ボール…低め外角、高め内角、ストレート…ランナーは3塁。）

横溝を一目見て、俺はバットを握る。

ビュンッ！

（もう一回ストレートが来る！）

カンツ！

バットの上側に当たり、打ち上げてしまったが…外野のいる方まで飛んでくれた。

近藤が補給した瞬間、横溝が全速力でホームベースへ滑り込み…間に合った！

「ピッチャー交代だ！須川から土屋に！」

空かさず、相手チームのキャッチャーを務める坂本が須川に駆け寄り、遅れて土屋もピッチャーマウンドへ到着。

次の打席は明久だ。

「明久。様子見ていくぞ…土屋の実力は未知数だからな。」

「分かったよ、啓吾。僕に任せて！」

試験召喚戦争が終わってから、明久は俺の呼び方を変えた…少し嬉しい。

今までは俺を見上げるように接していたからな。

おっと、明久と土屋の直接対決が始まる。

「……………明久、お前を倒す。」

「ムツツリーニが相手だろうと、僕は逃げも隠れもしないさ！」

キャッチャーの坂本が土屋に指示を出す。

他チームのベンチに座っている俺達に見えるような、大袈裟なジェスチャーだ。

『次の球は、カーブを…』

気を付ける明久…土屋は変化球を使ってくる；

切羽詰まるような、緊迫した状況。

『明久の頭に思いつきりぶつける！』

明久はヘルメットを被っているのだ…反則を進言しない限り、デッドボールになり1塁に進むことが出来る。

ムツツリーニがコクツと頷いた。

明久は…坂本がキャッチャーミットを頭の後ろに移動させているのに気付かず、

「遠慮してないで、本気で来い！」

「……………死ね！」

土屋が振りかぶって、一球を…投げられなかった。

ダダダダダダッ！！！！

「貴様らあああ！！！！学園祭の準備をサボって何をやってるかああ

あ！！！！！」

逆転を賭けた闘いが、鉄人の怒声に遮られてしまった。

明久は、

「ヤバッ、鉄人；」

坂本は野球用具を片付けぬまま、

「試合中止！続きは放課後だ…撤退！」

「了解！！！！」

雄二の指示を受け、散り散りになるチームメイト達。

俺もベンチを飛び出し、

「土屋！明久を置いて逃げるぞ！」

「……………了解！」

俺と土屋は、2人でグラウンドを横断し…校舎前まで撤退する。

騒ぎの中、鉄人は明久だけを狙い、追い回していた。

「吉井、貴様が主犯だな！？」

明久はグラウンドをクルクル廻って逃げている。

「指示を出したのは雄二ですよ！？僕は脅されたんだっ！」

「お前が指示を出させたんだろっが！」

「どうして…：そうやって、僕を目の敵にするんですか！」

「悪気があるから、俺から逃げているのだろう！待たんかあああ！
！！！」

俺達は明久が捕まるのを見届けてから、校舎へと逃げ切ったが…教室にて、『我がFクラスだけが出し物が決まっていなんだぞ！？』と叱咤された上に一発殴られてしまった。

頭が痛むのを抱えながら、俺達は鉄人の指示に従い、会議を開いていたが。

「さあてと…：清涼祭の出し物について意見を出し合って、適当に決めてくれ。実行委員の島田、後は任せたい。」

坂本は興味が無いらしく、欠伸をすると教室を出て行ってしまった。

「ちょっと…：ウチだけじゃ無理よ…！」

俺は仕方無く、島田にアドバイスする。

「島田…副委員を選出して、そいつと二人でやれば良い。」

「そうね。皆、副委員を推薦して！」

口々に意見を言い出すクラスメイト達。

『坂本がやるべきだろフツー。』

『吉井に押し付けりゃいい。』

『団長の須川がやれば良いだろ？』

明久が手を上げ、

「副委員…姫路さんが適任じゃない？」

確かに…優等生の姫路ならば、意見を纏められるかもしれないが…
彼女は如何せん優しすぎる。

俺は姫路に目を合わせ、明久に言う。

「明久。残念だが…姫路は全員の意見を切り捨てられるような人じゃない。何も決まらないままタイムオーバーになるぞ。」

「そっか…島田さん、どうする？」

島田は額に手を当ててから、

「うーん…このまま決まらなないと埒が明かないわ。さっき拳がった

人の中から多数決をしましょう。

懸命な判断だな。

島田は黒板に書き、

「じゃあこの3人から選んで」

と言ったので、俺は選択しようとして……あれ？

<多数決>

候補1……………吉井

候補2……………明久

候補3……………すつごくバカな吉井明久

どうしてこうなった。

「待つて、美波、その候補の上げ方はおかしい気がする。」

突っ込みが追い付かないので、考えるのを止めた。

『うーん、究極の選択だな……』

『……これは吉井じゃないか？』

『全部クズだし、迷う。』

「真剣に考えるフリしてさ……クズ呼ばわりしないでよっ！」

島田は明久を黙らせ、多数決を取った。

「じゃあ、アキに決定ね」

全会一致…明久も中々人望があるようだ。

「じゃあ、文化祭の出し物で意見がある人は手を挙げて発表し」

「……………写真館！（ピッ）」

「余りに素早い言動…土屋の言う写真館って、危険な香りがぶんぶんするわね…」

「……………エロになんか興味無い。」

誰かさんの彼女いる発言以上の大嘘だ。

「アキ、一応書いといて。」

明久がムツツリー二の意見を板書した。

1・写真館「秘密の覗き部屋」

中々のネーミングセンスだ。

だが、法的にはギリギリ過ぎる…

「じゃあ、他。」

姫路が手を上げた。

「ええつと…『ウエディング喫茶』というのはどうでしょうか？」

聞き慣れない言葉だが、良い意見だ。

「瑞希？ウエディング喫茶って？」

「普通の喫茶店と変わりませんが…ウエディングドレスを着て接客するんです。」

俺は…姫路と秀吉のウエディングドレス姿を浮かべた。

明久は流石は姫路さんと賞賛するが、土屋が異論を唱えた。

「……………ウエディングドレスは動き辛いし、初期投資が高過ぎる。それに、結婚は『人生の墓場』と称されている。」

確かに金が掛かりそうだが…意見としては成り立っている。

2・ウエディング喫茶「人生の墓場」

明久は頭の中に残った単語しかメモしていないらしい。

「じゃあ、須川。」

「俺は…『中華料理店』を提案する!」

須川にしては、まともな意見だな。

「中華喫茶って、チャイナドレスでも着るの?」

「いや、俺の言っている中華喫茶はそんなイロモノ的なヤツじゃない。本格的に料理を出すんだ。」

俺は眼を瞑り、真剣に聞く。

「そもそも…食の起源は中国にあるという言葉があることから分かるように、こと『食べる』文化に対しては中華ほど奥が深いジャンルはない。近年、『ヨーロッパ』文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが本来食というものはな…」

一体どうしたというんだ!?

熱い信念に身を焦がすような気分になる。

須川…覚醒したと言っのか;

明久もそれに応えるように、

3・中華喫茶「ヨーロッパ」

ガラッ！！！！

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

ドアから鉄人が入って来た。

明久が元気良く、

「今のところ、3つの案が出てます！」

鉄人が黒板に視線をを移すと、明久の名付けた雛鳥達が囀り出した。

「はあ…補習の時間を倍にしたほうがいいかも知れんな；」

これ以上、補習の時間が増えたら、近接武器を作る時間が無くなってしまう；

「それは明久が書いたんです。俺達がバカだという」

「バカなのは吉井であって決して僕たちがバカなわけではありませんせん！」

鉄人は教卓を叩き、

「見苦しい言い訳をするな！バカな吉井を選んだこと自体が頭の悪い行為だと言っているんだ…全く、貴様等は…少しは真面目にやったらどうだ？『稼ぎを出してクラスの設備を向上させよう』と思わんのか？」

ああ…その発想があったか。

「西村先生、そんなことしてもいいんですか？」

姫路が嬉しそうに聞く。

「ああ。本来は認められないことだが…今のFクラスの設備では、清涼祭に悪影響が出る可能性があるやもしれん。『学力によって差をつける』のがこの学校の『教育方針』ではあるが、だからといってその所為で体を壊しては《本末転倒》！！！今回は俺が特別に学園長に掛け合って…」

途端に真剣になるクラスメイト達。

こんなボロい教室が綺麗に生まれ換えられるなら、頑張らないとな！

『出し物どうする？利潤の多い喫茶店がいいんじゃないか？』

『いや、初期投資の多い写真館のほうが』

『駄目だ。写真館は文化祭に出せないようなものが多い。』

『中華喫茶なら外れはないだろ』

『それだと目新しさに欠ける。ただでさえ旧校舎は汚い…人は来ないぞ…』

『ウエディング喫茶はどうだ？』

『初期投資が大きすぎる。たった3日間の清涼祭じゃ儲けは出ないだろ。』

『リスクが大きいからこそリターンも大きいはずだ!』

『いや、そもそもうちのクラスは女子が少ない。人手不足は避けられないぞ。』

Fクラスも捨てたもんじゃないな。

「はいはい。ちょっと皆静かにして」

島田を無視して議論は続く。

『全世代に楽しめるものを。』

『外で模擬店をやろう。』

『Aクラスから頂いた備品も使おう。』

坂本の穴は埋め切れない…指揮官が居なければ、Aクラスだって意見をとめられないだろう。

島田が教卓を強く叩き、

「もうっ！静かにしてよ!!!決まりそつにないから、店はさつき上がった候補の中から選ぶからね!」

クラスを静かにさせるが、一部の生徒が不平が飛び交わせ始めた。

「ほら！ブーブー言わないの。この3つの中から1つだけ選んで手を上げること！」

半ば強引だが、Fクラスが相手ならこれぐらいが丁度良い。

多数決の結果、中華料理店『ヨーロッパ』に決定。

本格的な準備は明日から始める事と決まり、今日は大まかな方針だけ定める事となった。

- - - - -

放課後。

俺と須川は2人だけで、中華料理店の打ち合わせをしていた。

明久と島田、土屋と…姫路の4人は家庭科室で、調理中。

須川が先に口を切った。

「店の形式は…居酒屋式を採用する。セットメニューを廃止し、単品だけで勝負する…。」

「出来るだけ多様に料理を提供しよう…価格設定も運動場で展開するであろう模擬店より低くしなければ。」

「だから…材料、初期投資を限り無く少なくしたい。」

「しかし…厨房を用意するだけで、儲けの大半が流れてしまうだろうな。」

「清涼祭の期間中、ずっと厨房に居られるのは…明久、土屋、須川、島田の4人だけか。明らかに戦力不足に見えるが？」

「FFF団から引き抜く。一日中営業するつもりはないしな。」

10時～13時と14時～17時。

6時間勤務を3日繰り返すだけだ。

「接客は姫路、島田、秀吉の3人。姫路と秀吉は接客のみ、島田は調理と接客の両方をする。」

一般の客も多く訪れるから、化学薬品入りの料理は絶対に出してはならない。

「島田はドイツからの帰国子女…胸はペタンコだが、世間から見れば『クールなイケメン系女子』だ…可愛い女の子が接客すれば、客足は段違いに伸びる筈だ。」

俺は昼休みに書いた役割分担表を置いた。

<役割分担表>

『衣装関係』…ムッツリーニ

『装飾チーフ』…秀吉

『総料理長』…明久

『監査局長』…須川

《監査局》は『店内の風紀』が乱れぬように監査し、『実力行使』を可能とする部署である。

修繕やクレーム対処が主な仕事になる。

そして…料理長には明久が抜擢された。

「吉井は『他人を指導出来る』程の腕前だ…学園主催の《料理コンテスト》で優秀な成績を収めているし、腕は確かだ。」

明久は幼少の頃から母や姉に代わって、《花嫁修業》に明け暮れて来たのだ。

俺も彼の手料理に頬が落ちるような感触を幾度と体験している。

たゆまぬ努力が、彼を進化させたのだ。

「後は…坂本が協力してくれれば完璧なんだけどな。アイツは興味が湧かない事は無視の一点張りだ。」

須川は坂本を思い浮かべるが、

坂本の協力云々以前に、この教室は致命的な問題を抱えている。

「坂本は後回しだ…それよりも、この教室の環境を何とかしようぜ。」

先の試召戦争で設備はランクダウンせず、Aクラスの備品倉庫を奪取出来た。

しかし…腐った畳、ひび割れた壁、割れた窓…とても食事の気分にはなれない。

須川はこればかりは生徒の力だけで解決するにはきついなと表情を歪ませる。

「こんな劣悪な環境で生活慣れていた…全く考慮せずに意見を述べてしまった。」

俺も頭を抱える…こんな時、坂本が居れば…知恵を貸してくれると言っのに。

数分の間、グウの音も出ないまま考え込んでいると、

「松下：ちょっと、いいかな？」

俺は振り返り、

「ん？」

「相談があるの。聞いてくれない？」

島田は明らかに何か心配事があるように見えた。

「相談？俺は別に良いが…用件は何だ？」

「うん。ありがと。あのね…その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

「難問だな。アイツは興味が無い事には徹底的に無関心だ…学園祭の日も寝て過ごすだろう。」

「でも、松下が頼めば…きっと、頼みを引き受けてくれる筈だわ。」

「俺は坂本達とよくつるんではいるが…愛し合ってる訳じゃない。自分に不利益な頼みを聞き入れてくれやしねえよ。」

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

島田の問いに俺は済まないと言いつつも、

「何故…坂本を動かしたいんだ？深刻な問題でも抱えたか。」

島田に反問を投げ掛けると、島田は唇を噛み締め…俺に泣き付いた。

「実は…すごく深刻な状況なの!!!」

須川は家庭科室に行くと言って、教室を出て行った。

俺は半泣きの彼女の背中を擦る。

「本人には内緒にって言われたけど…事情が事情だから…。」

尋常な雰囲気ではない；

「……………」

島田は涙を拭き…衝撃の一言を放った。

「実は…瑞希なんだけど…あの子、《転校》するかもしれないの！
!!!」

ガクガクと身体が震えた。

頭が割れるような錯覚が襲い、

その時、俺に電流走る。

「…島田！姫路が転校って、どういうことだ!?!」

「どうもこうも、そのままの意味よ。このままだと瑞希は転校する
かもしれない。」

「このまま?…原因は何だ!?!」

島田は教室を見渡し、

「ええ…『Fクラス的环境』よ。」
と言った。

成程…姫路の両親が転校させたいと思うのも分かる。

姫路の転校の理由がクラス的环境なら…全て納得できる。

おそらく…姫路の転校には三つの原因がある。

- 1 ・傷のある卓袱台と綿の抜けた座布団
- 2 ・ポロポロに老朽化した教室
- 3 ・クラスメイト

Fクラスの代名詞は『バカの集まり』だ…これでは、とても姫路の学力の向上は望めないだろう。

「学園祭の出し物が決まる前…姫路は幾度と单身職員室へ乗り込んで行った。全てはFクラスの為に、か。」

「うん、そうなの。瑞希のお父さんが転校を勧めてるらしくて、そ

れで瑞希、『お父さんを見返すんですっ！』って…。」

島田は暗い顔で頷いた。

「そうか…《召喚大会》で優勝すれば、料理店の良い宣伝になる。売り上げで設備を向上させ、『Fクラスの誠意』を見せれば…姫路の父方も考え直すという事だな。」

「だから…お願い！どうしても、坂本の力が必要な…代表を呼び戻して！」

女性の頼みを断れるものか！

「…分かった。やれるだけやろう。」

俺は携帯電話を取り出し、坂本に電話をかけた。

prrrrrrと呼び出し音が響く。

『もしもし、どうした松下？』

俺は不満を直接ぶつけた。

「どじ、ウロウロしてるんだ！」

『悪いが今取り込み中でな…翔子に追い回されてるんだ！』

「今…何処に居る！？」

『話だけは聞いてやるから、翔子を追い払ってくれ…今2Fの旧校

舎の身障者用トイレに居る…助けてくれえええ…!!」

「坂本!? 応答しろ、雄二イイイ!!」

携帯からはツー、ツーと無機質な音が聴こえてくるだけだった。

「霧島の野郎…俺達の邪魔しやがって!」

「そつよ! 瑞希がいなくなるかもしれないのに、霧島さんは身勝手過ぎるわ!」

.....

ガラツと障子を乱暴に開け…俺は雄二を連れ、教室に戻った。

「松下! お疲れ様。」

俺は席に座り、寝転んだ。

作戦は簡単なものだった。

まず…霧島と会話し、その隙に坂本を身障者用トイレから脱出させる。

そして、二手に別れて坂本を探すと見せ掛け…男子禁制の所に逃げ込んだと偽情報を伝えれば…後は坂本と合流して教室まで撤退する

事が出来る訳だ。

霧島が此方の考えに気付く前に、用件を済ませよう。

俺は今の状況を斯く斯く然々と要求した。

「そうか。姫路の転校か…阻止するには、料理店の成功と召喚大会の優勝が不可欠だな。」

「ああ、優勝は厳しいが…姫路がいるし、可能性が低い訳ではない。Fクラスから優勝ペアが出れば、姫路の父方も考え直すだろう。」

坂本は卓袱台に肘を付け、

「《姫路&島田》、《松下&明久》以外は一回戦突破すら難しいだろうな。『召喚大会』は100チーム以上が参加する大規模な大会だ…勝ち進むのは楽しじゃねえ。」

「坂本、御前は大会に出ないのか？」

「生憎、勉強不足でな…今回は裏方に徹する。料理店の方でホールの連中をを指揮してやるから…優勝しろよ。」

「だが、坂本。召喚大会の選手登録は…3人じゃないと行えない。より戦略を広げる為に、試合形式は『各試合、3人から2人を選出し…闘わせる』が原則だ。」

「名前だけは貸してやるよ。秀吉には…姫路と島田に協力するよう、伝えておく。」

島田は頷き、お互い頑張りましょうと言うと、家庭科室へ戻って行った。

俺は召喚大会の対策はこれくらいしか出来ないと判断し、設備関連の問題を坂本に提示した。

丁度、須川も掃除用具を持って戻って来たようだ。

「そんなのババアに直訴すれば良いだけだろう？此処は曲がりなりにも教育機関だ…幾ら方針とは言っても、生徒の健康に害を及ぼすような状態であるなら…改善要求は当然の権利だ。」

俺は学園長の顔を浮かべる。

…本当に巧く行くのだろうか？

「早速ババアの所に行く…学園長室に乗り込むか。須川はFFF団の皆に学園祭の準備計画を伝令してくれ。」

「了解。交渉が終わる迄には、試作品も完成する筈だ。頼むぞ…松下と坂本。」

俺と坂本は、学園長室へ向かった。

学園長室に辿り着いたのは良かったが…会話の音が微かに聞こえた。どうやら先客が居るようだ。

『……の賞品の……として隠し……』

『……こそ……パーク……』

俺は話が終わるまで待つべく、学園長室の前にある座席に座っていたが…坂本がノックもせずに入ってきた。

「さ、坂本…お前、なあ。」

こうなってしまうとは、後戻り出来ない。

俺は慌てて坂本を追って、学園長室に入り…丁寧にドアを締め、一礼するが…。

「ハン…失礼なガキ共だねえ。ノックもせずに土足で踏み込むなんて、大した度胸じゃあないか。」

そこには…長い白髪に年相応の衰えは感じさせない、学園長こと藤堂カヲルと…鋭い目つきとクールな容姿で、理知的に見える竹原教頭がいた。

学園長とは寄贈関係で幾度か面識はあるが…教頭とは対談した経験は無い。

教頭は明らかに坂本を目障りそうに見ている…。

「御前の差し金か？やれやれ…とんだ来客だ。此方は大事な話をしていたんだが？」

学園長はバカにするなど言わんばかりに、

「誰が、そこに居る礼儀知らずと手を組むのさ。反吐が出るね。」

「フン、どうだか。学園長は隠し事が御上手ですからね…。」

「あたしが隠し事をするような臆病者だと思つなら、見当違いさね。言いたい事はそれだけかい？」

非常に険悪な雰囲気であつたが、

「…失礼します。この場はそういう事にしておきましょう。」

教頭はあっさりと学園長室を出て行った。

学園長は溜め息を付き、坂本に視線を向けた。

トントントント

「入りな。」

ガチャ！

「学園長、失礼しま…何でアンタ達が此処に居るの？」

振り返るとそこには…習志野が居た。

坂本は習志野を睨むが、

「ちよつと、教室の設備についてな。」

「ふん。御先にどうぞ。」

習志野は室内の座席に、アタッシュケースを足下に起き、ニコツとした。

教育現場に似つかわしくない単語が次々と出て行った会話の直後の為、非常に居づらい。

が、それに構わず、学園長は口を開いた。

「んで、ガキ共。何の用だい？」

交渉は坂本に任せよう…。

「今日は学園長に話があつて来ました。」

「アタシは今、それどころじゃないんでね。学園の経営に関する事なら教頭の竹原に言いな。それと…先に名前を名乗るのが社会の礼儀つてモンだ。覚えておきな。」

「失礼しました。俺は2年F組代表の…」

「同じく2年F組所属の…」

「ほう…そうかい。あんた達がFクラスの坂本雄二と松下啓吾だね？」

何だか同じグループに纏められたようで、少し嫌悪を感じた。

「妖怪の割には記憶力が良いんだな。」

「坂本…妖怪に失礼だ。」

余り暴言を吐くと、要望を聞いて貰えなくなってしまう。

「『A級戦犯者』と『武器寄贈人』か…よし、気が変わったよ…話だけは聞いてやろうじゃないか。」

「『有難う御座います。』」

「礼なんか言う暇があったら、さっさと話しなウスノ口共。」

「分かりました。単刀直入に申します。」

坂本は間髪入れずに、

「Fクラスの設備について、改善を要求しに来ました。今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みその様に穴だらけで、隙間風が吹きこんで来るような酷い状況です。学園長の様に戦国時代から生きている老いぼれならともかく、今の普通の高校生にこの状態は危険です。健康に害を及ぼす可能性が非常に高いと思われます。」

一瞬で学園長に対する不平を含ませつつ、此方の状況を具体的に説明してみせた。

「要するに、隙間風が吹き込む様な教室の所為で体調を崩す生徒が出てくるから、さっさと直せクソババア、という訳です。」

慇懃無礼な坂本の話が終わると、学園長は何やら思案顔になり、

「…ふむ、ちょうどいいタイミングさね」

と、小声で呟き、2人に向かって頷いた。

「よしよし、お前たちの言いたい事は良く分かった。」

問題が解決するように見えたが…世の中そんなに甘くはないらしい。

「却下だね。」

「松下、このババアをコンクリに詰めて廃棄しようぜ。」

「御前はさっきから失礼な事を言い過ぎだ。学園長が変死体で見付かってみる…途端に心霊スポットに早変わりだぞ…」

「貴方達、もう少し…言葉を選びなよ。学園長が想像を絶する化物であるのは否定できない事実だけれど、面と向かって言う必要は無いらね。」

習志野の突っ込みもgdgdだ…。

坂本は耳穴をほじりながら、

「済みません、失礼しました。どうか理由をお聞かせ願えますか？クソババア。理由なく断られて納得出来る訳ありません、妖怪！」

「堂々とアタシを妖怪呼ばわりするんじゃないよ…クソゴリラ！それが人に頼む態度なのかい!?!」

「他者をウスノ口呼ばわりする妖怪が、何を言っているんだ？」

ガンのくれあい。

学園長は呆れた顔で俺達を見て、こう応えた。

「理由も何も…設備に差を付けるのはこの学園の『教育方針』だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、このなまっちろいガキ共…と、何時もなら言っているんだけどねえ。可愛い生徒の頼みだ…此方の頼みも聞くなら相談に乗ってやるうじゃないか。」

生徒の要望に対して、交渉し返す人が…居るとは思いもしなかった。

坂本はかったるそうに学園長に尋ねる。

「条件…何ですか？」

「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「はい。俺と明久と松下で出ようと思っています。」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

俺と坂本、習志野は召喚大会のチラシを手渡された。

《チラシ》

優勝賞品

『純金製トロフィー&賞状』

『白金の腕輪』

『如月ブランドパークプレオープンペアチケット』

準優勝賞品

『純銀製盾&賞状』

『黒金の腕輪』

『如月ブランドパークプレオープンペアチケット』

そのペアチケットについて説明されると、坂本はビクッ！と身体を跳ねさせた。

どうしたんだ…顔は青く、身体が震えている。

それを見兼ねて、代わりに俺が話を聞く。

「で、それが何か？」

「まあ聞きな…この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてねえ…出来れば回収したいのさ。」

「回収？それなら…商品に出さなければ良いじゃないんですか？」

「そう出来るならしたいさ。けどね、この話は教頭が進めたとはいえ、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今更覆す訳にはいかないんだよ。」

「契約する前に、何とか出来なかつたんですか？」

「恥ずかしながら…腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね。」

学園長の表情が曇るのを、習志野は見逃さなかった。

「で、良からぬ噂って…何ですか？」

「如月グループは、『如月ランドパーク』に1つのジnkクスを作るうとしてるのさ。『ここを訪れたカップルは幸せになれる』ってジnkクスをね。」

「ジnkクス？」

「プレミアムチケットを使って来た2組カップルを、結婚までコーディネートするつもりらしいのさ。企業として、多少強引な手段を用いてもね」

「な、何いいい!?!」

それを聞いて、血相を変えたように大声を上げる坂本。

「さっきから何だよ…。」

「あ、慌てるに決まってるだろうが!いい、今…ババアは『プレオーブンプレミアムチケット』でやってきた2組のカップルを、『如月グループの力で強引に結婚させる』って言ったんだぞ!?!」

習志野は腹を抱えて笑った。

「その2組のカップルを出す候補に…文月学園がなっただって事ね。御愁傷様」

（　　）の表情を浮かべる彼女。

絶対に「ざまあw」て思ってるなw

「絶対に翔子は参加し、決勝進出を狙ってくる。もし、彼奴がチケツトを手にしたら、俺の将来は…！」

そんな坂本を他所に学園長は続ける。

「本人の意思を無視して、ウチの可愛い生徒の将来を決定しようって計画が気に入らないのさ。」

「つまり…交換条件は？」

「…『優勝賞品』と『準優勝賞品』を2つとも回収し、アタシに譲渡すれば…教室の改修くらい、やってやるんじゃないか。でも、優勝者や準優勝者から強奪なんてマネはするんじゃないよ？正攻法…ルールには従ってもらおうからね。」

習志野は概ね理解したらしく、

「つまり…Fクラス所属の2チームが決勝進出した地点で、『教室の改修』のみ行われるんですね？」

「そついう事さね…但し、『設備』に関しては一切手助けしないよ。《清涼祭の売り上げ》だけで、どうにかするんだね。」

よし…話を引き受けてくれただけで儲け物だ。

この取引に応じて損は無いだろう。

坂本に確認を取り、

「…この話、引き受けます。」

「そうかい。それなら、交渉成立だね。」

学園長は嬉しそうに、『計画通り』といった表情を見せた。

すると、坂本が更なる交渉に入ったのだ。

「召喚大会は『3人1チーム』の『2対2のタッグマッチ』。トーナメント形式で、『1回戦は数学・2回戦は化学』といった合に進めていくと聞いている。」

「それがどうかしたのかい？」

「《坂本・吉井・松下》と《姫路・島田・土屋》の2チームが決勝まで当たらないように対戦表を定めて欲しい。そして…勝負科目の指定を俺にやらせて頂けないか？」

「ふむ…良いだろう、点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それ位なら協力しようじゃないか。召喚大会で、決勝戦まで進める自信があるならね。」

そう言われた坂本は、眼を鋭くさせた。

「無論だ…俺達を誰だと思っている？絶対に優勝してやるから…そ
つちこそ、約束を忘れるんじゃないぞ。」

「なら、任せたよ。クソガキ共。」

習志野が学園長に用事を始める前に、俺と坂本は素早く退散した。

- - - - -

教室に帰還した俺と坂本を待っていたのは…幾つかの料理が乗せら
れたテーブルを囲む…明久達だった。

「啓吾。備品倉庫のテーブルを使ってみたよ。」

「テーブルクロスを引けば、使い物になるじやろう。演劇部の許可
を取り…色々借りて来たぞい。」

教室の端で須川がFFF団の袖を捲し上げ、タオルで汗を拭き、

「松下。FFF団を総動員して、出来るだけ掃除したが…大変だっ
たぜ。鉄人によりゃあ…学園創立以来、設備に手入れが施された事
が無いんだとよ。」

汚らしいロッカーは外され、腐った畳も割れた窓も全て取り除か
れていた。

備品倉庫から、新しい壁紙や障子、綺麗な畳を持ち出したそうだ。

「天井と畳の下、壁はどうしようも無かったけど…上手く繕えそうだね。」

シュタツ！

「……………飲茶も完璧。」

突如、康太の声…まるで気配が読めない；

「ムツツリーニよ。厨房の方は準備はできておるのか？」

「……………今日は家庭科室で作った。当日は模擬店の野外用のキッチンを設置する。」

エプロンを着けた島田が、

「胡麻団子…ウチが作ったの。松下と坂本は交渉で疲れているでしょ？先に食べてみて。」

「お、気が利くな。早速食べるか。」

「では、俺も戴くとしよう。」

胡麻団子をゆっくりと噛んで味わう。

雄二はグーサインを出し、

「表面はカリカリ、中がモチモチ…これなら店に出せる。御茶が欲しくなるな。」

ああ、美味しい…将来、島田は良いお嫁さんになれるだろう。

明久が解説を始めた。

「胡麻餡を白玉粉に水と胡麻油を混ぜた生地で包んで、周りに白胡麻または黒胡麻をまぶし揚げて作るんだ。胡麻餡の代わりに小豆の漉し餡を使ったり、蓮の実餡を使うなどのバリエーションもあるよ。」

「……………中に餡を入れず、暖まった空気で中空に膨らませ、大きく揚げるものも。」

「マレーシア、インドネシアにはオンデオンデと呼ばれる、胡麻団子に似た餅菓子があってね。此方は…キャツサバともち米を練り合わせた餅皮の中に、黒砂糖とココナッツなどの餡を入れ、茹でたり、揚げたりするんだよ。香り付けには…」

明久…料理の事になると、人が変わるな…

しかし、土屋も中々豊富な知識を持っているようだ。

「……………料理は紳士の嗜み。」

土屋はそう言うと、衣装に取り掛かった。

説明を終えた明久が、

「それじゃ、僕も貰おうかな。」

小皿に置いてあった胡麻団子を手でつまんで、軽く一口を頬張った。

「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバナバ。甘過ぎず、辛過ぎる味わいに…舌が溶けるような…んゴバっ！！！！」

明久が死んだ；

秀吉は身体を震えさせ、小皿を指差す。

「そ、それは…姫路が作った物じゃ；」

土屋は衣装をガン見し、坂本と須川は掃除の続きを始めた。

「……………明久、その団子は全てやる。」

「む、ムツッリーニ…どうしてそんなに怯えた様子で…胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの…無理…食べられない…！！」

俺は学園長との交渉の内容を思い出し、明久から眼を背ける。

「……………明久が責任を持って食べ！」

明久にもう一つ胡麻団子を無理に食べさせようとする土屋…俺は何も見えていない！

明久が物凄く抵抗をして、首を大きく横に振っていると、

ガラッ！

「秀吉部長。頼んでいた『テーブルクロス』を持って来た。」

そんな時、Cクラスの宮野が入室した。

「ん？胡麻団子…美味しそうだな。」

「待て、みや」

パクツ！

宮野は躊躇い無く残りの毒物（胡麻団子）を口に運んだ。

演技派である彼が何の疑いもなく食べるとは…恐るべし、姫路料理；

「…流石は副部長、大した男じゃ；」

「宮野君。最高に輝いているよ。」

「お前を勇者と称えよう！」

宮野は『？』と浮かべ、

「部長にせよ、バカ達にせよ、貴様等は何を発言している？モグモグ…表面はゴリゴリ、中はネバナバ。甘過ぎかつ辛過ぎる味わい…そして、舌が溶けるような感覚…ゴフウ！」

ドサァ！

明久と同じような感想を言い…宮野も死亡した；

「宮野君…とつても美味しかったね？」

床に倒れ伏した明久が宮野に目で訴えていたが…伝わってないと思う。

…宮野が起き上がった。

「俺は…死んだのか。彼岸花と川が見える…。」

秀吉は冷や汗を掻き、

「宮野がシヨックで『演技モード』に入ったぞい…」

宮野は演技を続ける。

「あの川を渡れば、極楽浄土があるのだな…幸枝、今そっちに…。」

姫路が教室に戻って来て、

「え？あれ？明久君と宮野君はどうしたんですか？」

明久は辛うじて手を動かし、

「大丈夫。足が攣っただけだよ…宮野君、食べて直ぐに寝たら牛になっちゃっよ。」

明久は手を宮野の左胸に手を置き、必死に心臓マッサージをしていた。

「六万…だと…普通、渡し賃は六文と相場は決まっている…そうまでして幸枝に逢わせないつもりか…はっ！」

三途の川を渡らんとした宮野が漸く意識を取り戻した。

「宮野君、足が攣ったんだよね？」

明久は宮野が余計な事を言わせない為に畳み掛けている。

俺としては真実を言って欲しいが。

「胡麻団子を食べたなら、臨死体験をした…駄目だ、思い出せない。幸枝…。」

まだ幻覚を見ているようだ。

FFF団が彼を保健室に連れていくのを見た俺は、姫路に《命令違反》はするなと強く注意した。

「姫路…お前は『接客のみ』だろう？勝手な行動は慎んでくれ。」

「で、でも…やっぱり私も手伝った方が良いかなんて思いました。」

「有り難いが…今は『料理』よりも『接客マナー』を優先して。申し訳無いけど、《独断行動》は《集団行動》を阻害する要因に為りかねない。」

「は…はい…」

姫路には余りきつい言い方をせずに、遠回しに料理させないようにしなければな。

。島田が姫路を慰めている間に、俺は坂本と明久に小声で耳打ちする。

「当日は絶対に姫路を厨房に入れるな。」

「ああ…肝に銘じておく。」

「…そうだね。」

2人は土屋と秀吉に指示を出し、当日は姫路を監視すると約束を取り付けた。

Aクラスの教室。

木下姉達が『メイド喫茶』の準備をするのに、形振り構わずに…2人が向き合い相対していた。

『総合科目』のフィールドが張り巡る。

剣道部副将《北沢 佳奈》と『部活動展示』の打ち合わせを終わらせた俺は…緊迫した状況に息を飲んだ。

「さてと、『召喚大会』に向けて…疑似タイムンの練習と行きましょーか。」

「桃花さん…本気で掛からないと僕には勝てないよ？」

『学年4位』と『学年3位』のタイムン。

高橋先生が合図をすると…先に習志野が召喚獣を出した。

2 - A 習志野 桃花 4027点

北沢が『化物同然だねえ…』と脅えた。

木下姉は一瞥しただけで、直ぐに作業に取り掛かる。

Aクラスの生徒の大部分が作業を止める中、久保は構えを見せた。

「単教科400点以上、総合科目4000点以上で『腕輪』を使用出来る。」

習志野の召喚獣はバズーカ砲を二丁持っていた。

「随分と…射撃が強そうな装備だね。」

「」

「だが僕にも高機動の黒龍が居る！試獣^{サモン}召喚！」

黒龍に乗った久保の召喚獣が出て来た！

2 - A 久保 利光 4405点

習志野との一騎討ち以来、成績向上の為に姫路指南の元、修業して2500点前後に上がったが…この2人は桁違いだな；

「利光には限界が無いのかなぁー。」

「限界を決めた時点で人は敗北する…頭で理解した方が良いよ。」

「ふん…御言葉に甘えて、潰しちゃう」

ドンッ！

勢いよくバズーカが飛び出す。

「ダークブレス！」

黒龍が炎を吐き出し、弾を誘爆させる。

爆風に煽られながらも、久保の召喚獣は相手召喚獣の真上をとる。

だが習志野は冷静にもう片方のバズーカで真上に弾を打ち出し、久保にガードさせるように仕向けた。

「熱を帯びた鞭の攻撃は、単なる金属鎌じゃ防ぎきれないよ！」

「グッ…。」

やむを得ず、片方の鎌でガードするが…赤く発行し、炎上した。

「黒龍！敵を焼き払え！」

習志野は素早く鞭を仕舞い、ダークブレスに直角にステップして避けた。

「戦術、反応では…桃花さんが上か！」

《学生戦争》での経験が、習志野の召喚獣を効率良く動かしているのだろう。

「戦略は完敗だけど、損傷は軽微だ！」

「点数差がこれ程響くなんて…いや、ひっくり返してやるよあゝ10手でねっ！」

「ならば、僕は1手で仕留める！」

久保の召喚獣が、黒龍に乗っかり…一気に突進した！

習志野は舌打ちし、バズーカ砲を連射するが…止まらない！？

「ダメージ覚悟で突攻…そんな一直線な攻撃に当たらないよ」

「油断大敵とキミに言わなかったかい？」

「バシィィィーーン!!!!」

「なっ!?!」

習志野の召喚獣が黒龍の翼に激突したただけだが…意表を突くには十分だ。

弾き飛ばされ、制御を失う彼女。

だが、久保に追撃の余裕は無く…ブレーキを掛け切れずに地面へ黒龍ごと強打してしまった。

習志野の召喚獣は地面に落下し、何とか起き上がる。

「バーカ。召喚フィールドの範囲を考慮せずに突っ込むから、そうなるんだよっ」

「だけど、今の一手で大部点数を削られたようだね。」

久保は不敵な笑みを浮かべた。

「黒龍は今の激突で気絶してる…生身の召喚獣では、機動性は格段に落ちる!」

習志野は滅茶苦茶にバズーカを全弾掃射した!

フィールドは平地…久保は地上でひたすら避け続けるしかない。

ドッ！ドッ！ドッ！

「ぐあ…！」

「弱き十手は強き一手に勝る。止め！」

久保は操作不能となった召喚獣を見て唇を噛み締める。

「まだ、僕は負けない！」

久保は鎌を大きく振り上げた。

届く筈がない。

鎌と鞭では…。

ジジジジジ！

電気によって熱を帯びた鞭が鎌の刃の付け根を焼ききった…その刹那！

ギョルギョルギョル…ギシャアアツ！

慣性で吹き飛んだ鎌の刃が習志野の召喚獣に吸い込まれるように…鞭を持っていた方の腕を切り飛ばした！？

余りにも不運、余りにも偶然！

奇跡の軌跡が巻き起こったというのか；

ズサアアア！

形勢逆転：満身創痍と化した彼女。

「また…奇跡が…私を邪魔する…！」

勝利を確信した笑みが焦燥に至った。

「はあ…ふふふ。まだ、闘える。」

習志野は胴と繋がっている方の手で、千切れた腕を広い、

ブチイイイ！！！！

耐性の無い生徒は、グロテスクな光景に嘔吐した。

久保も顔を青醒めさせ、後退り。

ポトン！

鞭にくつついた手を力任せに潰し、地面に落とした。

千切れた肩から大量に血が吹き出している…次が最後の再逆転の契機になる。

緊張が場を支配し、静寂が訪れる。

誰もが作業を中断し、固唾を飲んだ。

そして…！

「《劣等排斥》を掲げる代表…私は絶対に負けない」

自己暗示から習志野が鞭を投げた！

「！」

久保は鞭に注意力を削いでしまった。

真上から習志野がバズーカ砲を降り下ろすのに気付かずに。

久保の思考が停止する僅かな隙。

腕が無くなっても尚、己に立ち向かった習志野に対する恐怖が…彼を支配したのだ。

グシャ…。

「僕は…二度、敗北した…！」

久保の召喚獣の頭は、バズーカ砲の一撃に耐える訳も無く…叩き潰された。

「勝者、習志野桃花！」

高橋先生の声と同時に歓声上がる。

だが、習志野は自身の1桁の召喚獣を見つめ…息切れを起こし、歓

喜する余裕は無いようだった。

寝転びながら、彼女は俺を見て、

「大会、楽しみにしてるよ。私達を踏み越えて、優勝するよう願ってる…からね。」

俺は無言でAクラスの教室を出た。

習志野に感謝する気は無いし、馴れ合うつもりは無いからだ。

第22話 新章突入！〈清涼祭編開始〉（後書き）

今回は非常に長くなりました。

本日より新章突入ですから、気合い入り過ぎました、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0891x/>

バカとテストと召喚獣 ~ 伝説と呼ばれたバカ ~

2011年12月11日22時51分発行